静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第56集

牛岡遺跡Ⅰ・頭地遺跡

平成６年度日坂バイパス埋蔵文化財
発掘調査報告書

1995

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

当研究所は、掛川市内において、これまでに原川遺跡・領家遺跡・梅橋北遺跡の発掘調査を手懸けてきた。各遺跡は市内西部に位置し、弥生時代から中・近世に至る複合遺跡であることが明らかになり、各時代の良好な資料を得ることができた。特に原川遺跡と梅橋北遺跡は、隣接する袋井市坂尻遺跡と共に律令期の地方官衙の一部を形成したものと推定され、注目を集めた。その成果については、順次報告がなされてきたところである。

これらの調査に続いて、今回は市内東部の八坂・日坂地域において調査を行うことになった。一般国道1号日坂バイパス関連の発掘調査は、平成元年度から開始し、平成5年度までに頭地遺跡・牛岡遺跡・向畑遺跡・社宮寺遺跡・清水遺跡・水井遺跡の調査を実施している。各遺跡からは、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が多数検出されている。本書はその内、牛岡遺跡と頭地遺跡の調査報告書である。牛岡遺跡からは、奈良時代から近世にかけての掘立柱建物跡を中心とする集落跡が確認された。中・近世の集落跡をこれだけ広範囲に発掘調査した例は市内でも少なく、当地域の集落研究の貴重な資料となろう。また、一部下層からは縄文時代の遺物包含層が確認され、縄文時代中期を中心とする多量の土器資料を得ることができた。これら縄文時代の遺物については、今後『牛岡遺跡II』として報告する予定である。頭地遺跡からも奈良時代から中世にかけての遺構・遺物が確認された。特に、奈良時代の須恵器を中心とする豊富な土器資料が得られている。

遺跡の分布調査によれば、この地域には縄文時代から各時代にわたっていくつかの遺跡が営まれているが、この地域での発掘調査は従来実施されたことがなく、遺跡の実態はほとんど明らかにされていない。今回実施した6遺跡の発掘調査の成果が、当地域の歴史研究の一助となれば幸いである。

発掘調査ならびに本書の作成に深いご理解と御協力をいただいた建設省中部地方建設局浜松国道工事事務所、静岡県教育委員会、掛川市教育委員会をはじめとする関係機関及び多くの関係者の皆様に心から感謝と敬意を表したい。また、寒暑にめげず発掘調査や整理作業に参加された多くの方々の労苦をねぎらいたい。

1995年3月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長　斎藤　忠

例　言

1．本書は静岡県掛川市八坂に所在する牛岡遺跡・郡地遺跡の発掘調査報告書である。牛岡遺跡は調査報告書の第1分冊で、奈良時代以降の遺構・遺物について報告している。

2．調査は「一般国道1号日坂バイパス埋蔵文化財発掘調査業務」として、建設省中部地方建設局の委託を受け、静岡県教育委員会の指導の下、掛川市教育委員会の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

3．調査体制は次のとおりである。

現地調査

平成元年度　所長斎藤忠　常務理事亀山千鶴男　調査研究部長山下晃
調査研究第一課長平野吾郎　調査研究員篠原修二
掛川市教育委員会学芸員戸塚和美

平成2年度　所長斎藤忠　常務理事亀山千鶴男　調査研究部長山下晃
調査研究第一課長平野吾郎　調査研究員篠原修二　内藤朝雄　鈴木正悟

平成3年度　所長斎藤忠　常務理事鈴木勲　調査研究部長山下晃　調査研究部次長平野吾郎
調査研究員篠原修二　鈴木正悟

整理報告

平成6年度　所長斎藤忠　常務理事鈴木勲　調査研究部長小崎章男
調査研究第二課長佐野五十三　調査研究員篠原修二

4．本書の執筆分担は次のとおりである。
第Ⅰ章　第Ⅲ章～第Ⅴ章　調査研究員篠原修二　　第Ⅱ章　調査研究員杉山忍　篠原修二

5．遺跡の地質・地形等については、加藤芳朗氏（静岡大学名誉教授）にご教示をいただいた。

6．柱根等の木製品の樹種鑑定については、山内文氏に依頼し、玉稿をいただき第Ⅴ章に収録した。

7．石材の鑑定については、伊藤通玄氏（静岡大学教授）に依頼した。

8．平成元年度および平成2年度に概報を刊行している。各概報と本書の記述に差がある場合、本書の記述を以て報告とする。

9．本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が当たった。

10．発掘調査資料は、全て財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。

目　　次

序
例　言
目　次

第Ⅰ章　調査の経過 …… 1

第1節　調査に至る経過 …… 1
第2節　調査の方法 …… 1
第3節　発掘調査の経過 …… 2

第Ⅱ章　位置と環境 …… 4

第Ⅲ章　牛岡遺跡の遺構と遺物 …… 9

第1節　調査の概要 …… 9
第2節　各群の遺構と遺物 …… 10

第Ⅳ章　頭地遺跡の遺構と遺物 …… 75

第1節　調査の概要 …… 75
第2節　遺構と遺物 …… 77

第Ⅴ章　まとめ …… 103

第1節　牛岡遺跡出土土器について …… 103
第2節　牛岡遺跡出土の樹種について …… 118
第3節　牛岡遺跡の集落跡について …… 122
第4節　頭地遺跡出土土器について …… 127
第5節　おわりに …… 132

挿図目次

第1図　調査区及びグリッド配置図 …… 3
第2図　周辺遺跡分布図 …… 5
第3図　牛岡遺跡遺構全体図 …… 7・8
第4図　調査区内地形図 …… 9

第５図　Ａ群遺構配置図 …… 10
第６図　ＳＢ－01・ＳＨ－01実測図 …… 11
第７図　ＳＨ－21実測図 …… 12
第８図　Ｂ群遺構配置実測図 …… 14
第９図　ＳＨ－02・03実測図 …… 15
第10図　Ａ群・Ｂ群出土土器実測図 …… 16
第11図　Ｃ群遺構配置図 …… 17
第12図　ＳＨ－12実測図 …… 18
第13図　ＳＨ－13実測図 …… 19
第14図　ＳＨ－14・ＳＸ－03実測図 …… 20
第15図　Ｄ群遺構配置図 …… 22
第16図　Ｃ群出土土器実測図（１） …… 23
第17図　Ｃ群出土土器実測図（２） …… 24
第18図　Ｃ群・Ｄ群出土土器実測図 …… 25
第19図　Ｅ群遺構配置図 …… 26
第20図　ＳＨ－16実測図 …… 27
第21図　Ｆ群遺構配置図 …… 28
第22図　ＳＨ－06・07実測図（１） …… 29
第23図　ＳＨ－06・07実測図（２） …… 30
第24図　ＳＨ－08実測図 …… 31
第25図　ＳＨ－09実測図 …… 32
第26図　ＳＨ－10実測図 …… 33
第27図　ＳＨ－11実測図 …… 34
第28図　ＳＦ－01・04・06実測図 …… 35
第29図　ＳＸ－04実測図 …… 36
第30図　Ｆ群出土土器実測図（１） …… 38
第31図　Ｆ群出土土器実測図（２） …… 39
第32図　Ｇ群遺構配置図 …… 40
第33図　Ｈ群遺構配置図 …… 42
第34図　ＳＨ－04実測図 …… 43
第35図　ＳＨ－17実測図 …… 44
第36図　ＳＨ－18・19実測図 …… 45
第37図　ＳＦ－02・03・05・07実測図 …… 46
第38図　Ｈ群・Ｉ群出土土器実測図 …… 47
第39図　Ｉ群遺構配置図 …… 49
第40図　Ｊ群遺構配置図 …… 50
第41図　ＳＨ－05実測図 …… 51
第42図　Ｋ群遺構配置図 …… 52
第43図　Ｌ群遺構配置図 …… 53
第44図　ＳＨ－15実測図 …… 54
第45図　Ｍ群遺構配置図 …… 55

第46図　ＳＨ－20実測図 …… 56
第47図　Ｎ群遺構配置図 …… 58
第48図　ＳＸ－05実測図 …… 59
第49図　Ｊ～Ｍ群・ＳＸ－05出土土器実測図（１） …… 60
第50図　ＳＸ－05出土土器実測図（２） …… 61
第51図　ＳＸ－05出土土器実測図（３） …… 62
第52図　ＳＸ－05出土土器実測図（４） …… 63
第53図　ＳＸ－05出土土器実測図（５） …… 64
第54図　ＳＸ－05出土土器実測図（６） …… 65
第55図　ＳＸ－05出土土器実測図（７） …… 66
第56図　ＳＸ－05出土土器実測図（８） …… 67
第57図　ＳＸ－05出土土器実測図（９） …… 68
第58図　ＳＸ－05出土土器実測図（10） …… 69
第59図　出土土器実測図 …… 70
第60図　出土金属製品実測図 …… 70
第61図　出土石製品実測図（１） …… 71
第62図　出土石製品実測図（２） …… 72
第63図　出土木製品実測図（１） …… 73
第64図　出土木製品実測図（２） …… 74
第65図　頭地遺跡遺構全体図 …… 75
第66図　ＳＸ－02実測図（１） …… 76
第67図　ＳＸ－02実測図（２） …… 77
第68図　ＳＸ－01上面礫実測図 …… 78
第69図　ＳＸ－01下面石組実測図 …… 79
第70図　ＳＸ－01掘り方及びＳＦ－01実測図 …… 80
第71図　ＳＨ－01・ＳＸ－03実測図 …… 81
第72図　出土土器実測図（１） …… 82
第73図　出土土器実測図（２） …… 83
第74図　出土土器実測図（３） …… 84
第75図　出土土器実測図（４） …… 85
第76図　出土土器実測図（５） …… 86
第77図　出土土器実測図（６） …… 87
第78図　出土土器実測図（７） …… 88
第79図　出土土器実測図（８） …… 89
第80図　牛岡遺跡出土山茶碗変遷図（１） …… 114
第81図　牛岡遺跡出土山茶碗変遷図（２） …… 115
第82図　掘立柱建物跡の規模 …… 122
第83図　掘立柱建物跡の桁行柱間距離 …… 122
第84図　掘立柱建物跡の方位 …… 122
第85図　牛岡遺跡集落変遷 …… 125

挿表目次

表1　周辺遺跡地名表 …… 6

表2　牛岡遺跡遺物観察表 …… 90

表3　頭地遺跡遺物観察表 …… 100

表4　牛岡遺跡樹種同定資料一覧 …… 120

表5　樹種と遺物名 …… 121

表6　樹種と出土地点 …… 121

表7　牛岡遺跡掘立柱建物跡規格一覧 …… 123

報告書抄録 …… 巻末

図版目次

図版1　遺跡周辺環境1（空中写真）

図版2　遺跡周辺環境2（空中写真）

図版3　牛岡遺跡遺構全景（南西から）

図版4　1．牛岡遺跡遺構全景（北東から）　2．A群遺構全景（東から）

図版5　1．SB－01周辺（東から）　2．SB－01（北から）
3．SH－01(東から）

図版6　1．B群遺構全景（北東から）　2．SH－02（北から）
3．SH－03（東から）

図版7　1．C群西側遺構全景（北東から）　2．C群東側遺構全景（南から）

図版8　1．SH－12～14（東から）　2．SH－12(北から）
3．SP－445検出状況　4．SP－443検出状況
5．SP－405検出状況

図版 9　1．ＳＸ－03検出状況（南から）　2．ＳＸ－03完掘状況（北から）
3．ＳＸ－03遺物出土状況　4．ＳＸ－03遺物出土状況

図版10　1．D群遺構全景（東から）　2．E群遺構全景（北から）

図版11　1．F群遺構全景（北から）　2．F群遺構柱穴群（北から）

図版12　1．ＳＨ－06～08（東から）　2．ＳＨ－06・07（東から）
3．ＳＰ－55検出状況　4．ＳＰ－72検出状況
5．ＳＰ－69検出状況　6．ＳＰ－251検出状況

図版13　1．ＳＦ－01（西から）　2．ＳＦ－04（南から）
3．ＳＦ－06（西から）

図版14　1．ＳＸ－04遺物出土状況　2．ＳＸ－04完掘状況（西から）
3．G群遺構全景（西から）

図版15　1．H群遺構全景（北から）　2．ＳＨ－04（北から）

図版16　1．ＳＨ－17・18（北から）　2．ＳＦ－02（南から）
3．ＳＦ－03検出状況（西から）

図版17　1．ＳＦ－03完掘状況（西から）　2．ＳＦ－05（北から）
3．ＳＦ－07（南から）

図版18　1．I群遺構全景（北東から）　2．J群遺構全景（南から）

図版19　1．ＳＨ－05（北から）　2．K群遺構全景（東から）

図版20　1．L群遺構全景（南から）　2．M群遺構全景（南から）

図版21　1．N群遺構全景（西から）　2．ＳＸ－05遺物出土状況
3．ＳＸ－05遺物出土状況

図版22　1．頭地遺跡遺構全景（南東から）　2．頭地遺跡遺構全景（北から）

図版23　1．ＳＸ－02遺物出土状況　2．ＳＸ－01上面礫検出状況（南東から）
3．ＳＸ－01下面石組検出状況（南東から）

図版24　1．ＳＸ－01遺物出土状況　2．ＳＸ－01完掘状況（南東から）
3．ＳＨ－01（南東から）　4．ＳＸ－03検出状況（南から）

図版25　牛岡遺跡出土土器（1）　実測図番号36～38・60～62・85・101・102・132・159・161・171・173・185・186

図版26　牛岡遺跡出土土器（2）　実測図番号187・220～224・229～231・233・235～237

図版27　牛岡遺跡出土土器（3）　実測図番号239～246・248～251・256・271

図版28　牛岡遺跡出土土器（4）　実測図番号274・275・277・280～284・287・291・293・296・298・299

図版29　牛岡遺跡出土土器（5）　実測図番号304～308・316・331・332・334・336・340

図版30　牛岡遺跡出土土器（6）　実測図番号341・344～346・350～353・355～357・361～365

図版31　牛岡遺跡出土土器（7）　実測図番号367・369・373・374・377～380・383・387～391・394・396

図版32　牛岡遺跡出土土器（8）　実測図番号399～403・406・409～411・414・419～421・426～428

図版33　牛岡遺跡出土土器（9）　実測図番号429～433・449～452・455・458・459・461～464

図版34　牛岡遺跡出土土器（10）　実測図番号465・469～472・474・480・482・487・488・500・507・535

図版35　牛岡遺跡出土石製品（1）　実測図番号555～560・562～564・566

図版36　牛岡遺跡出土石製品（2）　実測図番号565・567・570～573・575～577

図版37　牛岡遺跡出土石製品（3）　実測図番号568・569・574
鉄製品・木製品（1）　実測図番号546・578・579

図版38　牛岡遺跡出土木製品（2）　実測図番号581・582・584・585・587・589

図版39　牛岡遺跡出土木製品（3）　実測図番号588・590・592～595

図版40　頭地遺跡出土土器（1）　実測図番号597・598・601・602・607・612・616・617・619・620・624・626

図版41　頭地遺跡出土土器（2）　実測図番号627・628・630～633・639・641・642・645・647・650

図版42　頭地遺跡出土土器（3）　実測図番号651・653～656・659・669・670・672・674・684

図版43　頭地遺跡出土土器（4）　実測図番号692・694・695・701・702・714・722・731

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査に至る経過

昭和44年の東名高速道路開通後も一般国道1号の交通量は増加し、交通混雑は著しくなる一方であった。このため各地域でバイパス建設が実施され、掛川市内でも昭和56年に掛川バイパスが開通し、平成元年には袋井バイパスが一部供用されている。これらの建設に伴い、これまで峯山遺跡・原川遺跡・領家遺跡等の発掘調査が行われてきた。

このような中で、掛川バイパスと金谷バイパスを結ぶ日坂バイパス建設工事は、昭和61年に都市計画決定がなされ、翌62年に本格的に事業化された。路線は掛川市八坂を起点に佐夜鹿までの総延長4.3Kmである。この計画に伴い、掛川市教育委員会によって昭和62年11月から昭和63年2月にかけて、路線内における遺跡の分布調査が行われた。その結果、周知の遺跡である頭地遺跡を含め、工事着工前に現地調査を必要とする地点として13地点が取り上げられた。この分布調査の結果を受け、建設省浜松工事事務所・県教育委員会文化課・掛川市教育委員会によって協議が持たれ、(1) この13地点について現地調査を実施する (2) 調査は、遺跡の範囲及び性格等を把握するための第1次調査を実施し、その結果に基づいて第2次調査（平面調査）へ移行する (3) 発掘調査は（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所が当たる (4) 調査全般にわたる調整は静岡県教育委員会が、地元との調整については掛川市教育委員会及び掛川市都市計画課が当たる等の合意がなされた。その後、各関係機関によって実際の調査に向けて調整・協議が行われ、初年度である平成元年度は、掛川市教育委員会から発掘調査担当者1名の派遣を得ることになった。

平成元年10月2日に調査委託契約が締結され、諸準備を経て11月から現地作業に着手した。平成元年度は頭地遺跡・牛岡遺跡・向畑遺跡の第1次調査と一部第2次調査を行い、平成2年度はこれら3遺跡の第2次調査と社宮寺遺跡の第1次調査、平成3年度は牛岡遺跡と社宮寺遺跡の第2次調査を実施し、平成3年度までに4遺跡の発掘調査を終了した。平成4・5年度には川田遺跡と日坂地区の6遺跡の第1次調査を実施し、その内遺構が確認された6地点目の清水遺跡の第2次調査を終了している。残り2遺跡については、平成7年度以降実施して行く予定となっている。

第2節　調査の方法

調査対象区域には、10m方眼のグリッドを設定した。グリッドは牛岡遺跡内のバイパスセンターラインのポイントNo.1190とNo.1185を結ぶ直線を主軸とし、No.1190をグリッドの起点とした。主軸線はN46°−24′−20″Eである。グリッド名は路線幅方向を南東からA・B・C・・・I、延長方向を牛岡遺跡から頭地遺跡に向って1・2・3・・・38とし、例えばAと1が交差する区画をA1グリッドと呼ぶことにした。

調査は、第1次調査（確認調査）と第2次調査（平面調査）の2回に分けて実施した。第1次調査はグリッドに合わせて、幅1mのトレンチをほぼ10m間隔に桝目状に入れていった。掘削は全て手掘りで行い、土層や遺物の出土状況の観察を進めた。基本的には遺構が検出された時点で止め、遺構の調査は後の第2次調査を考慮して行わなかった。第1次調査終了後、必要な範囲に対して第2次調査を実施した。表土除去は牛岡遺跡では建設重機を使用し、頭地遺跡では手掘りで行った。遺構検出は基本的に平面で行い、不明部分についてのみトレンチを利用した。竪穴住居跡等の遺構には、検出された順に遺構毎番号を付し、便宜的に竪穴住居跡（SB）・掘立柱建物跡（SH）・土坑（SF・SX）・小穴（SP）・溝（SD・SX）という記号を用いた。後述の遺構の概要の中でも、この記号を用いて記述している。

遺構平面図及び土層図は縮尺１/20を基本とし、平面図はグリッド毎に割り付けた。写真撮影は６×７判（白黒）と35mm判（白黒・カラーリバーサル）を併用し、作業工程記録用として35mm判（カラーネガ）を使用した。全景等の写真撮影に当たっては、ローリングタワーを３段から５段に組んで撮影する一方、ヘリコプターあるいはラジコンヘリコプターによる空中写真撮影も採用した。

第３節　発掘調査の経過

日坂バイパス予定路線内の発掘調査は、平成元年度から開始した。10月から準備作業を進め、作業員の確保・プレハブの設置・グリッド杭の設置等調査区の基本設定を行い、11月から現地調査に入った。今回報告する牛岡遺跡と頭地遺跡は、路線内の逆川を挟んだ低位段丘上に立地する別々の遺跡であり、調査は隣接する向畑遺跡や社宮寺遺跡と併行して実施した。

牛岡遺跡の第１次調査は、平成元年度事業として平成元年12月に実施し、調査対象面積約12,000㎡の内、約750㎡の確認トレンチを入れた。その結果、黒褐色土あるいは黒灰色土を覆土とする小穴が確認され、表土及び覆土から山茶碗・中世陶器等が出土し、中心は平安時代末から鎌倉時代の集落跡であろうと推測された。また、E24グリッド付近では、これら遺構の確認面である黄褐色土下層に縄文時代の遺物包含層が確認された。

この結果を受け、平成２年１月から第２次調査に入り、平成３年12月上旬まで他遺跡の調査と調整を取りながら断続的に実施した。調査区は調査の進捗状況にあわせて、便宜的に１～６区に分けた（第１図）。平成２年１月から１区の遺構検出を開始し、頭地遺跡と向畑遺跡の調査と併行させながら３区・２区・４区の順に調査を進めた。調査区内からは夥しい数の柱穴が検出されたが、遺構確認が比較的容易であったこともあり、発掘調査は順調に進み、平成３年１月までに終了することができた。２月に、１～４区の奈良時代から近世にかけての遺構全景写真をヘリコプターを使用して撮影し、３月９日には地元住民を対象に現地説明会を開催した。

平成３年度には、５区・６区と用地未買収であった２区西側の調査を実施した。６区からは奈良時代以降の遺構は検出されなかったが、５区では土坑状に広がる大きな溝状遺構が確認された。溝状遺構は最大幅約26m、最大深度1.5mあり、調査は難航し、途中社宮寺遺跡の調査も併行したため８月上旬までかかってしまった。その後、５区縄文時代遺物包含層の発掘を進めながら、10月から２区西側の調査を開始した。ここからは２年度の調査区から続く柱穴群が検出された。12月５日までに５区の現地調査を終了し、調査区の埋め戻し作業を行って、12月20日に牛岡遺跡の調査を全て完了した。第２次調査実施面積は、最終的に約11,000㎡となった。

第１次調査完了状況

牛岡遺跡４区発掘状況

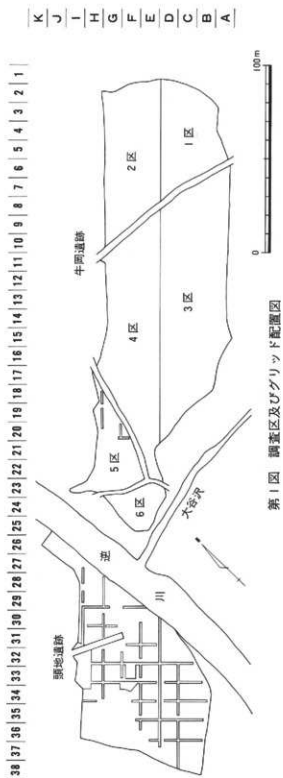
頭地遺跡の第１次調査は、平成元年度事業として平成元年11月上旬から12月に実施し、調査対象面積約5,800㎡の内、約600㎡の確認トレンチの発掘を行った。その結果、調査区の大半にあたる逆川に面した地点からは遺構は検出されず、確認されたのは調査区内で最も高いH－32グリッド付近のみであった。

この結果を受け、H－32グリッド付近約150㎡を対象に平成２年１月から第２次調査を開始した。手掘りにて表土除去を行うと、奈良時代を中心とする多数の土器が出土し、調査区中央からは集石遺構が検出された。そのため、３月になって集石の写真測量を実施し、他遺跡の調査との関係から本格的な調査を次年次におくることになった。

平成２年５月末から調査を再開し、集石土坑（SX－01）と中世の遺構を検出し、さらに奈良時代の土器を包含する旧流路跡の調査を行った。集石土坑の実測作業に手間取ったことや作業工程上の問題から調査は遅延してしまったが、11月上旬に遺構実測及び完掘写真撮影を終え、頭地遺跡の調査をすべて完了した。

牛岡遺跡５区発掘状況

頭地遺跡発掘状況



第１図　調査区及びグリッド配置図

第II章　位置と環境

牛岡遺跡と頭地遺跡は、掛川市東部の逆川上流域に位置し、逆川によって形成された低位段丘上に立地する。逆川は掛川市北東端の粟ヶ岳に源を発し、蛇行しながら南流して東山口付近で進路を西に変え、市街地を貫けて袋井市東端で原野谷川と合流する。支流の水を集めて川幅は徐々に広がり、東山口付近から比較的開けた沖積平野を形成して行く。両岸には掛川層群と相良層群からなる標高100～200m程の山々が連なり、逆川及びその支流によってつくられた大小多数の細長い谷が入り組んでいる。

古来より、日坂－小夜の中山－金谷に抜ける道は、東海道における交通の要衝にあたっている。小夜の中山については、源光行の『海道記』に「此山口をしばらくのぼれば、左も深谷、右も深谷、一峰ながき道はつゝみの上に似たり。両谷の梢を眼下に見て、群鳥の囀るを足下に聞く。谷の両片は苔く、又山の間をすぐれば、中山とは見えたり。」とその情景をうたっているが、「小夜（佐夜）」は、左右の谷間が狭く、「狭谷」から転じたとする説が一般的である。その様な地形ゆえか、『古今集』東歌に詠まれて以来、枕詞として盛んに用いられ、『後撰集』・『千載集』・『新古今集』などにも多くの歌を残している。また、日坂に残る「事任八幡宮」は、延喜式に見える「已等乃麻知神社」に比定され、小夜の中山とともに旅の名所として紀行文等に数多く取り上げられている。先述の『海道記』、源親行の『東関紀行』、阿仏尼の『十六夜日記』などには「ことのまま」の神社として登場し、嘉祥３年(850年)７月に従五位、貞観２年(860年)正月に正五位上を授けられるなど、国家にもその存在を重視されていたことが正史より窺える。

古代において掛川地域に勢力を有していたと思われる氏族として、素賀国造、久努国造、久努直、佐夜部直、佐夜直などの名が『先代旧事本紀』より確認される。このうち、「佐夜部直」「佐夜直」の名は、律令期、この地に建郡された「佐益郡（さやぐん）」の名に取り入れられたと考えられ、かなり大きな勢力を保持していたものと推測される。恐らく、当初は「佐夜」の地に関連性があったとしても比較的早い時期から西方の平野部、現在の掛川市と袋井市の境付近に活動拠点を移していたのであろう。奈良時代初期まで、掛川市から袋井市にわたるかなり大きな地域を領域として、この「佐益郡」が置かれていたが、養老６年(722年)２月に至り、そのうちの８郡を割いて新たに山名郡が置かれている。その理由について正史は何も語っていないが、もともと有力氏族がいくつも存在した上に、『駿河国正税帳』には佐益郡散事として「丈部塩麻呂」の名も見え、郡司職をめぐる氏族間の勢力争いなどが背景にあったとも考えられる。なお最近発掘調査がすすみ、佐益郡については、袋井市の「坂尻遺跡」が、山名郡については浅羽町の「新堀遺跡」が、それぞれの郡役所に関連する施設として注目されている。

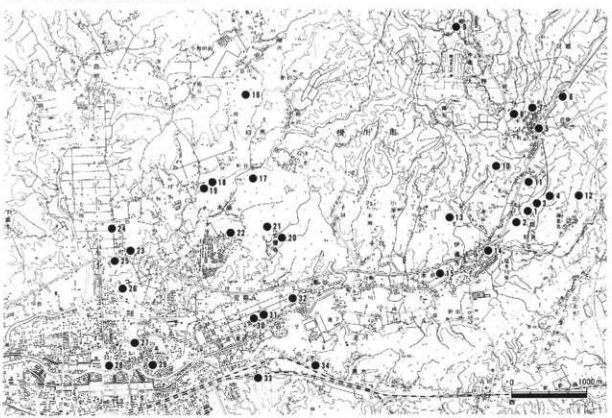
逆川上流域における奈良から平安時代の遺跡は、当遺跡を含めて深谷遺跡・安養寺遺跡・山口遺跡をはじめ15遺跡が確認されている。発掘調査が実施されたのは２遺跡で、深谷遺跡からは銅鏡と和同開珎が出土し、安養寺遺跡からは寺院的な建物跡が発見されている。ともに特殊な遺跡と考えられ、低地遺跡の調査はこれまでにない。『神鳳鈔』によれば、現在の蔵谷、本所あたりにあったと推測される「山口御厨」の名が確認できる。成立は延久２年(1070年)とされ、給主は外宮の度会光親であり、隣接していたとされる「小高御厨」とともにこの地域に影響を及ぼしていたものと考えられる。これら２つの伊勢神宮御厨に関連する施設が、今後発見される可能性も大いにあると思う。

中世に入ると、宿駅が整えられ交通路がより一層充実してくる一方、幾度かの戦乱の舞台として歴史に登場することになる。それを裏付けるように中世の城館が数多く存在し、松原城、本宮山城、伊達方城などが知られており、主として国人領主層の戦いのあとを物語っている。古代において日坂は、掛川市中心付近に比定される「横尾驛」と「初倉驛」とを結ぶ官道の真中に位置していた。中世以降「横尾」

の名は登場せず、代りに「縣川（河）」が史上に姿を現す。『吾妻鏡』がその初見であるが、建久元年（1190年）、源頼朝が上洛の帰途宿泊し、また暦仁元年（1238年）、将軍頼経の上洛に際し、城飼郡横地の将、横地太郎兵衛尉長直を奉行として御所が新造されている。これらの往来繁多の中で、小夜の中山の入口なる意味からか「山口」と言われた「山口今宿」（現、成滝から千羽あたりか？）や、頼朝上洛の際に鮭の楚割を賞味した「菊河（川）宿」などの宿が成立していったものと思われる。小夜の中山にある久延寺門前には、旅人に無料で湯茶を施す「接待所」が設けられていたという。

南北朝時代に入っても戦乱は続き、元弘４年（1334年）８月、北条時行の反乱軍と足利尊氏の軍が小夜中山で激戦を交えたことが『梅松論』に見え、後の足利氏内訌においては、正平６年（1351年）11月、尊氏の将、小笠原政長は直義派の上杉憲顕と佐与中山で戦い、更に鎌倉に向かう尊氏が縣川に駐軍したことが『足利尊氏軍勢催促状案』によって確認される。

室町時代の中遠地域は、今川氏・斯波氏と続いた守護勢力の支配力の無さと、原氏を中心とする国人勢力の台頭により、不安定な状況が続く。応仁の乱に誘発され、駿河今川氏の義忠により遠江進出が開始されるが、文明７年（1475年）、斯波氏と結んだ国人領主、勝間田氏、横地氏による反乱に伴い、小夜山口の戦いで今川方が堀越貞延をはじめ多くの犠牲者を出したことが知られている。日坂長松院の背後には「松原城」があり、原氏などと連携し今川氏と対抗していた国人領主、河合（川井）成信の居城とされている。河合氏は倉真の松葉城を本城としていたようであるが、明応５年（1496年）９月10日、今川氏親に呼応した勝間田城主勝間田播磨守と志戸呂城主鶴見因幡守により攻められ、本城とともに落城、河合成信は室とともに松原城にて落命している。河合氏滅亡後、最大勢力を誇っていた原氏も明応６年頃には今川に下り、氏親の西方への進出は速度を増す。それに伴い、家臣の朝比奈泰能に命じて作らせた掛川城は、その後戦国期には徳川氏との勢力争いの拠点となっていく。塩井川原砦は、掛川城攻略のため徳川氏によって築かれたものであるが、その後、山内一豊による掛川城修築の際の採石場などとなり、かなり破壊されてしまった。



第２図　周辺遺跡分布図（古代～近世）

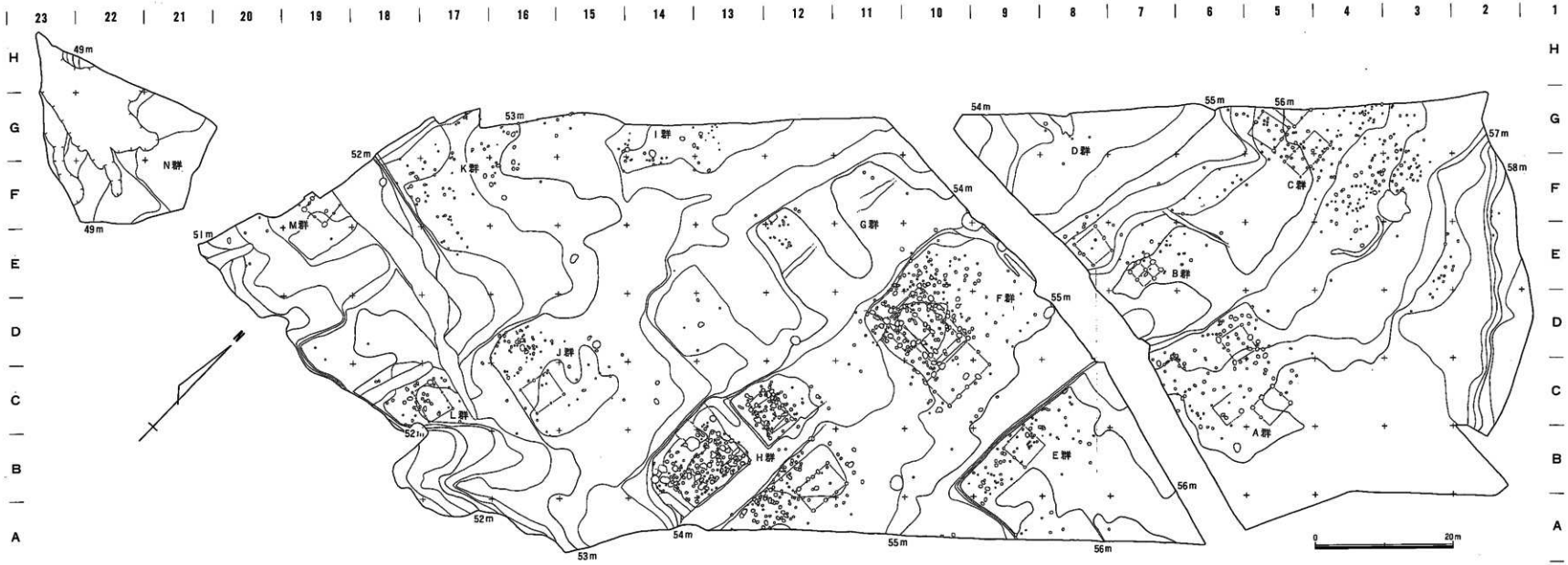
「牛岡」という地名が登場する文献史料は、『長松院文書』が最初である。氏親・義元・氏真と続く今川三代によって出された、永正2年(1505年)～永禄3年(1560年)の年紀をもつ一連の判物に「遠江国佐野郡牛岡郷」と表現されている。ただし、その後の史料では、たとえば慶長9年検地帳に「牛岡ノ庄海老名村」と表される如く、庄の名として出てくることが多い。現在の鴨方・宮村・影森・海老名のあたりを称し、中世以降「牛岡庄」と呼んでいたようである。「牛岡」のいわれについて、『掛川誌稿』では影森付近で湧き出た水を「潮河」と呼び、「河」を「賀」と訓じたことにより「うしおか」となったとする説を掲げている。

近世に入ると、日坂宿が幕府直轄支配として栄えることになる。慶長6年(1601年)の「道中奉行伝馬掟書」から、この頃以前に宿の成立の時期をおくことができる。正徳2年(1712年)に、掛川城主小笠原壱岐守長煕から日坂宿御林守を命じられた岩井佐太夫（のち政右衛門と改名）が、元文年間に「日坂陣屋」を建てている。日坂宿の北側、逆川右岸の尾根裾部の断崖上に築造されたが、現在は宅地・畑などになっている。寛延2年(1749年)からは、中泉代官の手代も兼ね、享和元年(1802年)まで、御林の管理保護や宿の司法、検察、民政の任にあたったという。日坂宿は、本陣・脇本陣を各1軒、旅籠33軒を備え、天保14年(1843年)には総家数168軒、人口750人を数えている。同じ日坂バイパス建設予定地内の日坂宿東側に位置する滑水遺跡（平成4・5年度に発掘調査を実施）からは、この町並みの一部と宿場成立以前の集落跡が発見されている。

表1　周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	時期	立地	番号	遺跡名	時期	立地
1	牛岡	奈良～近世	低位段丘	18	谷ノ坪II	奈良	低位段丘
2	頭地	〃	〃	19	谷ノ坪I	奈良～平安	〃
3	社宮寺	縄文	丘陵	20	深谷	奈良	丘陵
4	向畑	縄文・弥生	〃	21	安養寺	平安	〃
5	清水	平安～近世	下位段丘	22	文殊ヶ谷経塚		〃
6	水井	近世	丘陵	23	日守田	奈良	〃
7	日坂陣屋	〃	〃	24	加島	〃	低位段丘
8	大向砦	中・近世	〃	25	戸塚	平安	〃
9	松原城	〃	〃	26	天王山砦	中・近世	中位段丘
10	本宮山城	〃	〃	27	掛川古城	〃	下位段丘
11	地蔵堂	奈良～中世	低位段丘	28	掛川城址	〃	〃
12	海老名経塚		丘陵	29	笠町砦	〃	〃
13	伊達方城	中・近世	〃	30	成滝館	〃	低位段丘
14	塩井川原砦	〃	〃	31	山口	奈良～平安	〃
15	源訪窯	奈良	〃	32	吉明	〃	〃
16	初馬城	中・近世	〃	33	大六山砦	中・近世	丘陵
17	水垂城	中・近世	丘陵	34	畑中	奈良～平安	平野

＊名称・時期は掛川市遺跡地名表による。
＊立地は土地条件図（国土地理院）による。



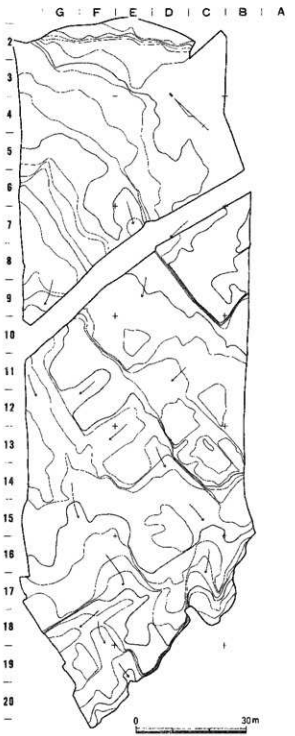
第3図　牛岡遺跡遺構全体図

第Ⅲ章　牛岡遺跡の遺構と遺物

第１節　調査の概要

遺跡は、逆川左岸の低位段丘上に立地し、北には向畑遺跡がのる丘陵が迫り、東には大谷沢と呼ばれる小河川が流れる。地形は、北東丘陵裾部を頂点に南西方向に緩やかに傾斜しており、比高差は約10mある。遺跡内はほとんどが水田であり、この地形に沿って段々畑を形成している。

調査区内の土層は、基本的には上から表土（水田耕作土）、黒褐色土、黄褐色土（砂礫混じり）の順となる。但し、調査区内には水田造成の段差とは別に、黒褐色土や黄褐色土面を削って自然流路状の凹みが認められ、凹み部には灰色粘質シルトが堆積していた。第４図に示したように、凹み部は南西に向かい、数本の流れが想定できる。旧地籍図を見ると、水田がこの地形に沿って営まれていたことがわかる。灰色粘質シルト内には中・近世の遺物が含まれており、このような地形の形成は、集落の廃絶以降のことと考えられる。黒褐色土は、この流路や水田造成により削平されており、段差の縁辺部にだけ残っていた。自然堆積と考えられるが、遺物包含層でもある。黄褐色土はほぼ調査区全体に広がっており、南西に向かって厚く堆積している。加藤芳朗氏に土層観察を実施していただいたところ、黄褐色土中には脈状に礫の潰が認められ、それが東西に延び、角礫を多く含んでいる等、この黄褐色土が大谷沢によって扇状地状に堆積したものであることが明らかになった。調査区北東部では下層の灰白色あるいは黒灰色粘土が一部露呈し、中央付近から以西では黄褐色土下に砂礫とシルトの堆積が確認されている。５・６区では、この砂礫あるいはシルト層から多数の縄文土器が出土している。黄褐色土中からも、第59図に示した縄文土器の一部が検出されている。



第４図　調査区内地形図

遺構確認面は、黄褐色土と黒褐色土両であるが、一部の遺構検出は土質が近似していたため黒褐色土上面では困難で、黄褐色土上面まで掘り下げて実施した。遺構覆土は黒褐色土ないし黒灰色で、色調等から時期差を捉えることはできなかった。遺構は第３図遺構全体図（図版３・４－１）を見るように、ほぼ調査区全体から確認されているが、上述のような地形の状況等もあって疎密が認められる。そこで、遺構のまとまりをＡ～Ｎの14群に分け、各群の遺構と遺物について触れていくことにする。

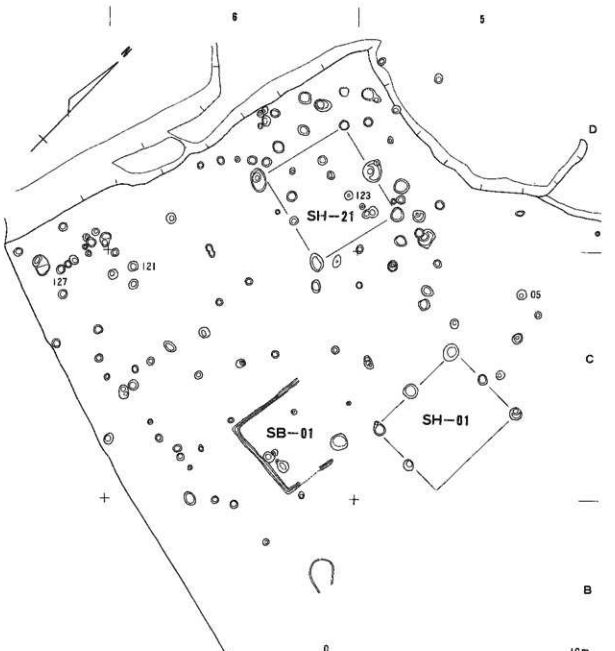
第２節　各群の遺構と遺物

A群（第５図　図版４－２）

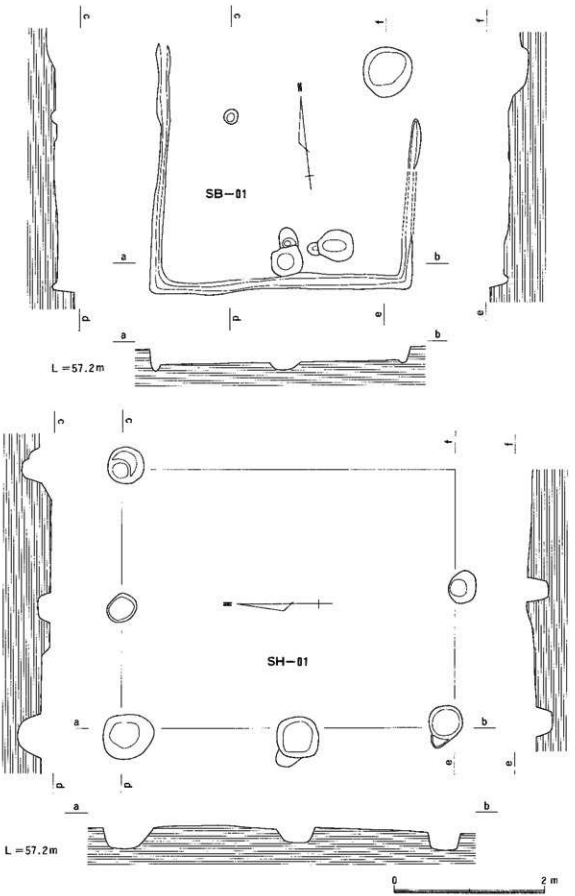
A群は調査区北側のＣ６グリッドを中心とする地区で、東西約20m・南北約22mの広がりを持つ。西側は水田造成のため約50cmの段差をなし、B群と分離される。段差付近には黒褐色土が薄く堆積しており、黄褐色土上面と２面にわたって遺構検出を実施した。遺構の一部は、近世後半以降の溝や攪乱によって破壊されていた。検出した遺構は、竪穴住居跡１と小穴約90がある。多数の小穴の内、掘立柱建物跡２棟が確認できた。

竪穴住居跡

ＳＢ－０１（第６図　図版５－１・２）



第５図　A群遺構配置図



第6図　SB－01・SH－01実測図

竪穴住居跡SB－01は、Ｃ６グリッドから検出され、北側は近世後半以降の溝によって壊されていた。東西3.5m・南北3.35m（残存）・深さ約20cmで、平面形態は方形を呈し、壁溝を有する。覆土は炭混じりの黒褐色土で、床面は堅く締まっていた。壁溝は幅約20cm・深さ約６cmでU字状を呈し、一周するものと思われる。明確な柱穴は確認できなかったが、内部から６個の小穴が検出された。南壁際中央の小穴には焼土が混入していた。北東の小穴は比較的大きく、貯蔵穴である可能性を持つ。カマドは検出されなかったが、北壁側にあったと推定される。周溝にはあたかも住居を囲むかのように、小穴が散在している。竪穴住居の方位は、Ｎ－６°－Ｅである。

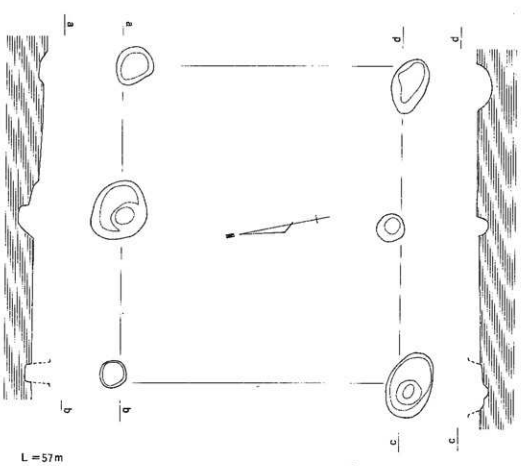
出土遺物は須恵器と土師器で、第10図１～４を図示することができた。１・２は須恵器坏蓋、３・４は須恵器坏身で、３は碗状を呈する。土師器は甕の胴部破片が出土している。遺構の時期は、出土土器から８世紀前半代と考えられる。

掘立柱建物跡

ＳＨ－０１（第６図　図版５－３）

掘立柱建物跡ＳＨ－01は、SB－01北東側のＣ５グリッドから検出された。南東部２本の柱穴を欠くが、梁行２間・桁行２間の南北棟の建物と推定される。梁行3.45m・桁行4.4mで、桁行方位はほぼ真北である。柱穴は桁行方向の側柱がやや小さな円形で、他は隅丸方形に近い。規模は長径20～40cmで、深さは20～30cmである。

柱穴からは、小皿の土師器と須恵器破片が出土している。遺構の時期は、出土土器から奈良時代の可能性を持つが、断定できない。



第７図　SH－21実測図

ＳＨ－２１（第７図）

掘立柱建物跡ＳＨ－19は、ＳＢ－01北西側のＤ５・Ｄ６グリッドから検出された。やや並びが悪いが、梁行１間・桁行２間の東西棟の建物と考えられる。梁行3.8m・桁行4.3mで、桁行方位はＮ－102°－Ｅである。柱穴は不整形で、規模も長径35～80cm と不揃いである。深さは10～28cm と浅いが、西側の柱穴は黒褐色土上面で検出されており、30cm 前後の深さを持っていた。

柱穴から奈良時代と考えられる小量の土師器と須恵器破片が出土してるが、柱穴の一部は黒褐色土（奈良時代の土器を包含）面にて検出されており、遺構の時期は12～13世紀代と推定される。

小穴及び包含層出土遺物（第10図５～14・第61図555～557）

出土遺物には、須恵器・土師器・山茶碗・陶器・石器があるが、全体的に量は少ない。５～７は須恵器坏身で、高台を有するものと無いものがある。いずれも奈良時代の土器である。８・９は山茶碗小皿で、10～13は碗である。10は口縁部が外反するもので、より古く位置付けられる。14は湖西・渥美古窯産の甕の底部である。また、Ｄ５・Ｃ６グリッドからは縄文時代の石器が出土している。555～557（図版35）は、石鏃・剝片石器・打製石斧で、剝片石器は側縁に調整加工を施している。

出土土器を見る限り、Ａ群遺構の時期は、８世紀と12～13世紀代の２時期に分かれると思われる。

Ｂ群（第８図　図版６－１）

Ｂ群は調査区北側のＥ７グリッドを中心とする地区で、東西約15m・南北約24mの広がりを持つ。西側は水田造成による段差があり、緩やかに傾斜して行く。北側はＣ群と隣接し、小穴が散在する。検出した遺構は、小穴約60と溝１である。小穴の内から、掘立柱建物跡２棟が確認できた。

掘立柱建物跡

ＳＨ－０２（第９図　図版６－２）

掘立柱建物跡ＳＨ－02は、Ｅ７グリッドから検出された。水田造成により南東部１本の柱穴を欠くが、梁行２間・桁行２間の南北棟の総柱建物と考えられる。梁行３m・桁行3.45mで、桁行方位はほぼ真北である。柱穴の形態は楕円あるいは円形を呈し、長径50～70cm で比較的大きい。検出面からの深さは10～30cm で、全体的に浅い。覆土は黒褐色土である。

柱穴からは小量の土師器破片が出土しているだけであるが、遺構の形態と周辺からの出土土器から、遺構の時期は奈良時代と考えられる。

ＳＨ－０３（第９図　図版６－３）

掘立柱建物跡ＳＨ－03は、ＳＨ－02南西側のＥ８グリッドから検出された。調査時はもう１間西へ伸びると思われたが、梁行が開いてしまうため、梁行１間・桁行２間の東西棟の建物として捉えた。梁行3.8m・桁行4.2mで、桁行方位はＮ－98°－Ｅである。柱穴はほぼ円形で、規模は長径35～55cm、深さ14～20cm と浅い。覆土は黒灰色土である。

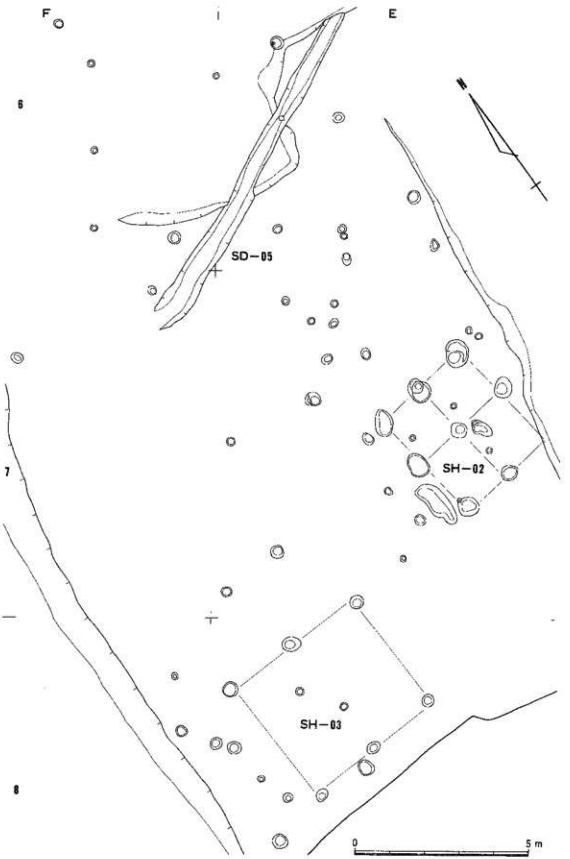
柱穴からは小量の土師器・山茶碗破片が出土しており、遺構の時期は12～13世紀代と考えられる。

溝状遺構

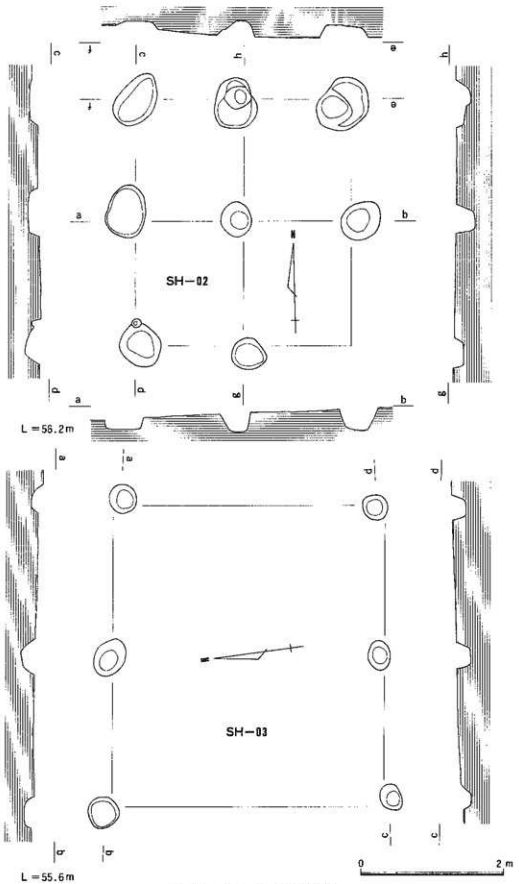
ＳＤ－０５（第８図　図版６－１）

溝ＳＤ－05はＥ６からＦ７グリッドにかけて、北東から南西に向かって延びる。検出長約10.5mで、両端は水田造成により欠く。幅は45～90cm で、南側でやや広くなる。深さは、検出面から７～20cm と比較的浅い。覆土は黒褐色土である。

溝内からは須恵器・土師器破片が出土しおり、第10図15・16を図示することができた。いずれも須恵器で、15は高台付坏身、16は長頸壺の胴部破片と考えられる。遺構の時期は、これら出土土器から８世紀前半代と考えられる。



第8図　B群遺構配置図

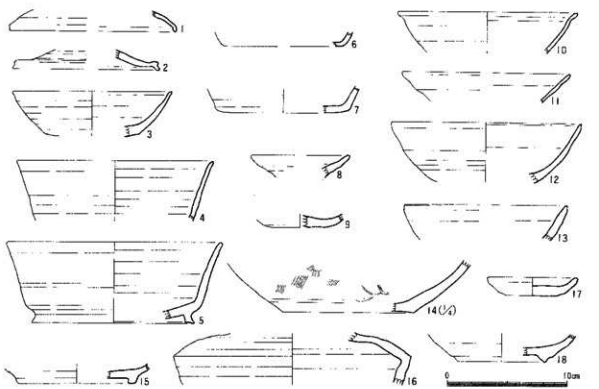


第9図　SH－02・03実測図

小穴及び包含層出土遺物（第10図17・18）

B群からの出土遺物は全体的に少なく、図示できたものは17・18の２点だけである。山茶碗の小皿と碗で、小皿は器高が低く比較的新しく位置付けられる。

B群遺構の時期は、A群同様に８世紀と12～13世紀代の２時期に分かれる。



第10図　A群・B群出土土器実測図

C群（第11図　図版７）

C群は、調査区北側のＥ４グリッドを中心とする地区である。南北約25m・東西45m以上で、さらに西へ広がる。Ｅ４グリッド付近の小穴群はやや離れるが、当群に含めた。検出した遺構は、土坑１・溝１・小穴200以上である。多数の小穴の内、掘立柱建物跡３棟が確認できた。

掘立柱建物跡

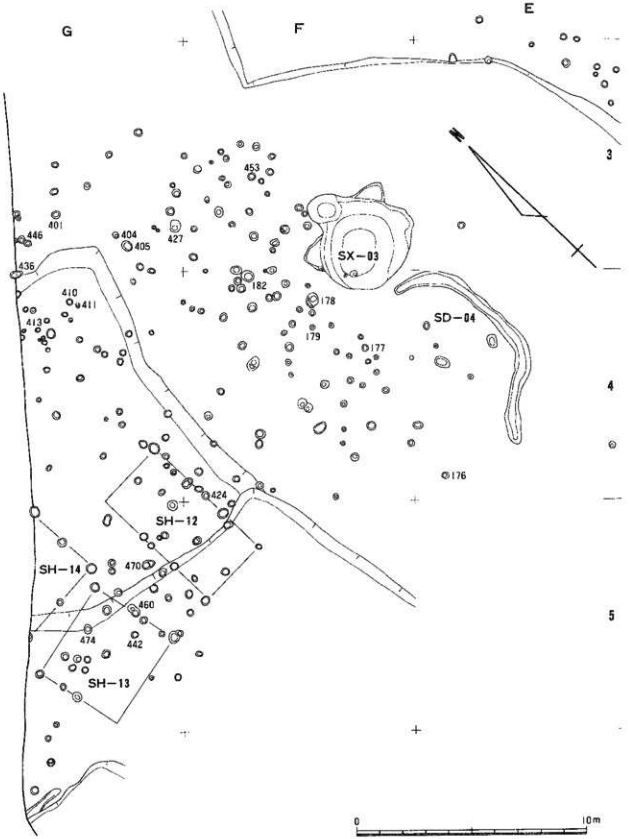
ＳＨ－１２（第12図　図版８－１・２）

掘立柱建物跡 SH－12は、Ｇ４からＦ５グリッドにかけて検出された。北西部１本の柱穴は検出されなかったが、梁行１間・桁行３間の南北棟の建物と考えられる。梁行3.15m・桁行6.3mで、桁行方位はほぼ真北である。東側の柱穴列２間には、約60cm離れて３本の柱穴が並列し、庇付建物である可能性が高い。また、南側２間の中央には、束柱と考えられる柱穴が検出された。柱穴はほぼ円形を呈し、長径30～50cm・深さ15～34cmで、庇部分の柱穴は他に比べやや小さい。覆土は黒褐色土で、３本の柱穴内には根固めのために扁平な石が１個ないし数個置かれていた。

柱穴からは、小量の山茶碗・土師器破片等が出土している。図示できたものは第16図19・20で、19は山茶碗小皿の底部破片、20は白磁碗の底部破片である。また、SP－437から出土した柱根あるいは礎板と考えられる木片は、樹種鑑定の結果イヌマキであった。遺構の時期は、出土土器から12世紀末から13世紀前半と考えられる。

ＳＨ－１３（第13図　図版８－１）

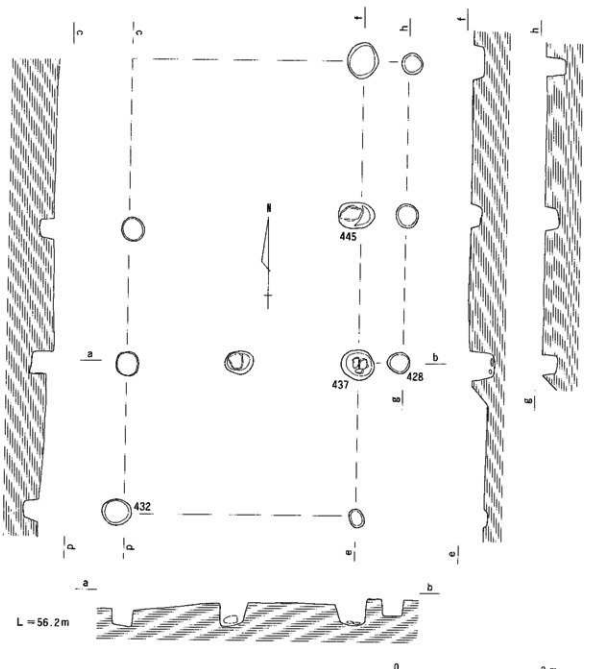
掘立柱建物跡SH－13は、SH－12西側のG５グリッドから検出された。南西部１本の柱穴を欠き、形



第11図　C群遺構配置図

態的には不自然な面も見られるが、梁行1間・桁行2間の南北棟の建物として捉えた。梁行4.5m・桁行4mで、桁行方位はN－10°－Wである。中央には束柱と考えられる柱穴が検出され、東側の柱穴列の外には約1.25m離れて3本の柱穴が並列し、さらに南側に1本、西側に1本同間隔で柱穴が検出されており、庇付建物の可能性がある。柱穴はほぼ円形で、規模は長径40cm前後・深さ30～47cmである。庇部分の柱穴は長径30cm、深さ12～25cmと主柱穴に比べやや小規模となる。覆土は黒褐色土で、4本の柱穴に根固めの礫が残っていた。

柱穴内からは、小景の山茶碗・土師器破片等が出土してる。図示できた土器は、第16図22の山茶碗小碗のみである。22は高台径が大きく、高台の作りも丁寧である。SI'－462からは第62図546（図版37）の

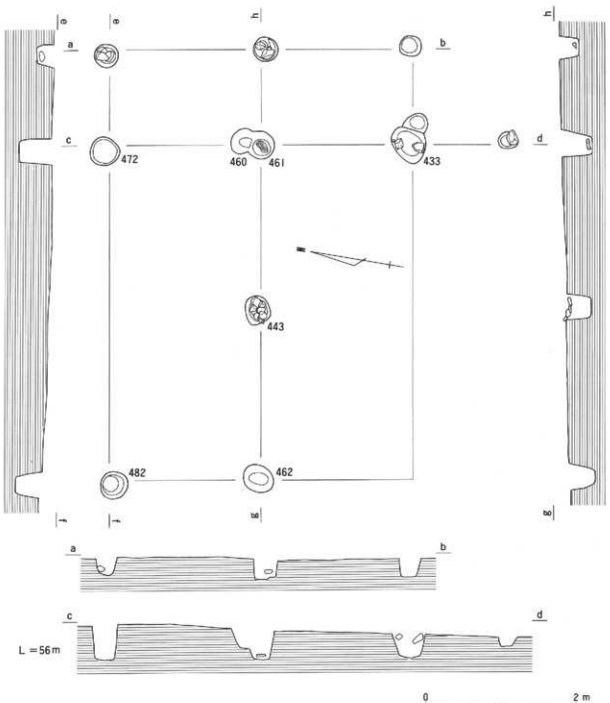


第12図　SH－12実測図

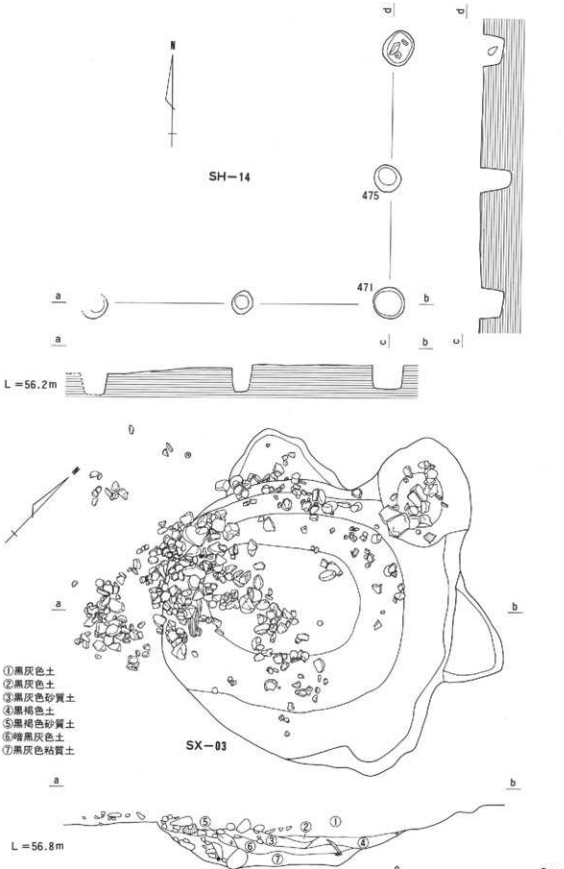
錐状の鉄製品が出土している。また、樹種鑑定の結果、SP－433・461・472から出土した柱根あるいは礎板と考えられる木片は、共にイヌマキであった。遺構の時期は、出土土器から12世紀中頃と考えられる。

ＳＨ－１４（第14図　図版８－1）

掘立柱建物跡SH－14は、Ｇ５グリッドSH－13の北側から検出された。北側が調査区外へ掛かっているため規模は明確ではないが、検出部分では梁行２間・桁行２間の東西棟の建物と考えられる。梁行3.5ｍ・桁行４ｍで、桁行方位はＮ－90°－Ｅである。柱穴はほぼ円形で、長径30～50cm・深さ28～42cmである。覆土は黒褐色土で、１本の柱穴には根固めの礫が残っていた。



第13図　SH－13実測図



第14図　SH－14・SX－03実測図

柱穴からは、小量の山茶碗・土師器破片が出土してる。図示できた土器は第16図21・23・24で、山茶碗の碗と小碗あるいは小皿である。遺構の時期は、12世紀後半から13世紀初頭と考えられる。

土坑

ＳＸ－０３（第14図　図版９）

土坑ＳＸ－03は、Ｆ３・４グリッドから検出された。壁の崩落と北側に長径約1.4mの楕円形土坑があるため、平面形態は不整形であるが、本来は径約４m・深さ約80cmの円形土坑と考えられる。北側土坑との前後関係は、土層からは確認できなかった。覆土は黒灰色ないし黒褐色土で、７層に分かれる。南側を中心に、土坑の内外に多数の礫が廃棄されていた。礫は５～30cm 程で、土器や木片、竹の根等がともに出土している。遺構の性格を示すものはないが、溜め井戸として機能していたと推測される。

土坑内外からは、灰釉陶器・山茶碗・片口鉢・甕が出土しており、土坑内出土土器は第16・17図45～69（図版25）に図示した。Ｆ４グリッドの包含層出土土器の多くは、ＳＸ－03に伴うものである。山茶碗の碗は口径14.5cm 前後で、体部に丸味を持つものが多く見られる。小皿は器高２cm 以下の扁平なものがほとんどで、完形品に近いものも多く見られる。片口鉢・甕は湖西・渥美、常滑、瀬戸古窯の製品である。これらの土器は一括性が強く、山茶碗の碗と小皿、外来系の片口鉢・甕との伴出関係を知る良好な資料と考えられる。また、土坑内から出土した杭・木材の樹種鑑定を実施したところ、ともにクリであった。出土土器には、灰釉陶器や一部古手の山茶碗破片も若干認められるが、遺構の廃棄された時期は13世紀後半と考えられる。

溝状遺構

ＳＤ－０４（第11図　図版７－１）

溝 SD－04は、Ｅ４グリッドから検出され、ＳＸ－03南側から弧状に南へ伸びる。全長約8.2mで、幅60cm 程・深さ10～30cm と規模は小さい。覆土は黒灰色土である。溝の内側は、ＳＸ－03南側から浅い凹地となっている。ＳＸ－03と隣接していることから、土坑と関係したものと推定される。

溝内からは、須恵器・山茶碗・陶器破片が小量出土しており、土坑ＳＸ－03と時期的にも同一と考えられる。

小穴及び包含層出土遺物（第16図25～44・第17・18図70～113　図版25）

小穴出土土器は、第16図25～44に図示した。25は小破片ながら、奈良時代の須恵器坏身である。26～31は山茶碗碗の口縁部で、32～34は底部である。35～43は、山茶碗小皿あるいは小碗の口縁部である。36は湖西・渥美古窯産の小皿で、底部外面に「大」という墨書文字が記されている。44の土師器は器高が浅く、皿と考えられる。また、ＳＰ－446からは第61図558（図版35）の凝灰岩製砥石が出土している。ＳＰ－436から出土した柱根は、樹種鑑定の結果、クリが使用されていた。

包含層出土土器は、第17・18図70～113に図示した。70～72は奈良時代須恵器坏身で、碗形と箱形がある。73・81は灰釉陶器碗の口縁部、74～79は底部破片で、時期差が認められる。80も灰釉陶器壺の口縁部と考えられる。82～94は山茶碗の碗である。82・83は口縁部が外反し、より古く位置付けられる。84は器形と胎土から湖西・渥美古窯産と考えられる。95・96は山茶碗小碗で、97～103は小皿である。小皿には、器高の高いものと低いものが見られる。104は湖西・渥美古窯産？の片口鉢、105・106は常滑古窯産の甕である。107は同安窯系青磁碗の底部、108は中国産と思われる黒釉小坏である。109は古瀬戸様式と思われる片口鉢、110は同じく緑釉小皿で古瀬戸後期の製品である。111～113は、土師器の碗・小皿・甕である。また、Ｆ２グリッドからは第59図539の縄文土器が出土している。縄文時代中期の土器で、曽利Ⅱ・Ⅲ式に比定される。

Ｃ群遺構の時期は、出土土器から８世紀から15世紀までの長期に渡っていたと考えられる。ただし、細かく見ると、９世紀代と14世紀代が欠けており、８世紀と10～11世紀、15世紀代の遺物は極めて小量

であり、遺構の中心は12世紀後半から13世紀代にあったと考えられる。また、10～11世紀の灰釉陶器は、出土地点を見ると、B群北側の山裾付近を中心に出土している。

D群（第15図　図版10－1）

D群は調査区北側のG8グリッドを中心とする地区で、B群の西側で一段下に位置する。検出遺構は少ないが、他とは明らかに分離し、間違いなく西側に広がるため1群として捉えた。検出した遺構は、土坑1・小穴8である。

土坑

SX－02（第15図　図版10－1）

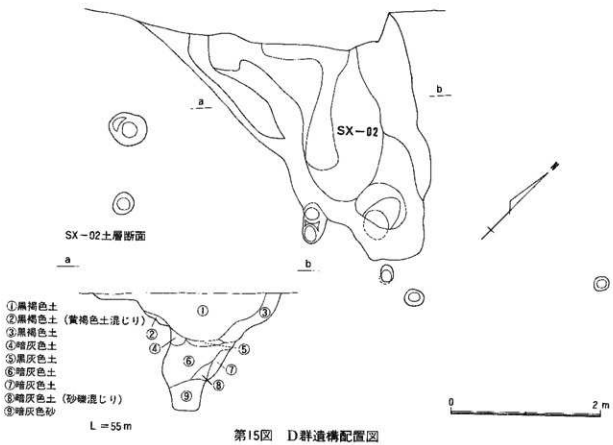
土坑SX－02は、西側が調査区外へ掛かっているため形態は明らかでない。検出部分最大幅で約4m、深さ1.55mである。掘り込みは二段掘り状で、口が広く底が幅約40cmと狭くなる。壁の立ち上がりも不整形で、湾曲したり、小穴が掘られたりしている。覆土は黒褐色土ないし暗灰色土で9層に分かれ、最下層は砂質となる。調査中にも水が浸透してきており、井戸状の機能を持つ土坑かもしれない。

土坑内からは、須恵器・土師器破片が小量出土している。図示できた土器は第18図114・115で、114は奈良時代の須恵器坏身、115は土師器壺の底部である。遺構の時期は、小破片ながら出土土器から奈良時代の可能性を持つ。

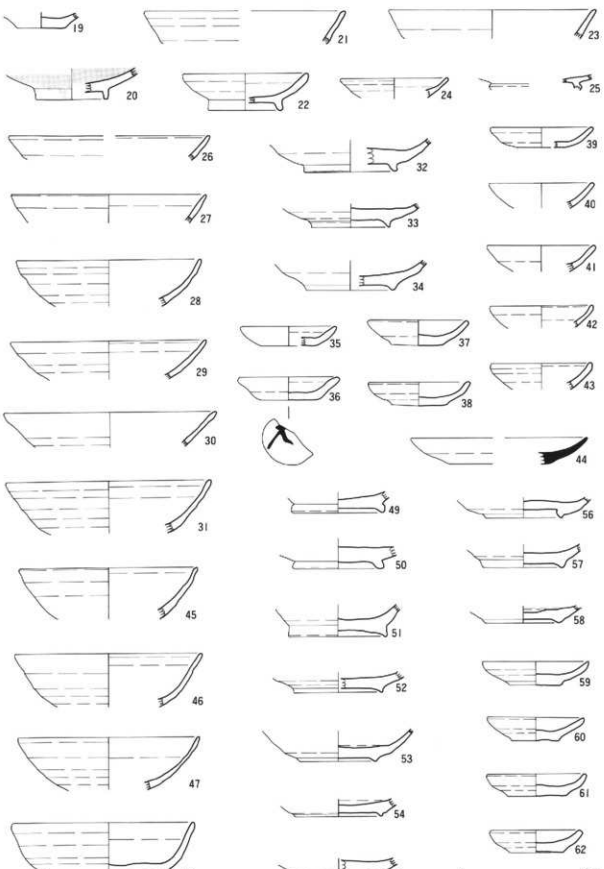
小穴及び包含層出土遺物

図示できる遺物はなく、周囲からは山茶碗や土師器等の小破片が若干出土しているに過ぎない。

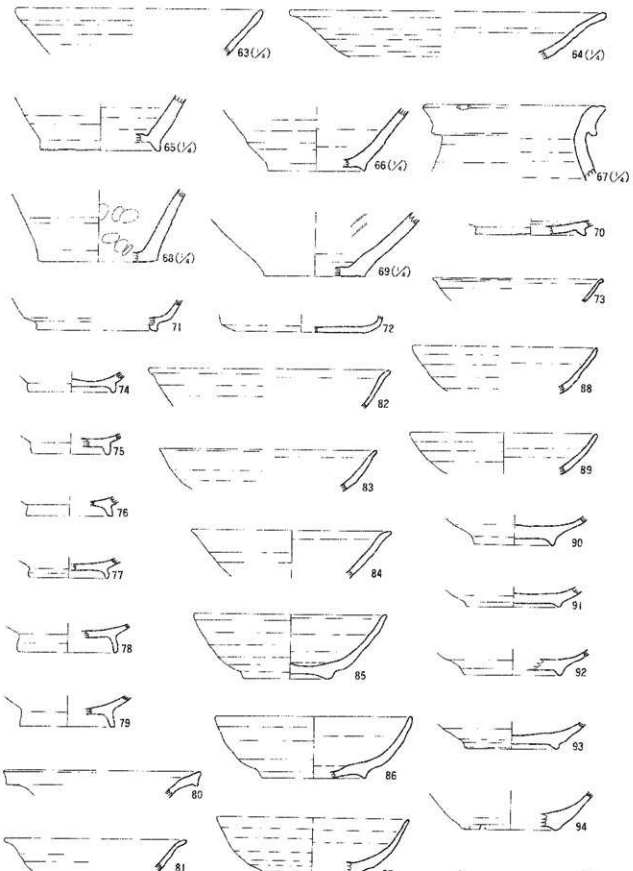
出土遺物が少なく、D群遺構の時期ははっきりしないが、出土土器から奈良時代と12～13世紀代の2時期に分かれると推測される。



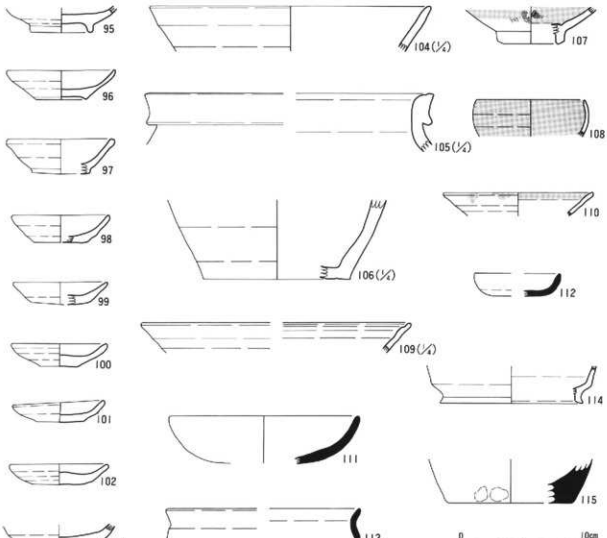
第15図　D群遺構配置図



第16図　C群出土土器実測図（1）



第17図　C群出土土器実測図（2）



第18図　C群・D群出土土器実測図

E群（第19図　図版10－2）

E群はA群の道路を挟んだ南側のB９グリッドを中心とする地区で、南北約21m・東西約20mの広がりを持つ。A９グリッド付近にも小穴が散在することから、さらに東へ広がる可能性がある。西と南側は水田造成のため約１m弱の段差となり、北側は自然流路状の凹みがあり緩やかに傾斜して行く。検出した遺構は小穴約90で、西側の段差付近に集中する。小穴の内から、掘立柱建物跡１棟が確認できた。図中ドットを落とした小穴は、覆土が暗褐色土を呈し、この群にのみ見られたものである。

掘立柱建物跡

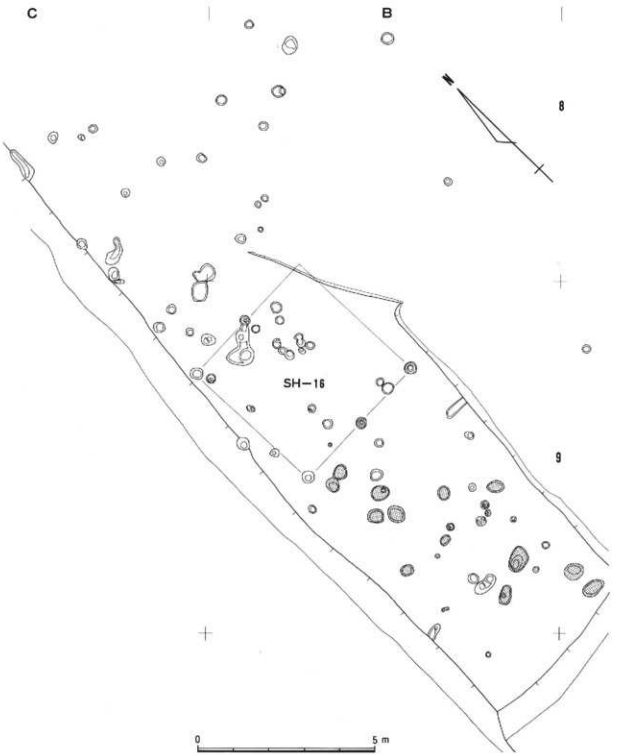
ＳＨ－１６（第20図　図版10－2）

掘立柱建物跡SH－16は、B９からC９グリッドにかけて検出された。北東部１本の柱穴は近世後半以降の撹乱により検出されなかったが、検出部分で梁行１間・桁行２間の東西棟の建物と考えられる。梁行4.35m・桁行4.2mで、桁行方位はN－90°－Eである。柱穴はほぼ円形を呈し、長径30cm前後・深さ24～43cmである。覆土は黒褐色土で、３本の柱穴は２段掘りを呈する。

柱穴からは山茶碗の碗・小皿の小破片と土師器破片が出土しており、遺構の時期は12世紀末から13世紀代と考えられる。

小穴及び包含層出土遺物（第61図559　図版35）

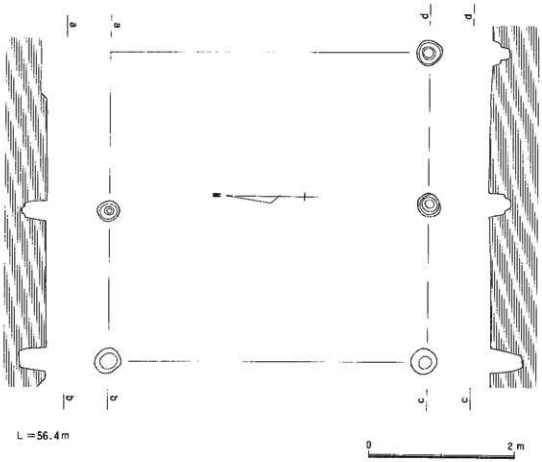
図示できる土器はなく、小穴及び周囲からは須恵器や山茶碗、土師器等の小破片が若干出土しているに過ぎない。C７グリッドの凹み部からは、559の砂岩製の敲石が出土している。縄文時代のものとは考



第19図　E群遺構配置図

えられず、トチムキ石に形態が類似している。

出土遺物が少なく、E群遺構の時期ははっきりしないが、出土土器から奈良時代と12～13世紀代の2時期に分かれると推測される。



第20図　SH－16実測図

F群（第21図　図版11）

F群は、E群西側の段差下のD10グリッドを中心とする地区で、南北約26m・東西約25mの広がりを持つ。西側は水田造成のため50cm程の段差となり、南側は自然流路状の凹みがあり、G・H群と分離される。遺構は東側段差の4m付近まで、西側も段差下にも検出されており、水田造成を行う前から現況に近い状態であったと推定される。西側段差付近には、黒褐色土の包含層が薄く堆積していた。検出した遺構は、土坑4・溝2・小穴約300である。多数の小穴の内から、掘立柱建物跡6棟が確認できた。小穴の規模は他群に比べ全体的に大きく、確認した建物跡も大きなものが見られる。

掘立柱建物跡

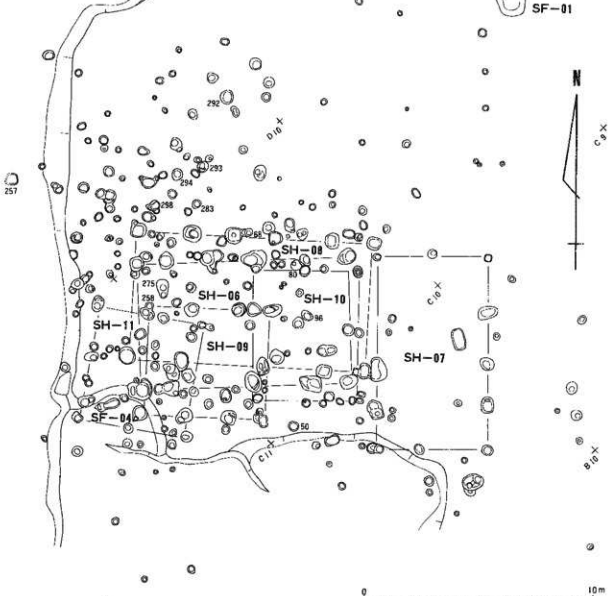
SH－06・07（第22・23図　図版12－1・2）

掘立柱建物跡SH－06・07は、C10からD11グリッドにかけて検出された。SH－06は梁行2間・桁行5間の東西棟の建物と考えられる。梁行5.6m・桁行9.2mで、桁行方位はN－90°－Eである。柱間距離は1.3～2.3mとばらつきがあり、梁行中央の側柱はともに南側にずれている。また、南側桁行の中央西寄り1間が抜けており、入り口部分と考えられる。柱穴は円形あるいは隅丸方形で、長径50cm～1.1m・深さ40～75cmである。北側東寄り2間には、約1m離れて柱穴が並列し、庇付建物であった可能性があ

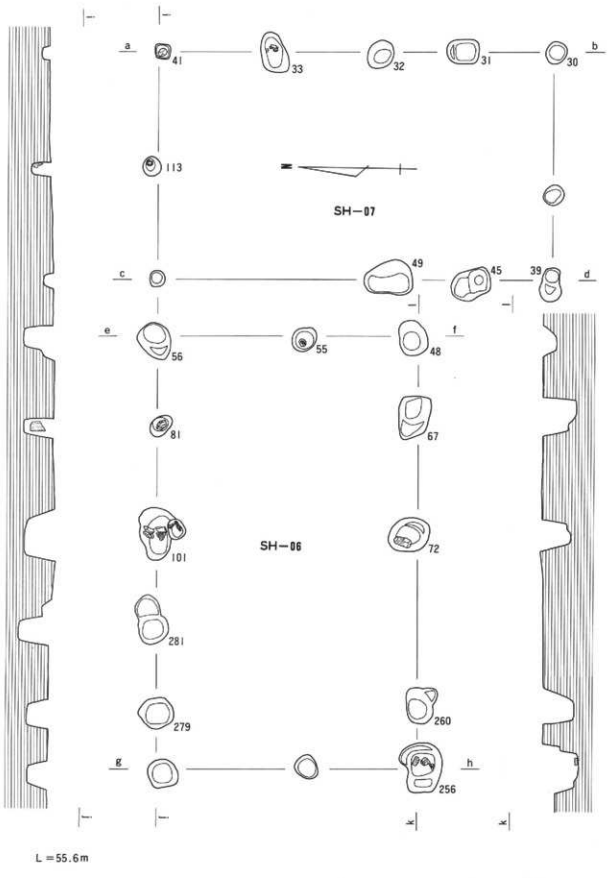
る。覆土は黒灰色土で、SP－55・81には柱根、SP－72・101・256には礎板（第63図578～582　図版37・38）が残り、SP－48・56・67・281からも柱根あるいは礎板と考えられる木片が出土している。樹種鑑定の結果、クリ・マツ・シイが使用されていた。

柱穴からは、小量の山茶碗・土師器・陶器破片が出土している。図示できた土器は、第30図116～119である。116・117は土師器で、118は瀬戸・美濃窯産の稜皿、119は同じく擂鉢である。遺構の時期は、出土土器から16世紀中頃から後半と考えられる。

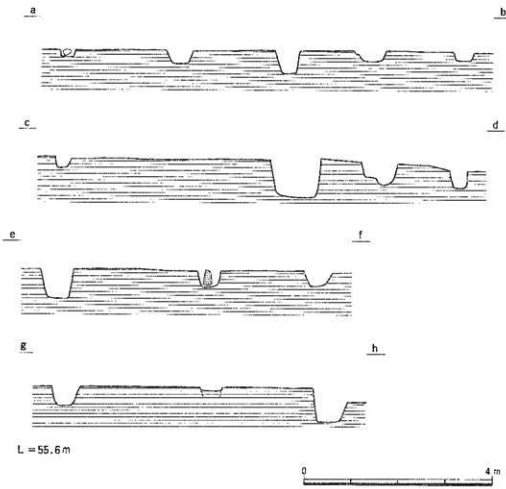
掘立柱建物跡 SH－07は、SH－06の東側から検出された。梁行２間・桁行４間の南北棟の建物と考えられる。梁行4.8m・桁行8.4mで、桁行方位はほぼ真北である。柱間距離は1.6～2.3mとややばらつき



第21図　F群遺構配置図



第22図　SH－06・07実測図（1）



第23図　SH－06・07実測図（2）

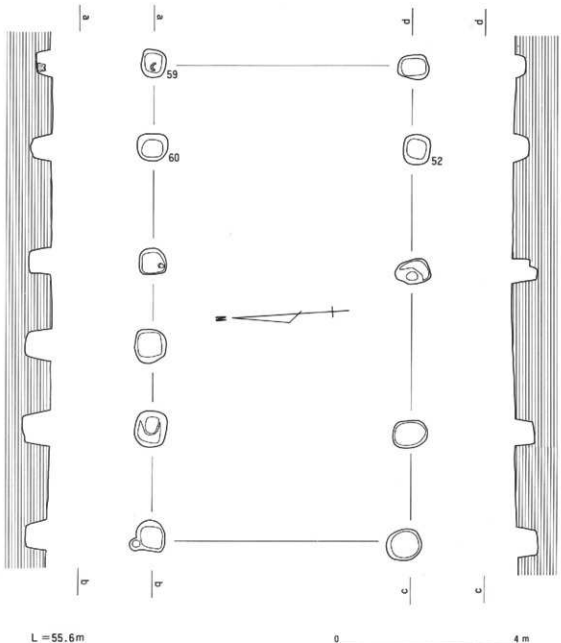
があり、梁行南の側柱は西側にずれ、西側桁行の北寄り1間が抜けている。柱穴は円形あるいは隅丸方形状で、長径30～80cm・深さ15～80cmとばらつきが見られる。覆土は黒灰色土で、SP－33・41には根固め石が検出されている。また、SP－113には柱根が残り、SP－30～33・39・45・49からは柱根あるいは礎板と考えられる木片が出土している。樹種はクリとマツであった。

柱穴からは小景の土師器・陶器破片が出土している。図示できた土器は第30図－120・121の2点で、120は土師器碗の底部、121は瀬戸・美濃窯産の深皿の底部である。掘立柱建物跡SH－06・07は、約1.2m離れてほぼ直角に並び、北側桁行と梁行は直列しており、棟続きの同一建物である可能性が高い。121の深皿は15世紀後半のものと思われるが、遺構の時期はSH－06と同時期と考えられる。

SH－08（第24図　図版12－1）

掘立柱建物跡SH－08は、D10グリッドSH－06と重複して検出された。梁行1間・桁行5間の東西棟の建物と考えられる。梁行5.6m・桁行10.4mで、桁行方位はN－93°－Eである。柱間距離は1.8～2.5mとややばらつくが、ほぼ対応している。南側桁行の中央西寄り1間が抜けており、入り口部分と考えられる。柱穴はほぼ隅丸方形で、長径60～80cm・深さ22～60cmである。覆土は黒灰色土で、SP－59には柱根（第63図583）が残り、SP－52・60からは柱根あるいは礎板と考えられる木片が出土している。樹種はマツとシイであった。

柱穴からは、小量の山茶碗・土師器破片が出土しているだけである。重複するSP－49とSP－399の前後関係から、SH－08はSH－07より新しいことがわかる。SH－06と建物の形態も類似しており、建て替えがなされたと思われる。遺構の時期は、16世紀後半から17世紀初頭と推定される。

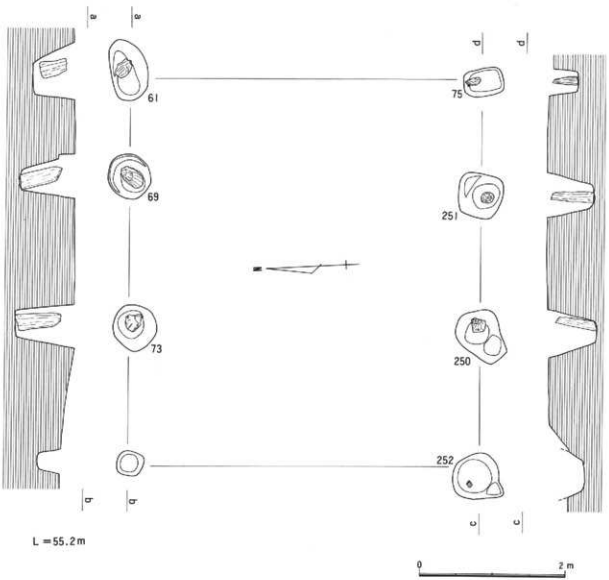


第24図　SH－08実測図

ＳＨ－０９（第25図）

掘立柱建物跡SH－09は、D10からD11グリッドにかけてSH－06と重複して検出された。梁行１間・桁行３間の東西棟の建物と考えられる。梁行4.8m・桁行5.3mで、桁行方位はN－93°－Eである。柱間距離は1.6～２mで、東側１間がやや短くなる。柱穴は楕円形あるいは隅丸方形で、北西角の柱穴をのぞいて、長径55～80cm・深さ40～80cm と比較的大きい。北西角の柱穴は、掘り足らずの可能性がある。また、南西角の柱穴は土坑SF－04に切られており、浅くなっている。覆土は黒灰色土で、SP－61・69・73・75・250・251には柱根（第63図584～588　図版38）が残り、SP－252からは柱根あるいは礎板と考えられる木片が出土している。樹種はクリ・シイ・クスノキ・マツであった。

柱穴からは、小量の土師器・陶器破片が出土している。擂鉢の小破片１点からではあるが、遺構の時期は16世紀代と推定され、重複関係からSF－04以前と考えられる。



第25図　SH－09実測図

SH－10（第26図）

掘立柱建物跡SH－10は、SH－06と重複してD10グリッドから検出された。梁行2間・桁行2間の南北棟の建物と考えられる。梁行4.65m・桁行5.8mで、桁行方位はほぼ真北である。柱穴は南東角を除いてほぼ円形で、長径35～50cmと比較的小さい。深さは13～70cmとばらつき、構造的にやや疑問が残る。SP－76・100（第64図589　図版38）からは、柱根あるいは礎板と考えられる木片が出土し、4本の柱穴から根固めの礫が検出されている。樹種はともにクリであった。

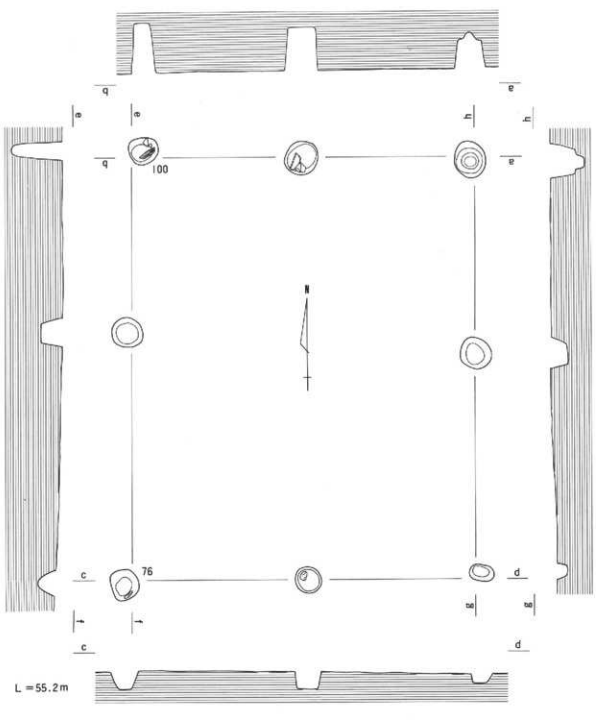
柱穴からは、小量の山茶碗・土師器破片が出土している。図示できた土器は、第30図122の山茶碗碗の口縁部1点のみである。遺構の時期は、小破片ながら出土土器と建物の規格から12世紀後半～13世紀代と推定される。

SH－11（第27図）

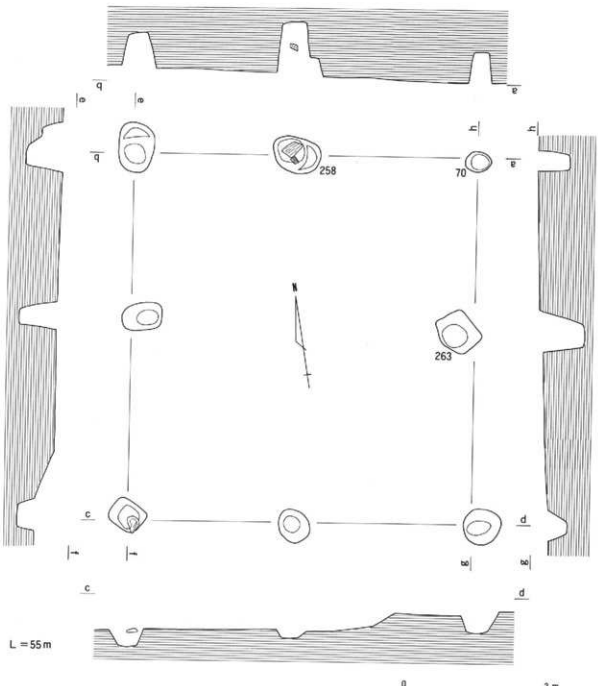
掘立柱建物跡SH－11は、SH－10の南西側D10からD11グリッドにかけて検出された。梁行2間・桁行2間の南北棟の建物と考えられる。梁行4.7m・桁行5.05mで、桁行方位はN－9°－Eである。桁行中央の側柱が内側に入り、形態的にやや疑問が残る。柱穴は円形あるいは隅丸方形で、長径35～70cm・深

き30～70cmと比較的小さい。南側2本の柱穴は、土坑SF－04に切られており、やや浅くなる。SP－258には礎板（第64図590　図版39）が残り、SP－70・263からは柱根あるいは礎板と考えられる木片が出土し、南西角の柱穴から根固めの礫が検出されている。樹種はともにクリであった。

柱穴からは、小量の山茶碗・土師器破片が出土しているが、図示できたものはない。遺構の時期は、SF－04との前後関係からそれ以前としか言えないが、小破片ながら出土土器からは12～13世紀代である可能性がある。



第26図　SH－10実測図



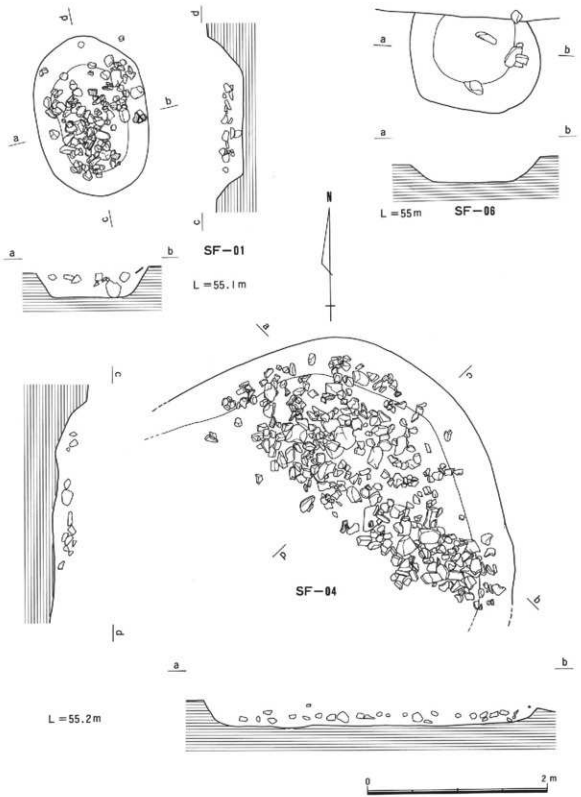
第27図　SH－11実測図

土坑

ＳＦ－０１（第28図　図版13－１）

土坑SF－01は、Ｆ群北東部のＤ８グリッドから検出された。平面形態は小判形を呈し、長径1.8m・短径1.2mである。深さは約35cmで、底は平坦である。覆土は黒灰色土で、土器とともに5～20cm大の礫が廃棄されていた。礫は比較的上部に集中していた。土坑内からは陶器破片が出土している。出土土器はすべて破片であり、廃棄されたものと思われ、他に遺構の性格を示すものはない。

図示できた土器は第30図127～130で、127は湖西・渥美古窯産の甕、128・129は常滑古窯産の甕、130は瀬戸古窯産の瓶子である。遺構の廃棄時期は、出土土器から13世紀前半と考えられる。



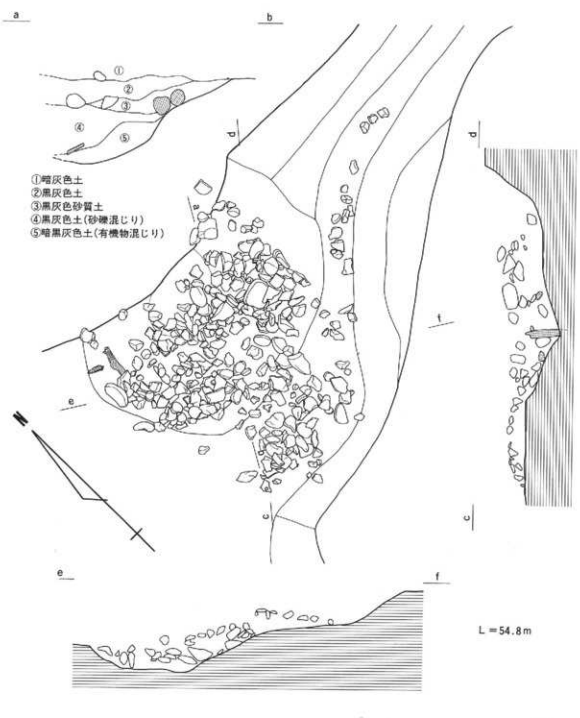
第28図　SF－01・04・06実測図

ＳＦ－０４（第28図　図版13－２）

土坑SF－04は、F群南西部のD11グリッドから検出された。水田造成のため南西部半分が削平されており、検出形態は半月状を呈するが、本来は径４ｍ程の円形あるいは隅丸方形であったと推定される。

深さは約30cmで、底は平坦である。覆土は砂質の強い黒褐色土で、周囲の柱穴とは異なっており、これらを切って掘り込まれていた。土坑内にはSF－01と同様に、土器とともに5～20cm大の礫が多数廃棄されていた。

土坑内からは山茶碗・陶器破片が出土している。図示できた土器は第30図131～143である。131～137は山茶碗の碗底部破片で、132(図版25)の底部外面には墨書(□あるいは二字か)が認められる。139～142は瀬戸・美濃窯産の擂鉢で、大窯期の製品である。143は志戸呂窯産の小鉢である。その他、第61図



第29図　SX－04実測図

560～562（図版35）の砥石と磨製石斧があり、いずれも礫中に混入していた。山茶碗と138の壷は周辺からの混入であり、遺構の廃棄時期は、その他の出土土器から16世紀後半と考えられる。

ＳＦ－０６（第28図　図版13－３）

土坑SF－06は、Ｅ９グリッド・溝状遺構SD－10とSD－11の合流部から検出された。北側は調査区外へ掛かるが、長径1.4m程の楕円形土坑と考えられる。深さは約30cmで、底は平坦である。覆土は暗灰色土で、数個の礫が混入していた。SD－10とは覆土がまったく異なり、SF－06はSD－10により切られていた。

出土遺物は全くなく、遺構の時期は不明である。

ＳＸ－０４（第29図　図版14－１・２）

土坑ＳＸ－04は、北西部のＥ・Ｆ－９・10グリッドから検出された。ちょうど段差部分に掘り込まれ、北側は調査区外に掛かる。径３m程の円形土坑と考えられ、東から溝ＳＤ－10が接続する。溝ＳＤ－10との前後関係は、土層からは確認できなかった。深さは段差上面から約1.5mで、覆土は暗灰色土ないし黒灰色土で５層に分けられる。溝ＳＤ－10から土坑上部には、５～30cm大の礫が木材等とともに廃棄されており、南側には杭が打たれていた。出土した木材はクリとマツであった。掘り込みも深く、本来は掘め井戸として機能していたものと推定される。

土坑内からは、山茶碗・陶器破片が出土している。図示できた土器は、第31図144～148である。144・145は山茶碗の碗底部で、混入と思われる。146～148は、瀬戸・美濃窯産の猪口・碗・擂鉢である。また、第60図547の銭貨（天禧通寶）が出土している。遺構の廃棄時期は、出土土器から16世紀中頃と考えられる。

溝状遺構

ＳＤ－１０・１１（第21図　図版11－１）

溝ＳＤ－10・11は、Ｅ９グリッドから検出され、東から西に伸びて土坑ＳＸ－04に続く。ＳＤ－11は幅40～60cm・深さ5cm前後・長さ５m程で、ＳＤ－10と合流する。ＳＤ－10は検出長約11m・深さ５～30cmで、西に向かって幅を広げながらＳＸ－04に流れ込んでいる。覆土はともに暗灰色土で、ＳＸ－04上層覆土とも区分できなかった。

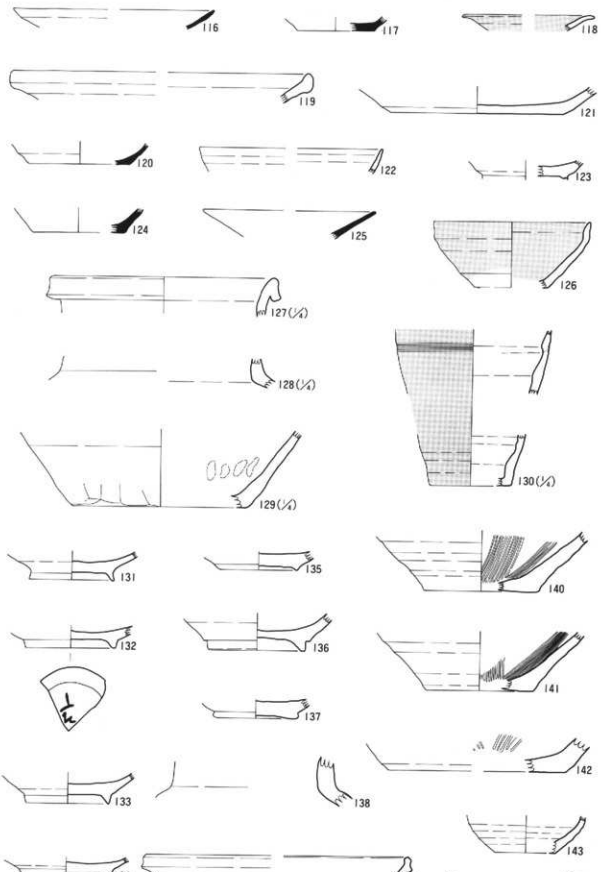
溝内からは山茶碗・土師器・陶器破片が小景出土しているが、遺構の時期はＳＸ－04と同時期と考えられる。

小穴及び包含層出土遺物（第30図123～126・第31図149～170等　図版25）

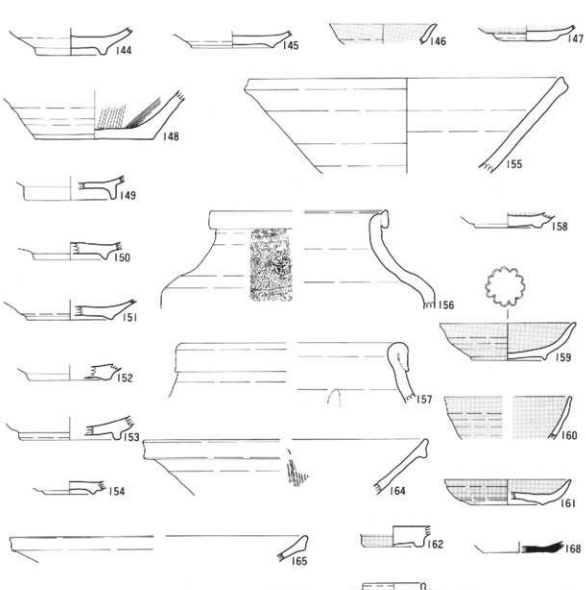
小穴出土土器は、第30図123～126に図示した。123は山茶碗の底部で、124・125は土師器の碗である。126は瀬戸・美濃窯産の天目茶碗で、古瀬戸後期の製品である。また、小穴出土の柱根及び礎板は、一部を第64図594・595（図版39）に示し、樹種鑑定の結果は表４にまとめた。

包含層出土土器は、第31図149～170に図示した。149は灰釉陶器の碗底部で、時期的には黒笹90号窯式に併行するものと思われる。150～154は山茶碗の碗底部である。155は東遠江産の片口鉢、156は常滑古窯産の壷で肩部に押印文がみられる。157も常滑古窯産の壷であるが、16世紀前半のものである。158～160は瀬戸・美濃窯産の丸碗・丸皿で、大窯期の製品である。いずれも灰釉が施され、159の皿底部内面には印刻花文がみられる。161・163は志戸呂窯産の小皿と小鉢で、16世紀末～17世紀初頭のものである。164～167は擂鉢で、164・165が瀬戸・美濃窯産、166・167が志戸呂窯産である。ともに16世紀末から17世紀初頭にかけての製品である。168～170は土師器である。その他、第59図540・543の縄文時代晩期の条痕文系土器、第61図564～566（図版35・36）の石鏃・敲石・打製石斧、第60図548の銭貨（天聖元寶）が出土している。

Ｆ群遺構の時期は、出土土器から一部９世紀後半代のものを含み、中心は12～13世紀代と15世紀後半から17世紀初頭にあると考えられる。



第30図　F群出土土器実測図（1）



第31図　F群出土土器実測図(2)

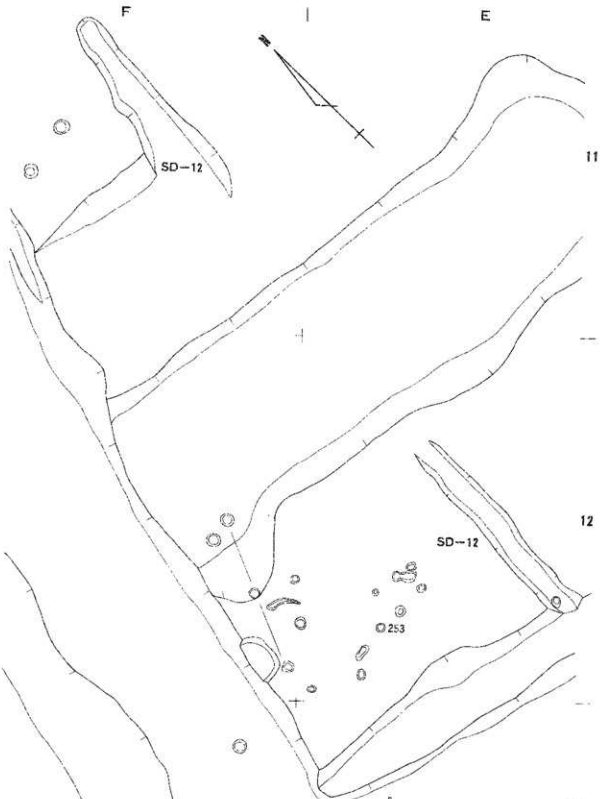
G群（第32図　図版14－3）

G群はF群西側の段差下のE12グリッドを中心とする地区で、南北約22m・東西約10mの広がりを持つ。西側と南側は水田造成のため小さな段差となり、中央と北側は自然流路状の凹みがある。そのためか遺構は希薄である。小穴の規模も径15～40cm と比較的小さい。検出した遺構は、溝1・小穴20数個である。覆土はすべて黒褐色土である。掘立柱建物跡は確認できなかったが、小穴の一部は直線的に配列するものもあり、建物があったと推定される。

溝状遺構

ＳＤ－１２（第32図　図版14－３）

溝SD－12は、F11からE12グリッドにかけて南北に伸びる。両端及び中央を水田造成と自然流路状の凹みによって欠くが、同一の溝と考えられ検出長約21mである。幅は80cm～1.5mで、深さは10cm前後



第32図　G群遺構配置図

と浅い。溝の長軸はほぼ真北を向き、F群遺構が付近まで広がっていたとすれば、これを画する溝であった可能性がある。

溝内からは、山茶碗小碗・土師器・擂鉢破片が小量出土している。遺構の時期は、擂鉢破片から15世紀以降と推定される。

小穴及び包含層出土土器（第59図544）

山茶碗・土師器・陶器破片が若干出土しているが、図示できるものはない。また、SP－253からは第59図544の縄文時代晩期の条痕文系土器が出土している。

G群遺構の時期は、出土遺物が極めて少ないためはっきりしないが、12～13世紀代と15～16世紀代のものであると推測される。

H群（第33図　図版15－1）

H群は、F群南側のB13グリッドを中心とする地区で、南北約35m・東西約25mの広がりを持つ。西側と南側は水田造成のため70cm程の段差となり、北側は自然流路状の凹みによりF群と分離される。西側段差付近には、黒褐色土が疎く堆積していた。検出した遺構は土坑4・溝3・小穴約300で、F群と並ぶ大きなまとまりをなすが、小穴群は溝により3つに分断されている。小穴の規模は20～60cm程とばらつくが、全体的には大きなものが多い。多数の小穴の内から、掘立柱建物跡4棟が確認できた。

掘立柱建物跡

SH－04（第34図　図版15－2）

掘立柱建物跡SH－04は、A12からB12グリッドにかけて検出された。梁行1間・桁行3間の南北棟の建物と考えられる。梁行4.05m・桁行6.25mで、桁行方位はN－5°－Eである。柱間距離は1.8～2.6mとばらつきがあるが、ほぼ対応する。桁行南側の1間が、やや間隔が広くなる。柱穴は円形あるいは隅丸方形で、長径35～60cm・深さ12～45cmである。北東側には、不揃いながらL字状の小穴列が認められ、建物を囲む柵列の可能性がある。覆土は黒灰色土で、SP－163からは柱根あるいは礎板と考えられる木片が出土し、南西角の柱穴には根固めの礫が残っていた。木片の樹種はマツであった。

出土遺物は全くなく、遺構の時期ははっきりしないが、木片の樹種から15世紀以降の可能性が高い。

SH－17（第35図　図版16－1）

掘立柱建物跡SH－17は、C12・13グリッドにかけて検出された。梁行1間・桁行2間の東西棟の建物と考えられるが、東側には溝SD－01があり、さらに延びていた可能性はある。梁行4.15m・桁行4.55mで、桁行方位はN－101°－Eである。柱間距離は、2.3m前後と比較的均等である。柱穴は円形あるいは隅丸方形で、長径45～60cm・深さ36～60cmとばらつきが見られる。覆土は黒灰色土で、SP－169・224からは柱根あるいは礎板と考えられる木片が出土している。樹種鑑定の結果、クリとマツが使用されていた。

柱穴からは小量の土師器・陶器破片が出土しているが、図示できる土器はない。遺構の時期ははっきりしないが、SH－18とほぼ重なり合っていることから、建替えの可能性が高く時期的にはその前後であると考えられる。

SH－18（第36図　図版16－1）

掘立柱建物跡SH－18は、C12・13グリッドSH－17と重複して検出された。梁行1間・桁行3間の東西棟の建物と考えられる。梁行3.3m・桁行5.1mで、桁行方位はN－93°－Eである。柱間距離は1.5～1.9mとややばらつくが、ほぼ対応している。桁行西側の1間がやや広めである。柱穴は円形あるいは隅丸方形で、長径40～60cm・深さ20～50cmである。覆土は黒灰色土で、SP－188からは柱根と考えられる木片が出土している。

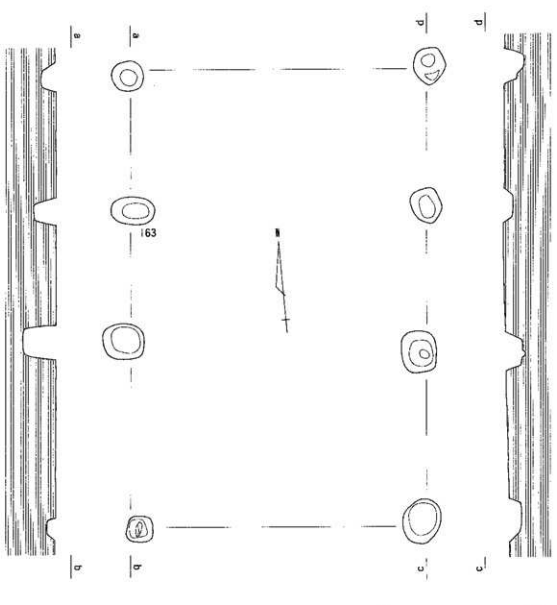
第33図　H群遺構配置図

柱穴からは、小量の土師器・陶器破片が出土している。図示できた土器は、第38図171・172の2点である。171（図版25）は志戸呂窯産の小天目茶碗で、灯明皿として再利用されている。出土した柱穴は重複しており、やや疑問が残るが、遺構の時期は出土土器から16世紀末～17世紀初頭と考えられる。

SH－19（第36図　図版16－1）

掘立柱建物跡SH－19は、B13グリッドから検出された。溝SD－02の南側で、ほぼ均等に並ぶ4個の小穴が確認されたため、掘立柱建物として捉えた。柱穴列の南側には、これに対応する小穴は認められず、SD－02によって削られてしまったものと思われる。現況で、梁行1間・桁行3間の東西棟の建物と推測される。規模は桁行5.7mで、桁行方位はN－97°－Eである。柱間距離は1.8～2mで、西側の1間がやや狭くなる。柱穴はほぼ円形で、長径50～65cm・深さ30～55cmと比較的大きい。

柱穴からは小量の土師器破片が出土しているだけで、図示できる土器はなく、遺構の時期ははっきりしない。



第34図　SH－04実測図

土坑

ＳＦ－０２（第37図　図版16－２）

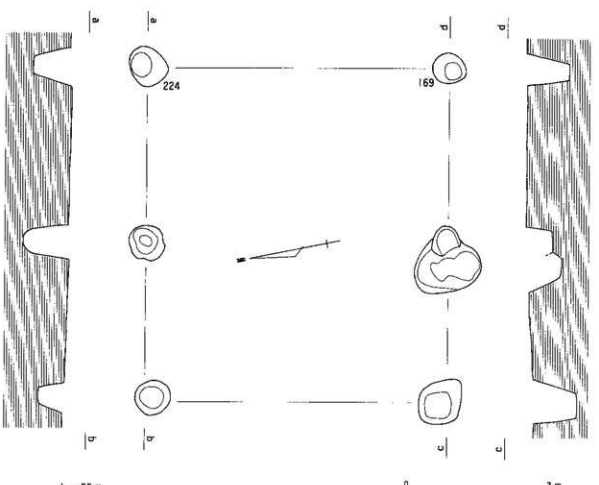
土坑SF－02は、B13･14グリッド西側段差付近から検出された。径1.9m程の隅丸方形状の土坑で、北側から西側段差にかけて、深さ30cmほどの凹みが続く。土坑部分の深さは約１ｍで、底は碗状である。覆土は、黒褐色土あるいは黒灰色土で８層に分けられ、下層は粘質を強め、有機物が混入していた。SX－04と同様に、溜め井戸状の機能を果たしていたものと推定される。

土坑内からは、土師器･陶器破片が出土している。図示できた土器は、第38図177～180である。177は瀬戸・美濃窯産の稜皿で、大窯期の製品である。178も瀬戸・美濃窯産の瓶子で、古瀬戸後期の製品と考えられる。179･180は、土師器碗の底部である。その他、土坑内から第62図568（図版37）の石臼が出土している。遺構の廃棄時期は、出土土器から16世紀中頃と考えられる。

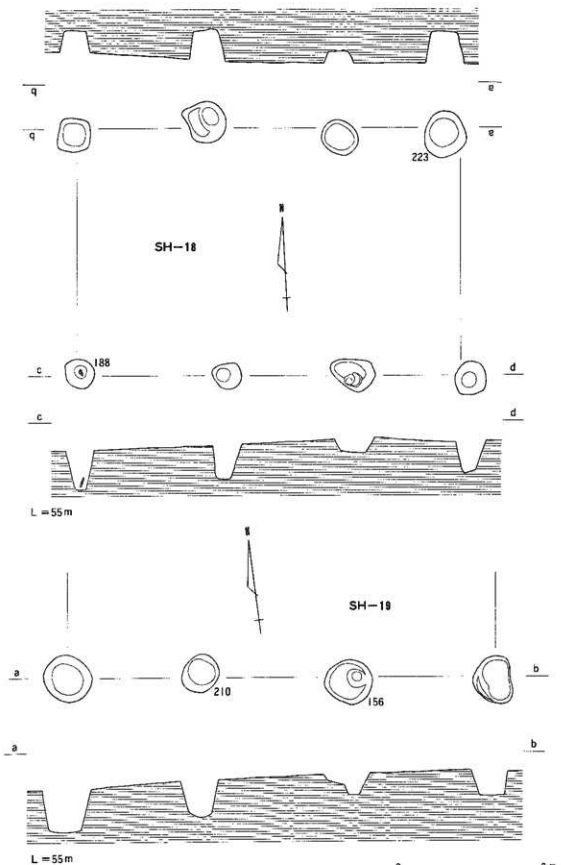
ＳＦ－０３（第37図　図版16－３・17－１）

土坑SF－03は、H群北東端のB11グリッドから検出された。平面形態は楕円形を呈し、長径２ｍ･短径1.8m程である。深さは約80cmで、覆土は３層に分けられる。土坑内には、土器･木片とともに5～30cm大の礫が、上層部を中心に多数廃棄されていた。出土した木片の樹種はマツであった。また、土坑下部からは、第62図569（図版37）の一石五輪塔が出土している。

土坑内からは、土師器・陶器破片が出土している。図示できた土器は、第38図181～183である。いずれも瀬戸・美濃窯産の天目茶碗・丸碗・擂鉢で、大窯期の製品である。遺構の時期は、出土土器から16



第35図　SH－17実測図

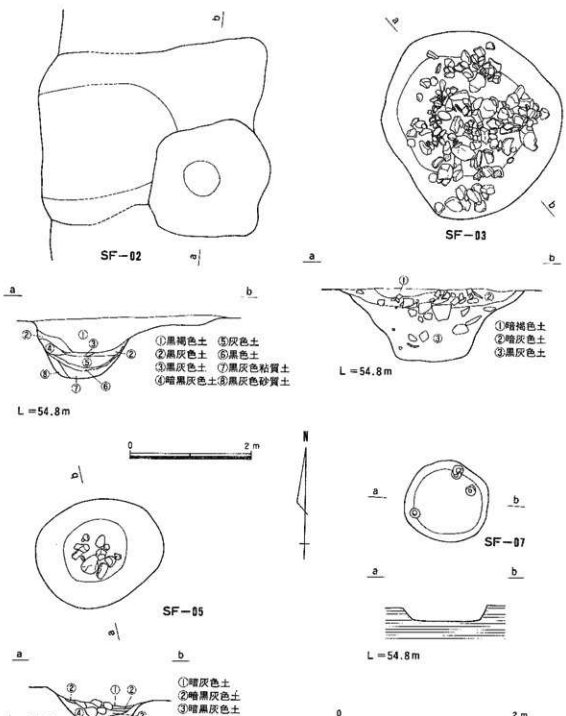


第36図　SII－18・19実測図

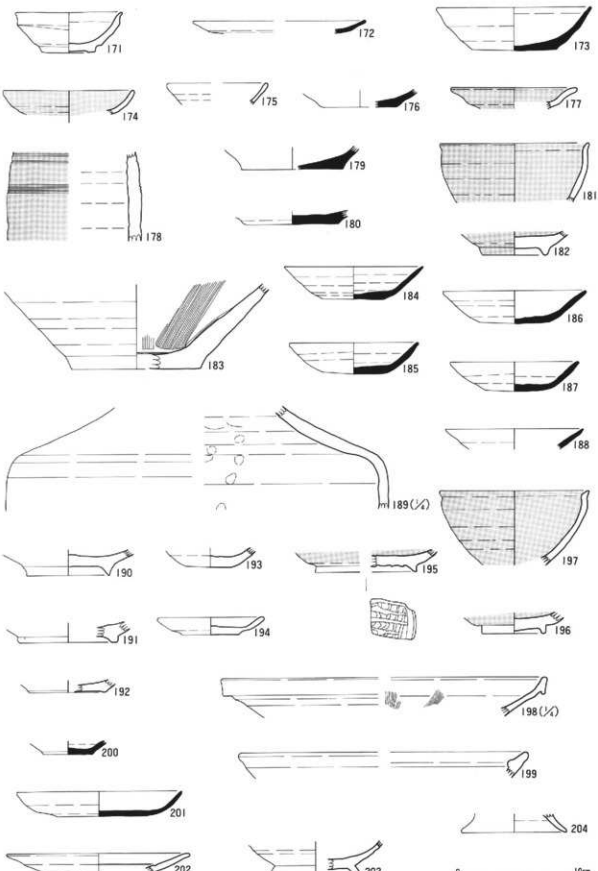
世紀代と考えられる。

ＳＦ－０５（第37図　図版17－２）

土坑SF－05は、D12グリッドH群北西端の段差下から検出された。平面形態は楕円形を呈し、長径1.4m・短径1.2m程である。深さは約40cmで、掘り込みは碗状である。覆土は４層に分けられ、５～20cm大の礫が10数個廃棄され、下層には木片や葉が混入していた。段差下からの検出であり、削平されている可能性が強く、本来はSF－03同様の土坑であったと推測される。



第37図　SF－02・03・05・07実測図



第38図　H群・I群出土土器実測図

図示できなかったが、土坑内からは三ッ沢窯産と思われる擂鉢破片1点が出土している。遺構の廃棄時期は、この土器から15世紀後半と考えられる。

SF－07（第37図　図版17－3）

土坑SF－07は、C13グリッドの段差近くから検出された。径約90cmの円形土坑で、深さは約20cmである。掘り込みは皿状を呈し、覆土は黒褐色土であった。土坑内からは土師器と銭貨が出土しており、土坑墓と推定される。B14グリッドでも、径1m前後の浅い土坑が確認されており、出土遺物はないが、SF－07と同様の土坑である可能性がある。

出土土器は、第38図184～188に図示した。土師器の碗5点で、ほぼ同一形態を呈する。銭貨は6枚出土している。第60図549は残りが悪いが、元祐通寶と思われ、その他洪武通寶破片も認められた。遺構の時期は、出土土器から15世紀後半から16世紀前半と考えられる。

溝状遺構

SD－01・02（第33図　図版15－1）

溝SD－01・02は、H群中央をT字状に伸びる溝で、南北方向をSD－01・東西方向をSD－02とした。SD－01は確認長約27m・幅3.4～5mで、南に行くにつれ幅広となる。深さは30～70cmで、底は4段の階段状を呈し、南へ向かって深くなって行く。SD－02は、SD－01から段差部分までの10.6mを検出した。幅約3.4m・深さ40～50cmで、底はほとんど落差を持たない。覆土は暗灰色粘質土で、小穴を切って掘り込まれており、溝内の小穴もその残りである。

溝内からは、山茶碗・土師器・陶器破片が小量出土している。図示した第38図189は、常滑古窯産の甕である。出土土器は、検出状況からも溝に伴うものとは考えがたく、遺構の時期は17世紀以降と考えられる。

SD－06（第33図）

溝SD－06は、南側段差近くA14からB14グリッドにかけて検出された。確認長約5m・幅1.2mで、深さは20cm前後と浅い。覆土は黒褐色土である。東側はSD－01に切られ、西側は南に屈曲するものと思われるが、段差で削平されている。溝付近では小穴が希薄となり、切り合いも認められず、II群遺構を画する溝であった可能性もある。

溝内からは土師器・陶器破片が小量出土しているが、遺構の時期ははっきりしない。

小穴及び包含層出土遺物（第38図173～176・190～201等）

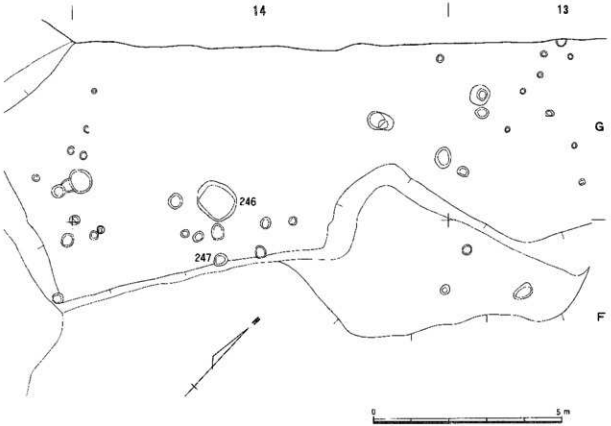
小穴出土土器は、第38図173～176に図示した。175は、山茶碗の小碗あるいは小皿の口縁部である。173（図版25）・176は土師器の碗で、SF－07出土土器に比べ大振りで深みを持ち、底部の屈曲も強い。174は瀬戸・美濃窯産の小皿で、大窯期の製品である。SP－139出土の柱根は第64図592（図版39）に示し、その他の小穴出土の柱根及び礎板は樹種鑑定の結果を表4にまとめた。

包含層出土土器は、第38図190～201に図示した。190～194は、山茶碗の碗底部と小皿である。195は三ッ沢窯産のおろし皿、197は瀬戸・美濃窯産の天目茶碗で、ともに15世紀後半に位置付けられる。198・199は志戸呂窯産の擂鉢で、16世紀末～17世紀初頭のものである。200・201は土師器の皿で、201は黒褐色土中から出土している。また、包含層からは第61図567（図版36）の打製石斧、第60図550～552の銭貨（永樂通寶・治平通寶・元祐通寶）が出土している。

H群遺構の時期は、出土土器から大きく12～13世紀代と15世紀～17世紀前半に分けられる。比較的山茶碗の出土量が少なく、遺構の中心は15～16世紀代にあったと考えられる。

I群（第39図　図版18－1）

I群は、G群西側のG14グリッドを中心とする地区で、南北約15mの広がりを持つ。西側は調査区外



第39図　Ⅰ群遺構配置図

にかかっており、範囲はさらに広がっている。南側は水田造成のため削平されて小さな段差となり、東側には自然流路状の凹みがあり、G・K群と分離される。検出した遺構は小穴約40で、覆土は黒褐色土である。小穴の径はほとんどが10～20cm 程で、全体的に規模が小さい。小穴は比較的散在しており、建物跡として確認できたものはない。

小穴及び包含層出土遺物（第38図202～204・第59図542）

出土遺物には山茶碗・土師器破片等があるが、全体的に量が少なく、図示できたものも少ない。小穴出土土器は、第38図202～204の３点がある。202は灰釉陶器の盤と考えられ、204はその高台部の可能性がある。203は山茶碗の碗底部で、高台は高く作りもしっかりしており、古く位置付けられる。第59図542は縄文時代晩期の条痕文系土器で、包含層から出土している。

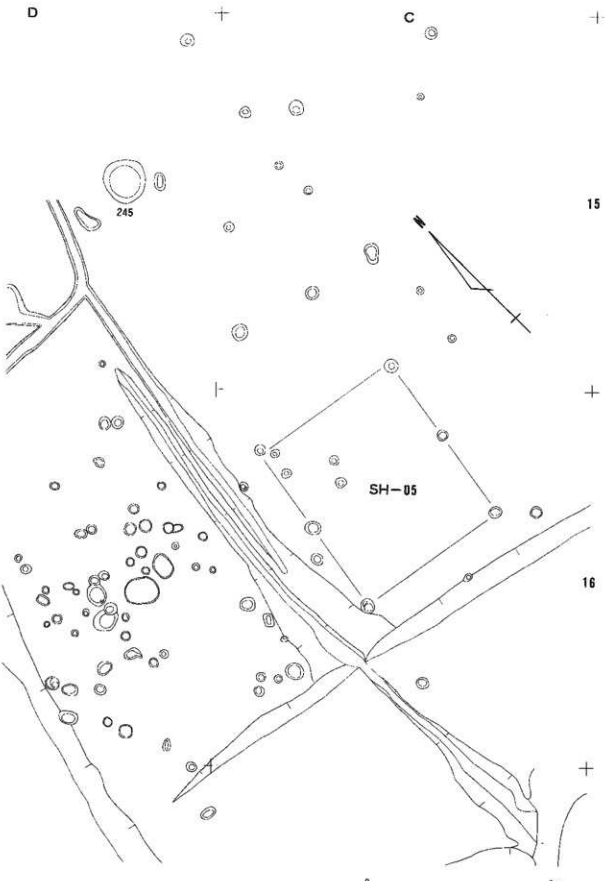
出土遺物が少ないためはっきりしないが、Ⅰ群遺構の時期は９世紀代まで遡り、12～13世紀代まで継続していたものと思われる。

Ｊ群（第40図　図版18－2）

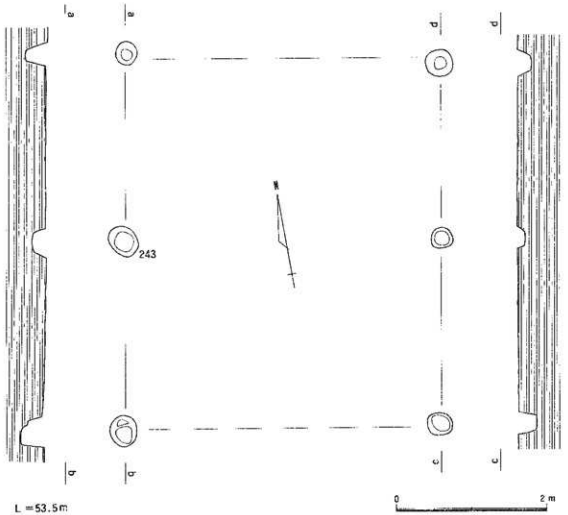
Ｊ群は、Ｈ群南西側のＣ・Ｄ16グリッドを中心とする地区で、南北約18m・東西約18mの広がりを持つ。南側と西側は水田造成のため50cm 前後の段差となり、Ｋ・Ｌ群と分離される。Ｄ15からＣ17グリッドにかけて南北に伸びる溝は、灰色砂を覆土とする近世後半以降の溝である。検出した遺構は小穴約90で、比較的散在している。覆土はほとんどが黒褐色土である。小穴の径はほとんどが10～30cm 程で、全体的に規模が小さい。小穴群の内から、掘立柱建物跡１棟が確認できた。

掘立柱建物跡

ＳＨ－０５（第41図　図版19－１）



第40図　J群遺構配置図



第41図　SH－05実測図

掘立柱建物跡SH－05は、C15からC16グリッドにかけて検出された。梁行1間・桁行2間の南北棟の建物と考えられる。梁行4.2m・桁行4.93mで、桁行方位はN－10°－Eである。柱間距離は比較的均等である。柱穴はほぼ円形で、長径30～40cm・深さ10～30cmである。覆土は黒灰色土である。

柱穴からの出土遺物はなく、遺構の時期ははっきりしないが、周囲の出土土器から12～13世紀代と推定される。

小穴及び包含層出土遺物（第49図205）

出土遺物には山茶碗・土師器破片等があるが、出土量は非常に少ない。図示できた土器は、SP－245出土の第49図205の1点だけである。常滑古窯産の壺で、16世紀代のものと思われるが、SP－245の覆土は暗灰色土で周囲の小穴とは全く異なっていた。

J群遺構の時期は、出土遺物が少ないためはっきりしない。出土土器からは12～13世紀代と16世紀代と考えられるが、遺構の多くは12～13世紀代と推測される。

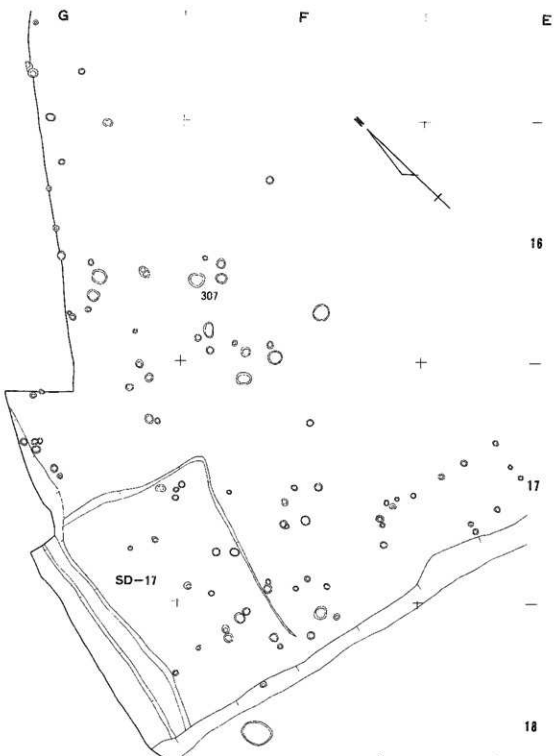
K群（第42図　図版19－2）

K群は、J群西側のF17グリッドを中心とする地区で、南北約30mの広がりを持つ。遺構は西側調査区外にかかっており、さらに西へ延びている。南側は、水田造成とL群溝SD－08から続く大きな溝状遺構のため70cm前後の段差となり、M群と分離される。検出した遺構は溝1と小穴約90で、小穴は比較的

散在している。覆土は黒褐色土で、小穴の径はほとんどが10～30cm 程で、全体的に規模が小さい。小穴群の中には、直線的に配列するものも見られるが、建物跡として確認できたものはない。

溝状遺構

ＳＤ－１７（第42図）



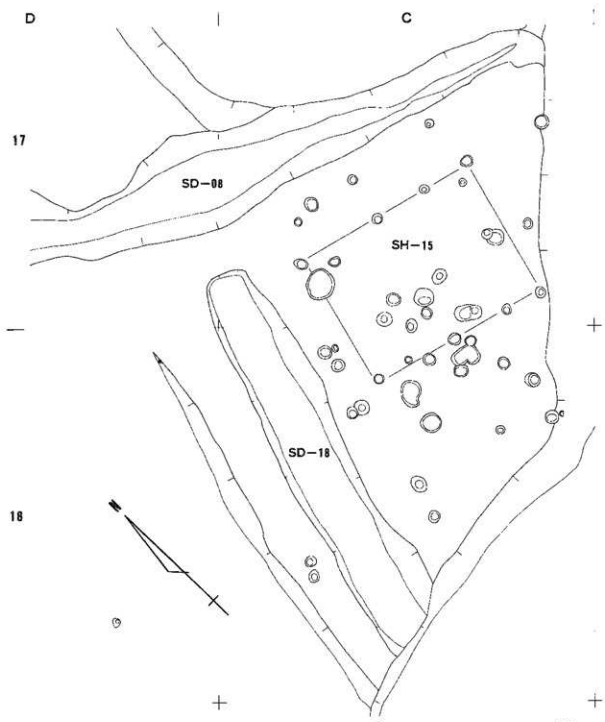
第42図　K群遺構配置図

溝SD－17は、G17から18グリッドにかけて南北に伸びる。北側は調査区外にかかり、南側は段差で削平されてしまっている。検出長は約15mで、幅70cm～1.3mである。覆土は黒褐色土で、深さは10cm前後と全体的に浅い。

出土遺物は全くなく、遺構の時期は不明である。

小穴及び包含層出土遺物（第49図206・第59図545）

出土遺物には山茶碗・土師器破片等があるが、出土量は非常に少ない。図示できた土器は、第49図206



第43図　L群遺構配置図

と第59図545の2点だけである。206は山茶碗の碗底部で、高台端部に籾痕を残す。545は縄文時代晩期の条痕文系土器である。

K群遺構の時期は、出土遺物が少ないためはっきりしないが、12～13世紀代を中心にしていたものと思われる。

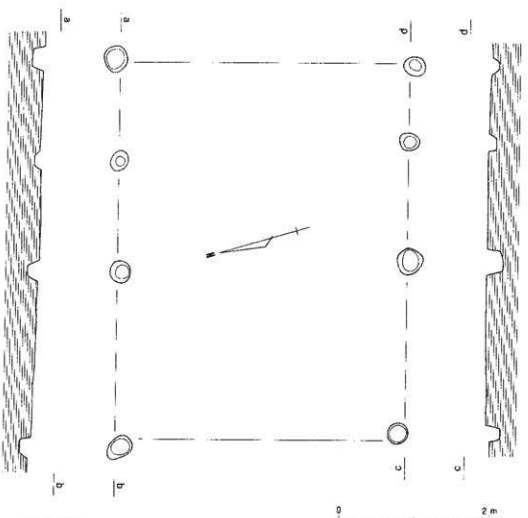
L群（第43図　図版20－1）

L群は、J群南側のC17・18グリッドを中心とする小さなまとまりである。南と東側は大谷沢に面した急な崖となり、北と西側は17世紀以降の暗灰色粘質土を覆土とする溝SD－08・18が走る。SD－18より西側にも小穴は見られるが、その数は少ない。検出した遺構は小穴約50で、比較的散在している。覆土は黒褐色土で、小穴の規模は全体的に小さい。小穴群の内から、掘立柱建物跡1棟が確認できた。

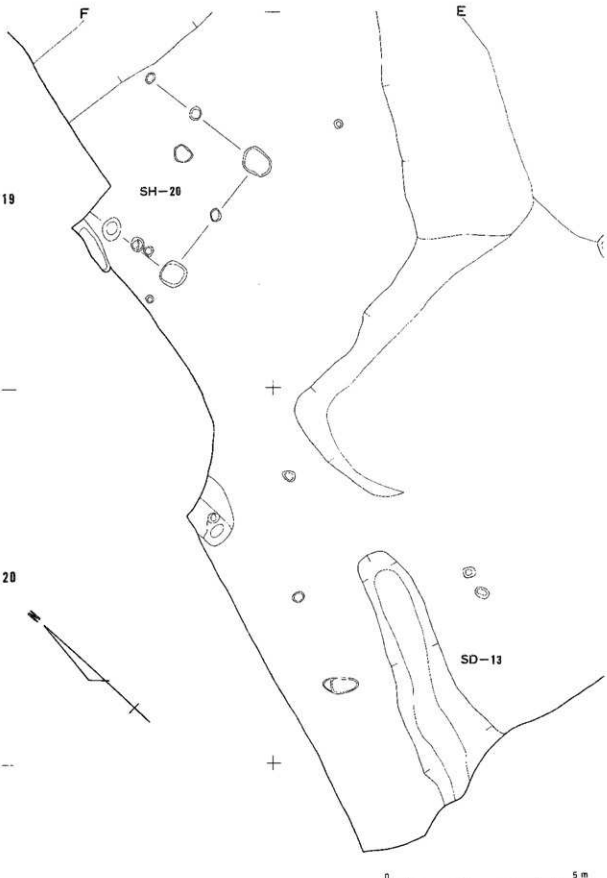
掘立柱建物跡

SH－15（第44図　図版20－1）

掘立柱建物跡SH－15は、C17からC18グリッドにかけて検出された。梁行1間・桁行3間の東西棟の建物と考えられる。梁行3.85m・桁行5mで、桁行方位はN－106°－Eである。柱間距離は1m～2.3mとばらつき、西側1間が大きく開く。建物跡として捉えるにはやや疑問が残るが、柱穴はほぼ対応している。柱穴はほぼ円形で、長径28～35cm・深さ10～20cmである。覆土は黒褐色土である。



第44図　SH－15実測図



第45図　M群遺構配置図

柱穴からの出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

小穴及び包含層出土遺物（第59図541）

出土遺物は山茶碗・土師器破片・縄文土器（第59図541）があるが、出土量は非常に少ない。

L群遺構の時期は、出土遺物が少ないためはっきりしないが、12～13世紀代を中心にしていたものと推測される。

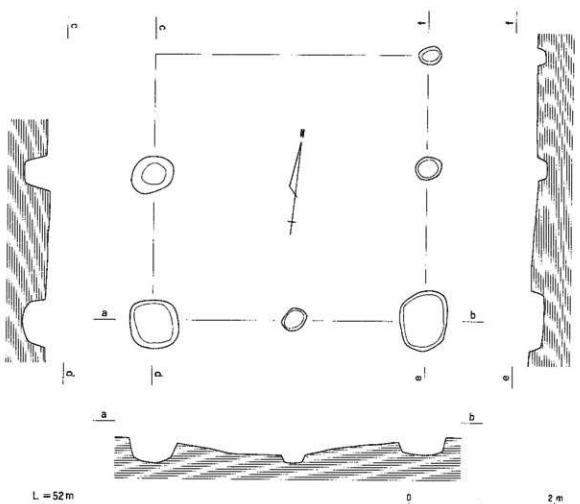
M群（第45図　図版20－2）

M群は、L群西側のF19グリッドを中心とする小さなまとまりである。遺構は西側調査区外にかかっており、さらに広がっていたと推定される。検出した遺構は、溝1・小穴18である。小穴の内から、掘立柱建物跡1棟が確認できた。

掘立柱建物跡

SH－20（第46図　図版20－2）

掘立柱建物跡SH－20は、E19グリッドから検出された。北側は一部調査区外にかかり、自然流路状の凹みもあるため不明確であり、桁行3間以上の南北棟の可能性もあるが、検出部分で梁行2間・桁行2間の東西棟の建物として捉えた。梁行3.6m・桁行3.73mで、桁行方位はN－84°－Eである。柱間距離は1.6～2mとややばらつくが、ほぼ対応している。柱穴は長径30～80cm・深さ10～35cmと大きくばらつ



第46図　SH－20実測図

くが、北側は削平されているためと考えられ、平面形態も隅丸方形状であったと思われる。覆土は黒褐色土である。

柱穴からは山茶碗・土師器破片が出土しているが、図示できるものはない。遺構の時期ははっきりしないが、出土土器から12～13世紀代と推定される。

溝状遺構

ＳＤ－１３（第45図　図版20－２）

溝SD－13は、E20からE21グリッドにかけ検出された。検出長約6.8mで、大谷沢に面した崖に向かって北から南に流れ込む。幅１～2.3m・深さ10～40cmで、南に向かって開いて行く。覆土は黒褐色土である。

溝内からは、山茶碗・土師器・陶器破片が小量出土しているが、図示できるものはない。遺構の時期は、出土土器から12～13世紀代と考えられる。

小穴及び包含層出土遺物（第49図207）

出土遺物は山茶碗・土師器破片等があるが、出土量は非常に少ない。図示できたものは、第49図207の山茶碗の碗底部だけである。

Ｋ群遺構の時期は、出土土器から12～13世紀代を中心にしていたものと推定される。

Ｎ群（第47図　図版21－１）

Ｎ群は、調査区南西の５区と呼んだ部分で、G22グリッドを中心とする地区である。西側は段丘端部にあたり、強く傾斜して現逆川に至る。調査区は宅地であったため削平されており、M群に比べ遺構検出面で２m程の比高差を持つ。検出した遺構は、大きな溝状遺構のまとまりで、これまで各群に認められたような小穴等は検出されなかった。また、南側を東西に流れる溝SD－15は灰褐色砂を覆土とする溝で、近世後半以降のものである。

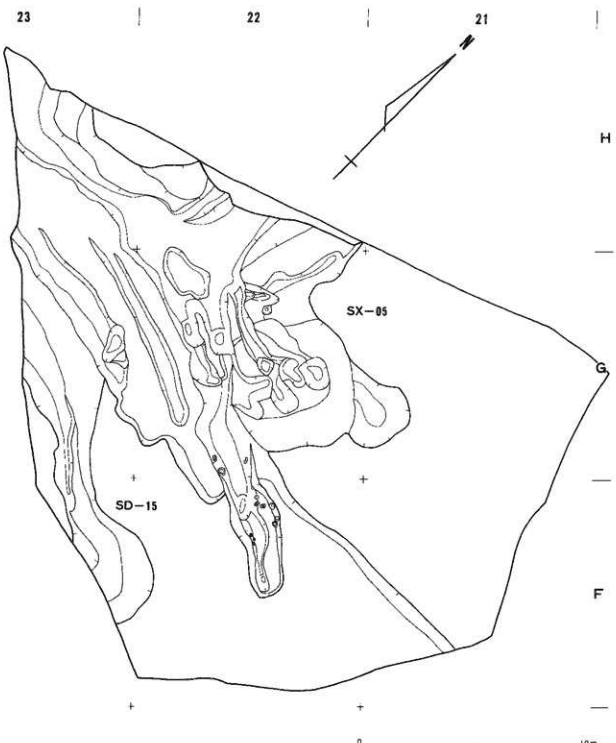
溝状遺構

ＳＸ－０５（第48図　図版21）

溝SX－05は、数本の溝がまとまって南北12m・東西26mの大きな土坑状を呈する。各溝は時間差を持っているが、分層して調査することはできなかった。南側には東から西に向かって３本の溝があり、北側からは大小２本の溝が合流する。両者の合流する間には、溝の一部と考えられる円形の土坑状を呈する凹みがある。この凹み部分の底部にはいくつかの凹凸があり、相当の落差を以て、東側から水が流れ込んだ様子が窺える。図示したように、溝下層には10～40cm大の礫が、多数の土器と共に廃棄されており、特に中央を東西に流れる溝に多く認められた。極めて不整形で自然流路状であるが、一部杭も検出されており、人為的な面も認められる。前述のように、この地点は逆川に面した段丘の端部であり、SX－05は生活域から出る水の排水口として機能していたと推定される。

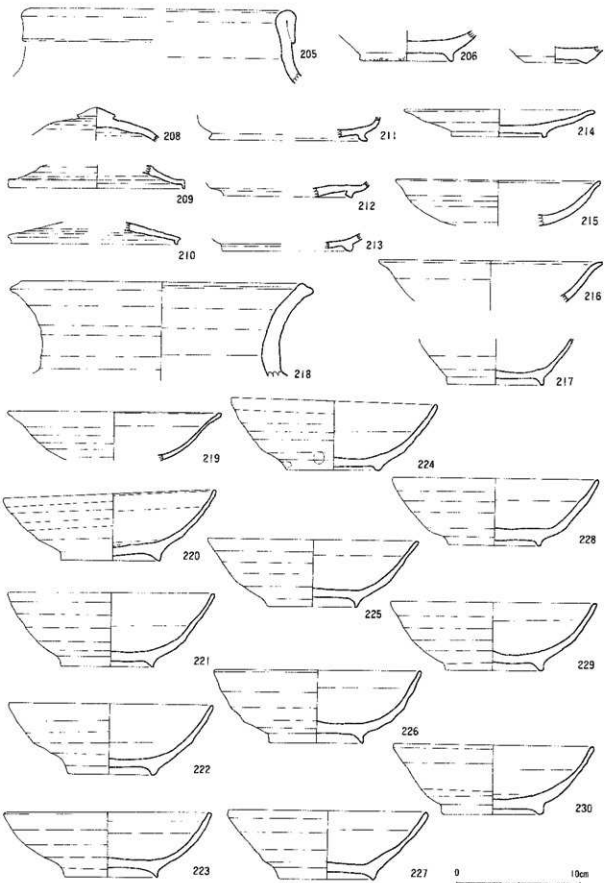
遺構内からは土器・石器・銭貨・杭が出土しており、その内土器は今回の調査の出土遺物の大半を占めている。出土土器は多数のため、残りの良いものを中心に第49図208～第59図537（図版26～34）に図示した。208～213は須恵器坏蓋と有台坏身で、奈良時代のものである。214～218は灰釉陶器皿・碗・壷で、214は黒笹14号窯式に併行する。219～329は山茶碗の碗で、細かな形態差があり、時期差が認められる。ほとんどが東遠江産と考えられ、他地域のものは少ない。他地域と思われる土器は307～329で、多くが湖西・渥美古窯産である。315～317・325だけが胎土を異にしており、瀬戸・常滑古窯産のものである可能性がある。315は玉縁状口縁を呈するもので、１点のみ出土している。碗の中に、４点の墨書土器が確認できた。304には「方」、306には「大」の文字が記されている。233・305は、文字というよりも記号的なものと考えられる。330～386は山茶碗小碗で、口径や形態等にいくつかの違いが認められる。

387～482は山茶碗小皿で、小碗同様に形態差が認められる。小碗・小皿もほとんどが東遠産と考えられるが、480～482が胎土を異にしている。480は湖西・渥美古窯産と思われる。483は小鉢・484は水瓶で、珍しい器種である。485～494は壷で、常滑、湖西・渥美、東遠古窯産のものがある。法量や口縁部等に違いが認められる。495～504は甕で、常滑、湖西・渥美古窯産のものがある。500は渥美産で、肩部に粗

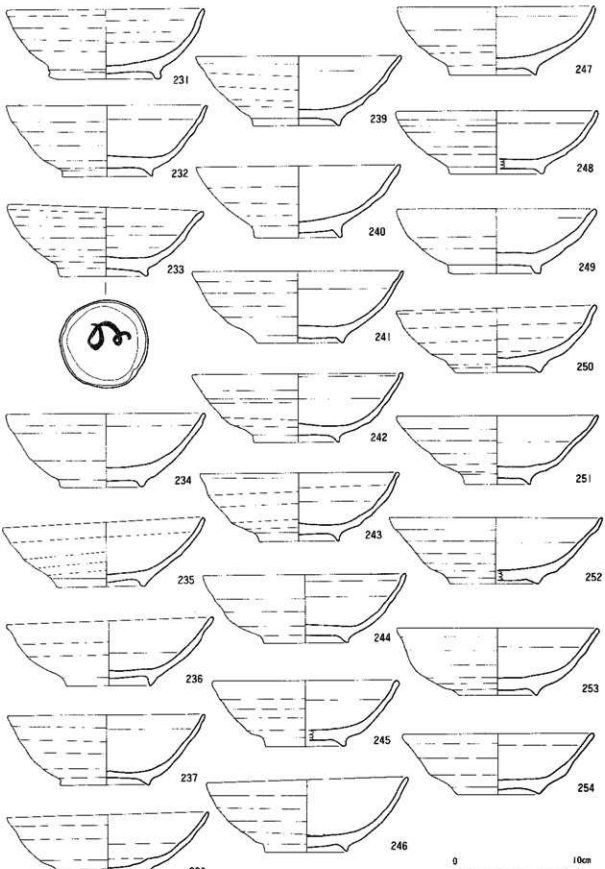


第47図　N群遺構配置図

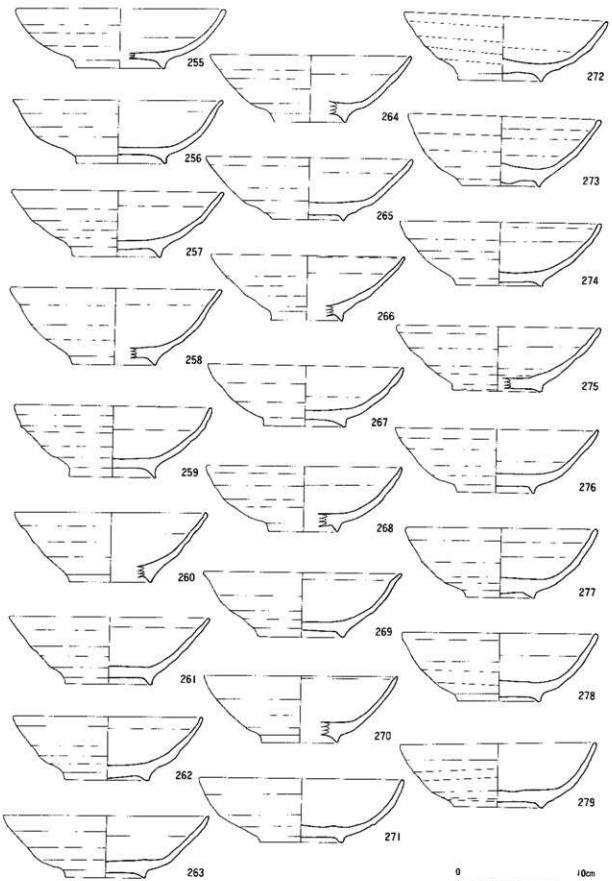
第48図　SX－05実測図



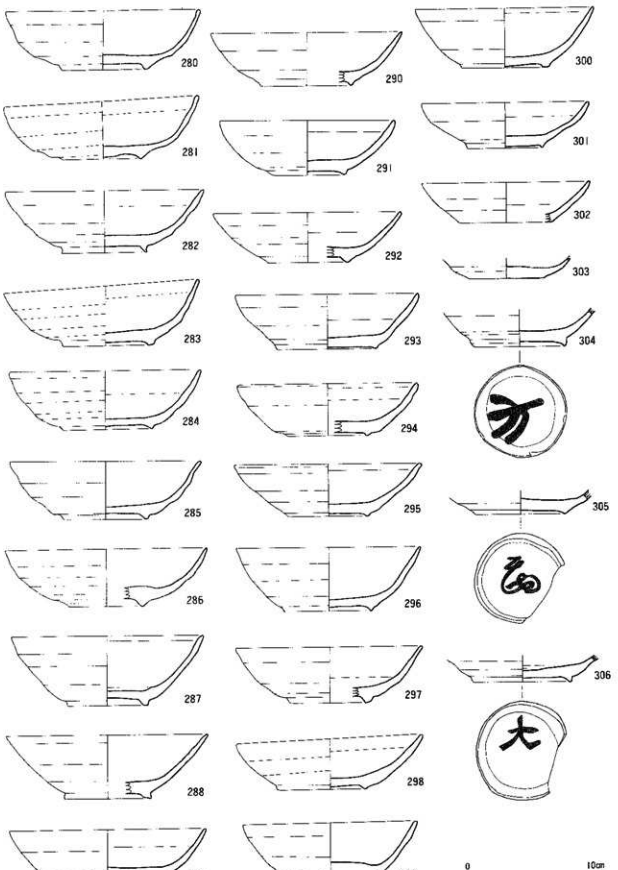
第49図　J～M群・SX－05出土土器実測図(1)



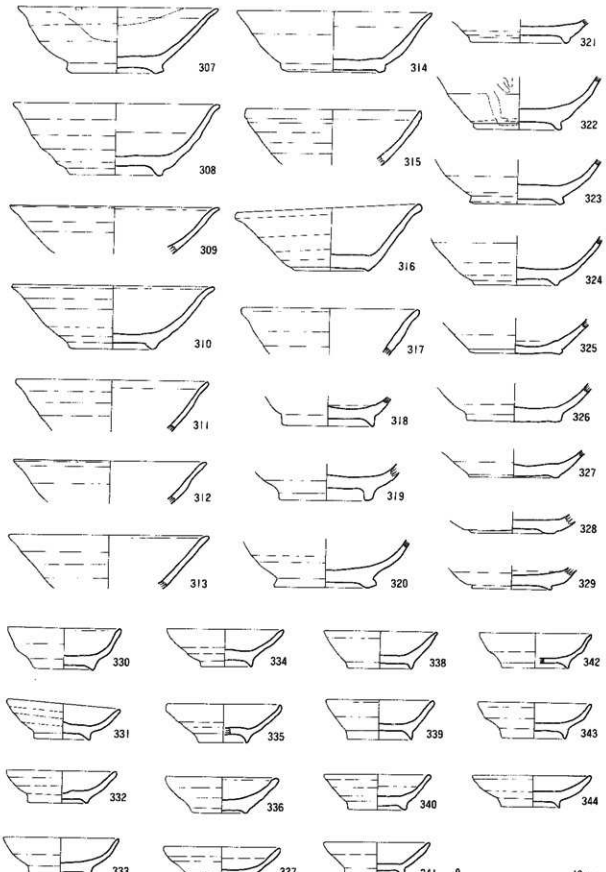
第50図　SX－05出土土器実測図(2)



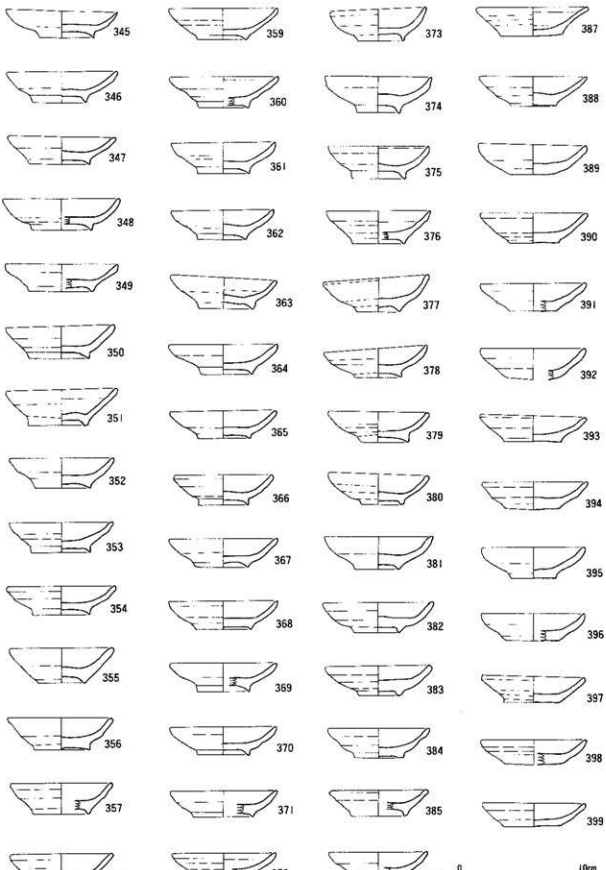
第51図　SX－05出土土器実測図(3)



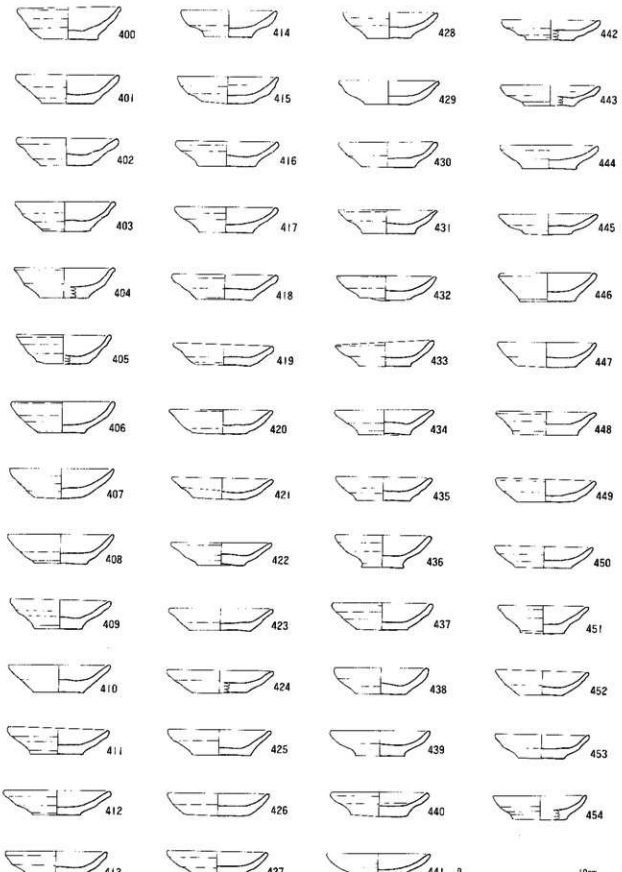
第52図　SX－05出土土器実測図(4)



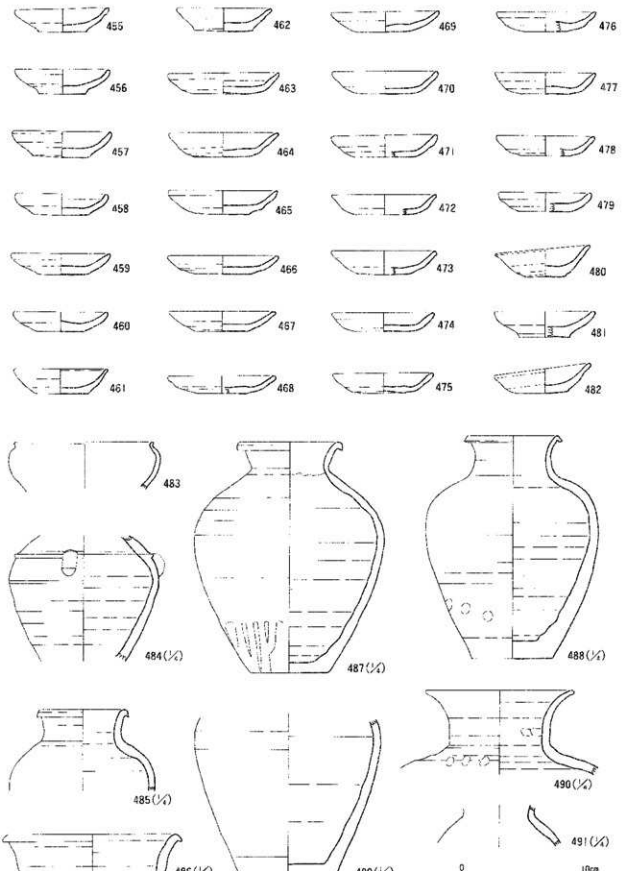
第53図　SX－05出土土器実測図(5)



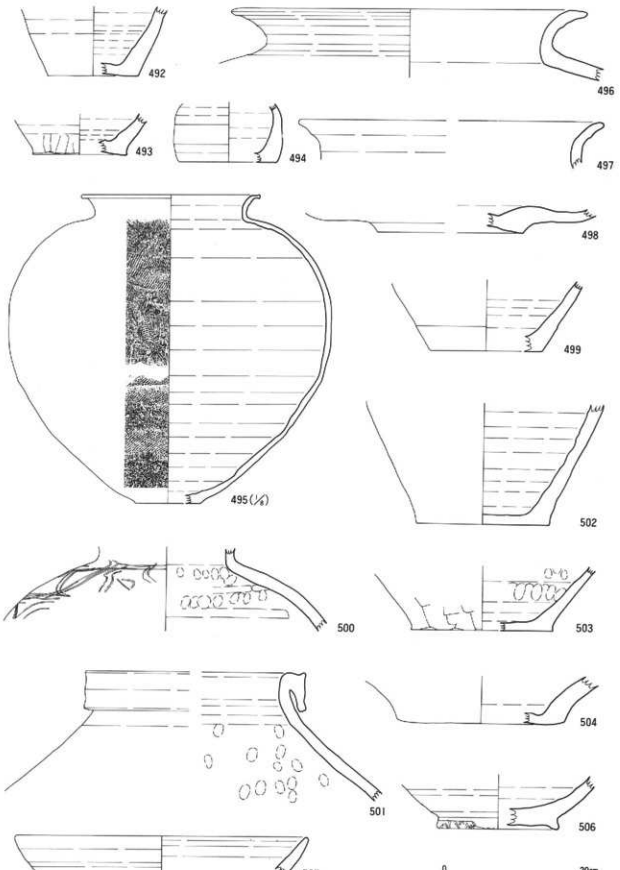
第54図　SX－05出土土器実測図(6)



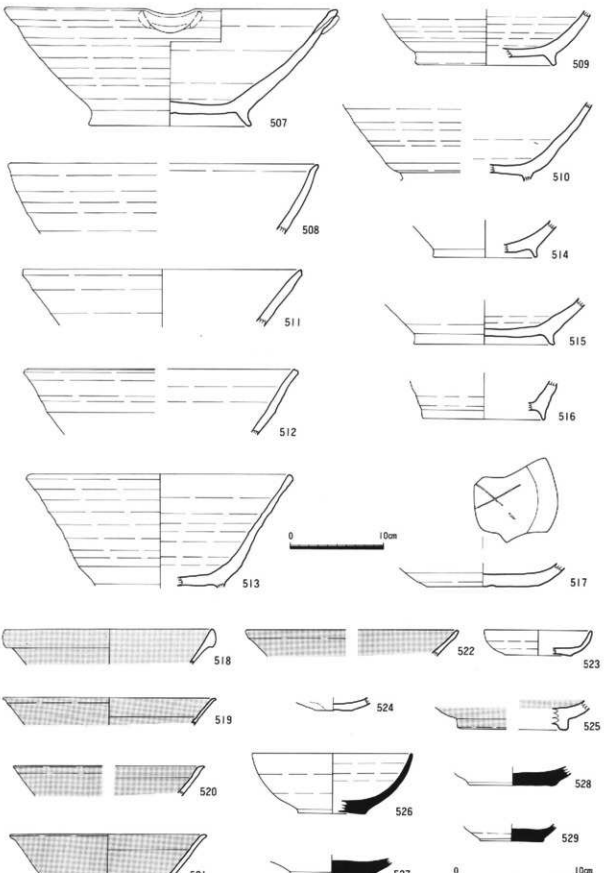
第55図　SX－05出土土器実測図(7)



第56図　SX－05出土土器実測図(8)



第57図　SX－05出土土器実測図(9)

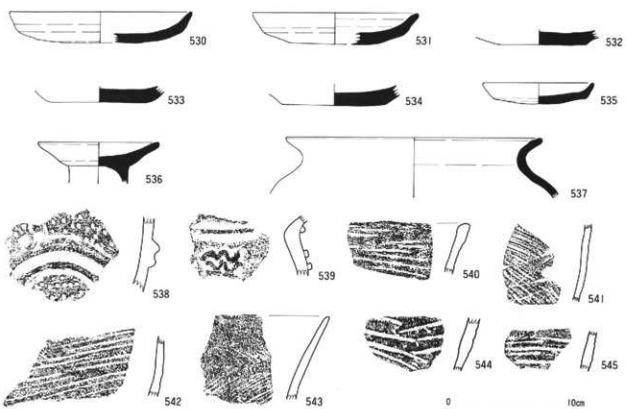


第58図　SX－05出土土器実測図(10)

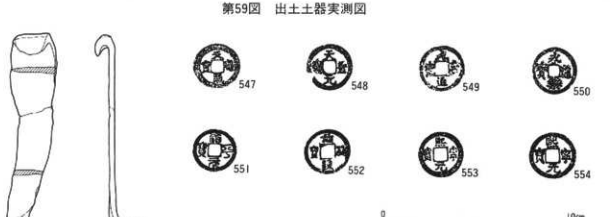
雑ながら連弁文が描かれている。505～517は片口鉢で、片口とわかるものは507だけである。常滑、湖西・渥美、東遠古窯産のものがある。518～524は白磁碗・小皿で、518は玉縁口縁をなす。525は龍泉窯系の青磁碗である。526～535は土師器碗・皿である。536は土師器の高台付皿、537はいわゆる伊勢型鍋と呼ばれるものである。

石器は第62図570～577（図版36・37）に図示した。打製石斧・敲石・砥石があり、打製石斧は下層の縄文土器包含層から掘り出されたものと思われる。574は石製の賽子で、県内では出土例はほとんど知られていない。銭貨は第60図553・554の2点を図示した。ともに熙寧元寶である。木製品としては、杭が数点出土している。3点について樹種鑑定を実施した結果、クリ・シイ・ミズキが使用されていた。

図示した土器以外にも、多数の土器破片が出土している。中でも、山茶碗破片が圧倒的多数を占めている。器種等による相対的な出土比率は調べてないが、今回の図版で大略は窺えるものと思われる。出

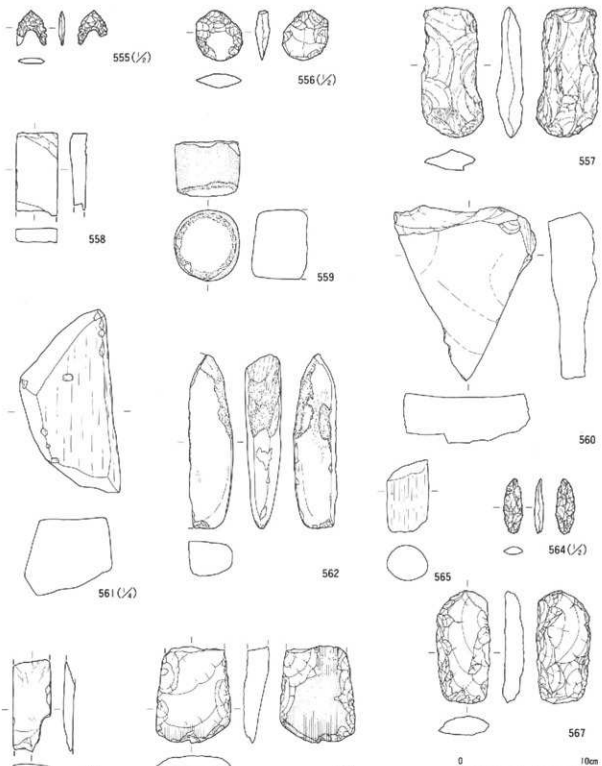


第59図　出土土器実測図

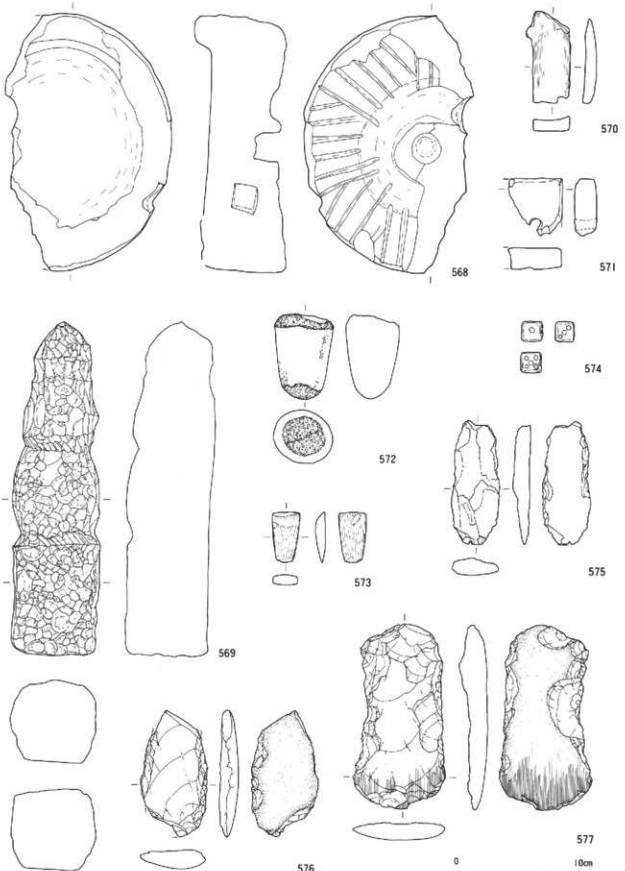


第60図　出土金属製品実測図

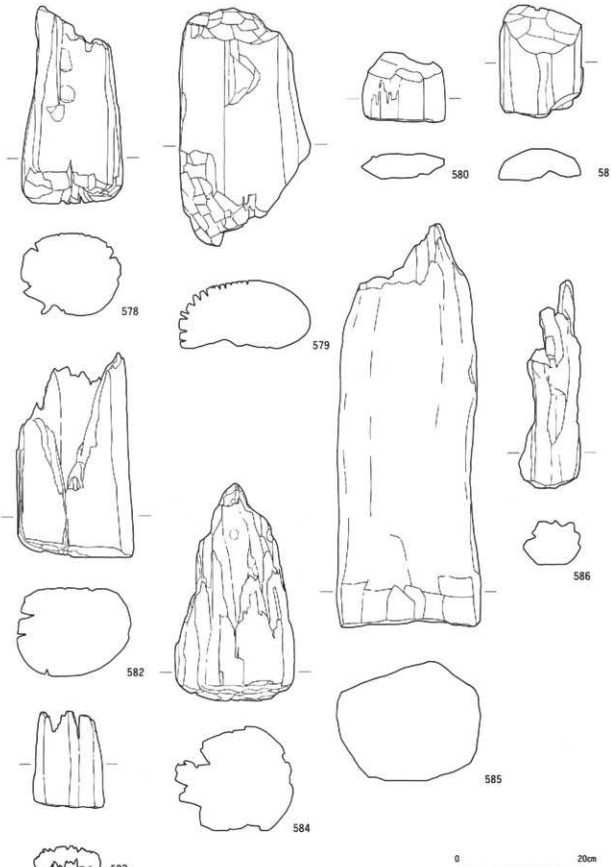
土量の多少はあるが、出土土器の年代は8世紀から14世紀に及んでいる。これら土器の在り方からは、集落規模の変遷のみならず、生活様式の一端を窺い知ることができる。出土土器は12～13世紀代のものが中心となるが、501の常滑古窯産の甕が含まれていることから、遺構の廃絶時期は14世紀後半代と考えられる。15～17世紀の遺物は認められておらず、集落の廃絶以前にSX－05は埋まってしまったものと推定される。



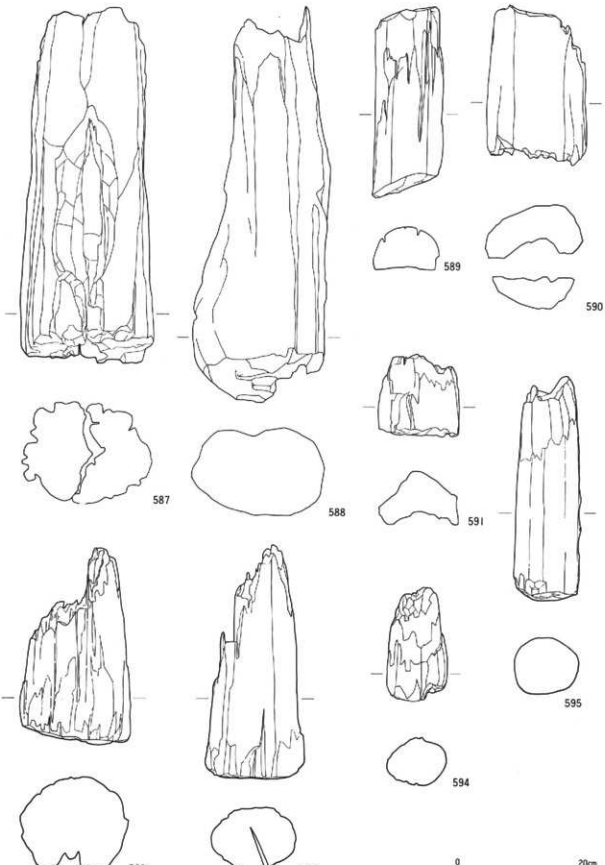
第61図　出土石製品実測図(1)



第62図　出土石製品実測図(2)



第63図　出土木製品実測図(1)

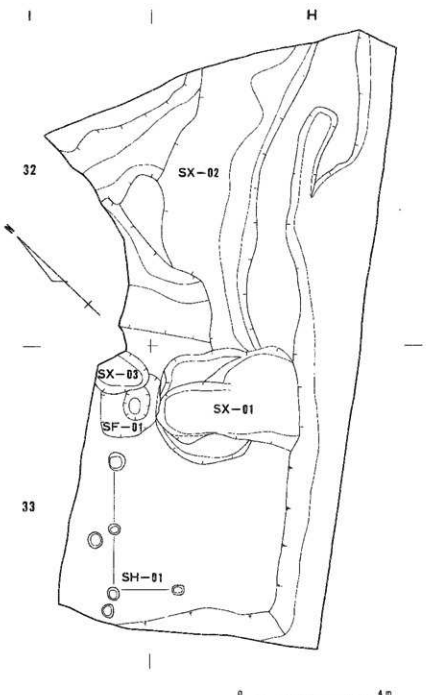


第64図　出土木製品実測図(2)

第Ⅳ章　頭地遺跡の遺構と遺物

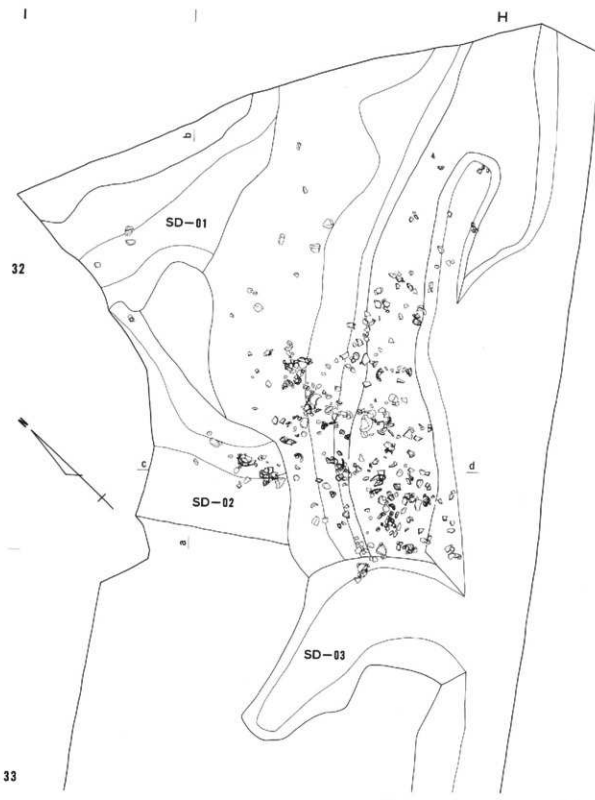
第1節　調査の概要

遺跡は、逆川右岸の標高44～49m程の低位段丘上に立地する。今回の調査地点は、遺跡推定範囲の南東部の逆川に面した部分である。現況は調査対象地北東側が畑地、H28からG36グリッドにかけては一段低くなって南北に水田、川岸付近はまた高くなって畑地となっている。

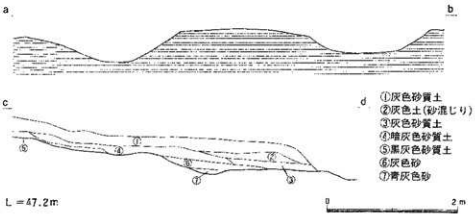


第65図　頭地遺跡遺構全体図

第１次調査の結果、Ｆグリッド列以南の畑地部分は、褐色土が厚く堆積し、下層には砂や砂礫層が逆川に向かって斜めに堆積していた。砂礫層中からは近世後半以降の陶磁器が出土し、この付近が比較的



第66図　SX−02実測図(1)



第67図　SX－02実測図(2)

新しい時期まで河川であったことが明らかになった。また、水田部分では耕作土下に砂礫層あるいはシルト層が認められ、G30グリッドの暗灰色シルト層中からは第79図733の奈良時代の土師器甕が出土した。おそらく、水田部分も奈良時代以降河道になっていたものと推定され、遺構は検出されなかった。遺構が検出されたのは、この水田面より1m程高い、調査対象地北東側（H・I 32-33グリッド）の畑地部分だけであった。そこで、約150m²の調査区を設定し、第2次調査を実施した。

調査区は平端部の幅約6mと狭く、東側は上述のように水田造成のために削平され、段差ができている。調査区内の土層は、基本的には上から暗褐色土（耕作土）・暗灰色砂質シルトあるいは灰色砂礫・黄白色粘土の順となっている。暗灰色シルトはI 33グリッド付近だけに広がり、灰色砂礫には深浅が認められ、下層の黄白色粘土はH33グリッドで確認されている。遺構確認は、暗灰色砂質シルトあるいは灰色砂礫層上面で行った。

第2節　遺構と遺物

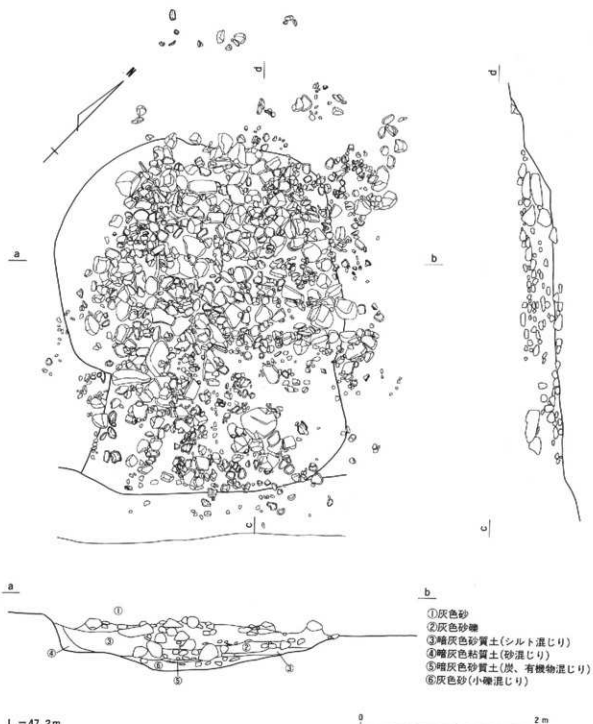
検出した遺構は土坑3・小穴6・溝3で、その他自然流路跡1を発掘調査した（第65図　図版22）。小穴の一部は掘立柱建物跡の可能性があり、建物群がさらに西あるいは北側に続くものと思われる。遺物はすべて土器で、ほとんどが8世紀から13世紀にかけてのもので、大半は8世紀代の須恵器である。耕作土中からは第79図737の志戸呂窯産の天目茶碗が出土しており、遺跡内に江戸時代の遺構等が存在している可能性を示している。

溝及び自然流路

SX－02（第66・67図　図版22・23－1）

調査区北側から検出された溝と自然流路跡をまとめてSX－02とした。流路は段差縁辺部をややえぐるように、調査区北東から南に向かって流れる。検出長約11m・深さ約1mで、幅は5m以上と推定される。覆土は砂質シルト及び砂層からなり、南側土層帯では7層に分けられる。流路底部には、青灰色砂を覆土とする2本の溝が並行して伸びていた。また、西側からは流路に注ぐように3本の溝が検出された。北側の溝SD－01・02は、検出長約5m・幅約2m・深さ40～50cm程である。SD－02は北へ行くに従い幅広となり、SD－01と重なり合う可能性もある。溝覆土は灰色あるいは暗灰色の砂質土で、流路の上層覆土と同様であり、前後関係は認められなかった。人為的な溝とは断定できないが、調査区西側に当然集落等の存在が考えられ、集落域等と密接した溝であることは間違いないと思われる。南側の土坑SX－01下から検出した溝SD－03は、長さ4m程で流路と接続してしまうことから、流路によって作られたものと考えられる。

SX－02からは、若干の礫とともに多数の土器が出土している。特に、SD－02と合流する付近に集中し、覆土上層の①～④層にかけて多く出土している。土器は流れ込んだというより、人為的に廃棄されたように思われる。出土土器には、須恵器・灰釉陶器・土師器がある（第72～79図　図版40～43）。土坑SX－01出土の大半も、SX－02内に含まれていたものと考えられる。しかし、灰釉陶器や土師器の一部はSX－02内部からは出土しておらず、検出面での他遺構からの混入と考えられ、溝及び自然流路の埋没時期は８世紀後半代と推定される。



第68図　SX－01上面礫実測図

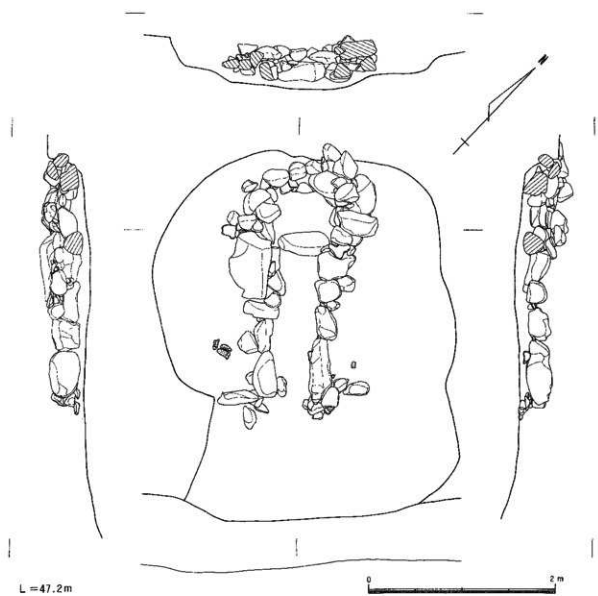
出土土器の9割以上を須恵器が占め、土師器はほとんどが小破片で、図示できたものは第79図730～732だけであった。須恵器には坏・鉢・壺・横瓶・平瓶・甕等多くの器形があり、各器形には幾つかの形態差が認められる。当然時期差が考えられ、土師器の残存率も考慮しなければならないが、土師器が少なく、須恵器が主体で多器形が認められる等、本遺跡が単なる集落ではない一面を窺わせていると思われる。

土坑

ＳＦ－０１（第70図）

土坑SF－01は、SX－01の北西側に隣接してＩ33グリッドから検出され、北側は土坑SX－03によって切られている。平面形態はやや不整形な円形状を呈し、土坑の中央はすり鉢状に窪む。規模は最大径約1.8m・深さ約50cmである。覆土はSX－01の①層と同様の灰色砂であるが、礫は殆ど混入していなかった。

土坑上面からは第79図724・727（同一個体）の灰釉陶器皿が出土している。高台は三日月状を呈し、灰釉は刷毛塗りによって施されている。遺構の時期は、出土土器から9世紀後半と考えられる。



第69図　SX－01下面石組実測図

ＳＸ－０１（第68～70図　図版23－２・３・24－１・２）

土坑ＳＸ－01は、調査区中央のH33グリッドから検出された。ＳＸ－01は、ＳＸ－02南側を掘り込んで作られた集石土坑である。平面形態は、ＳＸ－02と重複するため東側がやや不整形となるが、鍵穴状を足している。規模は検出長約４ｍ・円形部径約３ｍで、深さは円形部で約50cm、開口部で約70cm である。土坑内には、数 cm～70cm 程のおびただしい量の礫が廃棄されていた。

上面から断面図を作成しながら礫を除去して行くと、下部から20～70cm の比較的大きな礫があたかも横穴式石室状に組まれた状態で検出された。奥壁付近では扁平な礫が数段重ねられ、入口付近は横長の大きな礫が並列する。石組内にも比較的大きな礫が入っており、上部から崩れたものと考えられる。石組内は全長約2.3ｍで、幅は奥壁付近で60cm、入口付近で約30cm、検出高は奥壁付近で約50cm を測る。奥壁から50cm 程手前には60cm 程の横長の礫が内部を仕切るように置かれ、入口部分の両側にも石組に対して横方向に礫が据えられていた。石組部分は、周囲よりも10～20cm 程深く掘り込まれており、奥壁から入口に向かって溝状の凹みとなる。覆土は第68図の①～⑤層までで、⑥層はＳＸ－02の堆積層である。上面①層（灰色砂）は、土坑全体を覆う。石組の左右は異なった覆土となり、石組の裏込め土と考えられ、石組下部には裏込め土の②層が入り込んでいた。

第70図　ＳＸ－01掘り方及びSF－01実測図

土坑からは礫に混入して多数の土器が出土し、須恵器・灰釉陶器・山茶碗・土師器が見られる。山茶碗は、覆土がほぼ同一であるSF－01がＳＸ－03によって切られていたことから、検出面での混入と考えられる。須恵器もＳＸ－02を掘り込んで作られたために、当然混入したものと考えられ、遺構の時期は灰釉陶器の時期である可能性が高いが、出土量が少なくいずれも破片であり、やや疑問が残る。出土した灰釉陶器（第79図723・725・726）は、SF－01出土土器に比べ後出で、10世紀代に位置付けられる。第79図728・729の土師器は、８世紀代のものとは考えがたく、灰釉陶器に伴うものと考えられる。遺構の性格については、現地調査後類例を調べたが他に認められず、不明と言わざるをえない。

ＳＸ－０３（第71図　図版24－４）

土坑ＳＸ－03は、SF－01と重複してＩ33グリッドから検出された。北側が調査区外に掛かるため平面形態ははっ

きりしないが、検出部分から南北に長い楕円形を呈すると推定される。検出幅約1.3m・深さ約35cmで、底は比較的平坦である。覆土は砂質の強い黒灰色土で、土坑内には5～40cm大の礫が多数混入していた。

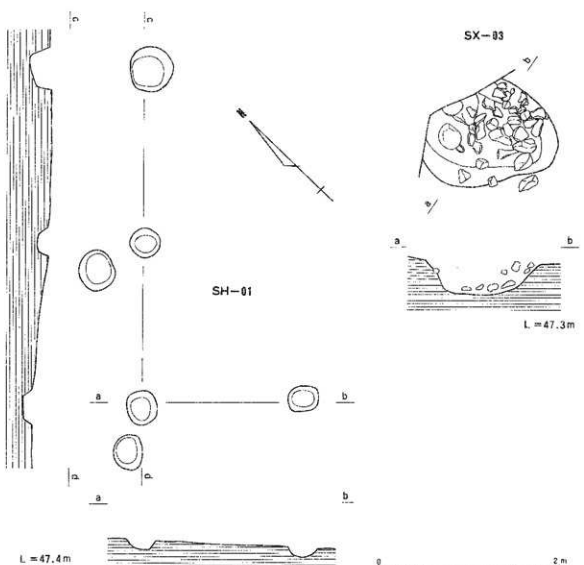
土坑内からは、第79図734・735の灰釉陶器碗と山茶碗小碗が出土している。734はSX－01出土の723と同一個体と思われ、SX－01からの混入と考えられる。遺構の時期は、山茶碗小碗から12世紀中頃から後半と考えられる。

掘立柱建物跡

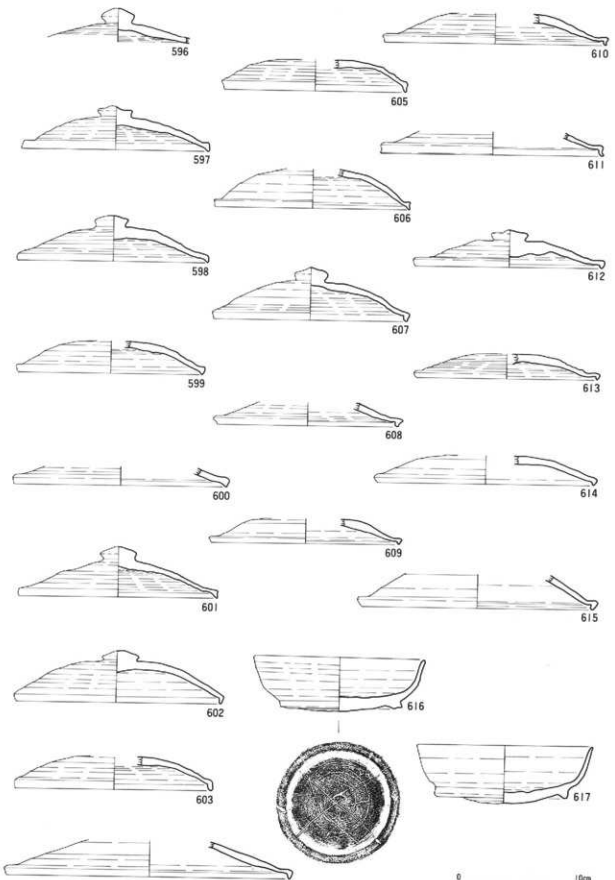
SH－01（第71図　図版24－3）

調査区西側H・I33グリッドから小穴6が検出された。その内、4本の小穴がほぼ均等間隔でL字状に配列していたことから掘立柱建物として捉えた。検出規模から梁行2間・桁行2間の建物と推測される。柱間距離は約1.8mで、方位はN－47°－Eとなる。柱穴はほぼ円形を呈し、長径30～50cm・深さ10～20cmで、覆土は黒灰色土であった。

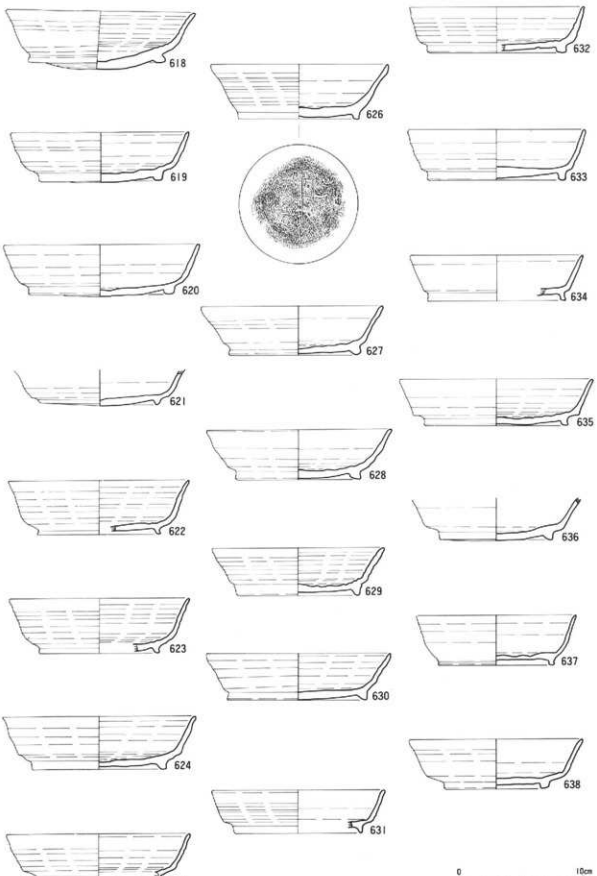
柱穴からの出土遺物は全くないが、覆土がSX－03と同一であることやSX－01上面から山茶碗小皿が出土していることから、遺構の時期は12世紀中頃から13世紀初頭と推定される。



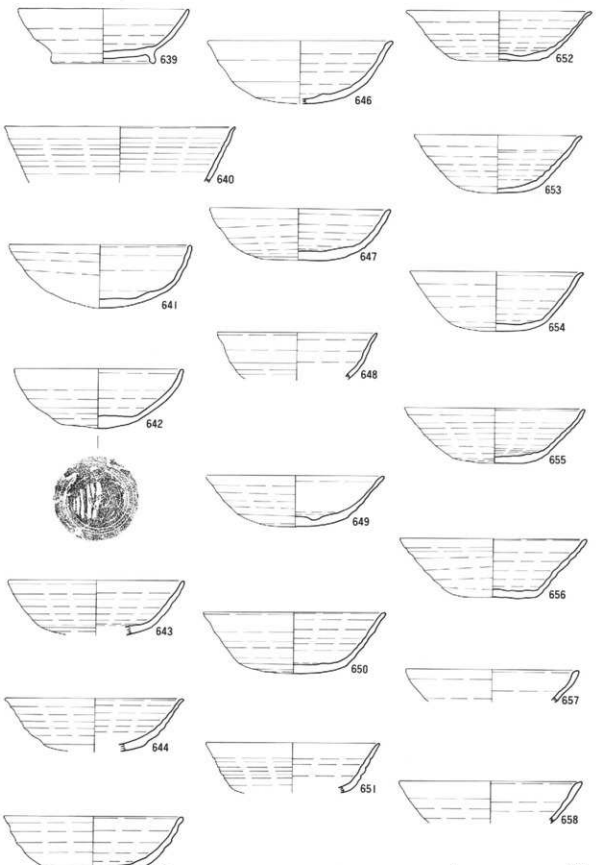
第71図　SH－01・SX－03実測図



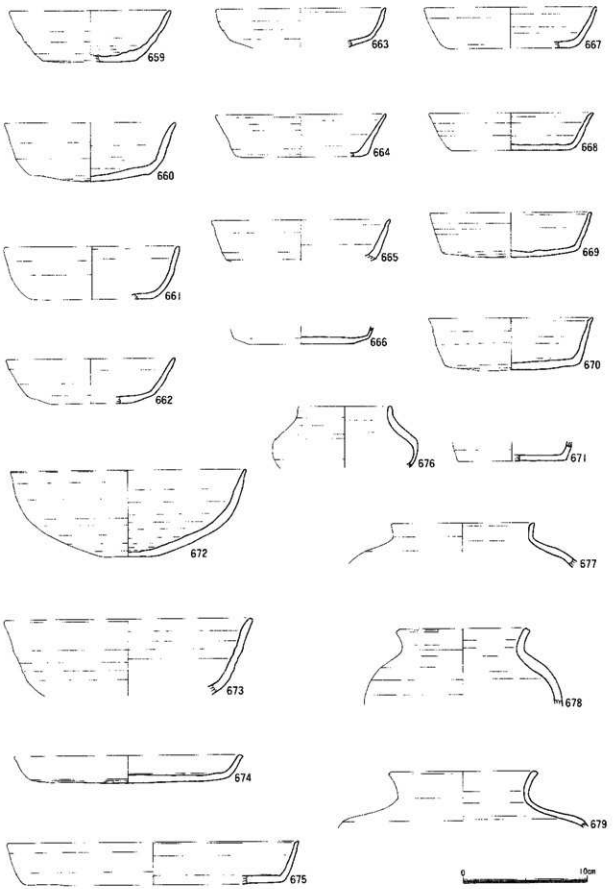
第72図　出土土器実測図(1)



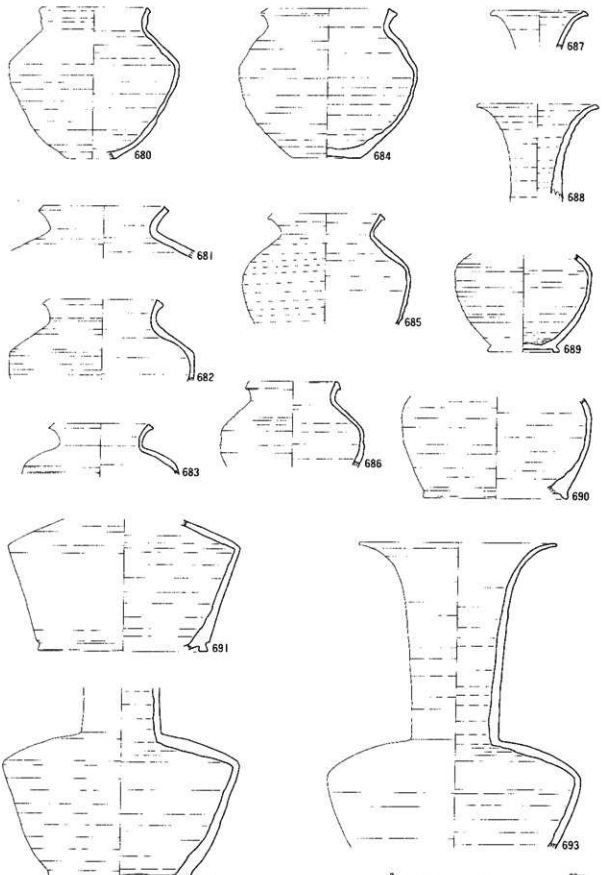
第73図　出土土器実測図(2)



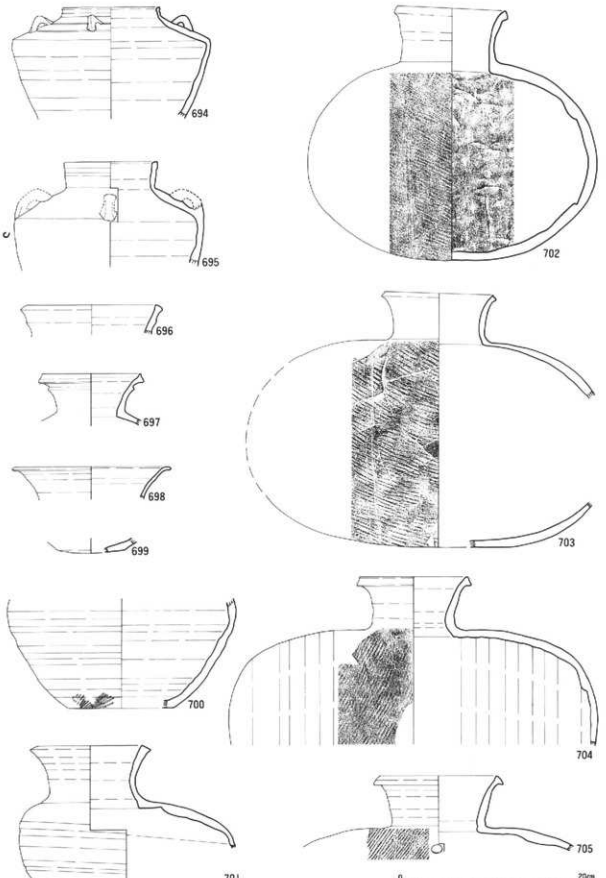
第74図　出土土器実測図(3)



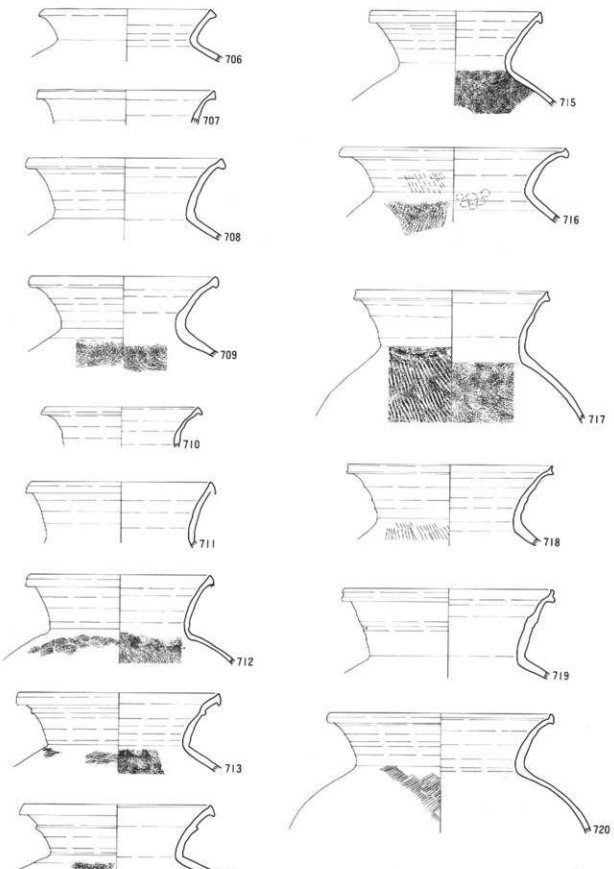
第75図　出土土器実測図(4)



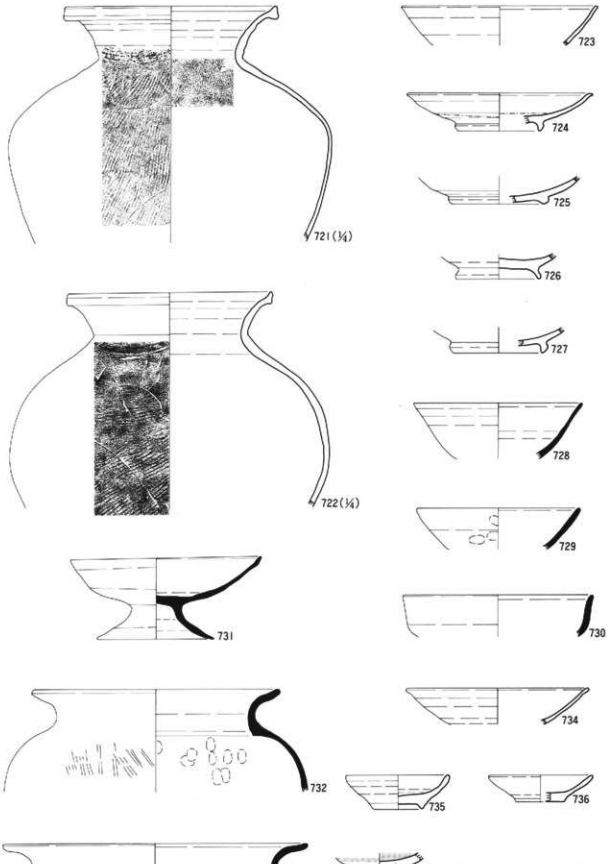
第76図　出土土器実測図(5)



第77図　出土土器実測図(6)



第78図　出土土器実測図(7)



第79図　出土土器実測図(8)

表2　牛岡遺跡遺物観察表

番号	出土位置	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	残存	色調	特徴等	図版
1	SB-01	須恵器	坏蓋	(13.8)・・	口縁部小破片	灰色	受部は明瞭に折れる	
2	〃	〃	〃	(12.2)・・	口縁部小破片	暗灰色	天井部から外反して受部へ移行	
3	〃	〃	坏身	(13.2)・・	口縁部1/8	青灰色	口縁部は小さく外傾・底部にハケ目状の圧痕	
4	〃	〃	〃	16.4・・	口縁部1/8	暗灰色	口縁部は小さく外傾	
5	D 5	〃	〃	(17.7)・6.7・(13.6)	1/5	〃	高台は方形で低く、ハの字状に開く	
6	SP-121	〃	〃	・・(9.8)	底部小破片	明灰色	底部に回転ヘラ削り	
7	C 4	〃	〃	・・(11.0)	底部小破片	〃	底部外周を斜めに面取り	
8	SP-05	山茶碗	小碗	(8.0)・・	口縁部小破片	淡灰色		
9	B 5	〃	小皿	・・(4.4)	底部1/2	灰褐色	底部に回転糸切り	
10	SP-127	〃	碗	(14.9)・・	口縁部1/8	青灰色	口縁部に小さく外反	
11	SP-123	〃	〃	(16.0)・・	口縁部1/10	〃	口縁部は弱く外傾	
12	D-6	〃	〃	(15.8)・・	口縁部1/5	〃	口縁部は弱く内湾	
13	C 6-7	〃	〃	(15.5)・・	口縁部小破片	暗灰色	口縁端部は尖り気味	
14	C-4	陶器	甕	・・(15.8)	底部小破片	〃	胴部に平行叩き・胴部下端に回転ヘラ削り・湖西・渥美産	
15	SD-05	須恵器	坏身	・・(9.6)	底部1/6	黒灰色	高台は方形・焼成不良	
16	〃	〃	長頸壺	・・	肩部1/8	明灰色	肩部に回転ヘラ削り	
17	E 7	山茶碗	小皿	(7.2)・1.5・4.2	1/4	暗青灰色	底部に回転糸切り	
18	F 6	〃	碗	・・(7.3)	底部1/6	灰白色	三角高台、端部にスノコ痕	
19	SP-432	〃	小皿	・・3.8	底部1/2	明灰色	底部に回転糸切り・SH-12	
20	SP-428	白瓷	碗	・・(5.8)	底部1/4	灰白色	釉は灰オリーブ色・SH-12	
21	SP-471	山茶碗	〃	(19.8)・・	口縁部1/16	暗灰色	口縁部は直線的に開く・SH-14	
22	SP-482	〃	小碗	(10.0)・3.6・6.0	1/3	青灰色	口縁部は内湾・高台高く、底径大・SH-13	
23	SP-475	〃	碗	(16.7)・・	口縁部1/12	〃	口縁部は直線的に開く・SH-14	
24	SP-471	〃	小皿	(8.6)・・	口縁部1/9	暗灰色	SH-14	
25	SP-424	灰釉	皿	・・	底部小破片	明灰色	三日月高台	
26	SP-179	山茶碗	碗	(16.0)・・	口縁部小片	青灰色		
27	SP-427	〃	〃	(15.6)・・	口縁部1/14	暗灰色	口縁部は直線的に開く・器厚は薄い	
28	SP-442	〃	〃	(14.8)・・	口縁部1/7	〃	口縁部は内湾	
29	〃	〃	〃	(15.7)・・	口縁部1/9	青灰色	口縁部は内湾	
30	〃	〃	〃	(17.0)・・	口縁部1/14	明灰色	口縁部は直線的に開く・口縁から内面に自然釉付着	
31	SP-474	〃	〃	(16.2)・・	口縁部1/3	青灰色	ノタ目顕著	
32	SP-177	〃	〃	・・(7.5)	底部1/3	〃	全体に厚みあり・胎土は砂質強・高台にモミ痕	
33	SP-178	〃	〃	・・6.3	底部1/2	暗灰色	三角高台・底部に糸切り痕	
34	SP-177	〃	〃	・・(7.2)	底部1/4	灰色	低い三角高台・底部外面にナデ	
35	SP-176	〃	小皿	(7.6)・1.6・4.4	1/3	明灰色	体部は内湾	
36	SP-182	〃	〃	(7.8)・1.9・4.3	1/3	灰白色	口縁部は緩やかに外反・底部外面に墨書・湖西・渥美産	25
37	SP-401	〃	〃	7.8・2.1・4.3	ほぼ完形	明灰色	底部回転糸切り	
38	SP-404	〃	〃	8.0・1.9・4.5	ほぼ完形	青灰色	底部はやや突出・口縁部は内湾	
39	SP-411	〃	〃	(8.1)・1.6・(4.0)	口縁部1/8	暗灰色	底部から緩やかに内湾・口縁部は弱く外反	
40	SP-413	〃	〃	(8.4)・・	口縁部1/8	青灰色		
41	SP-453	〃	小碗?	(8.6)・・	口縁部1/4	〃	口縁部は弱く外反	
42	SP-460	〃	小皿	(8.1)・・	口縁部1/5	〃	口縁部は内湾	
43	〃	〃	小皿?	(8.0)・・	口縁部1/3	〃	口縁部は内湾	
44	SP-410	土師器	皿	(14.2)・2.1・(8.0)	口縁部1/5	明赤褐色	体部から緩やかに内湾して立ち上がる	
45	SX-03	山茶碗	碗	(14.2)・・	口縁部1/8	青灰色	口縁部は小さく外反	
46	〃	〃	〃	(14.5)・・	口縁部1/5	灰色	口縁部は外傾	
47	〃	〃	〃	(14.5)・・	口縁部1/8	暗灰色	口縁部は内湾	
48	〃	〃	〃	(14.5)・4.6・7.1	1/3	青灰色	低い三角高台・体部下半が張る	
49	〃	灰釉	〃	・・(7.5)	底部1/3	灰白色	低い瓜形高台・底部外面にナデ	
50	〃	山茶碗	〃	・・7.3	底部ほぼ完形	青灰色	全体に厚みあり・胎土は砂質強・高台にモミ痕	
51	〃	〃	〃	・・8.0	底部1/2	灰白色	高台は接合面の広い三角形・底部外面にナデ・湖西・渥美産	
52	〃	〃	〃	・・7.2	底部1/2	灰色	低い三角高台	
53	〃	〃	〃	・・6.1	底部完形	暗灰色	低い三角高台・端部にスノコ痕	
54	〃	〃	〃	・・(7.0)	底部1/3	青灰色	低い三角高台	
55	〃	〃	〃	・・6.8	底部1/2	灰褐色	三角高台・端部は鋭い	
36	〃	〃	〃	・・6.2	底部1/2	灰色	低い三角高台	

番号	出土位置	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	残存	色調	特徴等	図版
57	SX 03	山茶碗	鉢	・ ・ 8.5	底部1/2	灰色	三角高台・底部外面にナデ・底面は上げ底状	
58	〃	〃	〃	・ ・ 6.0	底部1/2	〃	低い三角高台	
59	〃	〃	小皿	8.4・1.9・4.2	1/3	明灰色	底部はやや突出・口縁部は内湾	
60	〃	〃	〃	7.6・1.9・3.9	完形	〃	底部はやや突出	25
61	〃	〃	〃	7.8・1.8・4.7	ほぼ完形	灰色	底部はやや突出し、底径大・口縁部は内湾	〃
62	〃	〃	〃	7.2・1.8・4.3	ほぼ完形	明灰色	底部はやや突出・口縁端部は方形状	〃
63	〃	壺	甕片口鉢	(26.5)・ ・	口縁部小破片	灰灰色	口縁部は直線的に開く・内外面に施釉(暗オリーブ色)・釉ムラ	
64	〃	〃	〃	(36.4)・ ・	口縁部小破片	暗赤褐色	口縁部は斜く外反し、端部は丸くなる・体部ノタ目調整・常滑産	
65	〃	〃	〃	・ ・(13.0)	底部1/3	灰褐色	高い円内高台・底部と体部下半に回転ヘラ削り・胎土・焼成良	
66	〃	〃	〃	・ ・(10.6)	底部1/10	灰白色	低い三角高台・底部と体部下端に回転ヘラ削り・胎土・焼成良	
67	〃	〃	壺	・ ・	口縁部小破片	茶色	縁帯はN字状、端部に圧痕あり・施釉(淡緑灰色)・常滑産	
68	〃	〃	〃	・ ・(12.8)	底部1/8	暗茶褐色	内面に指頭痕顕著	
69	〃	〃	〃	・ ・(10.8)	底部1/5	〃	胴部下端はヘラ削り(タテ)の後ナデ・底部に細かな凸凹・常滑産	
70	G 5	肌黒器	坏身	・ ・ (8.8)	底部1/6	青灰色	高台は三角状で、外に張り出す	
71	G-5	〃	〃	・ ・ (6.0)	底部1/3	明灰色	内円高台	
72	D 3	〃	〃	・ ・(10.6)	底部1/4	灰色	底部外周を斜めに面取り	
73	F-2	灰釉	碗	(13.6)・ ・	口縁部小破片	暗灰色	口縁部は小さく外反し、端部は丸くなる・器厚は薄い	
74	E 4	〃	〃	・ ・ (6.8)	底部1/3	明灰色	瓜形高台・底部外面にナデ	
75	E 2	〃	〃	・ ・ (6.2)	底部1/3	灰色	三角高台、端部は丸くなる	
76	D-2	〃	〃	・ ・ (7.0)	底部1/7	〃	高い三角高台	
77	E 2	〃	〃	・ ・ (6.2)	底部1/3	〃	瓜形高台・底部外面にナデ	
78	D-3	〃	〃	・ ・ (7.6)	底部1/4	〃	三日月高台・底部外面にナデ	
79	〃	〃	〃	・ ・ (7.6)	底部1/4	〃	高台は高く、強く内湾する	
80	F-4	〃	壺	(17.7)・ ・	口縁部1/8	灰白色	口縁部は断面三角形状・内面に淡緑灰色釉付着	
81	E-2	山茶碗	鉢	(14.5)・ ・	口縁部1/12	灰色	口縁は強く外反	
82	G-4	〃	〃	・ ・	口縁部小破片	明灰色	口縁部は小さく外傾	
83	G 5	〃	〃	(18.4)・ ・	口縁部1/10	青灰色	口縁部は開く外反	
84	G-4・5	〃	〃	(16.0)・ ・	口縁部1/10	灰白色	口縁部は小さく外反・胴西・焼美産	
85	G 5	〃	〃	15.4・5.2・7.1	ほぼ完形	青灰色	低い三角高台・底部外面にナデ・体部下半が張る	25
86	F-4	〃	〃	(15.8)・5.0・(8.4)	1/8	暗灰色	低い三角高台・体部下半が張る	
87	G 5	〃	〃	15.4・4.8・(7.4)	2/5	〃	低い三角高台、端部にスノコ状・体部下半が張る	
88	F-2	〃	〃	(15.0)・ ・	口縁部小破片	灰色		
89	E-F-4	〃	〃	(15.0)・ ・	口縁部1/8	青灰色	体部から緩やかに内湾して立ち上がる	
90	G-5	〃	〃	・ ・ 6.4	底部完形	灰色	三角高台、端部にスノコ状	
91	F-4	〃	〃	・ ・ 7.5	底部1/2	淡灰褐色	三角高台、高台径大・焼成不良	
92	〃	〃	〃	・ ・(7.8)	底部1/5	青灰色	全体に厚みあり・高台端部にモミ痕	
93	G 5	〃	〃	・ ・ 7.4	底部2/3	黒灰色	低い三角高台、端部は丸くなる	
94	〃	〃	〃	・ ・(7.3)	底部1/6	灰白色	高台低く粗雑、端部にモミ痕・胴西・焼美産	
95	〃	〃	小鉢	・ ・ (5.6)	底部1/4	青灰色	高台は高く、端部は丸くなる	
96	〃	〃	〃	(8.6)・2.4・4.9	1/3	明灰色	低い三角高台・口縁部は内湾	
97	E-4	〃	小皿	(8.2)・2.8・(4.5)	口縁部1/4	青灰色	底部は突出・口縁部は肥厚して丸くなる	
98	F 4	〃	〃	(7.7)・2.2・(4.2)	1/5	暗灰色		
99	E-4	〃	〃	(7.5)・1.8・(4.6)	1/4	青灰色	体部から直線的に開く	
100	F 4	〃	〃	7.6・1.8・3.9	1/3	明灰色	底部はやや突出・口縁部は内湾	
101	〃	〃	〃	7.2・1.6・3.8	完形	暗青灰色	体部中央で弱く屈曲	25
102	G-4	〃	〃	7.7・1.7・4.3	ほぼ完形	青灰色	内面全体に自然釉付着	〃
103	E-F-4	〃	〃	・ ・ (5.6)	底部1/4	灰白色	底高台・底面は回転糸切り・胴西・焼美産	
104	SH-410	陶器	片口鉢	(30.5)・ ・	口縁部1/12	灰色	口縁部は小さく外反	
105	F 4	〃	甕	(31.6)・ ・	口縁部1/8	灰白色	67と同一・常滑産	
106	D 3	〃	〃	・ ・ 16.0	底部1/8	暗赤褐色	胴部下端に板状の強いナデ・常滑産	
107	E-F 4	青磁	碗	・ ・ (5.4)	底部1/6	灰色	釉は淡緑色・内面に櫛描文・見込みに圏線・同安窯系	
108	E 4	黒 地	小坏	(8.8)・ ・	口縁部1/8	暗灰色	内外面に施釉(黒色)	
109	D-3	陶器	鉢	・ ・	口縁部小破片	灰色	内面に放射状の段・口縁部から外面に灰釉流れ・胴小・美濃産	
110	F-4	〃	小皿	(12.0)・ ・	口縁部1/8	淡褐色	口縁部に施釉(緑色)・内外面にスス付着・瀬戸・美濃産	
111	G 4	土師器	碗	(15.2)・ ・	口縁部1/8	淡赤褐色	器壁剥離・小型色砂粒混入	
112	G-6	〃	小皿	(7.0)・1.8・(5.6)	1/3	明赤褐色	器壁剥離	
113	〃	〃	焼	・ ・	口縁部小破片	〃	口縁部はくの字状に外反・小石色砂粒混入	

番号	出土位置	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	残存	色調	特徴等	図版
114	SX-02	須恵器	坏身	・・(11.6)	底部小破片	灰白色	四角台形で、八の字状に開く	
115	〃	土師器	甕	・・(10.0)	底部1/5	淡黄褐色		
116	SP 279	〃	皿	・・	口縁部小破片	淡赤褐色	口縁部は緩く内傾・小石色砂粒混入・SH-06	
117	SP-268	〃	鉢	・・(6.2)	底部1/4	淡黄褐色	小石色砂粒混入・SH 06	
118	SP 281	陶器	椀 III	(10.4)・・	口縁部小破片	淡灰白色	口縁部は外反・内外面に施釉・瀬戸・美濃産・SH 06	
119	SP-101	〃	擂鉢	・・	口縁部小破片	淡黄褐色	口縁部肥厚して受口状・内外面に鉄釉（赤褐色）・SH-06	
120	SP-49	土師器	鉢	・・(8.0)	底部1/6	褐色	SH-07	
121	〃	陶器	擂鉢	・・(14.0)	底部1/7	黄白色	体部下半まで回転ヘラ削り・内面施釉・瀬戸・美濃産・SH-07	
122	SP-76	山茶碗	碗	(16.6)・・	口縁部小破片	灰白色	焼成不良・SH-10	
123	SP 298	〃	〃	・・	底部1/4	青灰色	低い三角高台	
124	SP-292	土師器	〃	・・(7.4)	底部1/10	淡赤褐色	小石色砂粒混入	
125	SP-294	〃	〃	・・	口縁部1/8	褐色	口縁部は直線的に開く・小石色砂粒混入	
126	SP-275	陶器	天目	(12.6)・・	口縁部1/8	灰白色	口縁部は直立し、端部は面く外傾・内外面に鉄釉・瀬戸・美濃産	
127	SP-91	〃	壺	(24.0)・・	口縁部小破片	灰色	緑帯は狭いK字状・下端は外反・瀬戸・窯美産	
128	〃	〃	〃	・・	胴部小破片	灰白色	内外面に釉付着・常滑産	
129	〃	〃	〃	・・(19.0)	底部1/6	淡灰色	胴部下端にタテ方向のヘラ削り後ナデ・内面に輪付着・常滑産	
130	〃	〃	瓶子	・・(8.2)	底部小破片	灰白色	胴上部に横線文・外面に施釉（淡緑灰色）・瀬戸産	
131	SF-04	山茶碗	碗	・・6.8	底部1/2	暗灰色	三角高台、端部にスノコ痕	
132	〃	〃	〃	・・7.2	底部1/3	灰色	底部外面に墨書	
133	〃	〃	〃	・・(6.6)	底部1/2	青灰色	三角高台	25
134	〃	〃	〃	・・6.9	底部1/2	暗灰色	三角高台	
135	〃	〃	〃	・・(7.2)	底部1/4	灰褐色	低い三角高台	
136	〃	〃	〃	・・(7.8)	底部1/3	灰白色	三角高台、端部は丸くなる・底部外面にナデ・調西・産美産	
137	〃	〃	〃	・・6.8	底部ほぼ完形	〃	高台は底部外周に粗雑に接合・端部にやや板・調西・産美産	
138	〃	陶器	壺	・・	頸部小破片	暗灰色	頸部外面に強いヨコナデ・瀬西・産美産	
139	〃	〃	擂鉢	26.0・・	口縁部小破片	淡灰黄色	口縁部は受口状・内外面に鉄釉釉・瀬戸・美濃産	
140	〃	〃	〃	・・(9.3)	底部1/3	〃	内面に1単位18本の櫛目・内外面に鉄釉釉・瀬戸・美濃産	
141	〃	〃	〃	・・(8.8)	底部1/5	灰白色	内面に1単位18本の櫛目・内外面に鉄釉釉・瀬戸・美濃産	
142	〃	〃	〃	・・(14.2)	底部小破片	赤褐色	底部に回転ヘラ削り・瀬戸・美濃産	
143	〃	〃	小鉢	・・(4.9)	底部小破片	淡黄褐色	底部は糸切り・体部と底部内面に施釉（淡緑灰色）・志戸呂産	
144	SX-04	山茶碗	碗	・・5.6	底部1/3	青灰色	三角高台	
145	〃	〃	〃	・・6.8	底部1/2	灰色	低い三角高台、端部にスノコ痕	
146	〃	陶器	卸口	(9.0)・・	口縁部1/6	灰白色	口縁部は小さく外反・内外面に施釉（緑黄色）・瀬戸・美濃産	
147	〃	〃	碗	・・5.2	底部完形	〃	底部は円錐状に削り出す・内面に施釉（緑褐色）・瀬戸・美濃産	
148	〃	〃	擂鉢	・・9.8	底部1/2	暗赤褐色	内面に1単位10本の櫛目・内外面に鉄釉釉・瀬戸・美濃産	
149	D 10	灰釉	碗	・・7.6	底部1/2	灰色	三日月高台	
150	B 9	山茶碗	〃	・・(6.0)	底部1/3	明灰色	三角高台	
151	E-9	〃	〃	・・7.0	底部1/2	灰色	低い三角高台、端部にスノコ痕	
152	D-9	〃	〃	・・(6.6)	底部1/5	青灰色	低い三角高台	
153	E-9	〃	〃	・・(7.9)	底部1/4	灰白色	四角高台、端部に砂痕・瀬西・産美産	
154	B-9	〃	小鉢	・・(4.0)	底部1/2	青灰色	高台剥離	
155	E-9	陶器	片口鉢	(26.0)・・	口縁部1/8	暗赤褐色	口縁部外縁に突起・体部下半に回転ヘラ削り	
156	〃	〃	壺	(13.6)・・	口縁部1/8	〃	緑帯は下半状・肩部に押印文・常滑産	
157	B-9	〃	〃	(18.5)・・	口縁部1/8	〃	折り返し口縁・外面に施釉（赤黒色）・常滑産	
158	〃	〃	碗	・・5.4	底部1/3	灰白色	削り出し高台・内面に施釉（淡緑黄色）・瀬戸・美濃産	
159	D 10	〃	丸皿	11.2・3.1・6.2	2/3	〃	内面印刻花文・施釉（淡緑黄色）・瀬戸・美濃産	25
160	E-9	〃	丸鍋	(10.4)・・	口縁部小破片	灰色	体部上半から内面に施釉（淡緑黄色）・瀬戸・美濃産	
161	D 10	〃	小皿	(10.4)・2.1・(5.8)	1/2	暗赤褐色	底部は内反り・体部下半から内面に施釉（緑灰色）・志戸呂産	25
162	〃	青磁	碗	・・5.2	底部完形	明灰色	削り出し高台、外周を斜めに面取り・外面に施釉（緑灰色）	
163	D 11	陶器	小鉢	(4.8)・・	1/4	淡黄白色	口縁部は直立、端部は面取り・無釉・志戸呂産	
164	〃	〃	擂鉢	(28.6)・・	口縁部小破片	明褐色	幅の狭い縁帯・内外面に鉄釉釉（赤黒色）・瀬戸・美濃産	
165	D-8+9	〃	〃	・・	口縁部小破片	〃	口縁部外面に突起が巡る・内外面鉄釉・瀬戸・美濃産	
166	B 9	〃	〃	(29.0)・・	口縁部小破片	淡茶褐色	口縁部内面に低い突起が巡る・無釉・志戸呂産	
167	E-9	〃	〃	・・	口縁部小破片	暗褐色	口縁部内面に低い突起が巡る・施釉（黒褐色）・志戸呂産	
168	〃	土師器	碗	・・(5.9)	底部1/3	灰褐色		
169	D 10	〃	小皿	(8.8)・1.5・(5.2)	1/8	淡黄褐色	口縁部は内湾	
170	E 10	〃	壺	・・(14.4)	底部1/8	黄白色	小豆色砂粒混入	

番号	出土位置	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	残存	色調	特徴等	図版
171	SP 186	陶器	小皿	8.4・3.3・4.4	2/3	明赤褐色	口縁部小さく外反・鉄釉・灯明皿転用・志戸呂産・SH 18	25
172	SP-228	土師器	皿	(13.9)・・	口縁部小破片	黄白色	SH-18	
173	SP 186	〃	碗	(12.4)・3.5・6.8	1/2	淡赤褐色	口縁部は直線的に開く・調整不明・小豆色砂粒混入	25
174	SP-220	陶器	小皿	(10.4)・・	口縁部1/8	灰白色	内外面に施釉(緑黄色)・瀬戸・美濃産	
175	SP 231	山茶碗	〃	・・	口縁部小破片	青灰色	口縁部は内湾	
176	〃	土師器	碗	・・(5.8)	底部1/8	赤褐色	小豆色砂粒混入	
177	SP-02	陶器	捏鉢	(10.1)・・	口縁部小破片	灰白色	口縁部は外反・内外面に施釉(鉄錆灰色)・瀬戸・美濃産	
178	〃	〃	四耳壺	・・	体部小破片	〃	胴部に1単位3本の櫛描横線文・外面灰釉施釉・瀬戸・美濃産	
179	〃	土師器	碗	・・(8.2)	底部1/4	淡赤褐色	底部突出・小豆色砂粒混入	
180	〃	〃	〃	・・(7.4)	底部1/4	〃	小豆色砂粒混入	
181	SP-03	陶器	天目	(11.9)・・	口縁部1/6	明褐色	口縁部は小さく外反・内外面に鉄釉(暗赤褐色)・瀬戸・美濃産	
182	〃	〃	丸碗	・・(5.2)	底部1/3	淡灰白色	内外面に施釉(緑黄色)・瀬戸・美濃産	
183	〃	〃	擂鉢	・・	底部1/3	暗茶褐色	内面に1単位20本7の櫛目・内外面に鉄錆釉・瀬戸・美濃産	
184	SF 07	土師器	碗	(11.2)・2.6・5.0	1/3	黄褐色	体部下半がやや湾曲・ヨコナデ・小豆色砂粒混入	
185	〃	〃	〃	10.3・2.6・5.2	完形	淡赤褐色	底部は回転糸切り・内外面にヨコナデ	25
186	〃	〃	〃	11.4・2.7・5.6	ほぼ完形	〃	体部下半が湾曲・底部は回転糸切り・小豆色砂粒混入	〃
187	〃	〃	〃	10.3・2.4・5.0	完形	〃	体部下半が湾曲・底部は回転糸切り・小豆色砂粒混入	26
188	〃	〃	〃	(11.2)・・	口縁部1/6	〃	小豆色砂粒混入	
189	SD 01	陶器	壺	・・	胴部破片	暗灰色	内面は暗褐色・常滑産	
190	C-13	山茶碗	碗	・・(6.6)	底部1/3	灰色	三角高台	
191	D 12	〃	〃	・・(7.8)	底部1/3	青灰色	高台端部にモミ痕	
192	B-C-13	〃	〃	・・6.2	底部1/2	暗灰色	底部外周に低い粗雑な高台	
193	B 14	〃	小皿	・・(3.8)	底部1/3	〃		
194	C-13	〃	〃	(8.2)・1.4・1.5	1/5	〃	底径大	
195	B-14	陶器	ドレ皿	・・(8.2)	底部1/4	灰色	底部外面にヘラによる格子目の刻み・灰釉施釉・三ツ沢窯産	
196	B-12	〃	丸碗	・・5.2	底部1/2	淡灰白色	削り出し高台・内外面に施釉(緑黄色)・瀬戸・美濃産	
197	D 12	〃	天目	(12.0)・・	口縁部1/8	灰色	口縁部は小さく外傾・体部下半から内面に鉄釉・瀬戸・美濃産	
198	〃	〃	擂鉢	(34.8)・・	口縁部1/12	褐色	口縁内面に1単位11本の櫛目・内外面に鉄錆釉・志戸呂産	
199	C 13	〃	〃	(19.0)・・	口縁部小破片	茶褐色	口縁部内面に低い突起が巡る・鉄錆釉・志戸呂産	
200	D-13	土師器	小皿	・・3.8	底部1/2	淡赤褐色	底部は回転糸切り	
201	B 14	〃	皿	13.3・2.0・7.0	3/4	淡褐色	体部下半は湾曲・底部は回転糸切り	
202	SP 246	灰釉	瓶	(14.6)・・	口縁部1/5	淡灰色	口縁部は緩やかに外反・内面に一条の沈線?	
203	SP-247	山茶碗	碗	・・(7.0)	底部1/4	灰色	底形状の高い高台	
204	SP 246	灰釉	壺	・・(8.5)	高台部1/7	明灰色	八の字状に開く外反、端部は丸くなる	
205	SF-245	陶器	壺	・・	口縁部1/8	鳥灰色	折り返し口縁・外側に施釉(赤黒色)・常滑産	
206	G 17	山茶碗	碗	・・7.3	底部完形	青灰色	全体に厚みあり・高台端部にモミ痕	
207	F 20	〃	〃	・・(5.0)	底部1/2	灰色	低い三角高台	
208	SX-05	須恵器	坏蓋	・・	天井部1/3	青灰色	宝珠状つまみ	
209	〃	〃	〃	(14.2)・・	口縁部小破片	〃	受部は明瞭に折れる	
210	〃	〃	〃	(13.4)・・	口縁部小破片	黒灰色	受部は内傾	
211	〃	〃	坏身	・・(12.6)	底部1/10	青灰色	高台端部は外に張り出す	
212	〃	〃	〃	・・(10.4)	底部1/10	〃	四角高台でやや内傾・底部中央が張り出す	
213	〃	〃	〃	・・(10.4)	底部1/10	明灰色		
214	〃	灰釉	皿	(15.2)・2.2・(7.6)	口縁部1/5	灰白色	口縁部は小さく外反・四角高台・内面に施釉(淡緑灰色)	
215	〃	〃	碗	(16.4)・・	口縁部1/8	明灰褐色	口縁部は外反	
216	〃	〃	〃	(17.6)・・	口縁部1/6	灰色	口縁部は緩やかに外反・丁寧なヨコナデ	
217	〃	〃	〃	・・7.8	底部完形	灰白色	三角高台・端部は丸味を持つ・底部外面にナデ	
218	〃	〃	壺	(15.8)・・	口縁部1/5	〃	黒い吹き出し口立つ・内外面に施釉(淡緑灰色)	
219	〃	山茶碗	碗	(17.0)・・	口縁部1/9	灰色	口縁部は緩やかに外反・丁寧なヨコナデ	
220	〃	〃	〃	16.5・5.4・7.7	ほぼ完形	青灰色	三角高台、端部は鋭い・器面外面にナデ	26
221	〃	〃	〃	16.5・6.0・7.5	ほぼ完形	〃	口縁部は僅く内湾・三角高台	〃
222	〃	〃	〃	16.2・5.6・7.0	1/2	灰色	三角高台・高台断面・スノコ痕	〃
223	〃	〃	〃	(16.2)・5.2・7.2	2/3	青灰色	口縁部は小さく内湾・高台端部にスノコ痕	〃
224	〃	〃	〃	16.4・5.4・7.2	3/4	灰色	底径大、端部にスノコ痕	
225	〃	〃	〃	(16.8)・5.4・7.4	1/3	青灰色	口縁部はやや外反・肥土緻密・高台端部にスノコ痕	〃
226	〃	〃	〃	(16.3)・5.8・7.2	2/3	〃	ノタ目顕著・高台作り粗雑・端部に顕広のスノコ痕	〃
227	〃	〃	〃	(16.0)・5.4・7.5	1/2	灰色	体部は底縁的に立ち上がる・底径大	〃

番号	出土位置	堆積	混入	法量(cm) 口径・器高・底径	残存	色調	特徴等	図版
228	SX-05	山茶椀	礫	(16.0)・5.3・7.6	1/3	灰白色	体部下半が張り出す・高台大、スノコ痕	
229	〃	〃	〃	16.2・5.5・7.7	2/3	青灰色	口縁部は弱く内傾・端部丸、スノコ痕	26
230	〃	〃	〃	16.0・5.6・8.3	ほぼ完形	暗青灰色	全体に厚みを持つ・高台端部にモミ痕	〃
231	〃	〃	〃	15.8・5.6・9.0	3/4	暗灰色	全体に厚みを持つ・口縁部は弱く外反・底部大、端部にモミ痕	〃
232	〃	〃	〃	(15.9)・5.7・7.0	1/3	〃	ノタ目顕著・高台端部にスノコ痕	
233	〃	〃	〃	15.6・5.8・7.1	3/4	青灰色	口縁部は弱く外反・高台にスノコ痕・底部に墨書	26
234	〃	〃	〃	(15.8)・5.8・6.8	1/2	灰色	底部は厚い・粘土は砂質強	
235	〃	〃	〃	16.0・5.7・6.8	2/3	暗灰色	体部は直線的に開く・底部外面にナデ	26
236	〃	〃	〃	16.4・5.3・6.8	1/2	灰色	口縁部は弱く外反・高台端部にスノコ痕	〃
237	〃	〃	〃	15.7・5.6・6.8	ほぼ完形	青灰色	体部下半がやや張り出す・高台端部にスノコ痕・底部にナデ	〃
238	〃	〃	〃	(16.0)・5.4・7.0	1/4	暗灰色	高台端部に幅広のスノコ痕	
239	〃	〃	〃	16.5・5.6・6.7	ほぼ完形	青灰色	ノタ目顕著・高台端部にスノコ痕・底部外面にナデ	27
240	〃	〃	〃	16.0・5.8・6.6	3/4	灰色	底部外面にナデ	〃
241	〃	〃	〃	(16.9)・5.8・6.8	1/4	〃	ひずみ大・口縁部は小さく内傾・高台端部にスノコ痕	〃
242	〃	〃	〃	16.6・5.3・6.8	2/3	暗灰色	高台端部にスノコ痕・底部外面にナデ	〃
243	〃	〃	〃	15.9・5.5・6.3	ほぼ完形	青灰色	口縁部は小さく外傾・ノタ目顕著・底部外面にナデ	〃
244	〃	〃	〃	(16.1)・5.5・6.7	1/2	〃	口縁部は内傾・口縁部から内面に自然釉付着	〃
245	〃	〃	〃	(15.0)・5.1・(6.8)	1/2	灰色	ひずみ大・体部下半が張り出す	〃
246	〃	〃	〃	15.8・5.7・6.5	2/3	暗灰色	体部は緩やかに湾曲	〃
247	〃	〃	〃	15.5・5.3・(6.7)	2/3	灰色	口縁部は内傾し、端部は丸くなる	
248	〃	〃	〃	16.0・5.1・(7.0)	1/2	〃	ノタ目顕著・底部外面にナデ・内面に自然釉付着	27
249	〃	〃	〃	15.8・5.2・7.4	1/2	青灰色	全体に厚みを持つ・口縁部は弱く外反・高台端部にモミ痕	〃
250	〃	〃	〃	15.9・5.2・6.7	1/2	緑灰色	口縁部は弱く外反・高台端部にモミ痕	〃
251	〃	〃	〃	16.2・5.5・5.8	1/2	暗灰色	体部下半が張り出す・底部小さく・端部にスノコ痕	〃
252	〃	〃	〃	(17.2)・5.3・(7.0)	1/3	灰色	ひずみ大・口縁部は内傾・高台端部にスノコ痕	
253	〃	〃	〃	(16.2)・5.2・6.2	2/3	灰白色	体部は緩やかに湾曲・高台の作り粗雑	
254	〃	〃	〃	15.0・4.9・6.5	1/2	〃	ひずみ大・高台の作り粗雑、端部にスノコ痕	
255	〃	〃	〃	(16.6)・5.0・(7.0)	1/3	灰色	ひずみ大・口縁部はやや肥厚する	
256	〃	〃	〃	16.4・5.1・7.0	1/3	青灰色	口縁部は小さく外反・底部外面にナデ	27
257	〃	〃	〃	16.8・5.3・7.2	1/4	暗灰色	ノタ目顕著・高い三角高台	
258	〃	〃	〃	(16.8)・6.2・(6.8)	1/8	灰色	口縁部はやや外傾	
259	〃	〃	〃	(15.8)・5.7・6.8	1/6	青灰色	高い三角高台・口縁部は内湾	
260	〃	〃	〃	(15.2)・5.6・(6.5)	1/4	〃	ノタ目顕著・口縁部は小さく内湾し、端部は丸くなる	
261	〃	〃	〃	(16.0)・5.4・7.0	1/6	〃	ノタ目顕著・体部は直線的に立ち上がる	
262	〃	〃	〃	(15.0)・5.1・(6.8)	1/6	〃	体部下半が張り出す・高台の作り粗雑・底部外面に木葉痕	
263	〃	〃	〃	16.4・5.0・6.4	1/3	暗灰色	体部下半が張り出す・高台端部にスノコ痕	
264	〃	〃	〃	(16.0)・5.4・(5.8)	1/8	青灰色	口縁部は直線的に開く	
265	〃	〃	〃	(16.6)・5.0・6.0	1/4	暗灰色	口縁部は直線的に開く・高台の作り粗雑	
266	〃	〃	〃	(15.4)・5.2・(5.8)	1/6	灰色	ノタ目顕著・口縁部は小さく内傾し、端部は丸くなる	
267	〃	〃	〃	(15.6)・4.8・6.6	1/4	青灰色	高台端部にスノコ痕・底部外面にナデ	
268	〃	〃	〃	(15.6)・5.3・(5.6)	1/3	〃	口縁部はかさく内湾	
269	〃	〃	〃	15.8・5.2・6.8	1/5	暗灰色	口縁部は小さく外傾・高台の作り粗雑・端部にスノコ痕	
270	〃	〃	〃	(15.6)・5.4・(6.2)	1/8	〃	体部下半がやや張り出す・高台端部に微ならモミ痕	
271	〃	〃	〃	16.3・5.0・6.6	ほぼ完形	青灰色	やや厚みを持つ・低い三角高台、端部に微ならモミ痕	27
272	〃	〃	〃	16.3・5.1・6.7	1/2	暗灰色	口縁部は直線的に開く	
273	〃	〃	〃	(15.6)・5.4・6.2	3/5	〃	口縁部は小さく内湾し、端部は丸くなる・高台の作り粗雑	
274	〃	〃	〃	(15.9)・5.1・6.6	1/2	灰色	低い三角高台、端部にスノコ痕	28
275	〃	〃	〃	(16.2)・5.2・(6.8)	1/3	青灰色	低い三角底台・底部がやや突出	〃
276	〃	〃	〃	(16.2)・5.0・6.4	1/3	暗灰色	体部下半がやや張り出す	
277	〃	〃	〃	(15.6)・5.4・5.8	1/2	黒灰色	高台低小さく、作りも粗雑	28
278	〃	〃	〃	15.6・5.4・6.5	1/3	〃	やや厚みを持つ・高台の作り粗雑・端部にスノコ痕	
279	〃	〃	〃	(15.6)・5.1・7.0	2/3	青灰色	低い三角高台、端部は丸味を持つ	
280	〃	〃	〃	(15.5)・4.8・6.9	1/3	〃	体部下半がやや張り出す・高台粗雑、端部にスノコ痕	28
281	〃	〃	〃	15.5・4.5・6.0	2/3	〃	体部は緩やかに湾曲・低い三角高台、端部にスノコ痕	〃
282	〃	〃	〃	(15.8)・4.9・6.6	1/3	灰色	体部は緩やかに湾曲・低い三角高台、端部にスノコ痕	〃
283	〃	〃	〃	(15.6)・4.9・7.2	2/3	暗灰色	低い三角高台、端部にスノコ痕・底部外面にナデ	〃
284	〃	〃	〃	15.2・4.7・7.2	3/4	暗灰色	ノタ目顕著・低い三角高台、端部にスノコ痕	〃

番号	出土位置	種　別	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	残　存	色　調	特　徴　等	図版
285	SX-05	山茶碗	碗	(15.2)・4.7・(6.8)	1/3	暗灰色	口縁部はやや外傾・低い三角高台、端部にスノコ痕	
286	〃	〃	〃	16.0・4.6・(6.0)	1/7	〃	体部は緩やかに湾曲・低い三角高台で、作りも粗雑	
287	〃	〃	〃	(15.4)・5.6・6.4	3/5	灰色	体部は直線的に立ち上がる・高台粗雑、端部にモミ痕	28
288	〃	〃	〃	(16.0)・5.1・(7.0)	1/5	青灰色	体部は直線的に立ち上がる・高台は低く、端部にモミ痕	
289	〃	〃	〃	(14.5)・4.4・5.7	1/3	〃	体部は緩やかに湾曲・高台粗雑、端部にスノコ痕	
290	〃	〃	〃	(15.2)・4.3・(7.2)	口縁部1/3	灰色	高台は低く、作りも粗雑	
291	〃	〃	〃	(14.0)・4.3・5.8	3/5	灰白色	体部は緩やかに湾曲・高台粗雑・端部にスノコ痕	28
292	〃	〃	〃	(14.8)・4.0・(6.0)	口縁部1/6	青灰色	高台低く、作りも粗雑、端部にスノコ痕	
293	〃	〃	〃	(14.6)・4.3・(7.8)	2/3	灰白色	体部は直線的に立ち上がる・低い三角高台・高台径大	28
294	〃	〃	〃	(14.2)・4.2・(6.5)	1/3	青灰色	高台低く、作りも粗雑・口縁部は小さく内湾	
295	〃	〃	〃	(14.7)・4.2・6.5	1/4	灰色	口縁部は小さく外反・高台粗雑、端部にスノコ痕	
296	〃	〃	〃	(14.6)・5.1・7.1	3/4	灰白色	体部下半がやや張る・低い三角高台で、作り粗雑	28
297	〃	〃	〃	(14.6)・4.5・(6.6)	1/3	青灰色	体部は緩やかに湾曲・高台の作り粗雑、端部にモミ痕	
298	〃	〃	〃	14.6・4.1・7.2	ほぼ完形	灰色	高台は低く、作りも粗雑、端部にモミ痕	28
299	〃	〃	〃	13.8・4.7・5.7	3/4	青灰色	高台は低く、作りも粗雑、端部にスノコ痕	〃
300	〃	〃	〃	(14.2)・4.8・7.0	1/3	灰白色	高台の作り粗雑・端部に疎らなモミ痕	
301	〃	〃	〃	(13.4)・3.7・(6.2)	1/3	暗灰色	体部上半から湾曲・低い三角高台・底部外面にナデ	
302	〃	〃	〃	13.4・3.2・7.4	1/8	灰色	無高台・体部は直線的に立ち上がる・口縁部は弱く内湾	
303	〃	〃	〃	・　・6.0	底部完形	〃	無高台・体部下半が張り出す	
304	〃	〃	〃	・　・7.4	底部完形	青灰色	三角高台、端部にスノコ痕・底部外面に墨書	29
305	〃	〃	〃	・　・7.4	底部2/3	〃	低い三角高台、端部に幅広のスノコ痕・底部外面に墨書	〃
306	〃	〃	〃	・　・8.0	底部3/4	灰色	三角高台、端部にスノコ痕・底部外面に墨書	〃
307	〃	〃	〃	15.8・5.2・7.8	4/5	灰白色	口縁部は外反・高台は方形・口縁部に灰釉漬掛け・湖西・渥美産	〃
308	〃	〃	〃	(16.5)・5.6・7.5	1/3	〃	口縁部は小さく外反・高台は方形状・湖西・渥美産	〃
309	〃	〃	〃	(16.8)・　・	口縁部1/4	〃	口縁部は外反・胎土緻密で、器肉も薄い	
310	〃	〃	〃	(16.2)・5.1・7.0	1/3	〃	口縁部は弱く外反・高台は低く、端部にモミ痕・湖西・渥美産	
311	〃	〃	〃	(15.2)・　・	口縁部1/6	〃	口縁部は弱く外反・湖西・渥美産	
312	〃	〃	〃	(15.0)・　・	口縁部1/6	〃	口縁部は弱く外傾・湖西・渥美産	
313	〃	〃	〃	(15.8)・　・	口縁部1/8	明灰色	口縁部は弱く外反・湖西・渥美産	
314	〃	〃	〃	(15.4)・4.9・8.3	2/5	灰白色	口縁部は緩やかに外反・高台低く、端部は丸い・器壁剥落	
315	〃	〃	〃	(14.0)・　・	口縁部1/4	〃	玉縁状口縁	
316	〃	〃	〃	14.6・5.0・5.9	2/3	〃	口縁部は小さく外反、外縁は丸くなる・高台は低く粗雑	29
317	〃	〃	〃	(14.0)・　・	口縁部1/6	〃	口縁部は弱く外反・外縁は丸くなる	
318	〃	〃	〃	・　・7.4	底部完形	〃	高台は高く、作りも丁寧・湖西・渥美産	
319	〃	〃	〃	・　・7.4	底部2/3	青灰色	高台は高く方形、端部にモミ痕・底部外面にナデ・湖西・渥美産	
320	〃	〃	〃	・　・8.2	底部ほぼ完形	灰白色	全体に厚みを持つ・高台は大きく、端部にモミ痕・湖西・渥美産	
321	〃	〃	〃	・　・8.0	底部3/4	明灰白色	高台は方形状・底部外側にナデ・内面に釉付着・湖西・渥美産	
322	〃	〃	〃	・　・6.6	底部ほぼ完形	灰白色	高台は方形状で一部外に張り出す・黒い吹き出し・湖西・渥美産	
323	〃	〃	〃	・　・7.7	底部完形	〃	高台の作り粗雑・湖西・渥美産	
324	〃	〃	〃	・　・6.8	底部2/3	〃	端部にスノコ痕？・湖西・渥美産	
325	〃	〃	〃	・　・7.4	底部完形	明灰色	高台は低く、作りも粗雑、接合面が広い・湖西・渥美産	
326	〃	〃	〃	・　・7.6	底部ほぼ完形	灰白色	高台低く、底部外縁に接合・湖西・渥美産	
327	〃	〃	〃	・　・7.2	底部完形	〃	高台低く、作りも粗雑、端部にモミ痕・湖西・渥美産	
328	〃	〃	〃	・　・6.8	底部完形	〃	高台の作り粗雑、端部に疎らなモミ痕・湖西・渥美産	
329	〃	〃	〃	・　・6.3	底部2/3	灰色	高台は低く、作りも粗雑・湖西・渥美産	
330	〃	〃	小　碗	(9.0)・3.3・4.6	1/2	明灰色	体部は張り出し、口縁部は外反	
331	〃	〃	〃	8.8・3.0・4.4	完形	灰色	高台径小さく、厚みを持つ	29
332	〃	〃	〃	8.8・2.6・4.8	完形	〃	口縁部はやや外反気味・端部にスノコ痕	〃
333	〃	〃	〃	(9.1)・3.1・4.8	2/5	青灰色	高台高く、作りも良い	
334	〃	〃	〃	9.0・3.0・4.6	2/3	明灰色	口縁部は直線的に開く・三角高台	29
335	〃	〃	〃	(10.7)・3.3・(5.6)	1/4	青灰色	口縁部は小さく内湾	
336	〃	〃	〃	8.9・2.9・4.3	ほぼ完形	灰白色	全体にやや厚みを持つ	29
337	〃	〃	〃	(9.0)・2.5・5.0	3/5	青灰色	高台径大・高台は低い	
338	〃	〃	〃	(9.0)・3.0・5.0	3/5	明灰色	体部は直線的に立ち上がる・高台径大	
339	〃	〃	〃	(8.5)・3.2・(5.2)	1/3	灰色	口縁部はやや外反気味	
340	〃	〃	〃	(8.6)・2.8・4.5	1/2	明灰色	口縁部は直線的に開く	29
341	〃	〃	〃	(8.4)・3.0・(4.9)	1/4	灰色	高台は高く、端部は鋭い	30

番号	出土位置	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	残存	色調	特徴等	図版
342	SX 05	山茶碗	小 碗	(9.0)・2.8・(5.5)	1/4	灰色	体部中央で屈曲	
343	〃	〃	〃	(8.9)・2.9・5.1	2/5	青灰色	体部中央で屈曲	
344	〃	〃	〃	9.4・2.5・4.8	3/5	〃	口縁部は弱く外反・身が浅い	30
345	〃	〃	〃	8.8・2.3・4.4	完形	〃	体部は屈曲・身が浅い・高台端部は鋭い	〃
346	〃	〃	〃	8.8・2.5・4.3	ほぼ完形	灰褐色		〃
347	〃	〃	〃	(8.4)・2.0・4.7	2/3	灰色	低い三角高台、高台径大	
348	〃	〃	〃	(8.8)・2.3・4.4	2/5	青灰色	体部は湾曲	
349	〃	〃	〃	(9.0)・2.2・(5.2)	1/3	明灰色	底部上半で屈曲・高台端部にスノコ痕	
350	〃	〃	〃	8.4・2.6・4.8	4/5	灰色		30
351	〃	〃	〃	8.5・2.7・4.8	3/4	青灰色	体部中央で弱く屈曲・内面に沈線	〃
352	〃	〃	〃	8.3・2.4・4.6	4/5	暗灰色	体部中央で弱く屈曲・高台径大	〃
353	〃	〃	〃	(8.2)・2.4・4.8	2/3	青灰色	高台端部にスノコ痕	〃
354	〃	〃	〃	(8.4)・2.3・4.6	1/3	〃	口縁部は小さく外反	
355	〃	〃	〃	(8.2)・2.8・(3.6)	1/2	淡灰褐色	体部は直線的に立ち上がる・低い三角高台	30
356	〃	〃	〃	8.2・2.6・4.3	ほぼ完形	灰色	口縁部は弱く外反・低い三角高台	〃
357	〃	〃	〃	8.0・2.5・(4.0)	3/5	〃		〃
358	〃	〃	〃	(8.0)・2.4・4.0	2/5	青灰色		
359	〃	〃	〃	(8.6)・2.5・4.0	2/5	暗灰色	口縁部は小さく内湾・内面に自然釉付着	
360	〃	〃	〃	(8.6)・2.5・(4.0)	1/3	青灰色		
361	〃	〃	〃	8.3・2.5・4.2	2/3	〃	体部上半で弱く内湾	30
362	〃	〃	〃	8.0・2.4・4.0	3/4	灰色	高台端部にスノコ痕	〃
363	〃	〃	〃	8.3・2.5・4.3	4/5	〃		〃
364	〃	〃	〃	(8.6)・2.4・3.9	1/3	灰褐色		〃
365	〃	〃	〃	8.4・2.2・4.3	2/3	青灰色	体部下半がやや張り出す	〃
366	〃	〃	〃	(7.8)・2.5・(4.0)	1/3	明灰色	口縁部は小さく内湾	
367	〃	〃	〃	8.5・2.3・4.3	ほぼ完形	〃	端部にスノコ痕	31
368	〃	〃	〃	(8.8)・2.3・(4.2)	1/5	灰色	口縁端部が尖る・高台端部にスノコ痕	
369	〃	〃	〃	8.4・2.3・(4.4)	1/2	灰褐色		31
370	〃	〃	〃	(8.4)・2.3・(4.2)	1/3	灰色	口縁部は内湾	
371	〃	〃	〃	(8.4)・2.1・(4.6)	1/3	青灰色	低い三角高台	
372	〃	〃	〃	(8.2)・2.2・(4.4)	1/3	明灰色	体部は直線的に立ち上がる	
373	〃	〃	〃	7.8・2.5・3.7	完形	青灰色	体部は湾曲・高台の作り粗雑・端部にスノコ痕	31
374	〃	〃	〃	8.4・2.9・3.6	2/3	灰色	口縁部は直立気味・高台径小	〃
375	〃	〃	〃	(8.0)・2.6・4.0	2/3	灰褐色	口縁部は直立、端部は尖る	
376	〃	〃	〃	(8.4)・2.6・(4.2)	1/3	灰色	口縁部は直立気味	
377	〃	〃	〃	8.2・2.8・3.4	完形	暗灰色	口縁部はやや外反気味・高台は小さく、作りも粗雑	31
378	〃	〃	〃	8.1・2.4・3.7	ほぼ完形	青灰色	体部は緩やかに湾曲・高台は小さく、作りも粗雑	〃
379	〃	〃	〃	7.9・2.5・3.9	完形	〃	高台径小	〃
380	〃	〃	〃	8.0・2.5・3.4	完形	灰色	高台は小さく、作りも粗雑	〃
381	〃	〃	〃	(8.6)・2.6・3.6	1/3	〃	高台径小	
382	〃	〃	〃	(8.4)・2.4・3.7	1/2	青灰色	高台径小	
383	〃	〃	〃	8.3・2.4・3.4	ほぼ完形	暗灰色	高台は小さく、作りも粗雑	31
384	〃	〃	〃	(8.0)・2.4・4.0	1/3	明灰色	高台は小さく、作りも粗雑・端部にスノコ痕	
385	〃	〃	〃	(7.6)・2.2・(4.6)	1/3	灰色	口縁部はやや外反気味・高台端部にスノコ痕	
386	〃	〃	〃	(7.8)・2.3・(3.7)	2/7	黒灰色	高台径小	
387	〃	〃	小 皿	8.8・2.4・5.0	完形	灰色	体部は直線的に立ち上がる・底径大	31
388	〃	〃	〃	8.5・2.4・3.6	ほぼ完形	明灰色	底部はやや突出	〃
389	〃	〃	〃	8.2・2.5・3.6	ほぼ完形	青灰色	体部はやや湾曲・底径小	〃
390	〃	〃	〃	8.6・2.4・3.8	3/5	灰色	底部はやや突出・底径小	〃
391	〃	〃	〃	(8.4)・2.2・(3.8)	1/3	青灰色	底部はやや突出	〃
392	〃	〃	〃	(8.6)・2.5・(4.4)	1/3	明灰色	体部は直線的に立ち上がる	
393	〃	〃	〃	8.3・2.2・4.5	3/5	青灰色	底部はやや突出・底径大	
394	〃	〃	〃	8.3・2.2・4.3	完形	暗灰色	底部はやや突出・体部中央で弱く屈曲	31
395	〃	〃	〃	(8.2)・2.5・4.2	3/5	青灰色	底部は突出	
396	〃	〃	〃	(8.4)・2.2・(4.6)	1/3	灰白色	口縁部は内湾・底径大	31
397	〃	〃	〃	(8.2)・2.2・4.4	2/3	青灰色	底部は突出・体部は直線的に立ち上がる	
398	〃	〃	〃	(8.2)・2.0・(4.6)	1/3	暗灰色	底径大	

番号	出土位置	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	残存	色調	特徴等	図版
399	SX-05	山茶碗	小皿	(8.2)・1.9・4.5	3/5	灰色	体部は直線的に立ち上がる・底径大	32
400	〃	〃	〃	8.1・2.7・4.5	2/3	青灰色	口縁部はやや外反気味・器高が高い	〃
401	〃	〃	〃	8.1・2.3・4.2	ほぼ完形	〃	体部は直線的に立ち上がる・高い吹き出し目立つ	〃
402	〃	〃	〃	8.0・2.2・4.2	3/4	灰色	口縁部は外反気味に肥厚	〃
403	〃	〃	〃	8.0・2.4・3.9	ほぼ完形	〃	口縁部はやや外反・底部は突出	〃
404	〃	〃	〃	(8.0)・2.5・(4.0)	1/4	暗灰色	口縁部はやや外反・体部中央で屈曲・底部は突出	
405	〃	〃	〃	(7.8)・2.3・(4.4)	1/3	〃	口縁部はやや外反気味	
406	〃	〃	〃	8.0・2.3・4.3	2/3	青灰色	体部上半で屈曲・底部は突出	32
407	〃	〃	〃	(8.0)・2.4・4.0	1/2	灰白色	体部は直線的に立ち上がる・口縁部は小さく内湾	
408	〃	〃	〃	(8.0)・2.3・4.2	2/3	青灰色	体部は緩やかに湾曲・底部はやや突出	
409	〃	〃	〃	8.0・2.5・3.9	2/3	〃	底部は強く突出	32
410	〃	〃	〃	8.0・2.2・4.0	1/2	灰色	体部は直線的に立ち上がる	〃
411	〃	〃	〃	8.0・2.1・4.2	2/3	〃	口縁部は直立気味・底部は突出	〃
412	〃	〃	〃	(8.0)・2.0・3.8	2/5	青灰色	口縁部はやや外反気味・底部は突出	
413	〃	〃	〃	8.0・2.0・4.2	2/5	〃	口縁部はやや外反気味	
414	〃	〃	〃	(8.0)・2.1・4.2	3/4	〃	体部は鈍曲・底部は強く突出	32
415	〃	〃	〃	(8.0)・2.2・4.2	1/3	灰色	体部は湾曲・底部は強く突出	
416	〃	〃	〃	(8.0)・2.0・4.4	2/5	〃	底部は突出・底径大	
417	〃	〃	〃	(8.0)・2.0・4.4	1/3	青灰色	底部は突出・口縁部は小さく内湾	
418	〃	〃	〃	(8.2)・2.0・4.6	2/5	灰色	底部は突出・高い吹き出し目立つ	
419	〃	〃	〃	8.0・1.8・4.5	2/3	〃	口縁部は弱く外反	32
420	〃	〃	〃	8.1・1.9・4.4	ほぼ完形	青灰色	口縁部はやや外反気味	〃
421	〃	〃	〃	8.0・1.8・4.2	完形	暗灰色	口縁部はやや外反気味・内面に自然釉付着	〃
422	〃	〃	〃	(8.0)・1.8・3.8	2/5	青灰色	口縁部はやや外反気味・高い吹き出し目立つ	
423	〃	〃	〃	(8.0)・1.7・4.9	2/5	灰褐色	口縁部はやや外反気味・底径大	
424	〃	〃	〃	(8.0)・1.6・(4.4)	1/3	灰色	体部は緩やかに湾曲	
425	〃	〃	〃	(8.1)・2.0・4.5	2/5	明灰色	体部は直線的に立ち上がる・底径大・内面に自然釉付着	
426	〃	〃	〃	(6.6)・1.8・5.0	1/2	明褐色	底径大	32
427	〃	〃	〃	7.8・2.1・3.7	2/3	青灰色	体部は直線的に立ち上がる	〃
428	〃	〃	〃	7.8・2.1・3.4	ほぼ完形	明灰色	底部は突出	〃
429	〃	〃	〃	7.8・1.9・3.7	3/5	灰色	口縁部は弱く外反	33
430	〃	〃	〃	7.7・1.9・4.2	3/6	青灰色	底部はやや突出	〃
431	〃	〃	〃	7.7・2.2・4.3	ほぼ完形	灰色	体部中央で弱く屈曲・口縁部はやや外反気味	〃
432	〃	〃	〃	7.7・1.9・4.1	4/5	青灰色	底部はやや突出	〃
433	〃	〃	〃	7.8・1.9・4.2	ほぼ完形	〃	底部はやや突出	〃
434	〃	〃	〃	(8.0)・2.0・4.3	2/5	〃	体部は直線的に立ち上がる・底部はやや突出	
435	〃	〃	〃	(7.8)・1.9・4.2	1/3	灰色	底部はやや突出	
436	〃	〃	〃	(7.6)・2.8・3.2	3/4	褐色	底部は強く突出・底径小	
437	〃	〃	〃	(7.8)・2.3・4.2	1/4	青灰色	底部はやや突出	
438	〃	〃	〃	(7.8)・2.1・4.0	1/2	〃	口縁部は内湾・底部は突出	
439	〃	〃	〃	(7.6)・2.0・4.0	1/5	灰白色	体部は湾曲・底部は突出	
440	〃	〃	〃	(7.6)・2.0・4.8	1/3	灰色	口縁部は小さく内湾・底径大	
441	〃	〃	〃	(7.6)・2.0・4.0	3/5	明灰色	底部は突出	
442	〃	〃	〃	(7.8)・1.6・(3.9)	2/5	青灰色	底部は突出・口縁部は内湾	
443	〃	〃	〃	(7.8)・1.6・(4.0)	2/5	灰色	体部は湾曲・底部は突出	
444	〃	〃	〃	(7.8)・1.9・4.0	1/2	明灰色	体部は湾曲・底部は突出	
445	〃	〃	〃	(7.8)・1.7・3.3	3/4	青灰色	体部は湾曲・底部は突出	
446	〃	〃	〃	(7.8)・2.3・4.8	1/4	灰色	体部は直線的にのち上がる・底径大	
447	〃	〃	〃	7.8・2.0・4.8	1/3	灰褐色	体部は短く、直線的に立ち上がる・底径大	
448	〃	〃	〃	(7.8)・1.9・5.2	1/3	青灰色	体部は短く、口縁部は弱く外傾・底径大、粗い糸切痕	
449	〃	〃	〃	7.8・1.9・4.7	3/4	〃	底径大	33
450	〃	〃	〃	7.8・1.7・4.2	2/5	暗灰色	底部はやや突出	〃
451	〃	〃	〃	(7.4)・2.2・3.5	2/5	青灰色	器高が高い・底部はやや突出	〃
452	〃	〃	〃	7.3・1.9・3.6	4/5	灰色	体部は直線的に立ち上がる	〃
453	〃	〃	〃	(7.4)・1.8・3.8	2/5	明灰色	口縁部は弱く外反・底部はやや突出	
454	〃	〃	〃	(7.4)・2.0・(4.4)	1/3	青灰色	体部は湾曲・底部はやや突出	
455	〃	〃	〃	7.4・1.9・3.8	完形	〃	体部は直線的にのち上がる・底部はやや突出	33

番号	出土位置	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	残存	色調	特徴等	図版
456	SX-05	山茶碗	小皿	(7.4)・2.0・3.7	1/2	青灰色	体部は緩やかに湾曲・底部は突出	
457	〃	〃	〃	(7.4)・2.1・4.6	1/3	〃	体部は緩やかに湾曲・底部は突出	
458	〃	〃	〃	(7.4)・1.8・4.0	3/5	〃	口縁部は内湾	33
459	〃	〃	〃	7.4・1.7・4.1	ほぼ完形	灰色	底部はやや突出	〃
460	〃	〃	〃	(7.4)・1.8・(3.8)	1/3	〃	口縁部は内湾・黒い吹き出し目立つ	
461	〃	〃	〃	7.4・2.0・4.1	3/4	青灰色	口縁部はやや外反気味・黒い吹き出し目立つ	33
462	〃	〃	〃	(7.5)・1.9・4.6	4/5	灰色	体部は直線的に立ち上がる・底径大	〃
463	〃	〃	〃	8.8・1.7・4.8	3/4	青灰色	体部下半が湾曲・口縁部は外反気味	〃
464	〃	〃	〃	8.7・1.9・4.7	完形	暗灰色	体部下半が張り出す・口縁部は弱く外反	〃
465	〃	〃	〃	8.6・1.9・4.6	ほぼ完形	灰色	体部下半が張り出す	34
466	〃	〃	〃	(8.4)・1.5・4.6	3/5	青灰色	体部は緩やかに湾曲・底部はやや突出	
467	〃	〃	〃	8.4・1.6・4.3	1/2	明灰色	口縁部は緩やかに外反・底部はやや突出	
468	〃	〃	〃	(8.4)・1.4・(4.2)	1/4	〃	体部は緩やかに湾曲・口縁部はやや外反気味	
469	〃	〃	〃	8.4・1.7・4.4	4/5	〃	体部は緩やかに湾曲・口縁部はやや外反気味	34
470	〃	〃	〃	8.4・1.8・4.9	2/3	青灰色	体部下半が湾曲	〃
471	〃	〃	〃	8.2・1.8・(4.9)	5/6	〃		〃
472	〃	〃	〃	8.2・1.6・(4.6)	1/3	〃	体部下半が湾曲・口縁部は小さく外反	〃
473	〃	〃	〃	(8.2)・1.8・(4.4)	1/6	〃	体部中央が張り出す・口縁部はやや外反	
474	〃	〃	〃	8.1・1.6・4.7	2/3	〃	体部下半が湾曲・口縁部はやや外反気味	34
475	〃	〃	〃	(8.0)・1.6・3.6	1/5	灰色	体部下半が湾曲	
476	〃	〃	〃	(7.8)・1.6・(3.6)	1/6	明灰色	体部下半が湾曲・口縁部はやや内湾	
477	〃	〃	〃	(8.0)・1.7・3.8	1/3	灰色	体部下半が湾曲・口縁部はやや外反	
478	〃	〃	〃	(7.8)・1.6・(4.0)	1/6	〃	体部下半が湾曲	
479	〃	〃	〃	(7.8)・1.6・(4.7)	1/5	青灰色	体部は緩やかに湾曲	
480	〃	〃	〃	7.5・2.3・3.7	2/3	灰白色	口縁部は小さく外反・底部はやや突出・湖西・渥美産	34
481	〃	〃	〃	(8.0)・2.3・(4.0)	2/5	灰色	口縁部は内湾・底部は突出・胎土緻密	
482	〃	〃	〃	7.8・2.0・4.1	完形	〃	口縁部は弱く外反・胎土緻密	34
483	〃	陶器	小鉢	(11.0)・　・	口縁部1/4	明灰色	口縁部は小さく外反・胎土緻密で器厚は薄い・湖西・渥美産	
484	〃	〃	長頸壺	・　・	体部1/5	青灰色	肩部に一条の突帯が巡り、把手が付く	
485	〃	〃	短頸壺	(9.2)・　・	口縁部1/3	黒灰色	折り返し口縁・外縁を外にやや引き出す	
486	〃	〃	広口壺	(18.1)・　・	口縁部1/8	灰色	口縁部は外折・内外面に釉付着	
487	〃	〃	短頸壺	10.8・24.9・8.4	1/2	暗灰色	折り返し口縁・口縁部から胴部下半に施釉（緑灰色）	34
488	〃	〃	〃	9.8・24.0・8.7	3/5	灰色	折り返し口縁・外縁を外に引き出す・外面に施釉	〃
489	〃	〃	〃	・　・10.4	底部完形	暗灰色		
490	〃	〃	広口壺	(15.8)・　・	口縁部1/3	灰色	口縁部は緩やかに外反	
491	〃	〃	壺	・　・	肩部1/3	〃	外面に釉付着・常滑産	
492	〃	〃	〃	・　・(9.8)	底部1/4	明灰色		
493	〃	〃	〃	・　・(10.2)	底部1/6	灰色	胴部下端にタテ方向のヘラ削り・湖西・渥美産	
494	〃	〃	小型壺	・　・(10.6)	底部1/6	〃	胴部と胴部下端に回転ヘラ削り・湖西・渥美産	
495	〃	〃	甕	(38.4)・67.7・(14.0)	1/2	暗青灰色	口縁部は強く外反・胴部はタタキ後強いナデ・湖西・渥美産	
496	〃	〃	〃	(38.6)・　・	口縁部1/6	黒灰色	口縁部は強く外反・口縁部内面と肩部に釉付着・湖西・渥美産	
497	〃	〃	〃	(35.0)・　・	口縁部1/10	〃	口縁部は緩やかに外反・湖西・渥美産	
498	〃	〃	〃	・　・(18.4)	底部1/10	暗赤褐色	焼きひずみ大・湖西・渥美産	
499	〃	〃	〃	・　・(12.2)	底部1/10	灰白色	胴部下端に回転ヘラ削り・内外面に釉付着・湖西・渥美産	
500	〃	〃	〃	・　・	肩部1/4	灰色	肩部に押印文・外面に釉付着（緑灰色）・湖西・渥美産	34
501	〃	〃	〃	・　・	口縁部小破片	〃	縁帯はN字状・外面に釉付着・常滑産	
502	〃	〃	〃	・　・(14.4)	底部1/5	明灰色	内外面に厚く釉付着・常滑産	
503	〃	〃	〃	・　・(15.4)	底部1/5	暗赤褐色	胴部下端にタテ方向のヘラ削り後ナデ・常滑産	
504	〃	〃	〃	・　・(18.2)	底部1/6	〃	内面に釉付着・常滑産	
505	〃	〃	片口鉢	(31.2)・　・	口縁部1/8	緑灰色	口縁部は弱く内湾	
506	〃	〃	〃	・　・	底部1/5	赤褐色	高台の作り粗雑、端部にモミ痕・体部下端に回転ヘラ削り	
507	〃	〃	〃	35.4・12.6・(17.6)	1/2	灰白色	片口・体部は直線的に立ち上がり、下半に回転ヘラ削り	34
508	〃	〃	〃	(33.2)・　・	口縁部小破片	灰色	口縁部は小さく外反	
509	〃	〃	〃	・　・(15.4)	底部1/4	青灰色	高い四角高台、端部にモミ痕	
510	〃	〃	〃	・　・	底部小破片	暗灰色		
511	〃	〃	〃	(30.2)・　・	口縁部1/10	灰白色	口縁部はやや外反気味、端部は沈線状に凹む	
512	〃	〃	〃	・　・	口縁部小破片	〃	口縁部は肥厚し、端部は丸くなる・体部下半に回転ヘラ削り	

番号	出土位置	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	残存	色調	特徴等	図版
513	SX-05	陶器	片口鉢	27.8・　・	1/6	淡灰白色	ノタ目顕著・体部下端に回転ヘラ削り・内面に釉付着	
514	〃	〃	〃	・　・(11.4)	底部1/5	灰白色	低い四角高台・底部と体部下半に回転ヘラ削り・湖西・渥美窯	
515	〃	〃	〃	・　・(15.4)	底部1/3	灰色	四角高台・体部下半に回転ヘラ削り・湖西・渥美窯	
516	〃	〃	〃	・　・(13.3)	底部1/8	灰白色	高台は薄手で、直立・底部と体部に回転ヘラ削り・湖西・渥美窯	
517	〃	〃	〃	・　・(12.2)	底部1/3	灰色	体部下端に回転ヘラ削り・高台部に研磨・湖西・渥美窯	
518	〃	白磁	碗	(16.8)・　・	口縁部1/8	灰白色	玉縁口縁	
519	〃	〃	〃	(17.1)・　・	口縁部1/10	〃	器厚は薄い・口縁部は小さく外傾	
520	〃	〃	〃	(15.3)・　・	口縁部小破片	〃	口縁部は小さく外傾・体部上半内面に圏線	
521	〃	〃	〃	(15.6)・　・	口縁部1/12	〃	口縁部は小さく外反・体部上半内面に浅い沈線	
522	〃	〃	〃	(17.0)・　・	口縁部小破片	灰色	口縁部は弱く内傾	
523	〃	〃	小皿	8.6・2.0・(5.4)	1/3	淡緑灰色	上げ底・底部外面は露胎	
524	〃	〃	〃	・　・2.9	底部2/3	灰白色	体部下半と底部外面は露胎	
525	〃	青磁	碗	・　・(9.4)	底部小破片	緑灰色	龍泉窯系	
526	〃	土師器	〃	(12.8)・4.8・(5.4)	1/4	淡茶褐色	底部は突出、外面に糸切り痕	
527	〃	〃	〃	・　・6.4	底部完形	淡赤褐色	底部は回転糸切り	
528	〃	〃	〃	・　・7.0	底部1/2	淡茶褐色		
529	〃	〃	〃	・　・5.0	底部完形	淡赤褐色		
530	〃	〃	皿	(14.7)・　・(8.0)	1/5	淡灰褐色	口縁部は弱く外反・底部は張り出す・小豆色砂粒混入	
531	〃	〃	〃	(13.4)・　・(7.2)	1/6	〃	530と同一	
532	〃	〃	〃	・　・7.5	底部完形	赤褐色	底部は突出	
533	〃	〃	〃	・　・7.8	底部1/2	〃	小豆色砂粒混入	
534	〃	〃	〃	・　・8.4	底部1/2	淡赤褐色		
535	〃	〃	〃	8.8・1.7・7.4	3/4	淡褐色	底部がやや張り出す・小豆色砂粒混入	34
536	〃	〃	台付皿	(9.7)・　・	口縁部1/3	〃	口縁部は弱く外反・小豆色砂粒多く混入	
537	〃	〃	鍋	(20.4)・　・	口縁部1/3	〃	口縁部は内面に折り返し・砂粒多く混入	
538	A-18	縄文	深鉢	・　・		暗赤褐色	弧状の隆帯・地文に刺突文・胎土は砂質強	
539	F-2	〃	〃	・　・		〃	頸部に貼付文	
540	C-9	〃	〃	・　・		暗褐色	竹管状の粗い条痕・砂粒多く混入	
541	C-18	〃	〃	・　・		暗赤褐色	口縁部はやや外反・外面に羽状条痕・胎土は砂質強	
542	G-13	〃	〃	・　・		暗褐色	口縁部はやや肥厚・内面に指頭痕・外面に条痕	
543	SP-77	〃	〃	・　・		明褐色	外面に条痕・黒斑あり	
544	SP-253	〃	〃	・　・		明赤褐色	櫛状の粗い条痕・ミミ殻状の圧痕あり	
545	SP-307	〃	〃	・　・		〃	櫛状の粗い条痕・長石粒多く混入	

番号	出土位置	種別	器種	法量(cm) 最長・最幅・最厚	残存	色調	特徴等	図版
546	SP-462	金属器	鑿?	10.4・2.4・0.3	先端部欠損		鉄製・一端は折り返し	37
547	SX-04	〃	銅銭	2.4・　・	完形		天禧通宝(初鋳1017年)	
548	D-11	〃	〃	2.4・　・	ほぼ完形		天聖元宝(初鋳1023年)	
549	SF-07	〃	〃	2.4・　・	ほぼ完形		元祐通宝?(初鋳1086年)	
550	B-14	〃	〃	2.4・　・	完形		永楽通宝(初鋳1408年)	
551	〃	〃	〃	2.3・　・	完形		治平元宝(初鋳1064年)・隷書体	
552	〃	〃	〃	2.4・　・	ほぼ完形		元祐通宝?(初鋳1086年)・篆書体	
553	SX-05	〃	〃	2.4・　・	完形		熙寧元宝(初鋳1068年)	
554	〃	〃	〃	2.4・　・	完形		熙寧元宝(初鋳1068年)	
555	D-5	石製品	石鏃	1.8・1.6・0.3	片脚先端欠損	黒色	抉入・石材はチャート	35
556	C-6	〃	削器	2.6・2.4・0.8	完形	黒灰色	縁辺部に使用痕あり・石材は頁岩・重量5.1g	〃
557	D-5	〃	打斧	10.4・5.0・2.2	完形	黒色	短冊形・刃部に磨きあり・石材は粘板岩	〃
558	G-3	〃	砥石	6.7・3.3・1.2	片側欠損	淡黄褐色	板状砥石・石材は凝灰岩・SP-446	〃
559	C-7	〃	敲石	4.4・5.2・5.6	基部欠損	灰褐色	側縁を中心に敲打痕あり・石材は砂岩・重量224.6g	〃
560	SF-04	〃	砥石	14.1・11.4・4.0	完形?	淡灰褐色	砥面は表面のみで凹面をなす・石材は凝灰岩	〃
561	〃	〃	〃	19.7・9.8・8.1	完形	灰色	不定形・両側面を利用・石材は砂岩	
562	〃	〃	磨斧	14.0・3.5・29.0	片側欠損	暗灰褐色	両刃型・石材は砂岩・重量237g	35
563	SX-04	〃	砥石	7.4・3.0・0.9	両端欠損	淡灰色	板状砥石・焼けている・石材は凝灰岩	〃
564	D-11	〃	石鏃	3.0・1.0・0.5	完形	黒色	柳葉形・石材は頁岩	〃
565	C-11	〃	敲石?	5.5・3.4・2.9	両端欠損	暗灰色	石材は砂岩	36
566	E-10	〃	打斧	7.8・6.0・1.8	基部欠損	灰色	短冊形・刃部摩滅・石材は砂岩	35
567	B-14	〃	〃	9.1・4.3・1.6	完形	暗灰色	短冊形・石材は砂岩・重量88.5g	36

番号	出土位置	種別	器種	法量(cm) 最長・最幅・最厚	残存	色調	特徴等	図版
568	SF-02	石製品	石臼	(27.6)・　・7.8	1/2	灰褐色	焼けている・石材は砂岩	37
569	SF-03	〃	五輪塔	35.9・9.5・9.8	完形	灰色	三面を加工・石材は砂岩	〃
570	SX-05	〃	砥石	7.3・3.6・1.0	両端欠損	黄褐色	板状砥石・石材は砂岩	36
571	〃	〃	砥石?	4.6・4.2・1.8	片側欠損	灰色	穿孔あり・石材は滑石片岩で珍しい	〃
572	〃	〃	敲石	6.8・4.8・4.3	完形	淡緑灰色	両端に敲打痕あり・側面は研磨・重量214.4g	〃
573	〃	〃	磨石斧	4.0・2.3・0.9	完形	暗灰色	全面を研磨・石材は粘板岩	〃
574	〃	〃	賽子	1.6・　・	完形	白色	目に赤色顔料を塗布・石材は石英	37
575	〃	〃	打斧	10.0・3.8・1.3	完形	淡緑灰色	全体に摩滅・石材は片岩質	36
576	〃	〃	〃	10.2・5.2・1.5	両端欠損	暗灰色	一方は自然面・石材は粘板岩	〃
577	〃	〃	〃	14.9・7.4・2.2	完形	〃	刃部は摩滅・石材は砂岩	〃
578	SP-55	木製品	柱根	32.7・16.4・13.7			樹種はクスノキ・SH-06	37
579	SP-72	〃	礎板	39.2・21.8・10.2			両先端に加工痕あり・樹種はクリ・SH-06	〃
580	SP-101	〃	〃	11.6・13.6・4.2			一端に加工痕あり・樹種はクリ・SH-06	
581	SP-256	〃	〃	18.6・13.3・5.4			両端に加工痕あり・樹種はシイ・SH-06	38
582	SP-81	〃	柱根	33.9・18.8・14.6			底部に加工痕あり・樹種はシイ・SH-06	〃
583	SP-59	〃	〃	15.8・10.8・4.7			底部に加工痕あり・樹種はシイ・SH-08	
584	SP-61	〃	〃	36.1・19.8・17.2			底部に加工痕あり・樹種はマツ・SH-09	38
585	SP-69	〃	〃	67.1・23.9・20.9			底部に加工痕あり・樹種はクリ・SH-09	〃
586	SP-75	〃	〃	34.3・9.8・9.2			樹種はクスノキ・SH-09	
587	SP-250	〃	〃	59.6・21.8・17.1			樹種はシイ・SH-09	38
588	SP-251	〃	〃	67.0・22.4・15.7			底部に加工痕あり・樹種はクリ・SH-09	39
589	SP-100	〃	礎板	31.2・11.2・7.0			底部に加工痕あり・樹種はクリ・SH-10	38
590	SP-258	〃	〃	26.7・16.4・8.8			樹種はクリ・SH-11	39
591	SP-472	〃	柱根	13.7・12.9・8.8			樹種はイヌマキ・SH-13	
592	SP-139	〃	〃	31.9・18.0・16.4			底部に加工痕あり・樹種はマツ・H群	39
593	SP-436	〃	〃	38.7・16.0・13.6			樹種はクリ・C群	〃
594	SP-283	〃	〃	18.5・9.8・7.8			樹種はクリ・F群	〃
595	SP-293	〃	〃	36.8・10.3・9.5			底部に加工痕あり・樹種はクリ・F群	〃

表3　頭地遺跡遺物観察表

番号	出土位置	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	残存	色調	特徴等	図版
596	SX-01	須恵器	坏蓋	・　・	天井部1/8	暗灰色	やや高い宝珠状のつまみ	
597	SX-02	〃	〃	15.0・3.5・	2/3	明灰色	天井部は丸味あり・受部は三角状	40
598	SX-01・02	〃	〃	15.4・3.7・	2/3	暗灰色	口縁部付近は外反・受部は三角状・内面ノタ目顕著	〃
599	SX-02	〃	〃	(14.8)・　・	1/3	明灰色	つまみ欠損・口縁部付近は弱く外反・受部は三角状	
600	SX-01・02	〃	〃	(16.9)・　・	口縁部1/4	灰色	口縁部付近は外反・受部は三角状	
601	SX-02	〃	〃	(15.9)・4.0・	1/3	〃	口縁部付近は外反・受部は下方に引き出す・内面ノタ目顕著	40
602	〃	〃	〃	(16.4)・4.2・	1/4	暗灰色	天井部は丸味あり・受部はやや内傾気味に引き出す	〃
603	SX-01・02	〃	〃	(15.7)・　・	1/3	明灰色	天井部はやや丸味あり・受部は下方につまみ出す	
604	H-32	〃	〃	(22.7)・　・	口縁部1/4	灰色	天井部は直線的に開く・受部は下方につまみ出す	
605	SX-01	〃	〃	(14.6)・　・	1/3	青灰色	天井部はやや丸味あり・受部は外反気味に引き出す	
606	〃	〃	〃	(15.6)・　・	口縁部1/6	暗灰褐色	天井部は丸味あり・口縁部は強く外反・受部は外傾	
607	SX-02	〃	〃	15.3・4.3・	1/2	灰色	天井部はやや丸味あり・口縁部付近外反・受部は小さく外反	40
608	SX-01	〃	〃	(14.5)・　・	口縁部1/3	明灰色	口縁部付近は外反・受部は小さく外反	
609	〃	〃	〃	(15.2)・　・	口縁部1/8	青灰色	器高低く扁平・受部は小さく外反	
610	〃	〃	〃	(17.8)・　・	口縁部1/4	灰色	口縁部付近は外反・受部は外反	
611	SX-02	〃	〃	(17.8)・　・	口縁部1/8	明灰色	口縁部付近は外反・受部は強く外反	
612	SX-01・02	〃	〃	(15.0)・3.0・	1/2	灰色	天井部は扁平・受部は内傾し、小さくつまみ出す	40
613	〃	〃	〃	14.6・　・	1/3	〃	天井部は扁平・受部は短く内傾・外面ノタ目顕著	
614	SX-01	〃	〃	(17.4)・　・	口縁部1/8	明灰色	口縁部付近は直線的に開く・受部は短く内傾	
615	H-32	〃	〃	(18.6)・　・	口縁部1/8	灰色	口縁部付近は外反・受部は強く内傾	
616	SX-02	〃	有台坏身	13.6・4.4・9.8	4/5	暗灰色	体部は椀状・底部やや突出・底部外面にヘラ記号	40
617	SX-01	〃	〃	14.1・4.7・10.2	3/4	灰色	体部は椀状・底部突出・口縁部は小さく外反・高台は台形状	〃
618	SX-02	〃	〃	15.0・4.7・9.9	1/2	暗青灰色	体部は椀状・底部突出・内面に沈線状のノタ目	
619	SX-01	〃	〃	(14.2)・4.0・10.0	1/2	灰色	体部下半が張る・口縁部は直線的に開く・底部はやや突出	40
620	〃	〃	〃	(15.6)・4.2・11.5	1/2	暗灰色	体部下半が張る・底部は突出・高台は方形状	〃
621	SX-02	〃	〃	・　・9.3	底部完形	明灰色	体部下半が張る・底部は突出・高台は三角状で、端部は丸い	

番号	出土位置	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	残存	色調	特徴等	図版
622	SX-02	須恵器	有台坏身	(14.4)・4.4・(9.8)	1/1	暗青灰色	体部下半が張る・口縁部は緩やかに外反・高台は薄い方形状	
623	SX-01・02	〃	〃	(14.4)・4.4・(9.4)	1/6	青灰色	体部下半が張る・口縁部は弱く外反・高台は薄い方形状	
624	SX-01	〃	〃	15.3・4.2・10.7	ほぼ完形	黒灰色	体部下半が屈曲・口縁部は小さく外反・高台は台形状	40
625	〃	〃	〃	14.7・ ・	1/8	灰色	体部下半が屈曲・口縁部はやや外反・高台は方形状	
626	SX-02	〃	〃	14.2・4.4・9.6	ほぼ完形	明灰色	口縁部は内湾気味・外面沈線状ノタ目・底部外面にヘラ記号	40
627	〃	〃	〃	14.4・3.9・10.3	3/4	灰白色	体部は直線的に開く・高台は台形状で、端部は丸い	41
628	〃	〃	〃	14.8・4.0・9.6	3/4	暗灰色	体部は弱く湾曲・口縁部は弱く外反・底部はやや張り出す	〃
629	SX-01	〃	〃	(13.8)・3.8・(9.6)	1/8	青灰色	体部は直線的に開く・内外面に沈線状のノタ目顕著	
630	SX-02	〃	〃	14.7・3.7・11.1	4/5	灰色	体部は直線的に開く・口縁部は弱く内湾・ノタ目顕著	41
631	〃	〃	〃	13.7・3.5・(10.0)	3/4	明灰色	体部下半が折れる・高台は薄い方形状・沈線状のノタ目	〃
632	〃	〃	〃	14.0・3.7・11.2	1/2	灰白色	体部下半が屈曲・口縁部は小さく外反・高台は方形	〃
633	SX-01	〃	〃	14.2・4.1・10.9	4/5	〃	体部下半が折れる・体部は直線的に立ち上がる	〃
634	SX-01・02	〃	〃	(13.8)・3.7・(11.1)	1/8	灰色	体部下半が強く折れる・高台は薄い方形状	
635	SX-02	〃	〃	(15.4)・3.8・(11.4)	1/4	〃	体部下半が強く折れる・高台はやや内側に接合	
636	SX-01	〃	〃	・ ・9.1	1/3	青灰色	体部下半が強く折れる・底部がやや張り出す	
637	〃	〃	〃	(12.8)・4.0・9.2	1/3	灰色	体部下半が湾曲・高台は方形状で、外縁に接合	
638	H-32	〃	〃	(13.8)・4.0・8.3	1/2	灰白色	体部下半が屈曲・口縁部は緩やかに外反・高台は内側に接合	
639	SX-01・02	〃	〃	13.6・4.4・8.1	4/5	明灰色	体部は碗状・高台は方形状で、端部は丸い	41
640	SX-01	〃	〃	(18.6)・ ・	口縁部1/5	灰色	大形・体部は直線的に立ち上がる・口縁部は小さく外反	
641	SX-02	〃	無台坏身	14.6・5.1・	1/2	青灰色	半円状・口縁部はやや内湾・底部回転ヘラ削り	41
642	〃	〃	〃	13.3・4.8・	2/3	明灰色	半円状・底部ヘラ削り未調整？、板状の圧痕	
643	SX-01・02	〃	〃	(14.0)・ ・	1/4	灰白色	体部下半がやや張る・口縁部は内湾気味	
644	SX-02	〃	〃	(14.2)・ ・	1/4	〃	体部下半がやや張る・口縁部は外反	
645	SX-01	〃	〃	14.3・4.8・	完形	灰色	半円状・口縁部は弱く外反・ノタ目顕著	
646	SX-02	〃	〃	(14.6)・5.0・	1/4	〃	半円状・口縁部は小さく外反・底部回転ヘラ削り	
647	〃	〃	〃	14.4・4.2・	3/4	〃	底部はやや平坦となる・底部回転ヘラ削り？、板状の圧痕	
648	SX-01	〃	〃	(12.8)・ ・	口縁部1/4	〃	口縁部は内湾気味に外傾	
649	SX-02	〃	〃	(14.3)・4.1・	1/2	〃	底部はやや平坦・体部は外反気味に立ち上がる・焼成不良	
650	〃	〃	〃	14.4・4.9・	1/2	青灰色	底部はやや平坦・体部は外反気味に立ち上がる	41
651	〃	〃	〃	(14.0)・ ・	1/3	灰白色	体部下半が屈曲・口縁部は外反気味・内外に沈線状のノタ目	42
652	〃	〃	〃	(14.8)・4.0・	1/4	〃	底部は平坦・体部は直線的に開き、口縁部は外反	
653	〃	〃	〃	13.7・4.7・	1/2	〃	底部はやや平坦・口縁部は小さく外反・底部未調整？	42
654	〃	〃	〃	13.9・4.8・	完形	青灰色	底部は丸味あり・口縁部は外反・底部ヘラ切り未調整	〃
655	〃	〃	〃	14.4・4.4・	ほぼ完形	〃	底部やや平坦・口縁部は小さく外反・底部ヘラ切り未調整	〃
656	〃	〃	〃	15.0・4.7・	ほぼ完形	灰白色	底部は平坦・体部は直線的に開く・ノタ目顕著	〃
657	SX-01・02	〃	〃	(13.8)・ ・	口縁部1/3	暗灰色	口縁部は弱く内湾、端部はやや外傾	
658	SX-02	〃	〃	(14.6)・ ・	口縁部1/4	灰色	口縁部は肥厚して、弱く外反	
659	〃	〃	〃	(12.8)・4.1・7.6	1/2	暗灰色	体部は内湾気味に立ち上がる・底部回転ヘラ削り	42
660	SX-01・02	〃	〃	(13.8)・4.7・(9.3)	1/4	灰褐色	体部は屈曲・口縁部は弱く外反・底部はやや突出	
661	〃	〃	〃	(14.0)・4.3・(10.3)	1/5	青灰色	体部は緩やかに湾曲して立ち上がる	
662	〃	〃	〃	(13.4)・3.6・(6.4)	1/4	〃	体部は内湾気味に立ち上がる・底部はやや突出・底部未調整	
663	SX-01	〃	〃	(13.6)・ ・	口縁部1/5	〃	体部は緩やかに湾曲・底部はやや突出	
664	〃	〃	〃	(13.6)・3.4・(9.6)	1/8	〃	体部は緩やかに外反・底部外面に面取り	
665	H-32	〃	〃	(14.4)・ ・	1/5	〃	口縁部は弱く外反・底部外縁に面取り	
666	〃	〃	〃	・ ・10.9	底部1/2	〃	底部外縁に幅広の面取り	
667	SX-01	〃	〃	(13.8)・3.3・(11.2)	1/5	〃	底部外縁で屈曲・体部は内湾気味に立ち上がる	
668	SX-02	〃	〃	(13.3)・3.0・(9.7)	1/4	〃	体部は外反気味に立ち上がる・口縁部は弱く外反	
669	〃	〃	〃	(13.0)・3.6・10.6	3/4	明灰色	体部は内湾気味に立ち上がる・口縁部内面は外傾	42
670	〃	〃	〃	13.1・4.2・10.6	4/5	灰白色	体部は直線的に立ち上がる・口縁部は小さく外傾	〃
671	SX-01	〃	〃	・ ・(8.8)	底部1/5	〃	体部は底部から強く屈曲	
672	SX-02	〃	鉢	18.2・7.0・	1/2	灰色	半円状・口縁部は小さく外反・底部回転ヘラ削り	42
673	〃	〃	〃	(19.6)・ ・	口縁部1/4	灰白色	体部下半が湾曲・口縁部は緩やかに外反	
674	H-32	〃	皿	(18.1)・2.3・(15.8)	1/3	灰色	体部は緩やかに湾曲・口縁部は弱く外反	42
675	SX-01	〃	〃	(23.4)・3.4・(21.0)	1/8	青灰色	口縁部は弱く外傾し、端部は弱い段をなす	
676	〃	〃	短頸壺	(7.4)・ ・	口縁部1/3	〃	口縁部は外反気味に立ち上がる・胴部下半は回転ヘラ削り	
677	〃	〃	〃	(11.4)・ ・	口縁部1/8	灰色	口縁部は直立し、端部は外傾面をなす・外面に自然釉付着	
678	SX-02	〃	〃	10.2・ ・	口縁部2/3	〃	口縁部は弱く外反・肩部は丸くなる	
679	SX-01	〃	〃	(11.6)・ ・	口縁部1/7	暗灰色	口縁部は外反・肩部はやや張る・肩部に自然釉付着	

番号	出土位置	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	残存	色調	特徴等	図版
680	SX-02	須恵器	短頸壺	(11.2)・16.3・(5.4)	1/3	灰色	口縁部は短く外反し、端部は方形状・胴部下半回転ヘラ削り	
681	〃	〃	〃	(13.0)・　・	口縁部1/4	明灰色	口縁部は緩やかに外反し、端部は回面をなす	
682	〃	〃	〃	11.6・　・	口縁部3/4	〃	口縁端部を三角状に引き出す・肩部はやや張る	
683	〃	〃	〃	10.2・　・	口縁部3/4	灰色	口縁部は外反・端部は三角状・肩部に浅い沈線	
684	〃	〃	〃	(13.2)・16.0・(7.2)	1/3	〃	肩部はヘラ削り後ヨコナデ・胴部下半は回転ヘラ削り	42
685	〃	〃	〃	(11.6)・　・	1/4	〃	肩部はヘラ削り後ヨコナデ・ノタ目顕著	
686	SX-01	〃	〃	(9.4)・　・	口縁部1/4	青灰色	口縁部外縁を下方に引き出し、端部は上方につまむ	
687	〃	〃	長頸壺	(9.7)・　・	口縁部1/4	灰色	口縁部は内面に段を作り、端部は外に引き出す	
688	SX-02	〃	〃	12.4・　・	口縁部1/2	灰白色	口縁部はラッパ状に外反、端部は外に引き出して面を作る	
689	SX-01・02	〃	〃	・　・7.0	胴部1/2	明灰色	胴部は球状・胴部下半に回転ヘラ削り	
690	SX-02	〃	〃	・　・(15.4)	底部1/4	淡灰色	高台端部は三角状・肩部まで回転ヘラ削り	
691	SX-01・02	〃	〃	・　・18.2	胴部3/4	明灰色	胴部は台形状・胴部下半と肩部に回転ヘラ削り	
692	〃	〃	〃	・　・15.4	胴部1/2	灰色	胴部は台形状・胴部下半と肩稜部に回転ヘラ削り	43
693	〃	〃	〃	20.8・　・	1/2	〃	太頸・口縁部は強く外反	
694	SX-02	〃	四耳壺	10.4・　・	1/4	暗灰色	肩部に2条の沈線・胴部下半に回転ヘラ削り	43
695	SX-01・02	〃	〃	9.8・　・	1/2	灰色	口縁部は外傾気味に直立・口縁部下に太い沈線	〃
696	SX-01	〃	壺	(14.0)・　・	1/3	〃	口縁部内面は弱く内湾・頸部に低い三角の凸帯	
697	〃	〃	〃	10.4・　・	口縁部2/3	明灰色	口縁部は三角状・口縁下に三角の凸帯・内外面に自然釉	
698	〃	〃	〃	(16.5)・　・	口縁部1/8	〃	口縁部は強く外反・器壁は薄い	
699	〃	〃	〃	・　・7.2	底部2/3	淡灰色	底部は丸味あり・外面回転ヘラ削り	
700	SX-01・02	〃	〃	・　・(11.2)	底部1/3	灰色	胴部下端に平行タタキを残す	
701	〃	〃	平瓶	11.0・　・	底部欠損	〃	口縁部はやや三角状	43
702	SX-02	〃	横瓶	11.6・27.3・	2/3	〃	口縁部は小さく外反・胴部内外面はタタキ後ヨコナデ	〃
703	SX-01・02	〃	〃	(11.6)・27.1・	3/4	明灰色	胴部外面に平行タタキ・外面左横と内面はヨコナデ	
704	〃	〃	〃	11.4・　・	1/2	淡灰色	胴部にタタキ後ヨコナデで一部タタキを残す	
705	〃	〃	〃	(12.5)・　・	1/4	青灰色	口縁部は三角状で外縁を引き出す・胴上部に円形付文	
706	SX-02	〃	甕	(17.8)・　・	口頸部1/4	灰色	口縁部は三角状・焼成不良	
707	SX-01	〃	〃	(18.8)・　・	口頸部1/8	〃	口縁部は小さく外反・断面は三角状	
708	SX-02	〃	〃	20.7・　・	口頸部3/4	〃	口縁部は三角状、外縁端部は丸くなる	
709	〃	〃	〃	(19.6)・　・	口頸部1/3	〃	口縁部は三角状、端部は丸くなる・胴部はタタキ後ナデ	
710	SX-01	〃	〃	(16.3)・　・	口頸部1/4	〃	口縁部は外縁を強く引き出し、端部は鋭い・薄手	
711	SX-02	〃	〃	(19.2)・　・	口頸部1/6	灰白色	口縁部は外縁を強く引き出す	
712	SX-01・02	〃	〃	(19.4)・　・	口頸部1/6	明灰色	口縁部外縁を強く引き出す・肩部は平行タタキ、内面はナデ	
713	SX-02	〃	〃	21.4・　・	口頸部1/2	青灰色	頸部上部に三角状の凸帯・胴部はタタキ後ナデ消し	
714	〃	〃	〃	20.0・　・	口頸部1/2	灰色	口縁部下に凸帯・肩部外面にタタキ痕が残る	43
715	〃	〃	〃	(18.2)・　・	口頸部1/4	青灰色	口縁端部を上下に引き出す	
716	SX-01	〃	〃	(23.8)・　・	口頸部1/5	灰色	口縁上端部を上に引き出す	
717	SX-02	〃	〃	20.5・　・	口頸部1/2	青灰色	口縁上端部を外反気味に引き出す	
718	〃	〃	〃	(21.9)・　・	口頸部1/5	〃	口縁上端部を外反気味に引き出す	
719	〃	〃	〃	(22.0)・　・	口頸部1/4	暗灰色	口縁上端部を内湾気味に引き出す・外面は沈線状	
720	SX-01・02	〃	〃	23.8・　・	口頸部1/2	〃	口縁上端部をつまみ上げる	
721	SX-02	〃	〃	22.5・　・	胴部下半欠損	〃	口縁上端部をつまみ上げる・胴部内面はタタキ後ナデ消し	
722	SX-01・02	〃	〃	21.8・　・	胴部下半欠損	〃	口縁上端部を内湾気味に引き出す	43
723	SX-01	灰釉	碗	(15.7)・　・	口縁部1/4	灰色	口縁部は小さく外反	
724	SF-01	〃	皿	15.0・3.1・(6.6)	1/4	灰白色	高台は三日月形・ハケ塗り施釉・体部下半に回転ヘラ削り痕	
725	SX-02	〃	碗	・　・(7.8)	底部1/4	〃	高台は低い瓜形状・体部下半に回転ヘラ削り痕	
726	SX-01	〃	〃	・　・(6.8)	底部1/2	〃	高台は三日月状・底部に回転糸切り痕	
727	SF-01	〃	皿	・　・(7.4)	底部1/3	灰褐色	高台は低い三日月状	
728	SX-02	土師器	碗	(13.6)・　・	口縁部1/6	赤褐色	口縁部は弱く外反・小豆色砂粒混入	
729	SX-01	〃	〃	(13.0)・　・	口縁部1/6	淡赤褐色	口縁部は内湾気味・指頭痕目立つ	
730	SX-02	〃	坏	(15.2)・　・	口縁部1/7	赤褐色	口縁部は弱く外反・体部下半は湾曲	
731	〃	〃	高坏	15.2・6.6・9.3	1/2	淡灰褐色	口縁部は弱く内湾・脚部は外反して開く	43
732	〃	〃	甕	(19.8)・　・	口頸部1/3	赤橙色	頸部からコの字状に外反・口縁端部は内湾・赤彩	
733	G-30	〃	〃	24.3・　・	口頸部1/4	淡赤褐色	口縁部は大きく外反、端部は内湾	
734	SX-03	灰釉	碗	(14.6)・　・	口縁部1/5	灰色	口縁部は小さく外反	
735	〃	山茶碗	小碗	(8.2)・2.8・(3.8)	1/3	〃	口縁部は内湾・高台の接合剥離	
736	H-33	〃	小皿	(8.2)・2.2・(3.7)	1/4	明灰色	口縁部はやや内湾・底部やや突出	
737	〃	陶器	大目	・　・(4.7)	底部1/4	灰褐色	付け高台・施釉（鉄釉）	

第Ⅴ章　まとめ

第１節　牛岡遺跡出土土器について

今回の調査では、第３章ですでに述べてきたように、縄文時代から江戸時代にかけての遺物が出土している。縄文時代の遺物は少なく、ほとんどが奈良時代以降の包含層出土あるいは遺構への混入品である。遺物には土器と石器があり、縄文土器には中期後半の曽利式と晩期の条痕文系土器がみられる。奈良時代から江戸時代の遺物は、土器・石製品・金属製品・木製品がある。石製品には、砥石・石臼・敲石・一石五輪塔・賽子がある。敲石はその形状がトチムキ石に類似する。石製賽子の出土例は珍しく、県内でもあまり知られていない。金属製品も少なく、図示した環状鉄製品の他に釘状鉄製品・鉄鏃玉が若干出土している。木製品には柱根・礎板・杭があり、ほとんどが柱根である。柱根等の樹種については、本章第２節に山内氏の報告がある。

このように縄文時代の遺物や奈良時代以降の石製品・木製品等が若干みられるが、出土遺物の大半は奈良時代から江戸時代にかけての土器資料が占める。特に、５区ＳＸ－05からは、鎌倉時代を中心とする土器が多数出土している。以下出土土器について、大まかにⅠ期（奈良時代）・Ⅱ期（平安時代）・Ⅲ期（平安時代末～鎌倉時代）・Ⅳ期（室町時代～江戸時代前半）の４期に分けて、その概略を見ていくことにする。

１．Ⅰ期の土器

Ａ群～Ｄ群遺構及びＮ群ＳＸ－05から出土し、量的には少ない。ほとんどが須恵器で、土師器は第18図113とＳＢ－01に甕の胴部破片がみられる他は、Ⅰ期と判別できるものはない。須恵器の器種には坏と壺があり、各器種・器形にいくつかの違いが認められる。

坏蓋

すべて扁平な宝珠状つまみを持つと考えられる。天井部の形態は、直線的に開くもの（1・210）と口縁部付近が外反するもの（2・209）に分けられる。口縁部は、端部を明瞭に折り曲げて受部を作る。受部の形態は、短くほぼ真下に伸びるもの（1・209）と外に開くもの（2）、下方に伸びて小さく外反するもの（210）に分けられる。

坏身

坏身は、有台と無台がある。有台坏身は高台径から大まかに大・小２つに分かれ、高台は細かな形態差はあるが、ほぼ方形状を呈する。形態が明らかなものは、大形の２点のみである。口径17cm前後で、体部は深みを持ち、直線的に立ち上がる（4・5）。無台坏身は、碗状のものと平底に分かれる。碗状坏は１点のみで、体部は緩やかに湾曲し、口縁部は小さく外傾する（3）。平底坏は形態が明らかなものはないが、底部と体部の境を面取りするもの（72）とそのまま屈曲するもの（6・7）に分けられる。

壺

肩部破片１点（16）のみで、長頸壺と考えられる。

以上のように須恵器坏に細かな形態差が認められるものの、形態変化を捉えるには出土量があまりにも少ない。これらの須恵器は、胎土・色調から湖西窯産と考えられる。仮に８世紀を初頭・前半・後半の３期に区分して、従来の須恵器編年研究とこれらを対比すると、坏蓋・有台坏身・碗状坏身は前半、平底無台坏身は後半に位置付けられると思われる。ここで問題になるのは、平底無台坏身の年代についてであろう。近年提示された後藤健一氏の須恵器編年（後藤1989）によると、蓋付平底無台坏身はⅤ期

以降（８世紀第２四半世紀後半以降）に比定されている。しかし、平底坏身すべてを後半に位置付けることを疑問視する考え方もある。ここでは、当集落跡が小規模ながら継続的に営まれていたと推測されることから、出土した平底坏身を８世紀後半代と考えておきたい。

２．II期の土器

C群（特に東寄り）・F群・I群遺構及びN群ＳＸ－05から出土し、量的には少ない。ほとんどが灰釉陶器で、II期と判別できる土師器は第59図536の台付皿１点のみである。灰釉陶器の器種には、碗・皿・盤・壺があり、各器種・器形にいくつかの違いが認められる。

碗

全形態が明らかなものはなく、すべて口縁部あるいは底部破片であるが、細かな形態差が見られる。口縁部は、薄手で小さく外反するもの（73）、湾曲する体部から緩やかに外反するもの（215）、直線的な体部から比較的強く外反するもの（216）に分けられる。底部は高台の形態が、三日月状のもの（149）、低い三日月状のもの（49・74・77）、三角形状もの（75・76・217）、高く内彎あるいは直線的に伸びるもの（78・79）に分けられる。

皿

いわゆる角高台で、内面にハケ塗り施釉をしたもの（214）と小破片ながら低い三日月状高台を呈するもの（25）がある。

盤

口縁部が緩やかに外反するもの（202）で、須恵器と見ることもできる。しかし、胎土・色調から204を脚部とする可能性があり、灰釉陶器とした。

壺

大・小２点があり、ともに口縁部の断面形は三角形状を呈する。小形の80は口縁部内面に、大形の218には内外面に施釉している。

以上のように量的にも少なく、残存も悪く不明確ではあるが、これらの土器を近年提示された松井一明氏の灰釉陶器編年（松井1989）に対比すると、214の皿はＩ期（９世紀前半）、149の碗はII期（９世紀後半）、低い三日月状高台の碗・皿はIII期（10世紀前半）、その他の碗はIV期（10世紀前半から11世紀後半）に比定されると思われる。盤と壺は、その形態等からIII期以前と推定される。214の皿は猿投窯産と考えられ、斉藤孝正氏の編年（斉藤1989）による黒笹14号窯式２型式に該当する。松井編年のIV期は、清ヶ谷窯では４細分されているが、全形態が不明なためこれとの対応は不可能である。土師器台付皿は、その形態からIII期あるいはIV期に併行すると考えられる。静岡県内には、浜北市宮口古窯跡群・大須賀町清ヶ谷古窯跡群・菊川町皿山古窯跡群・島田市旗指古窯跡群といった灰釉陶器生産窯が知られているが、214以外の土器について産地を特定するのは難しい。地域的には、清ヶ谷窯産である可能性が高いように思われる。

３．III期の土器

III期の土器は、今回の調査の主体的位置を占めるもので、すべての遺構群から出土しており、特にN群ＳＸ－05からの出土量が多い。当期の土器には統一的な名称区分がないことから、山茶碗（碗・小碗・小皿）・陶器（小鉢・壺・甕・片口鉢）・輸入陶磁器（青磁・白磁・黒釉）・土師器に区分して、その形態と特徴を見ていきたい。また、山茶碗を中心に、III期の土器の変遷についても触れてみたい。

１）山茶碗

III期の土器のうち、9割以上をいわゆる山茶碗が占めている。器種には碗・小碗・小皿があり、小碗と小皿は高台の有無によって区分した。産地としては、金谷・皿山古窯跡群等の東遠江系（以下東遠系）と湖西・渥美古窯跡群等の外来系が認められ、もちろん在地である東遠系が主体となる。比率は算出していないが、東遠系が9割以上を占めるものと思われる。以下、東遠系と外来系に分けて、山茶碗の特徴と形態変化を見ていくことにする。

a．東遠系山茶碗

碗

調整は内外面ヨコナデ調整で、底部はほとんどが糸切り未調整である。碗の内面は、使用痕か磨耗しているものが多い。形態等からａ～ｆに分類し、さらに各類に見られる特徴から細分してみた。

a類（83・219等）

口縁部が外反するもの。外反の度合いに若干の差は認められるが、明らかに外反と捉えられるものを本類とした。いずれも口縁部破片のみで、全形態が明らかなものはない。推定口径も14.2～18.4cmと大きくばらつき、不確定な点が多い。底部は203のような高台が高く、作りの丁寧なものになると思われる。

b類

器厚が比較的薄手で、ノタ目が顕著なもの。胎土も緻密で、焼成・色調も須恵器に類似する。形態等から1～4に細分できる。

b 1類（220～229等）

体部は緩やかに湾曲し、口縁部は内彎して伸びる。高台は三角形で、ほとんどが端部にスノコ痕を残す。法量は、口径(16.2)～(16.8cm)・器高5.2～6.0cm・高台径7.0～7.7cmである。

b 2類（232～248等）

形態はｂ1類とほぼ同様であるが、全体に体部下半の湾曲を弱め、高台径がｂ1類に比べて小さく、高さも低くなる。高台端部にはほとんどがスノコ痕を残すが、270・271のように疎らなモミ痕を残すものも見られる。法量は口径15.5～(16.9)cm・器高5.1～5.8cm・高台径6.5～7.1cmである。

b 3類（85～87・273～286等）

体部は、底部から口縁部にかけて半円状に湾曲する。ｂ2類に比べ口径が小さくなったことにより、身が浅くなり、ノタ目も弱まる。高台はさらに低くなり、接合や作りが粗雑になる。高台端部には、ほとんどがスノコ痕を残す。法量は口径(15.0)～(16.2)cm・器高4.5～5.4cm・高台径5.8～7.2cmである。

b 4類（289～300等）

ｂ3類に比べさらに小形化し、器高が全体的に低くなる。体部は、丸味を持つものとやや直線的に立ち上がるものがある。高台の作りはさらに粗雑化する。高台端部には、スノコ痕を残すものとモミ痕を残すもの（297・298・300）が見られる。別分類しなかったが、293・296のように高台径が他と比べ大きいものもある。法量は口径13.8～(15.2)cm・器高4.0～5.1cm・高台径5.7～(7.8)cmである。

c類

器厚が全体的に厚く、胎土は砂質がやや強い。高台径も大きく、端部にモミ痕を残すことにより、高台は台形状を呈する。形態等から2つに細分できる。

c 1類（230・231）

体部下半が張り出し、口縁部は弱く外反する。法量は口径15.8～16.0cm・器高5.6cm・高台径8.3～9.0cmである。

c 2類（249・250）

c１類とほぼ同形態であるが、身が浅くなる。器高が低くなったことにより、体部下半の張りが弱まり、高台も小さく低くなる。法量は口径15.8～15.9cm・器高5.2cm・高台径6.7～7.4cmである。

d類（287･288等）

器高が高く、体部は口縁部にかけて直線的に開く。口縁端部は尖り気味になる。高台は低く、作りも粗雑で、端部にモミ痕を残す。法量は口径(15.4)～(16.0)cm・器高5.1cm・高台径6.7～7.4cmである。

e類（301）

体部は直線的に開き、口縁部付近で内彎する。底部は突出気味で、高台は低く小さい。法量は口径(13.4)cm・器高3.7cm・高台径(6.2)cmである。

f類

無高台のもので、底部の形態から２つに分けられる。

f１類（302）

体部は底部から直線的に開き、口縁部は内彎する。法量は口径(13.4)cm・器高3.2cm・底径（7.4)cmである。

f２類（303）

全形態は明らかではないが、底部がやや突出し、体部下半が張り出すもの。底径は6.0cmである。

従来の編年研究から、碗はａ類→ｂ１類（ｃ１類）→ｂ２類（ｃ２類）→ｂ３類（ｄ類）→ｂ４類→ｅ類→ｆ類という形態変化を捉えることができる。ａ類は前述のように不確定要素が多く、同時期の碗は口径17～18cmを測るものが多いことからも、一部誤認の可能性がある。この時期には東遠江でも幾つかの窯跡で生産されているが、形態的には金谷古窯跡群・島田あざみ沢窯跡出土の碗（松井1993）に類似していると思われる。ｂ類も薄手で口縁部が弱く内彎して伸びること、高台はスノコ痕が主体であること等の特徴から、金谷古窯跡群産と推定される。ただし、ｂ４類は若干の形態差が認められ、すべてとは言えない。ｂ１類→ｂ２類→ｂ３類への形態変化は漸次的であり、分類不明瞭なものも幾つか認められる。ｂ４類は口径値が比較的安定しており、分類は比較的容易である。ｃ類は厚手で、高台にモミ痕を残す等、皿山・土器谷・相良古窯跡出土の碗（松井1993・塚本1993）と特徴が類似している。ｃ１類からｃ２類への形態変化が考えられるが、ｂ類との対比については推定であり、現地でも確認できていない。ｄ類は、形態的に相良古窯跡群の蛭ヶ谷窯出土の碗に類似する。口径が15.5cm前後であることから、ｂ３類と併行するものと推定している。高台の有無から、ｅ類からｆ類への形態変化を捉えることができるが、口径値は同様であり、同時期と考えられる。各類の出土量をはっきりと示すことはできないが、ａ類・ｅ類・ｆ類はきわめて少なく、ｂ２類・ｂ３類が最も多くを占める。

小碗

調整は内外面ヨコナデ調整で、底部の糸切り痕は高台接合時にほとんどがナデ消されている。高台は三角高台で、端部にスノコ痕を残すものが幾つか認められる。モミ痕を残すものはない。形態等からａ～ｃに分類し、さらに各類に見られる特徴から細分してみた。

ａ類（330）

体部は湾曲し、口縁部は緩やかに外反する。高台は高く、しっかりしている。法量は口径(9.0)cm・器高3.3cm・高台径4.6cmである。

ｂ類

比較的大振りのもので、口縁部は外面をやや外反気味とする。高台の作りは比較的丁寧であるが、若干の高低が見られる。体部の形態から２つに細分される。

ｂ１類（331～341）

体部が比較的直線的に立ち上がるもの。法量は口径8.4～(10.7cm)・器高2.5～3.3cm・高台径

4.3～(5.6) cmである。

b 2類 (342・343)

体部中央で屈曲し、口縁部へ移行するもの。法量は口径8.9～(9.0)cm・器高2.8～2.9cm・高台径5.1～(5.5)cmである。

c類

b類に比べ身が浅くなり、高台もやや作りが粗雑になる。形態等から5つに細分される。

c 1類 (344～348・363～367・377～385等)

口縁部が直線的ないしわずかに外反気味となるもの。法量は口径(7.6)～9.4cm・器高2.1～2.8cm・高台径3.4～4.8cmを測り、口径値に差が認められる。377～384は同様な高台の作りで、極端に粗雑である。

c 2類 (352・354・356等)

体部中央で屈曲し、口縁部はやや外反するもの。法量は口径8.2～(8.4)cm・器高2.3～2.6cm・高台径4.3～4.6cmである。

c 3類 (353・361・362・368等)

体部上半から内彎して、口縁部へ移行するもの。法量は口径(7.8)～8.3cm・器高2.2～2.5cm・高台径3.7～4.6cmである。

c 4類 (374～376等)

器高が比較的高く、口縁部が直立気味となり、端部が尖るもの。法量は口径(8.0)～8.4cm・器高2.6～2.9cm・高台径3.6～(4.2)cmである。

従来の編年研究から、小碗はa類→b類→c類という形態変化を捉えることができる。碗のように産地の違いを示すような器形・胎土等の差は認められないが、胎土・焼成等は碗b類に類似しており、金谷古窯跡群産のものが主体と推測される。a類とb類・c類の識別は、比較的容易であるが、b類からc類への形態変化は漸次的である。c類は口縁部を中心に分類したが、350～354等のように他に比べ高台径が大きいもの、377～384のように高台の作りが共通のものが見られる。c 1類は、口径値が(7.6)～9.4cmとやや差が大き過ぎる。全体的には小形化と扁平化という変化が考えられることから、この差を時間差と見ることもできる。b類とc類には体部と口縁部に若干の形態差が認められ、b 1類→c 1類、b 2類→c 2類という2つの流れがあり、さらにc 1類～c 3類は小皿へと続く。このような形態や技法の継承は、生産地あるいは生産集団の違いを反映しているものと思われる。

小皿

調整は内外面ヨコナデ調整で、底部は糸切り未調整である。形態等からa～fに分類し、さらに各類に見られる特徴から細分してみた。

a類 (387)

比較的大振りで、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。法量は口径8.8cm・器高2.4cm・底径5.0cmである。

b類

小碗c類から高台を取り除いた形態となる。器高が高く、比較的身が深いものをb類とした。体部・口縁部等の形態から3つに細分される。

b 1類 (388～393・400～403等)

体部は比較的直線的に立ち上がり、口縁部外面はやや外反気味となる。底部は突出するものが多い。法量は口径8.0～(8.6cm)・器高2.2～2.7cm・底径3.8～(4.5)cmである。

b 2類 (394・404)

体部中央で屈曲し、口縁部は弱く外反するもの。底部は突出する。法量は口径8.3cm・器高2.2cm・底径4.3cmである。

b３類（395・396等）

体部上半から口縁部にかけて内彎するもの。底部は突出する。法量は口径(8.2)～(8.4)cm・器高2.2～2.5cm・底径4.4～(4.6)cmである。

c類

b類と同形態を呈し、やや器高低くなり、扁平化したもの。体部及び口縁部等の形態から３つに細分される。

c１類（411～413・429～431等）

体部は比較的直線的に立ち上がり、口縁部外面はやや外反気味となる。底部の突出は弱まる。法量は口径7.3～(8.1)cm・器高1.9～2.2cm・底径3.7～4.3cmである。

c２類（451・453）

体部中央で屈曲し、口縁部が弱く外反するもの。法量は口径(7.4)cm・器高1.8～2.2cm・底径3.5～3.8cmである。

c３類（416～418・435～441等）

体部上半から口縁部にかけて内彎するもの。法量は口径(7.4)～(8.2)cm・器高1.9～2.1cm・底径3.4～4.8cmである。

d類

c類とほぼ同形態を呈し、さらに扁平化したもの。口縁部形態から２つに分けられる。

d１類（423・424）

体部は比較的直線的に立ち上がり、口縁部外面はやや外反気味となる。法量は口径(8.0)cm・器高1.6・7cm・底径(4.4)～4.9cmである。

d３類（442・443・445・450）

体部上半から口縁部にかけて内彎するもの。法量は、口径7.8cm・器高1.6・7cm・底径3.3～4.2cmである。

e類（446～449等）

形態はｂ１類に類似するが、底径が大きく、体部が短く見えるもの。法量は口径7.8～(8.0)cm・器高1.8～2.3cm・底径4.7～5.2cmである。

f類

器高が低く、全体的に底径（糸切り痕）が大きい。体部は底部から緩やかに湾曲して開き、口縁部は弱く外反する。胎土・焼成がほぼ一様である。底部の形態から２つに分けられる。

f１類（420・464・465）

底部がやや突出して、くびれるもの。法量は口径8.0～8.7cm・器高1.9cm・底径4.4～4.7cmである。

f２類（463・466～479等）

底部の突出がなくなり、より扁平化したもの。法量は口径7.8～8.8cm・器高1.4～1.8cm・底径3.6～4.9cmである。

従来の編年研究から、小皿はｂ類→ｃ類（ｅ類）→ｄ類という形態変化を捉えることができる。形態的には小碗から小皿への変化が認められるが、ａ類は小碗から系譜をたどることは難しく、まったく別の系譜かあるいは産地が異なるのかもしれない。ｂ類～ｄ類は小碗の無高台化したものと考えられ、小碗ｃ１類→ｂ１類→ｃ１類→ｄ１類、小碗ｃ２類→ｂ２類→ｃ２類、小碗ｃ３類→ｂ３類→ｃ３類→ｄ３類という３つの流れが想定でき、産地も同一と推測される。ｅ類の系譜ははっきりしないが、金谷古

窯跡群きつね沢窯出土土器（松井1993）に類似品があり、生産集団の違いによるものと推測される。法量から、c類段階に位置付けられると思われる。f類は形態や胎土・焼成からまったく別系譜と考えられ、形態的には皿山古窯跡群5号窯出土土器（塚本1993）に類似しているが、口径が全体に小振りである。f1類からf2類への形態変化が考えられるが、口径値に比較的差があり、やや疑問が残る。

b．外来系山茶碗

碗

出土量は少なく、全形態が明らかなものも少ない。法量的に不明確ではあるが、形態・胎土等からa・bの2つに分類し、さらに各類に見られる特徴から細分してみた。

a類

色調は灰白色あるいは明灰色で、胎土は砂質が強い。形態等から3つに細分される。

a1類（307）

体部は緩やかに湾曲し、口縁部は外反する。口縁部には指押さえの輪花を作り、漬け掛けにより灰釉を施す。底部破片では、318・319等が本類に含まれる。法量は口径15.8cm・器高5.2cm・高台径7.8cmである。

a2類（308・309）

比較的大振りで、体部は緩やかに湾曲し、口縁部はa1類に比べ外反を弱める。底部破片では、320・323等が本類に含まれる。法量は口径(16.5)～(16.8)cm・器高5.6cm・高台径7.0cmである。

a3類（84・310～314）

体部は比較的直線的に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。高台は低く粗雑な作りで、モミ痕を残すものが多い。底部破片では、327～329等が本類に含まれる。法量は口径(15.4)～(16.2)cm・器高4.9～5.1cm・高台径7.0～8.3cmである。

b類

胎土はa類と類似するが、色調は灰色でくすんだ色合いとなる。口縁部形態から2つに細分される。

b1類（315）

体部は直線的に立ち上がり、口縁部は玉縁状を呈する。法量は口径(14.0)cmである。

b2類（316・317）

体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや肥厚して弱く外反する。高台は低く、作りも粗雑である。法量は口径(14.0)～14.6cm・器高5.0cm・高台径5.9cmである。

a類は、胎土・色調等から湖西・渥美古窯跡群産と考えられる。従来の編年研究から、a1類→a2類→a3類という形態変化が捉えられる。湖西・渥美古窯跡群の山茶碗については、後藤健一氏によって編年（後藤1987）が提示されている。これらを後藤氏の編年に対比すると、a1類はⅠ期、a2類はⅡ期、a3類はⅢ－1期に比定されると考えられる。b類は、形態から尾張系の山茶碗と推定される。生産窯は特定できないが、知多古窯跡群の赤羽・中野両氏の編年（赤羽・中野1994）に対比すると、b1類は1型式、b2類は5型式に比定されると思われる。

小皿

出土量は少なく、図示できたものは3点のみである。色調は灰白色あるいは明灰色で、胎土は砂質が強い。形態等から3つに細分される。

a1類（480）

器高が高く、身が深い。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は弱く外反する。法量は口径7.5cm・器高2.3cm・底径3.7cmである。

a2類（103）

口縁部を欠く。底径が大きく、体部下半は弱く湾曲する。法量は底径(5.6)cmである。

a 3類（36）

器高が低く、扁平となる。体部から緩やかに外反して口縁部へ移行する。法量は口径(7.8)cm・器高1.9cm・底径4.3cmである。

胎土・色調等が碗a類と同様であり、すべて湖西・渥美古窯跡群産と考えられる。後藤氏の編年とこれらを対比すると、やや小振りであるがa 1類はII期、a 2類はIII－1期、a 3類はIII－3期に比定されると思われる。

2）陶器

ほとんどが山茶碗併焼と考えられる。器種には小鉢・壺・甕・片口鉢があり、壺には幾つかの器形が認められる。

小鉢

口縁部破片1点（483）のみの出土で、胎土から湖西・渥美古窯産と考えられる。肩部は強く張り出し、口縁部は短く外反する。器厚は薄く、丁寧な作りである。類例は見られないが、新古古窯跡（湖西市教委1984）等で片口碗とされるものに形態的には類似する。

壺

器形及び法量から、瓶子・小形壺・短頸壺・長頸壺・広口壺に分けられる。

瓶子

1点（130）のみの出土で、口頸部を欠く。胴部は直線的に外傾し、上半部に櫛描横線文を施し、外面には淡緑灰色の灰釉を施す。古瀬戸様式前期の製品と考えられる。

小形壺

1点（494）のみの出土で、口頸部を欠く。平底の底部から胴部は湾曲して内傾する。胎土から湖西・渥美古窯産と考えられ、山口第17地点古窯跡（湖西市教委1991）等に類例が見られる。

短頸壺

口径10cm前後と比較的小振りで、折り返し口縁を呈する。形態的には、三筋壺と呼ばれるものに類似する。ほとんどが胴部下端に回転ヘラ削り調整を施すが、493は器形が異なるのか縦方向のヘラ削りを施す。形態等から2つに分けられる。

a類（487）

肩部は比較的なだらかで、頸部は外傾気味に開き、口縁部下端はやや丸くなる。頸部内面から胴部下半にかけて、灰釉を流し掛け施釉する。

b類（485・488・489）

口縁部は頸部から外反し、折り返した下端はやや外反する。肩部はa類に比べ、強く張り出す。いずれも無釉である。

産地は山茶碗ほどはっきりしないが、形態等からも湖西・渥美古窯跡産と推定され、東笠子第38地点古窯（湖西市教委1982）等に類例が認められる。a類からb類への形態変化が捉えられそうで、時期的には後藤編年のII期を下らないと考えられる。

長頸壺

胴部破片1点(484)のみの出土で、肩部に一段三角形状の凸帯が巡り、縦方向の耳を持つ。産地ははっきりしないが、色調等は東遠系山茶碗に近い。足立順司氏が、『大谷川IV』（静文研1989）で紹介した皿山古窯跡群出土遺物に同様の凸帯を持つ壺が見られる。

広口壺

短頸壺に比べ、やや口径が大きくなるものを広口壺とした。口頸部破片のみで、全形態が明らかなものはない。口縁部形態から3つに分けられる。

a類（490）

口縁部は頸部上半から外反し、肩部は比較的強く張り出す。

b類（486）

口縁部は頸部から緩やかに外反し、端部を外に引き出す。短頸壺の口縁部に類似する。

c類（156）

口縁部の断面形はN字状を呈する。縁帯は幅狭で、肩部に押印文（花文）を施す。

a類・b類は、胎土・色調等から湖西・渥美古窯産と考えられる。a類は山口第17地点古窯跡（湖西市教委1991）等に類例があり、時期的には後藤編年のII期を下らないと思われる。b類は類例がなく、中形甕の口縁部の可能性もある。c類は常滑古窯産で、赤羽・中野編年の6a型式に比定される。

甕

形態等から2つに分かれ、さらに細分される。いずれも破片が多く、全形態が明らかなものは1点のみである。底部破片では壺と甕の分類が困難なため、ほとんどを甕とした。底部下端の調整は、縦方向のヘラ削りを施すものと強いヨコナデを施すものが見られる。

a類（129・502～504等）

口縁部の断面がN字状を呈するもので、2つに細分できる。

a1類（105）

縁帯の幅が比較的狭いもの。

a2類（501）

縁帯が下方に伸びて、幅広となるもの。

b類（498・499等）

色調が灰色あるいは暗灰色を呈するもので、口縁部等の形態から4つに分けられる。

b1類（495）

口縁部は頸部上半から強く外反し、端部に幅狭の面を作る。胴部は倒卵形で、外面に叩きを施し、底部は小さな平底となる。

b2類（496・497）

口縁部が頸部からくの字状に外反するもの。

b3類（127）

折り返し口縁で、下端が外反するもの。

b4類（500）

口縁部を欠くが、肩部に竹管状の工具により連弁文を施す。

a類は常滑古窯産と考えられる甕で、a1類からa2類への変化が捉えられる。赤羽・中野編年に対比すると、a1類は6a型式、a2類は8型式に比定されると思われる。b類は色調・胎土にやや疑問が残るが、形態等から湖西・渥美古窯産と推定される甕である。形態的にはb1類からb2類への変化が捉えられ、後藤編年に対比すると、b1類がI期、b2類がII期に比定される。b3類は類例がなくはっきりしないが、伴出土器からIII期に相当するものと推定される。b4類は渥美古窯の典型的な連弁文を施すもので、坪沢古窯跡群出土土器（愛知県教委1986）に類例があり、時期的にはII期を下らないと思われる。

片口鉢

破片が多く、全形態が明らかなものは2点で、その内片口とわかるものは1点のみである。壺・甕類

に比べ、各古窯での資料が少なく、胎土・色調からも産地の比定が難しい。不確実ではあるが、見た目の特徴から3つに分けられる。

a類（73）

内外面に灰釉を施すもの。

b類

色調は明灰色あるいは灰白色を呈し、胎土は粗く長石が目立つ。高台は方形状と三角形状のものがあり、若干の形態差が認められる（514～516等）。口縁部等の形態から3つに細分できる。

b1類（511）

体部は直線的に開き、口縁部は切り出し状となり、端部に凹線が入る。

b2類（164・507・512）

比較的直線的な体部から口縁部は弱く外反し、端部は丸くなる。形態的には類似するが、技法等個々に違いが見られる。

b3類（513）

体部は直線的に立ち上がり、口縁部は肥厚して丸くなる。

c類

色調は灰色あるいは暗灰色を呈し、胎土はb類に比べ緻密となる。高台は方形状で、端部にモミ痕を残すものが見られる（506・509・510等）。口縁部形態から3つに細分できる。

c1類（155）

やや肉厚で、体部は直線的に開く。口縁部は、下端が張り出して凹面を作る。

c2類（104・508）

器厚は比較的薄手で、口縁部は弱く外反する。

c3類（505）

やや肉厚で、口縁部は弱く内彎する。

a類は、瀬戸古窯産の施釉陶器と考えられる。b類は、胎土的には湖西・渥美古窯産の山茶碗に類似する。しかし、b2類の64は色調等から常滑古窯産と考えられ、b1類・b3類も形態的に尾張系古窯の片口鉢に類似している。c類は、胎土・色調が東遠系山茶碗に類似する。c1類は清ヶ谷E－4号窯（静岡県教委1989）に類例があり、松井編年のⅠ期に比定されるものである。しかし、c2類は新古X号窯（湖西市教委1984）出土のものと同形態を呈する。c3類は類例がない。片口鉢については、県内資料が少なく、不明確な点が多い。

3）輸入陶磁器

量は少ないが、青磁・白磁・黒釉陶器が出土している。黒釉陶器は1点（108）のみで、青磁・白磁も小破片が多く、図示できたものは少ない。

青磁は碗の底部が2点で、同安窯系（107）と龍泉窯系（525）が見られる。時期は12世紀後半から13世紀前半と考えられる。白磁は碗と皿があり、いくつかの形態差が認められる。碗は口縁部形態が玉縁口縁のもの（518）、小さく外反するもの（521）、外折して平坦面を作るもの（519・520）、内傾気味となるもの（522）がある。皿（523・524）は底部形態がまったく異なり、523は類例が確認できていない。森田勉氏の分類（森田1978）にこれらを対比すると、玉縁口縁の碗はⅣ類、他の碗がⅤ類、皿（524）がⅥ類となると思われる。時期は11世紀中葉から12世紀初頭と考えられる。

輸入陶磁器は伝世される可能性が高く、使用年代はさらに幅広くなると考えられ、これらを皿期の土器とした。

4）土師器

全体的に土師器の出土量は少なく、他の土器との伴出例もないため、年代的に不明確な点が多い。そこで出土状況等から可能性の高いものを本期に含めた。全形態が明らかなものは5点で、器種は碗・皿・鍋がある。

碗（526）は底部がやや突出し、体部から湾曲して口縁部へ移行する。皿は平底で口縁部が内彎して開くもの（44）とやや丸味を持った底部で口縁部が外反気味となるもの（531）があり、後者とほぼ同形態の小皿（535）が見られる。鍋はいわゆる伊勢型鍋で、新田洋氏の編年（新田1985）の4類に比定され、時期は12世紀後半と考えられる。

5）出土山茶碗の変遷について

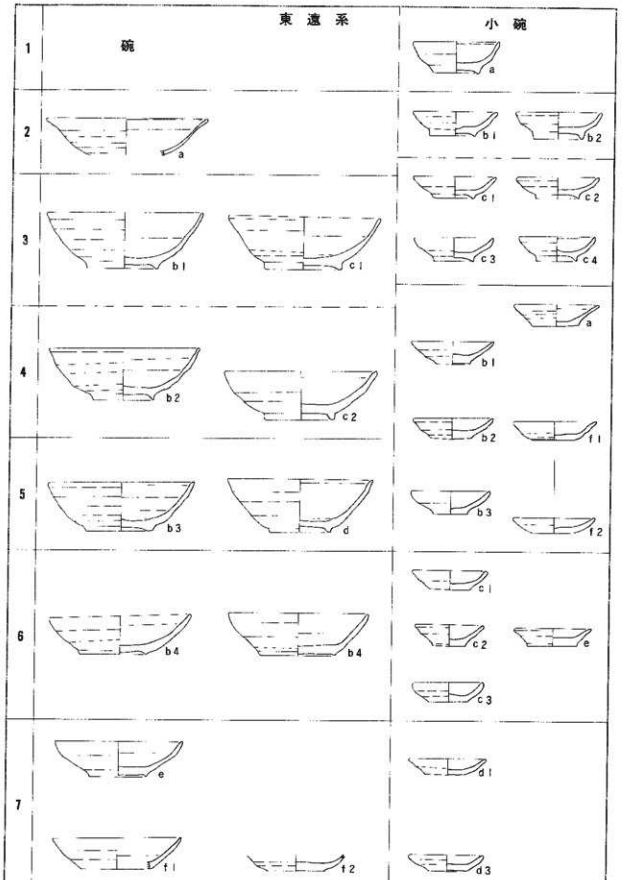
これまで山茶碗・陶器・輸入陶磁器・土師器に分けて、各器種の特徴と形態変化について概観してきた。各器種・器形にはいくつかの形態差が認められ、時期的変化を捉えることができた。ここでは、最も多く出土し、各器種に多様な変化が窺えた東遠系山茶碗の変遷について、再度整理したい。

山茶碗は、碗・小碗・小皿の形態変化から第80・81図に示したように7期に区分される。各期の構成と外来系山茶碗との併行関係は、以下のようになる。

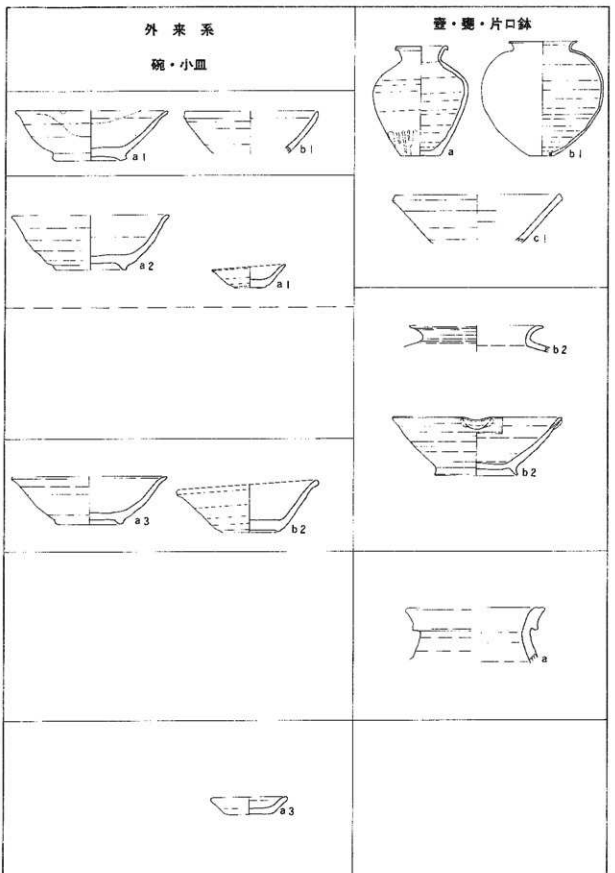
1期：東遠系小碗a類
2期：東遠系碗a類・小碗b類・c類、湖西系碗a1類・尾張系碗b1類
3期：東遠系碗b1類・c1類・小碗c類・小皿a類・b類、湖西系碗b2類・小皿a1類
4期：東遠系碗b2類・c2類・小皿b類・f1類
5期：東遠系碗b3類・d類、小皿b類・f2類、湖西系碗a3類・尾張系碗b2類
6期：東遠系碗b4類・小皿c類・e類
7期：東遠系碗e類・f1類・f2類・小皿d類、湖西系小皿a3類

東遠系とした山茶碗の多くは、その特徴から金谷窯の製品と考えられる。次に、金谷窯を中心に遠江の各古窯跡群を網羅的に捉えた松井一明氏の山茶碗編年（松井1993）と対比させながら、各期の内容を見ていくことにする。

1期の小碗a類は、口径(9.0)cmとやや小振りではあるが、身が深くⅠ－1期に対応すると考えられる。碗については出土例はないが、皿山窯あるいはあざみ沢窯出土土器が伴うものと予想される。2期の碗a類は、前項で述べたように不明確ではあるが、口径の大きなものは山茶碗と識別される。碗a類は碗b1類に先行することは間違いないと思われ、小碗b類と共にⅠ－2期に対応すると考えられる。3期から5期については、碗と小碗・小皿の併行関係を明確に捉えることができなかった。従来の編年研究では、小碗はすべてⅠ期として捉えられており、小碗c類もⅠ－2期に対応するものと考えられるが、c類は窯跡からの出土例が少なく、松井編年にうまく対応しない。これは金谷窯において、Ⅰ－2期の実態が明らかになっていないためとも考えられる。しかし、小碗c類は扁平化が進み、c2類～c4類は口径8cm前後に小形化し、明らかにb類に比べ後出と考えられることから、c類は3期の碗b1類に伴う可能性がある。また、小碗の方が小形であるため残存率が高いとも考えられるが、Ⅰ期の碗が抽出できないわりには小碗の出土量が多いことからも、同様の推測が可能と思われる。ただし、c1類には口径9cm前後のものも認められ、c類全てとは言えない。3期の碗b1類・c1類・小皿a類は、Ⅱ期に対応すると考えられる。しかし、小皿a類は小碗からの系譜がたどれないもので、出土例も1点のみであり、b類の一部（口径が比較的大きなもの）もこれらに併行する可能性がある。小皿a類の系



第80図　牛岡遺跡出土山茶碗変遷図(1)



第81図　牛岡遺跡出土山茶碗変遷図(2)

譜は、灰釉陶器末期にみられる無高台の小碗に求められるのかもしれない。小皿ｂ類～ｄ類の分類は、小碗から小皿への連続した変化が捉えられたことにより、時間的変化を小形化という面よりも扁平化を優先させたため、松井編年とは対応していない。小皿ｂ類は少なくとも２期区分されなければならないが、その変化を捉えることはできなかった。碗ｂ１類と４期の碗ｂ２類の違いは高台径の縮小にあり、形態的にはそれほど大きな差はない。Ⅱ期あるいはⅢ－１期に対応するのか判断が難しいが、一応Ⅱ期としておきたい。いずれにしても、４期は過渡的な段階と考えられる。碗ｃ２類は、碗ｃ１類より後出であることから４期としたが、５期とすべきかもしれない。５期の碗ｂ３類・小皿ｆ類は、Ⅲ－１期に対応すると考えられる。碗ｄ類は類例がなく、口径値からの推定である。小皿ｆ類は口径がやや小さいが、形態的には皿山窯Ⅲ期に比定される小皿に類似する。ｆ類は他の窯には認められず、その可能性は高い。ｆ１類からｆ２類への変化が考えられ、碗ｂ２類をⅢ－１期と捉えるならば、これに併行する可能性もある。６期は、唯一碗・小皿・陶器の併行関係が捉えられている。Ｃ群道構ＳＸ－03からは若干の混入があるものの、碗ｂ４類と小皿ｃ類が伴出している。また、甕ａ類とした赤羽・中野編年６ａ型式と考えられる常滑古窯産の甕が共に出土しており、年代的にも折り合っている。碗ｂ４類はⅢ－２期に対応し、小皿ｃ類・ｅ類もほぼ一致する。碗ｂ４類の内、高台径が小さく体部が湾曲するものは、きつね沢窯出土の碗に類似している。７期の碗ｅ類・ｆ１類は、Ⅲ－３期に対応すると考えられる。碗ｆ２類は体部及び口縁部の形態がわからないため、無高台ということで７期に入れたが、底部の形態はⅢ－２期の無高台碗に類似しており、６期とすべきかもしれない。小皿ｄ類は出土小皿の中で最も器高が低くなることから７期としたが、Ⅲ－２期に対応するものであり、より扁平化したものをあてるべきかもしれない。第81図の余白に陶器の一部を加えたが、山茶碗と他の土器との併行関係は、前項で述べた年代比定及び編年対比の通りである。陶器の多くは、４期以前に位置付けられる。

各器種の分類及び併行関係にやや違いは認められるが、各期と松井編年との対比を再度整理すると、１期がⅠ－１期、２期がⅠ－２期、３・４期がⅡ期、５期がⅢ－１期、６期がⅢ－２期、７期がⅢ－３期となる。実年代については、Ⅰ－１期を12世紀前半、Ⅰ－２期を12世紀中頃、Ⅱ期を12世紀後半から13世紀初頭、Ⅲ－１期を13世紀前半、Ⅲ－２期を13世紀中頃、Ⅲ－３期を13世紀後半とする松井氏の年代観を支持したい。

４．Ⅳ期の土器

Ｃ群・Ｆ群・Ⅱ群・Ⅰ群道構から出土し、量的には少ない。陶器・磁器・土師器が見られるが、小破片が多く図示できたものは少ない。磁器は青磁の碗底部１点（162）のみである。

陶器

瀬戸・美濃窯と金谷町志戸呂窯、常滑窯の製品が認められる。

瀬戸・美濃窯の製品

器種には、天目茶碗・丸碗・皿・猪口・瓶子・鉢・擂鉢がある。天目茶碗は口縁部が直立するもの（126）、強く外傾するもの（197）、外反するもの（181）が見られる。丸碗（158・160・182・196）は、高台が三角形状のもの、低い台形状のもの、やや高い方形状のものがある。皿は、緑釉小皿（110）・小皿（74）・稜皿（118・177）・丸皿（159）・深皿（121）に分かれる。丸皿は底部内面に印刻花文を付す。猪口（146）・瓶子（178）・鉢（109）は１点のみで、瓶子は横線を付し、鉢は口縁部内面に段を有する。擂鉢は口縁部縁帯が上方に伸びるもの（119・139）とほとんど伸びないもの（164）、断面三角形状のもの（165）が見られる。

天目茶碗（126・197）・緑釉小皿・深皿・瓶子・鉢は、古瀬戸後期に位置付けられ、時期は15世紀中頃から後半と考えられる。他は大窯期の製品で、天目茶碗（181）・丸碗（182）・小皿・丸皿がⅠ期（16世

紀前葉)、後皿・猪口がII期（16世紀中葉)、丸碗（160)・擂鉢（119・139)がIII期（16世紀後葉)、丸碗（158・196)・擂鉢（164・165)がIVないしV期（16世紀末から17世紀初頭）と考えられる。

金谷町志戸呂窯の製品

器種には、小天目茶碗・丸皿・おろし皿・小鉢・擂鉢がある。小天目茶碗（171)・丸皿（161）には鉄錆釉を施している。おろし皿は、底部外面に刻みを入れるものである。擂鉢は、口縁部内面に凸帯が巡るもの（166・167・199）と縁帯を形成するもの（198）が見られる。

おろし皿は三ッ沢窯産と考えられ、時期は古瀬戸後期併行、足立順司氏の編年（足立1994）のI期（15世紀後半）に位置付けられる。他はその特徴から大窯期併行、足立編年のIII期に比定されるもので、時期は16世紀末から17世紀初頭の製品と考えられる。

常滑窯の製品

器種は壺（157・205）のみで、縁帯は頸部に密着し、上端は平坦となる。赤羽・中野編年の12型式に比定され、時期は16世紀前半と考えられる。

土師器

器種には碗・皿・小皿があり、すべてロクロ成形と考えられる。いずれも破片が多く、器形全体がわかるものは少ない。碗は、体部が弱く内彎して立ち上がるもの（173）と直線的に開くもの（184～188等）がある。184～188の碗は、ＳＦ－07からの一括出土である。皿は、体部が内彎するもの（201）と扁平で体部が直線的に開くもの（172）がある。小皿は、体部が内彎気味に立ち上がるもの（112）と直線的な体部から口縁部が内彎するもの（169）が見られる。

近年、松井一明氏によって遠江のかわらけ編年（松井1993）が試みられている。未だ資料数が少ないこと等から、これらを松井編年に対比させることは難しいが、184～188等の碗は勝間田城出土のものに形態的に類似しており、15世紀後半から16世紀前半に位置付けられる可能性が高い。

以上出土土器をＩ～IV期に分けて、各時期の器種・器形の特徴を概観し、年代的位置付けを行ってきた。各時期の図示できた土器数を見ると、Ｉ期が21個体、II期が19個体、III期が約400個体、IV期が40個体となる。この数が出土量の全てを表しているわけではないが、Ｉ・II期が少なく、IV期がほぼ倍となり、III期が圧倒的多数を占める。II期は年代幅が広いわりには、出土量が少ない。III期は土器が大量に廃棄されていたＳＸ－05の出土土器を除いても約100個体となり、最も多数を占める。このような土器の傾向は、集落の動向を示すものと思われ、当集落の最盛期はIII期にあったと考えられる。年代的に見ると、12世紀後半～13世紀中葉の土器が最も多く、９世紀～11世紀と14世紀～15世紀前半の土器の出土量が少ない。９世紀～11世紀の土器は、年代幅が広いわりに極端に少ないとも言えるが、小量ながらも土器編年に継続的に対応している。しかし、14世紀～15世紀前半に位置付けられる土器はほとんどなく、見落としがない限り、常滑古窯産の14世紀後半と考えられる甕１点のみとなってしまう。このような状況は従来から言われており、その背景として木製椀の普及・かわらけの普及・中国製陶磁器と古瀬戸製品の普及等、諸説が唱えられている。当集落がこの間継続して営まれていたとすれば、山茶碗に代わるようなかわらけ・陶磁器が出土していないことから、木製椀の普及説が有力となろう。かわらけの普及あるいは中国製陶磁器と古瀬戸製品の普及説をとれば、一時的な集落の断絶あるいは縮小があったことになり、当集落の在り方に大きな差ができてしまう。木製椀の出土はなく、この問題を解決することはできないが、１点でも該期の土器が認められることから、小規模ながらも集落は継続していたと考えたい。

本節の執筆にあたっては、足立順司氏、渋谷昌彦氏、羽生保氏、佐藤正知氏、松井一明氏、前田庄一氏、塚本和弘氏にご多忙中いろいろとご教示をいただいた。心からお礼申し上げます。

第2節　牛岡遺跡出土の樹種について

山内　文

調査を行った出土材は、12世紀から17世紀初頭にかけての掘立柱建物跡の柱根、礎板、木片及び土坑内の杭と木材である(表4)。建物跡出土で単に木片とされているものは、柱根あるいは礎板と区別されていないものであるという。調査を行った材は総数65点、いずれも切片を作り、検鏡して、樹種の同定を行った。判明した樹種はマツ(二葉松：アカマツ又はクロマツ)、イヌマキ、シイ(スダジイ又はツブラジイ)、カシ(アカガシ属1種)、クリ、クスノキ、ミズキの7種である。

以下に樹種の同定に利用した材の解剖学的特徴を簡単に記す。

イヌマキ　Podocarpus macrophyllus　4点

礎板No.37、木片No.36，No.38，No.39

仮道管と散在する木部柔組織及び柔細胞構の放射組織とで構成されている。これらの特徴からイヌマキであることは明らかである。イヌマキは割裂性に乏しい材が多いため、遺跡出土材では多くは丸木のまま使用されている事が多い。

マツ属　Pinus　アカマツ又はクロマツ　15点

柱根No.24，No.51，No.52，No.53、木片No.01，No.08，No.11，No.15，No.17，No.18，No.23，No.41，No.54、杭No.62、木材No.60

水平・垂直樹脂溝が存在する。放射組織は、柔組織と放射組織仮道管とで構成されている。分野の膜孔は大形の窓状、放射組織仮道管に鋸歯状肥厚が存在する。保存の良好な資料(No.52)では、鋸歯状肥厚が明瞭に残存していたが、保存状態の良否は切片の採取場所とも関係があり一概には決められないが、この資料のものは鋭い鋸歯状肥厚が認められ、従ってアカマツ様であった。発掘材では鋸歯状肥厚は明瞭には残らないことが多く、かつこの肥厚の状態は材の成育状態とも関係があり、アカマツとクロマツの識別は困難なことが多く、従ってマツ属(アカマツ又はクロマツ)とした。

シイ属　Castanopsis　スダジイ又はツブラジイ(コジイ)　8点

柱根No.03，No.21，No.28，No.45、礎板No.06、木片No.09，No.22、杭No.64

環孔材。春材部大道管の接線径は大径のもので170～230μm、孔圏は1層、輪初の大道管の相互の間隔は広く、その存在数は少ない。小道管は集まって、放射方向にやや火炎状に分布する。木部柔組織に小形の結晶を含有している結晶細胞が存在する。道管と放射組織との接する部分の膜孔は柵状を呈する。放射組織は単列で、異性の傾向が強い。シイ属にはスダジイとツブラジイ(コジイ)とが普通に存在する。コジイには集合放射組織が出現することが知られているが、資料の切片では認められなかった。この特徴は注意深く資料を観察する必要があるが、おそらくこれらの出土材はスダジイである可能性が高いと考えられる。

クリ　Castanea crenata　32点

柱根 No.25, No.26, No.29, No.42, No.43, No.44, No.47, No.48, 礎板 No.04, No.05, No.13, No.31, No.33, No.49, No.50, 木片 No.07, No.10, No.12, No.14, No.16, No.19, No.20, No.32, No.34, No.35, No.40, 杭 No.56, No.57, No.65, 木材 No.58, No.59, No.61

環孔材。春材部大道管の接線径280～460μm、小道管は集まって放射状～火炎状に分布する。輪初の大道管は密に接し、その間隔は狭い。木部柔組織に時に大形の細胞を含有している。道管と放射組織との交わる部分の膜孔は、主として縦長角丸の矩形～楕円形である。放射組織は1－((2))細胞列で、同性の傾向が強い。クリ材は大道管と小道管との大きさの差があり、かつカシ材のような広放射組織が存在しないため板目の割裂性に勝れている。この性質は、次に述べるカシ材との大きな相違である。

カシ（アカガシ属1種）　Cyclobalanopsis sp.　1点

杭 No.55

放射孔材。道管と放射組織との交わる部分に棚状の膜孔が存在する。単列・広放射組織が存在する。4～5年生の材。

クスノキ　Cinnamomum camphora　4点

柱根 No.02, No.27, No.96、木片 No.30

散孔材。道管は単独又は2～3個宛複合する。単独道管の最大接線径200μm、道管の穿孔板は単、小道管では時に階段状で bar（横線）の数は少ない。道管に螺旋肥厚が存在する。道管相互間の膜孔は交互状。道管を取り巻く木部柔組織は顕著で、時に大形の油細胞となる。道管と放射組織との接する部分の膜孔は大形である。放射組織は1～3(4)細胞列である。

ミズキ　Cornus controversa　1点

杭 No.63

散孔材。道管は単独、その多くは数個宛複合する。単独道管の接線径約80μm、道管の穿孔板は階段状、道管相互間の膜孔は対列状である。放射組織は異性で、1～4(5)細胞列である。

明らかとなった樹種と遺物及び出土地点とをそれぞれ表5及び表6で記した（時期は本章第1節の時期区分に従った）。別して問題となる樹種はないと考えられる。全体を通して、クリ材の使用頻度が高い。時代が降ると使用する樹種が多くなるが、これは材を採取した場所の相違とも考えられる。時期による相違は、マツ材の出現が大きいと考えられる。これはマツの蓄積が多い場所での使用材の採取が行われたのか、あるいは樹脂分の多いマツ材の処理が簡単に行われるようになったためとも考えられる。同じ針葉樹材でもイヌマキなどに比べれば手間のかかる仕事である。

いずれにしてもイヌマキも耐湿性に勝れた良材であり、マツは材に含有している樹脂により耐朽性に勝れている。シイ（とくにスダジイ）及びクリは材に含まれているタンニンにより、クスノキも材に含まれている精油（樟脳成分）により耐朽性のある良材である。なおミズキは軽軟な材で、あまり利用価値の高い材ではない。

表4　牛岡遺跡樹種同定資料一覧

番号	遺物名	出土地点	遺構	時代	樹種	番号	遺物名	出土地点	遺構	時代	樹種
01	木片	SH-04	SP-163	IV期？	マツ	34	木片	SH-11	SP-70	III期？	クリ
02	柱根	SH-06	SP 55	IV期	クスノキ	35	〃	〃	SP-263	〃	クリ
03	〃	〃	SP-81	〃	シイ	36	〃	SH 12	SP-437	III期	イヌマキ
04	礎板	〃	SP-72	〃	クリ	37	礎板	SH 13	SP-461	III期	イヌマキ
05	〃	〃	SP-101	〃	クリ	38	木片	〃	SP-433	〃	イヌマキ
06	〃	〃	SP-256	〃	シイ	39	〃	〃	SP-472	〃	イヌマキ
07	木片	〃	SP 48	〃	クリ	40	〃	SH 17	SP-169	IV期	クリ
08	〃	〃	SP 56	〃	マツ	41	〃	〃	SP-224	〃	マツ
09	〃	〃	SP-67	〃	シイ	42	柱根	C 群	SP-436		クリ
10	〃	〃	SP 101	〃	クリ	43	〃	F 群	SP-50		クリ
11	〃	〃	SP 279	〃	マツ	44	〃	〃	SP-68		クリ
12	〃	〃	SP-281	〃	クリ	45	〃	〃	SP-80		シイ
13	礎板	SH-07	SP-49	IV期	クリ	46	〃	〃	SP-96		クスノキ
14	木片	〃	SP-30	〃	クリ	47	〃	〃	SP-283		クリ
15	〃	〃	SP-31	〃	マツ	48	〃	〃	SP-293		クリ
16	〃	〃	SP-32	〃	クリ	49	礎板	〃	SP 62		クリ
17	〃	〃	SP-33	〃	マツ	50	〃	〃	SP-257		クリ
18	〃	〃	SP-39	〃	マツ	51	柱根	H 群	SP-139		マツ
19	〃	〃	SP-45	〃	クリ	52	〃	〃	SP-187		マツ
20	〃	〃	SP-113	〃	クリ	53	〃	〃	SP-213		マツ
21	柱根	SH-08	SP 59	IV期	シイ	54	木片	〃	SP-171		マツ
22	木片	〃	SP-52	〃	シイ	55	杭	C 群	SX-03	III期	カシ
23	〃	〃	SP-60	〃	マツ	56	〃	〃	〃	〃	クリ
24	柱根	SH-09	SP-61	IV期	マツ	57	〃	〃	〃	〃	クリ
25	〃	〃	SP-69	〃	クリ	58	木材	〃	〃	〃	クリ
26	〃	〃	SP-73	〃	クリ	59	〃	〃	〃	〃	クリ
27	〃	〃	SP-75	〃	クスノキ	60	〃	F 群	SX-04	IV期	マツ
28	〃	〃	SP-250	〃	シイ	61	〃	〃	〃	〃	クリ
29	〃	〃	SP-251	〃	クリ	62	杭	H 群	SF-03	IV期	マツ
30	木片	〃	SP-252	〃	クスノキ	63	〃	N 群	SX-05	III期	ミズキ
31	礎板	SH-10	SP-100	III期？	クリ	64	〃	〃	〃	〃	シイ
32	木片	〃	SP-76	〃	クリ	65	〃	〃	〃	〃	クリ
33	礎板	SH-11	SP 258	III期？	クリ						

表5　樹種と遺物名

遺構名		掘立柱建物跡			土坑・溝		
遺物名		柱根	礎板	木片	杭	木材	計
樹種名	イヌマキ		1	3			4
	マツ	4	1	8	1	1	15
	シイ	4	1	2	1		8
	クリ	9	6	11	3	3	32
	カシ				1		1
	クスノキ	3		1			4
	ミズキ				1		1
計		20	9	25	7	4	65

表6　樹種と出土地点

時期		III期						IV期								不明
遺構名		掘立柱建物跡				土坑・溝		掘立柱建物跡						土坑		柱穴
		10	11	12	13	SX03	SX05	04	06	07	08	09	17	SF03	SX04	
樹種名	イヌマキ			+	+											
	マツ							+	+	+	+	+	+	+	+	+
	シイ						+		+		+	+				+
	クリ	+	+			+	+		+	+		+	+		+	+
	カシ					+										
	クスノキ								+			+				+
	ミズキ						+									

第3節　牛岡遺跡の集落跡について

今回の調査では、竪穴住居跡1軒、多数の小穴、溝を検出した。小穴の多くは柱穴と考えられ、小穴の内から掘立柱建物跡21棟を確認した。遺構の時期は、奈良時代から江戸時代初期までとかなりの時期幅を持つことが明らかになった。ここでは、掘立柱建物跡の規格等を整理するとともに、各遺構群の状況を基にして集落の変遷について見ていくことにする。

1．掘立柱建物跡について

表7に検出した掘立柱建物跡の規格をまとめてみた。これを見ると、各建物跡の規格にいくつかの相違点が確認できる。建物跡の一部には、規格や時期に不明確な点もあり、その可否も含めて各規格毎に検討してみたい。年代の記述については、第1節で示したⅠ～Ⅳ期の区分を使用する。

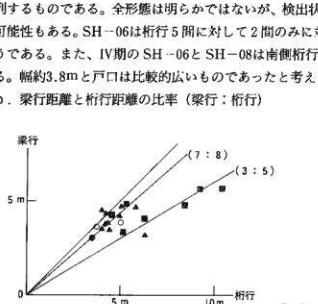
1）平面形態

a．梁行と桁行の柱間数（梁行×桁行）

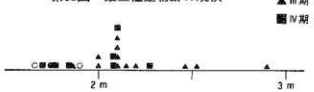
梁行柱間は1間から2間まで、桁行柱間は2間から5間まであり、平面形態は6種の組合せが見られる。時期別に見ると、Ⅰ期が2×2間(1)、Ⅲ期が1×2間(3)・1×3間(1)・2×2間(5)、Ⅳ期が1×2間(1)・1×3間(3)・1×5間(1)・2×4間(1)・2×5間(1)となる。Ⅰ期のSH－02は総柱建物であり、形態的に他と大きな違いがある。小規模なわりに柱穴が大きくなるのも特徴的である。Ⅲ期は桁行2間、Ⅳ期は桁行3間以上が主体となることがわかる。この傾向に反するⅢ期のSH－12とⅣ期のSH－13は、建物の規格の捉え方に問題があると言えそうである。

これらの建物の内、庇付建物の可能性があるものとしては、Ⅲ期のSH－12・SH－13とⅣ期のSH－06の3棟がある。いずれも、桁行方向に60cmあるいは1m前後の間隔をおいて、やや小規模な柱穴が並列するものである。全形態は明らかではないが、検出状況からSH－12は一面庇で、SH－13は二面庇の可能性もある。SH－06は桁行5間に対して2間のみに並列するもので、これらとは異なる作りとなるようである。また、Ⅳ期のSH－06とSH－08は南側桁行1間の柱が抜けており、入口であることがわかる。幅約3.8mと戸口は比較的広いものであったと考えられる。

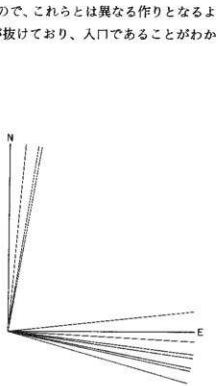
b．梁行距離と桁行距離の比率（梁行：桁行）



第82図　掘立柱建物跡の規模



第83図　掘立柱建物跡の桁行柱間距離



第84図　掘立柱建物跡の方位

表7　牛岡遺跡掘立柱建物跡規格一覧

遺構名	群別	平面形態	梁行	桁行	桁行柱間	面積	桁行方位	時期	備　考
01	A	2×2	3.45	4.4	2.2	15.2	N−0°−E	III?	
21	A	1×2	3.8	4.3	2.15	16.3	N−102°−E	III?	
02	B	2×2	3.0	3.45	1.75	10.4	N−0°−E	I	総柱
03	B	1×2	3.8	4.2	2.1	16.0	N−98°−E	III	
12	C	(1×3)	3.15	6.3	2.1	19.8	N−0°−E	III	庇付
13	C	(1×2)	4.5	4.0	2.0	18.0	N−10°−E	III	〃
14	C	(2×2)	3.5	4.0	2.0	14.0	N−90°−E	III	
16	E	(1×2)	4.35	4.2	2.1	18.3	N−90°−E	III	
06	F	2×5	5.6	9.2	1.84	51.5	N−90°−E	IV	庇付?
07	F	2×4	4.8	8.4	2.1	40.3	N−0°−E	IV	
08	F	1×5	5.6	10.4	2.08	58.2	N−93°−E	IV	
09	F	1×3	4.8	5.3	1.77	25.4	N−93°−E	IV	
10	F	2×2	4.65	5.8	2.9	27.0	N−0°−E	III?	
11	F	2×2	4.7	5.05	2.53	23.7	N−9°−E	III?	
04	H	1×3	4.05	6.25	2.08	25.3	N−5°−E	IV	
17	H	(1×2)	4.15	4.55	2.28	18.9	N−101°−E	IV	
18	H	1×3	3.3	5.1	1.7	16.8	N−93°−E	IV	
19	H	(1×3)	−	5.7	1.9	−	N−97°−E	?	
05	J	1×2	4.2	4.93	2.47	20.7	N−10°−E	III?	
15	L	(1×3)	3.85	5.0	1.67	19.3	N−106°−E	?	
20	M	(2×2)	3.6	3.73	1.87	13.4	N−84°−E	III?	

第82図は梁行距離と桁行距離を軸として、建物跡の規模を表したものである。距離は角柱の中心を結んだもので、ひずみのあるものは平均値を取っている。この図を見ると、梁行7：桁行8と梁行3：桁行5という2つの傾向が読み取れ、7：8にはⅢ期の建物が多く、3：5にはⅣ期の建物が多いことがわかる。この傾向に反する建物としては、Ⅲ期のSH－12とⅣ期のSH－09・SH－17があげられる。SH－12は、やはり1×2間の建物と理解すべきであろうか。SH－09とSH－17はⅣ期の中の形態差ともとれるが、SH－17の柱間数の不整合からしても、桁行が実際には数間伸びていた可能性が考えられる。Ⅲ期のSH－13とSH－16も上記の建物ほどずれはないが、比率が5：5を越えており、やはり建物の規格の捉え方に問題がありそうである。

c．桁行の柱間距離（桁行距離÷間数）

第83図に桁行の柱間距離を時期別に表した。これによると、ばらつきはあるものの、1.8m前後・2.1m前後・2.5m前後・2.9mに分けられそうである。Ⅰ期のSH－02は1.8m前後となり、Ⅲ期は2.1m前後と2.5m前後、Ⅳ期は1.8m前後と2.1m前後が主体となる傾向が見られる。1棟ずつとなるⅢ期のSH－10とSH－20は建物の規格の捉え方に問題があるのかもしれない。

2）建物の規模

第82図に示したように建物の規模は、大きく2つに分かれる。面積を見ると、10.4㎡～58.2㎡までとなる。Ⅰ期のSH－02は最小の10.4㎡で、ここでも他の建物とはっきり区分される。Ⅲ期は(14.0)～20.7㎡と全体的に小規模である。Ⅳ期は大小2つに分かれる。小規模なものでも、16.8～(25.4)㎡とⅢ期に比べ全体的に面積は広くなる。大規模なものは40.3～58.2㎡と、面積はほぼ2倍となる。このように、Ⅳ期に建物の規模が大きく変化することがわかる。SH－06とSH－07は棟続きの建物とも考えられ、その規模約90㎡を越える大きな「屋敷」となる可能性がある。

3）建物の方位

掘立柱建物跡21棟の内、南北棟9棟、東西棟11棟となる。第84図に各建物の桁行方位を図示した。これを見ると、殆どの建物が真南あるいは真北を基準にして建てられていることがわかる。強いてずれを指摘すれば、SH－15とSH－20があげられる。SH－15は建物の規格の捉え方に問題があるのかもしれない。SH－20は1棟のみ北に寄っており、柱間距離の違いも含め時期的な違いを示している可能性がある。

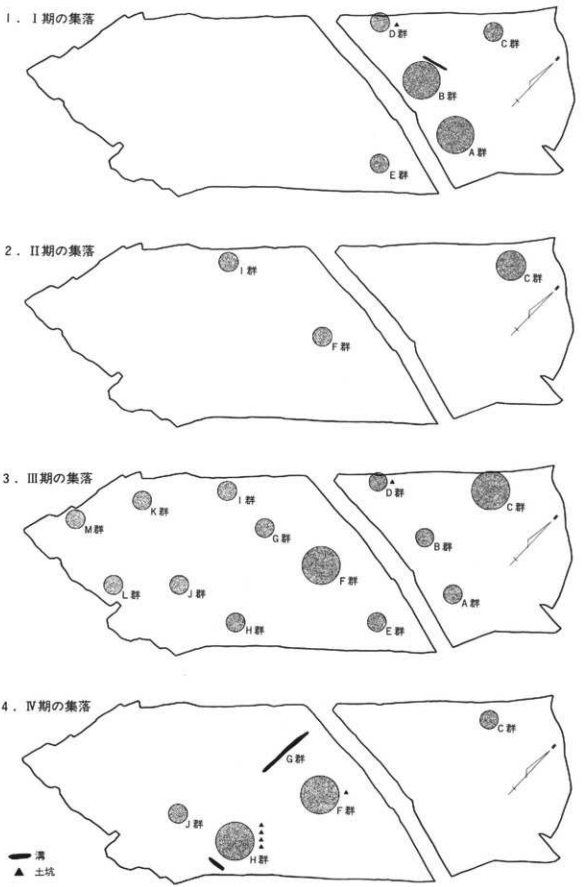
4）柱根および礎板の樹種

樹種については、第2節の山内氏の報告にあるとおり、マツ材の出現が大きな画期になっている。この画期がⅢ期とⅣ期の間にあることは、建物からだけでなく、土坑出土木材やⅣ期の遺物が多いH群出土柱根の材を見ても間違いないと考えられる。この報告によって、これまで時期判断が不明瞭であった建物の位置付けをより明確にすることができた。

各建物毎の使用材を表4で見ると、資料数が少ないためとも考えられるが、Ⅲ期の建物がイヌマキあるいはクリのみと1つの建物で同一材を使用しているのに対し、Ⅳ期の建物は数種の材が使用されていることがわかる。礎板については、クリ材の使用頻度が高いことが指摘できそうである。なお、多数の樹種を使用しているⅣ期のSH－06・SH－07・SH－09について、柱穴毎の使用材を照合したが、建物内での規則性は認められなかった。

2．集落の変遷について

今回検出した遺構は、第Ⅲ章で示したようにA群～N群の14群のまとまりに分かれる。このまとまりは、後の水田造成等の地形的要因によるものばかりでなく、各時期における建物の配置を示すものと考えられる。建物としては、竪穴住居跡1軒と掘立柱建物跡21棟を確認しただけで、1,000を越える小穴の明確な位置付けはできていない。そこで、各遺構群の状況と出土土器をもとに、集落の変遷について検



第85図　牛岡遺跡・集落変遷図

討してみたい。第85図は各遺構群の出土土器をもとに、第1節のⅠ～Ⅳ期の土器区分に従い、集落の変遷を追った図である。遺構群の中心を円で表し、建物に付随すると考えられる土坑と溝を記入した。円の大・小は、各時期における遺構・遺物の多少を大まかに示している。

Ⅰ期の集落（奈良時代）

集落の開始時期は、奈良時代前半と考えられる。A～Eの遺構群からなり、調査区北側の比較的標高の高い部分に集中する。出土土器は全体的に少ないが、A・B群に比較的多く、竪穴住居跡SB－01と掘立柱建物跡SH－02を検出している。A・B・E群は地形的に1つのまとまりと考えられ、現況ではこのまとまりとC群、D群の3つの小単位が1組になって、集落が形成されていたものと思われる。B群から検出された溝SD－05は、他群とを画する溝の可能性もあるが、SH－02はその構造から倉庫跡である可能性が高く、この3小単位によってSH－02は共有されていたとも考えられる。もちろん、年代幅もあり、Ⅰ期を通してこのような状況であったとは言えない。

Ⅱ期の集落（平安時代）

C・F・Iの遺構群からなり、調査区の比較的北寄りに広がるが、やや散在的である。出土土器はⅠ期に比べさらに少なく、建物跡も確認できていない。出土土器はC群の山裾寄りに目立ち、Ⅰ期同様に調査区北側に集落の中心があったと推測される。年代幅が広いわりに出土土器は少なく、集落は極めて小規模であったと考えられるが、小規模ながらも集落は継続していたと推測される。

Ⅲ期の集落（平安時代末～鎌倉時代）

全ての遺構群からなり、集落が最も拡大した時期である。Ⅲ期の中での動きを見ると、12世紀前半はⅡ期に続いて集落は比較的小規模であったと思われ、12世紀後半から集落は拡大して行ったと考えられる。13世紀末からまた集落は縮小して行き、14世紀代には極端に小規模なものであったと推測される。検出した建物跡は、推定も含めて掘立柱建物跡11棟がある。中でも、C群とF群が大きなまとまりを持ち、集落の中心であったと推測される。建物跡は平面形態1×2間あるいは2×2間で、規模には極端な違いは認められない。調査した部分だけを見ると、集落内にそれほど大きな格差があったとは思えない。当然、当集落だけで完結していたとは考えがたく、付近により拠点的な集落あるいは溝によって区画された「屋敷」の存在が考えられる。

Ⅳ期の集落（室町時代～江戸時代初頭）

C・F・G・H・Jの遺構群からなり、集落の中心は南側へ移動する。この時期、F群とH群には井戸状の深い土坑が多く見られるようになる。また、H群の南端には土坑墓が検出されており、「屋敷墓」的な在り方をしている。14世紀代の状況はほとんど捉えられないが、15世紀後半になって土器がまた見られるようになる。15世紀から16世紀前半にかけての建物跡は確認できていないが、Ⅱ期と同様にその在り方は散在的であり、この時期には集落は比較的小規模なものであったと考えられる。ところが、16世紀後半になって集落の構造は大きく変化する。建物遺構はF群とH群に限られ、これらはG群から検出された溝SD－12によって囲まれていた可能性があり、ひとつの「屋敷地」として捉えることができる。検出した建物跡は掘立柱建物跡7棟があり、平面形態1×3間～2×5間までと大小が見られる。規模の大きなものはF群に集中し、小さなものはH群に多い。F群とH群の在り方の違いは、母屋とそれに付随する建物として捉えられると思われる。

当集落は遅くても17世紀前半には、一時的に廃絶したと考えられる。その理由としては、自然的要因が考えられる。第3図の調査区内の地形に示したように、調査区内には浅い流路状の凹みが認められ、おそらく集落は、この頃洪水によって洗い流されてしまったと推定される。その後の遺構は確認できていないが、『東海道分間延絵図』（東京美術1981）を見ると、遺跡内に3棟の建物があり、19世紀初頭以前には再び住んでいたことがわかる。現地調査前には、2軒の民家が建っていた。

第４節　頭地遺跡出土土器について

今回の調査では、須恵器、灰釉陶器、土師器、山茶碗が出土している。以下、各土器の器種とその特徴を整理し、年代的位置付けについて検討していきたい。

１．器種とその特徴

１）須恵器

出土土器の大半を須恵器が占める。器種には、坏・鉢・皿・壷・平瓶・横瓶・甕がある。

坏

坏蓋と坏身があり、坏身は有台坏身・無台平底坏身・碗状坏身に器形分類される。

坏蓋

すべて扁平な宝珠状つまみを持つと考えられる。受部の形態から５つに分類される。

Ａ１類（597～600）

受部は折れずに、三角形状となる。そのため内面は内彎する。天井部は丸味を持つ。口径は15cm 前後と17cm 程に分かれる。

Ａ２類（602～604）

受部は折れて、下方に伸びる。天井部は丸味を持つ。口径は16cm 前後と23cm 程に分かれる。

Ａ３類（601･605～607･611）

受部は折れて、端部は小さく外反する。天井部は丸味を持つ。口径は15cm 前後と18cm 程に分かれる。

Ａ４類（608～610）

受部は折れて内傾し、端部は小さく外反する。天井部は扁平となる。口径は15cm 前後と18cm 程に分かれる。

Ａ５類（612～615）

受部は折れて内傾する。天井部は扁平となる。口径は15cm 前後と18cm 前後に分かれる。

有台坏身

坏部の形態からＡ・Ｂの２つに分かれ、Ａ類は５つに細分される。

Ａ１類（616～618）

底部が高台より突出し、体部は下半で湾曲して立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。口径は14cm 前後と15cm 程に分かれる。器高は4.4～4.7cm と比較的高い。

Ａ２類（619～625･638）

底部の突出は弱まり、体部は下半で屈曲し、口縁部は比較的直線的に立ち上がる。口径は14cm 前後と15cm 前後に分かれる。

Ａ３類（626～630･637）

Ａ２類と形態的に近いが、底部は比較的平らとなり、高台の位置が体部の屈曲部に近づく。口径は14cm 前後で、器高はやや低くなる。

Ａ４類（631～636）

底部は比較的平らで、体部は下半で屈折して直線的に立ち上がり、口縁部へ移行する。口径は14cm 前後と15cm 程に分かれる。器高は3.5～4.1cm と低くなる。

Ａ５類（639）

体部は碗状で、比較的高い高台が付く。坏部の形態はＡ１類に近い。口径13.6cm と小振りのわりに器

高は高い。

B類（640）

全形態は明らかではないが、口径が大きく身も深く、体部は直線的に開く。

無台平底坏身

形態からやや碗状となるA類と箱形となるB類に分かれ、さらに細分される。

A１類（660・661）

身が深く、体部は湾曲して立ち上がる。口径は14cm 前後である。

A２類（652・663）

底部は張り出し、体部は下半で屈曲して内彎気味に立ち上がり、口縁部へ移行する。口径は14cm 前後である。

B１類（670）

底部はやや張り出し、底部外縁まで回転ヘラ削り調整を施す。体部は屈折して直線的に開き、口縁部は小さく外傾する。口径は13cm 前後である。

B２類（664～669）

底部は平らとなり、底部の回転ヘラ削り調整は外縁まで及ばない。体部は屈折して直線的に開き、口縁部は外反するものとしないものがある。口径は13cm 前後と14cm 前後に分かれ、B１類に比べ器高は低くなる。

B３類（659）

身が深く、底径に比べ口径が大きい。体部は内彎気味に開く。口径は13cm 前後である。

碗状坏身

底部の調整は、回転ヘラ削りと未調整のものがある。全体的に体部のノタ目が顕著である。口径は14cm 前後とほぼ均一である。形態から４つに分類される。

A１類（641～643）

体部は半球形で、口縁部はやや内彎する。

A２類（644～648）

体部は半球形で、口縁部は小さく外反する。

A３類（649～656）

底部の丸味が弱まり、体部は比較的直線的に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。

A４類（657・658）

口縁部はやや肥厚し、上端を面取りする。全形態は明らかではないが、碗状坏身に含めた。

鉢

形態的には碗状坏身に類似するが、口径が19cm 前後と大きいことから鉢とした。形態から２つに分かれる。

A類（672）

体部は半球形で、口縁部は弱く外反する。

B類（673）

底部は比較的平らと考えられ、体部下半で湾曲し、口縁部は弱く外反する。

皿

形態から２つに分かれる。

A類（674）

体部はやや内彎して開き、口縁部は小さく外傾する。口径は（18.1）cm である。

B類（675）

身が深く、体部は直線的に立ち上がり、口縁部は斜めに面取りする。口径は(23.4)cmである。器形としては、高台を有する可能性がある。

壺

口頸部の長短から大きく2つに分かれ、短頸壺はいわゆる短頸壺と広口短頸壺に器形分類される。

短頸壺

口縁部等の形態から2つに分かれ、さらに細分される。

A類（676）

小形で、体部上半が張り出し、口縁部は短く内傾気味に立ち上がる。

B類

やや大形で、口縁部は直立あるいは内傾する。口縁部の形態から3つに分かれる。1類・2類はいわゆる四耳壺と呼ばれるものである。

B1類（694）

肩部が強く張り出し、口縁部は短く内傾する。

B2類（695）

肩部は比較的丸味を持ち、口縁部はやや長く直立する。

B3類（677）

全形態は明らかではないが、肩部は比較的丸味を持ち、口縁部は短く直立する。

広口短頸壺

体部の形態から3つに分かれ、さらに細分される。

A類（678）

体部は球形状となる。口縁部は弱く外反し、端部はやや丸くなる。

B類

全形態は明らかではないが、肩部が強く張り出す。口縁部の形態から2つに分かれる。

B1類（679）

口頸部は外反し、口縁端部は丸くなる。

B2類（681）

口頸部はくの字状に外反し、口縁端部は方形状となる。

C類

体部上半が張り出すものであるが、B類に比べ張り出しは弱くなる。形態から2つに分かれる。

C1類（682～686）

口頸部は外反し、口縁部は端部を上下に引き出し、断面形は三角形状となる。

C2類（681）

口頸部は直立気味となり、やや長胴となる。

長頸壺

口縁部はラッパ状に外反し、端部は丸くなる。体部の形態から2つに分かれる。

A類（689・690）

体部は比較的球形状となる。

B類（691～693）

体部は逆台形状となる。

平瓶（701）

広口で、口縁部は外反し、外縁を引き出す。

横瓶

口縁部は外反し、断面形は三角形状となる。体部の形態から2つに分かれる。

A類（702）

体部は横長となる。

B類（703～705）

体部はA類に比べ横に短く、球形に近い。

甕

口径20cm前後で、法量に大きな差は見られない。口縁部の形態から3つに分かれる。

A1類（706～712）

口縁部は下端を引き出し、断面形は三角形状となる。

A2類（713～716）

口縁部は下端を引き出し、上端を摘みあげる。頸部に三角形の凸帯を付すものがある。

A3類（717～722）

口縁部は上端を上に強く引き出す。

2）灰釉陶器

出土量はきわめて少ない。器種には碗・皿がある。

碗

底部の形態から2つに分かれる。

A1類（725）

高台は低い三日月状高台で、底部は回転ヘラ削り調整を施す。

A2類（723・724・726）

高台はややくずれた三日月状高台で、底部は糸切り未調整である。体部は直線的に開き、口縁部は小さく外反する。同一個体と考えられ、無釉である。

皿（724・727）

体部は緩やかに湾曲し、口縁部は小さく外反する。高台は三日月状高台で、施釉は刷毛塗りである。同一個体と考えられる。

3）土師器

出土量は少ない。器種には坏・碗・高坏・甕がある。

坏（730）

平底で、体部下半で湾曲して立ち上がり、口縁部は弱く外反する。

碗（728・729）

体部は下半で湾曲し、直線的に口縁部へ移行する。

高坏（731）

坏部は碗状を呈し、脚部はハの字状に開く。

甕（732・733）

口頸部はコの字状に外反し、口縁端部は弱く内彎する。

4）山茶碗

2点のみで、器種には小碗と小皿がある。

小碗（735）

低い三角高台で、口縁部は内彎する。

小皿（736）

底部はやや突出し、口縁部は内彎する。

2．年代的位置付け

1）須恵器

今回出土した須恵器は、その胎土・色調から大半が湖西窯産と考えられる。湖西窯での須恵器編年は後藤健一氏によってまとめられており（後藤1989）、出土した須恵器はすべて後藤編年のⅣ期からⅤ期に対応するものと考えられる。以下、各器種毎に後藤編年に対比させていくことにする。

坏蓋は、天井部に丸味を持つものから扁平なもの へ、受部が下方へ伸びるものから内傾するものへという傾向が考えられ、Ａ１類・Ａ２類→Ａ３類→Ａ４類→Ａ５類という形態変化が想定される。Ａ１類とＡ２類は、後藤編年によると共存する別系列の坏蓋とされており、同時期と考えられる。Ａ３類も同様に分類される可能性があるが、判別できなかった。Ａ１類～Ａ３類はⅣ期に、Ａ４類・Ａ５類はⅤ期に対応するものと思われる。

有台坏身は、器高が高いものから低いものへ、体部が丸いものから屈折するものへ、底部に丸味を持つものから平底へという傾向が考えられ、Ａ１類→Ａ２類→Ａ３類→Ａ４類という形態変化が想定される。Ａ５類とＢ類は、後藤編年の蓋付有台坏身ＢｂとＥにそれぞれ対応すると考えられる。すべてⅣ期に対応するものと思われる。

無台平底坏身は、有台坏身からの形態変化とすると、有台坏身Ａ４類→Ｂ１類→Ｂ２類という変化が想定される。Ｂ類はⅤ期に対応するものと思われ、坏蓋Ａ４類・Ａ５類と組合せになると考えられる。Ａ類は有台坏身Ａ４類からの変化とは考えがたく、むしろ形態的には有台坏身Ａ１類・Ａ２類から高台を取り除いたものに近く、Ｂ類に先行する可能性も考えられる。

碗状坏身は丸底から平底へという傾向が考えられ、Ａ１類→Ａ２類→Ａ３類という形態変化が想定されるが、下滝遺跡３区 SB01（浜松市遺跡調査会1985）ではＡ２類とＡ３類が伴出しており、このような傾向だけではないようである。後藤編年ではいくつかの形式に分けられており、これらとの対比は難しい。不明確ではあるが、ほぼⅣ期に対応するものと思われる。

鉢は類例が確認できていないが、形態的に碗状坏身に類似していることから、Ⅳ期に属すると推定している。

皿Ａ類はⅤ期に対応し、皿Ｂ類も後藤編年の大皿Ｂｂと同形態とすれば、同じくⅤ期に対応するものと思われる。

短頸壷Ａ類は、平尾野添横穴群Ｂ-ｃ-２号（静岡県埋蔵文化財調査研究所1992）に類例があり、Ⅳ期に属する可能性が高い。短頸壷Ｂ類は、肩部が丸味を持つものから屈折するものへという変化が考えられることからより古く位置付けられ、Ⅳ期に属するものと思われる。広口短頸壷は球形胴から長胴へという傾向が考えられ、Ａ類→Ｃ１類→Ｃ２類という形態変化が想定されるが、口縁部の形態が異なっており、出土例も少なくはっきりしない。Ｃ１類は、半田山古墳群Ａ小支群Ａ15号墳（浜松市遺跡調査会1984）に類例がみられる。Ａ15号墳のものは底部に丸味があることから、平底となるＢ１類はより後出と考えられ、Ⅴ期までﾄﾞる可能性もある。Ｂ類については、類例が確認できていない。

長頸壷は、形態的にはＡ類→Ｂ類への形態変化が考えられるが、この時期両者は共存しており、いずれもⅣ期に対応するものと思われる。

平瓶は、肩部に丸味を持つものから屈折するものへという変化が考えられることから、より古く位置付けられ、Ⅳ期に属するものと思われる。

横瓶Ａ類とＢ類は、前段階からすでに共存しており、時期差とは考えられない。この時期の横瓶の出

土は珍しく、より古く位置付けられ、Ⅳ期に属するものと考えられる。

甕は、口縁部断面形が三角形から四角形へ、頸部凸帯の消滅という傾向が考えられ、A1類～A3類はすべてⅣ期に対応するものと思われる。甕の形態変化は捉えづらいが、前段階のものは口縁部断面形が三角形のものが多く、A2類は凸帯を付すものを含むことから、A1類→A2類→A3類という形態変化が想定できるかもしれない。

以上整理すると、Ⅳ期に属するものは、坏蓋A1類～A3類、有台坏身、碗状坏身、短頸壷A類・B類、広口短頸壷A類、長頸壷、平瓶、横瓶、甕、V期に属するものは、坏蓋A4類・A5類、無台平底坏身B類、皿となる。また、無台平底坏身A類はⅣ期に、広口短頸壷はV期に属する可能性がある。坏類等一部の器種に見られた形態変化は、各期の中での時期差として捉えることができる。実年代については、後藤編年によるとⅣ期が8世紀初頭～8世紀第2四半世紀前半、V期が8世紀第2四半世紀後半～8世紀末となる。

2）灰釉陶器

碗は、底部ヘラ削り調整から糸切り末調整へという傾向があり、A1類→A2類という形態変化が想定される。高台の作りが粗雑で、無釉である等やや新しくなる要素も見られるが、形態からいずれも松井一明氏の灰釉陶器編年（松井1989）のⅢ期に対応するものと考えたい。皿は、その特徴から松井編年のⅡ期に対応するものである。実年代については、松井編年によるとⅢ期が10世紀前半、Ⅱ期が9世紀後半ということになる。

3）土師器

坏は、下滝遺跡7区SB02（浜松市遺跡調査会1985）に類例があり、伴出須恵器から後藤編年のV期前半代に位置付けられると思われる。碗は、形態的には灰釉陶器碗の模倣と推測され、出土状況からも灰釉陶器に伴うものと思われる。高坏は、形態的にいわゆる高盤とは異なり、在地的なものと考えられ、時期的には後藤編年Ⅳ期に伴うものと推定される。甕は、形態から8世紀代のものと考えられるが、この時期あまり大きな形態変化がなく、細かな位置付けは難しい。

4）山茶碗

小碗と小皿は東遠産と考えられ、それぞれ牛岡遺跡における山茶碗分類の小碗c3類と小皿b3類に対応する。小碗は12世紀中頃～後半、小皿は12世紀末～13世紀前半に位置付けられる。

第5節　おわりに

本書では、牛岡遺跡と頭地遺跡の調査結果を報告した。牛岡遺跡は上層から検出した遺構・遺物に限ったため「牛岡遺跡Ⅰ」とし、頭地遺跡は牛岡遺跡と隣接し、時期的にも重なることから合本とした。

牛岡遺跡は、今回の調査によって、奈良時代から江戸時代初期にかけての集落跡であることが明らかになった。検出した遺構の大半は小穴で、そのほとんどが掘立柱建物跡の柱穴と考えられた。しかし、これらの柱穴群の中から確認できた掘立柱建物跡は、わずか21棟だけであった。本来は、この数倍の建物が継続的に建てられていたと推定され、調査の不手際を深く反省している。不十分な所見からではあるが、すでに述べたように当集落は、きわめて単位的な集落として奈良時代に開始され、12世紀後半から13世紀代に拡大し、16世紀後半になって大きく変貌していったと推測される。このような集落の動向が、歴史の大きな変換期と重なるのは、単なる偶然とは思えない。当該期の集落構造において、当集落及びその内容がどのように位置付けられるかが、今後の大きな課題となろう。いずれにしても、これだけ広範囲にわたる集落跡の発掘調査例は少なく、時期的にも数少ない事例であり、当該期の集落構造を考える上で、貴重な資料となるものと思われる。

頭地遺跡は、灰釉陶器などが散布する遺跡として、従来から知られていた遺跡である。今回の調査に

よって、遺跡の範囲がある程度明確になり、遺跡の内容もほぼ把握することができた。今回の調査地点は、遺跡の南端部にあたる。調査面積が狭かったため、牛岡遺跡ほど遺跡の内容は明らかではないが、8世紀から13世紀にかけての遺構と遺物が検出され、当遺跡が主として当該期の集落跡であることが明らかになり、それ以降も遺跡は継続していた可能性を窺わせている。

頭地遺跡と牛岡遺跡は、ほぼ同時期に営まれていた集落跡であり、逆川を隔てて隣接する両集落が密接な関係にあったことは間違いないと思われる。奈良時代に限って見ると、遺構や遺物の状況から牛岡遺跡は頭地遺跡の枝村と理解することもできる。また、付近を通っていたと考えられる古代東海道と両集落がどのように関わっていたかも、興味ある問題である。今後、頭地遺跡の内容がより明確になっていくことに期待したい。不十分な報告ではあるが、両遺跡の調査結果が、この地域における古代から近世にかけての歴史研究の一助となれば、幸いである。

調査ならびに本書の作成にあたっては、多くの方々のご指導・御助言・御協力をいただいた。末尾ながら、この場をかりて深くお礼申し上げたい。

＜参考文献＞

掛川市教育委員会　1984　『掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ』
掛川市教育委員会　1984　『掛川市遺跡分布調査報告Ⅱ』
掛川市　1984　『掛川市史－中巻－』
湖西市教育委員会　1982　『東笠子（ＨＫ）第27地点遺跡発掘調査報告書』
湖西市教育委員会　1984　『青半古窯跡・新古古窯跡発掘調査報告書』
湖西市教育委員会　1991　『山口第17地点古窯跡発掘調査報告書…農村基盤総合整備パイロット事業湖西地区新町工区発掘調査報告書－』
浜松市遺跡調査会　1984　『半田山古墳群Ａ小支群・半田山Ⅲ遺跡』
浜松市遺跡調査会　1985　『下滝遺跡－半田地区上地区画整理事業に伴う埋蔵文化財範囲確認調査…』
磐田市教育委員会　1993　『見付端城遺跡発掘調査報告書』
袋井市教育委員会　1990　『大門遺跡Ⅴ－大門Ⅰ遺跡第５次発掘調査報告書－』
袋井市教育委員会　1982　『一般国道１号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報…坂尻遺跡第２次調査－』
袋井市教育委員会　1984　『坂尻遺跡－平安時代・中世編－』
島田市教育委員会　1976　『旗指古窯址群－一般国道１号島田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（本文編）－』
島田市教育委員会　1983　『旗指古窯跡』
静岡県教育委員会　1989　『静岡県の窯業遺跡（静岡県内窯業遺跡分布調査報告書）』
愛知県教育委員会　1986　『愛知県古窯跡分布調査報告Ⅴ（渥美古窯跡群）』
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　1990　『頭地遺跡・牛岡遺跡…平成元年度日坂バイパス埋蔵文化財発掘調査概報－』
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　1991　『牛岡遺跡－平成２年度日坂バイパス埋蔵文化財発掘調査概報－』
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　1992　『平尾野添横穴群－平成２・３年度菊川内山住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　1991　『原川遺跡Ⅳ－平成２年度袋井バイパス（掛川地区）埋蔵文化財発掘調査報告書－』

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　1989　『大谷川Ⅳ（遺物・考察編）－巴川（大谷川）総合治水対策特定河川事業埋蔵文化財発掘調査報告書（神明原・元宮川遺跡）４－』
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　1985　『祝田遺跡Ⅱ－昭和57～59年度都田川河川改修工事（細江地区）埋蔵文化財発掘調査報告書－』
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　1994　『祝田遺跡－平成４年度二級河川都田川住宅宅地関連公共施設設備促進事業工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
財団法人大阪文化財センター　1980　『陶邑Ⅲ』
川江秀孝　1979　「静岡県下の須恵器について」
『須恵器－古代陶質土器－の編年』　静岡県考古学会
後藤健一　1989　「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」
『静岡県の窯業遺跡（静岡県内窯業遺跡分布調査報告書）』　静岡県教育委員会
斉藤孝正　1989　「灰釉陶器の研究Ⅱ」
『名古屋大学文学部研究論集104』　名古屋大学
佐野五十三　1990　「滑郷型甕の研究－煮沸形態からみた古代末の東海地方－」
『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要Ⅲ』　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
松井一明　1989　「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」
『静岡県の窯業遺跡（静岡県内窯業遺跡分布調査報告書）』　静岡県教育委員会
後藤健一　1987　「遠美・湖西古窯跡群」
『マージナル』No.７　愛知考古学談話会
松井一明　1993　「遠江における山茶碗生産について」
『静岡県考古学研究』No.25　静岡県考古学会
塚本和弘　1994　「皿山古窯跡群の成立と終末について」
『地域と考古学』　向坂鋼二先生還暦記念論集刊行会
藤澤良祐　1982　「瀬戸古窯址群Ⅰ」
『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』　瀬戸市歴史民俗資料館
中野晴久　1994　「赤羽・中野「生産地における編年について」」
『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」』　日本福祉大学知多半島総合研究所
森田　勉　1978　「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」
『九州歴史資料館研究論集４』　九州歴史資料館
新田　洋　1985　「平安時代～中世における煮炊用具－伊勢型鍋－に関する若干の覚書」
『三重考古学研究』１　三重考古学談話会
足立順司　1994　「消費地出土の初山焼・志戸呂焼－原川遺跡を中心に－」
『地域と考古学』　向坂鋼二先生還暦記念論集刊行会
藤澤良祐　1986　「瀬戸大窯発掘調査報告」
『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』　瀬戸市歴史民俗資料館
松井一明　1993　「東海地域のかわらけ編年について」
『久野城Ⅳ』　袋井市教育委員会

図　　版

(写 真)

図版Ⅰ　遺跡周辺環境Ⅰ（空中写真）

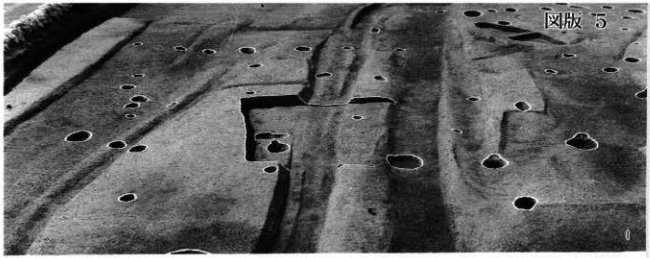
向畑遺跡
社宮寺遺跡
牛岡遺跡

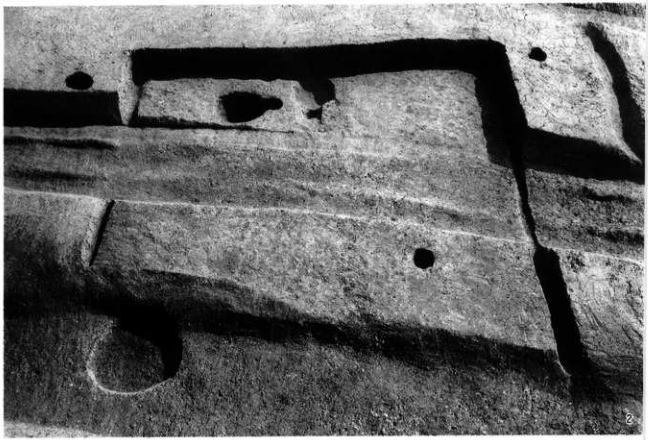
図版 2　遺跡周辺環境 2（空中写真）

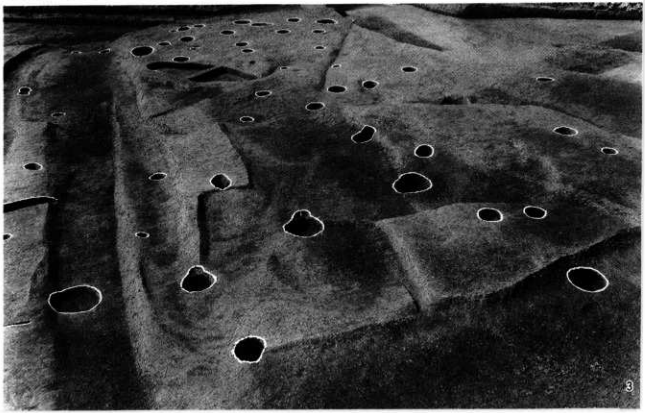
図版３　牛岡遺跡遺構全景（南西から）

図版４　１．牛岡遺跡遺構全景（北東から）
２．Ａ群遺構全景（東から）

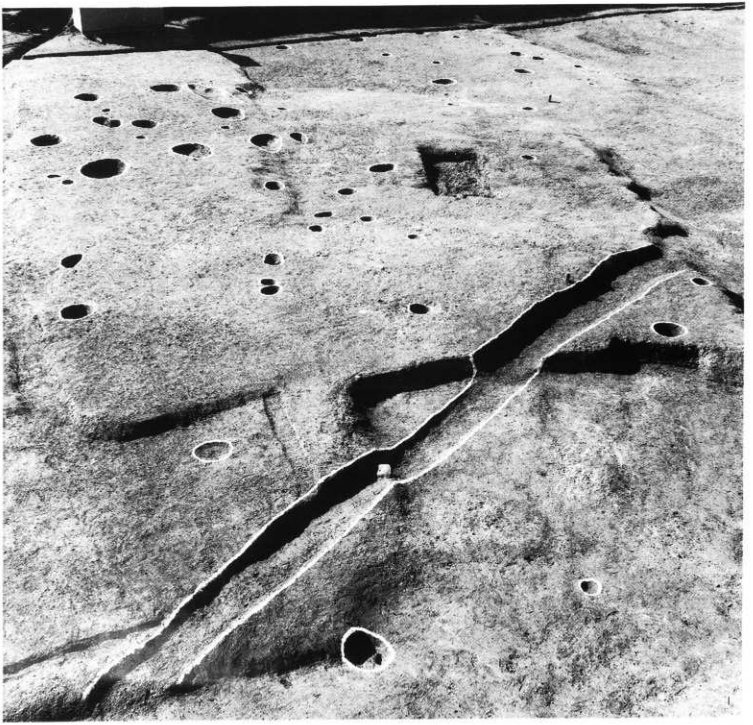
図版5　1．SB－01周辺（東から）
　　2．SB－01（北から）
　　3．SH－01（東から）

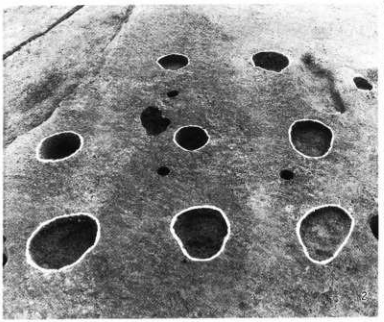

1

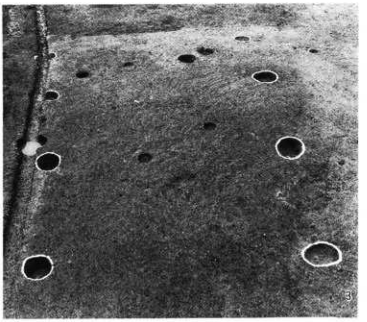

2


3

図版６　１．Ｂ群遺構全景（北東から）
２．SH－02(北から)
３．SH－03（東から）

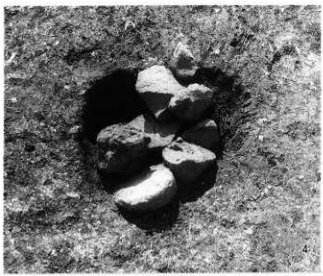




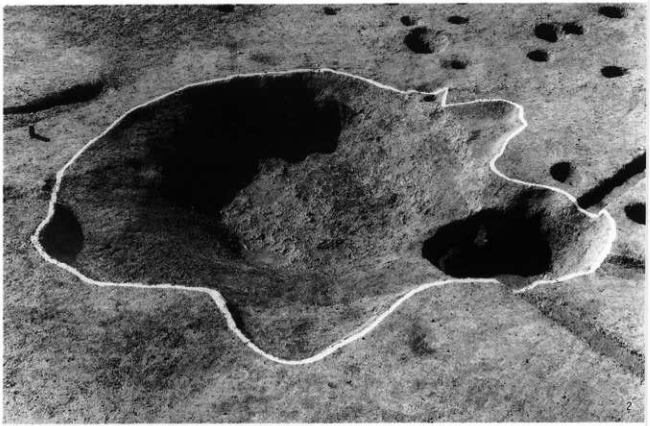


図版７　１．Ｃ群西側遺構全景（北東から）
　　２．Ｃ群東側遺構全景（南から）

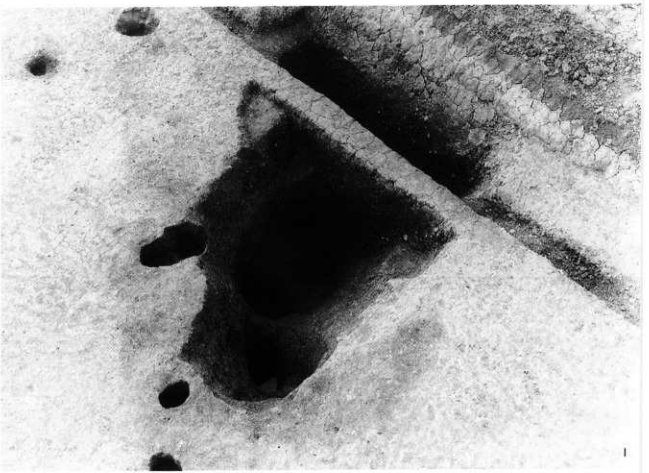
図版8　1．SH－12～14（東から）
2．SH－12（北から）
3．SP－445検出状況
4．SP－443検出状況
5．SP－405検出状況



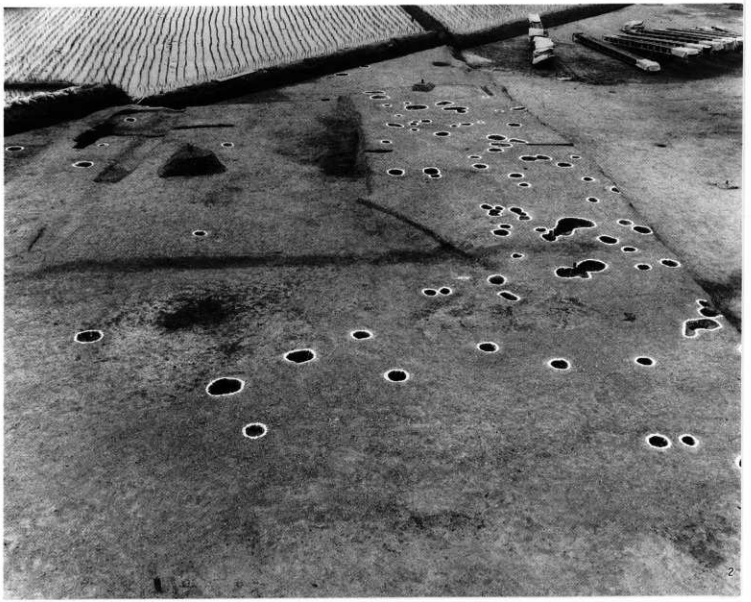
図版 9　1．SX－03検出状況（南から）
2．SX－03完掘状況（北から）
3．SX－03遺物出土状況
4．SX－03遺物出土状況



図版10　1．D群遺構全景（東から）
2．E群遺構全景（北から）

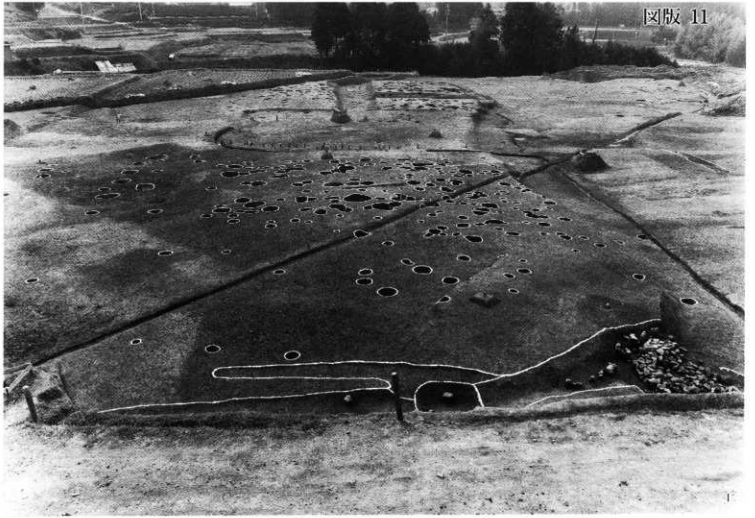


1

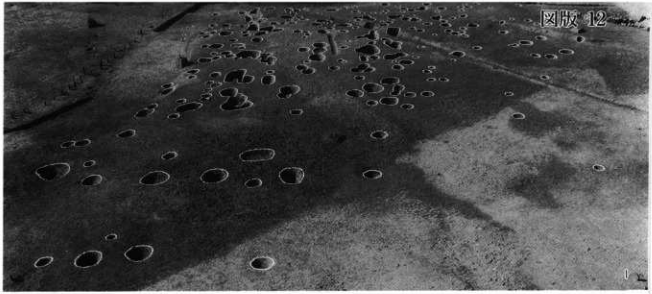


2

図版11　1．F群遺構全景（北から）
2．F群遺構柱穴群（北から）



図版12　1．SH－06～08（東から）
2．SH－06・07（東から）
3．SP－55検出状況
4．SP－72検出状況
5．SP－69検出状況
6．SP－251検出状況


1

2

3

4

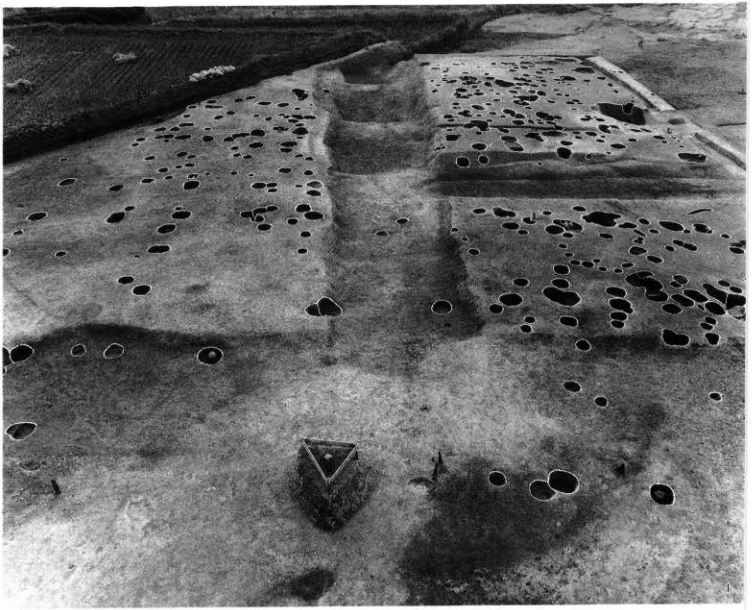
5

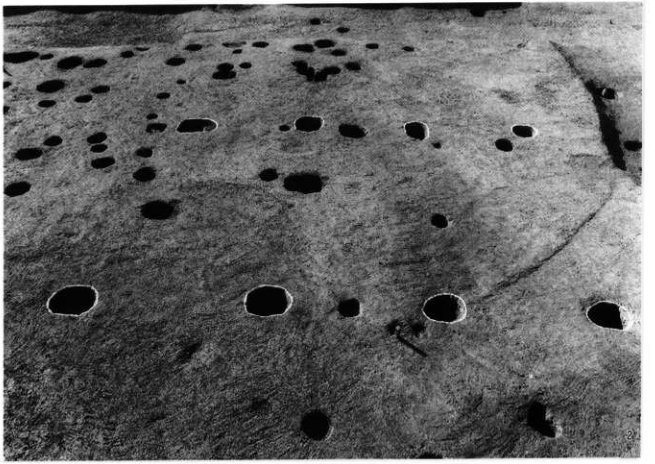
6

図版13　1．SF－01（西から）
2．SF－04（南から）
3．SF－06（西から）

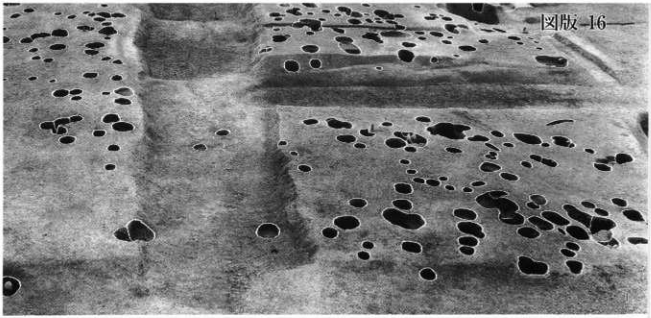
図版14　1．SX－04遺物出土状況
2．SX－04完掘状況（西から）
3．G群遺構全景（西から）

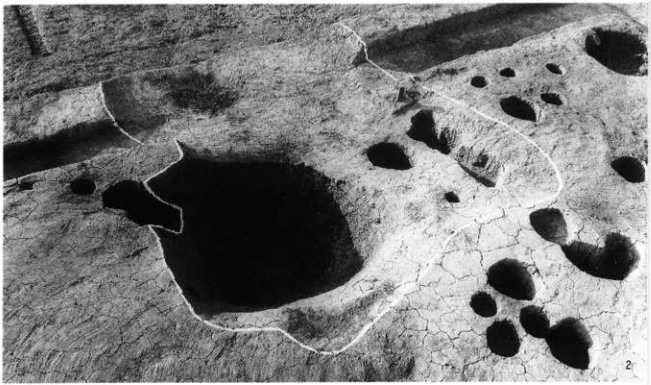
図版15　1．H群遺構全景（北から）
2．SH－04（北から）





図版16　1．SH－17・18（北から）
2．SF－02（南から）
3．SF－03検出状況（西から）





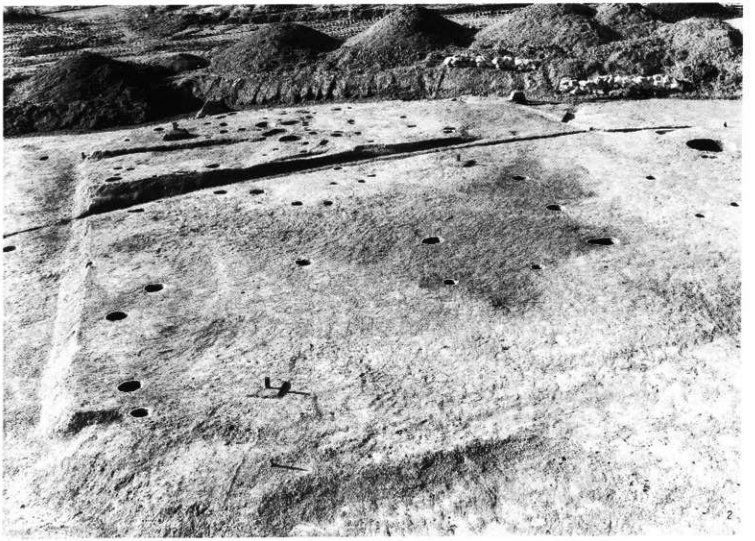
2

3

図版17　1．SF－03完掘状況（西から）
2．SF－05（北から）
3．SF－07（南から）

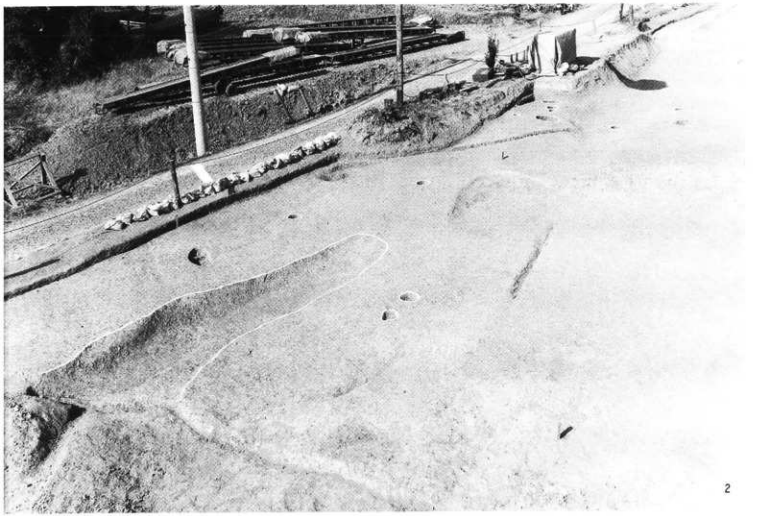
図版 17

図版18　1．I群遺構全景（北東から）
　　2．J群遺構全景（南から）

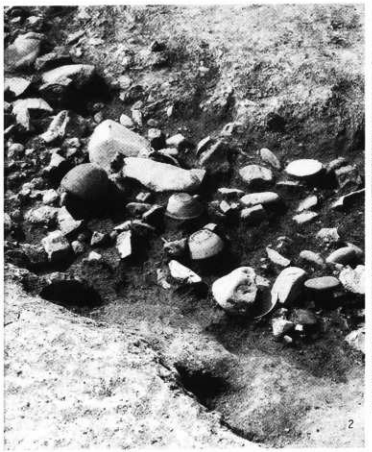


図版19　1．SH－05（北から）
　　2．K群遺構全景（東から）

図版20　1．L群遺構全景（南から）
2．M群遺構全景（南から）



図版21　1．N群遺構全景（西から）
2．SX－05遺物出土状況
3．SX－05遺物出土状況



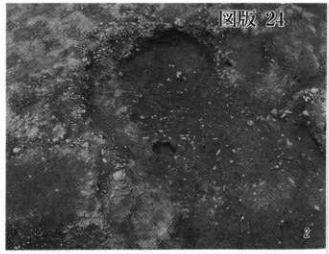
2

3

図版22　1．頭地遺跡遺構全景（南東から）
2．頭地遺跡遺構全景（北から）

図版23　1．SX－02遺物出土状況
2．SX－01上面礫検出状況（南東から）
3．SX－01下面石組検出状況（南東から）

図版24　1．SX－01遺物出土状況
2．SX－01完掘状況（南東から）
3．SH-01（南東から）
4．SX－03検出状況（南から）



図版25　牛岡遺跡出土土器（1）
実測図番号　36～38・60～62・85・101・102・132
159・161・171・173・185・186

36

37

38

60

61

62

85

101

102

132

159

161

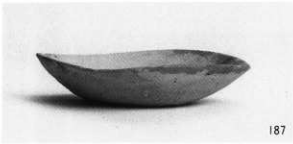
171

173

185

186

図版25　牛岡遺跡出土土器（2）
実測図番号　187・220～224・229～231
233・235～237


187

230

220

231

221

233

222

223

235

224

236

229

237

図版27　牛岡遺跡出土土器（3）
実測図番号　239～246・248～251・256・271

239

240

241

242

243

244

245

246

248

249

250

251

256

271

図版28　牛岡遺跡出土土器（4）
実測図番号　274・275・277・280～284・287
291・293・296・298・299

274

275

277

280

281

282

283

284

287

291

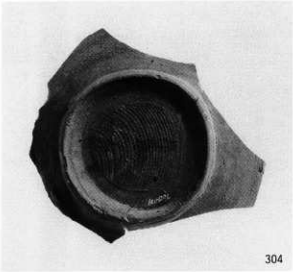
293

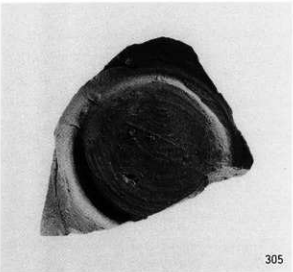
296

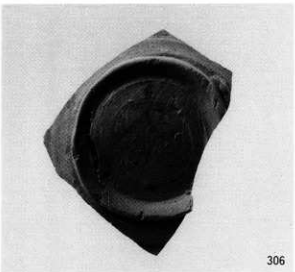
298

299

図版29　牛岡遺跡出土土器（5）
実測図番号　304～308・316・331
332・334・336・340


304


305


306

307

308

316

331

332

334

336

340

図版30　牛岡遺跡出土土器（6）
実測図番号　341・344～346・350～353
355～357・361～365

341

355

344

356

345

357

346

361

350

362

351

363

352

364

353

365

図版31　牛岡遺跡出土土器（7）
実測図番号　367・369・373・374・377～380
383・387～391・394・396

367

369

373

374

377

378

379

380

383

387

388

389

390

391

394

396

図版32　牛岡遺跡出土土器（８）
実測図番号　399～403・406・409～411・414
419～421・426～428

399

400

401

402

403

406

409

410

411

414

419

420

421

426

427

428

図版33　牛岡遺跡出土土器（９）
実測図番号　429～433・449～452・455
458・459・461～464

429

430

431

432

433

449

450

451

452

455

458

459

461

462

463

464

図版34　牛岡遺跡出土土器（10）
実測図番号　465・469～472・474・480・482
487・488・500・507・535

465

469

470

471

487

500

472

474

480

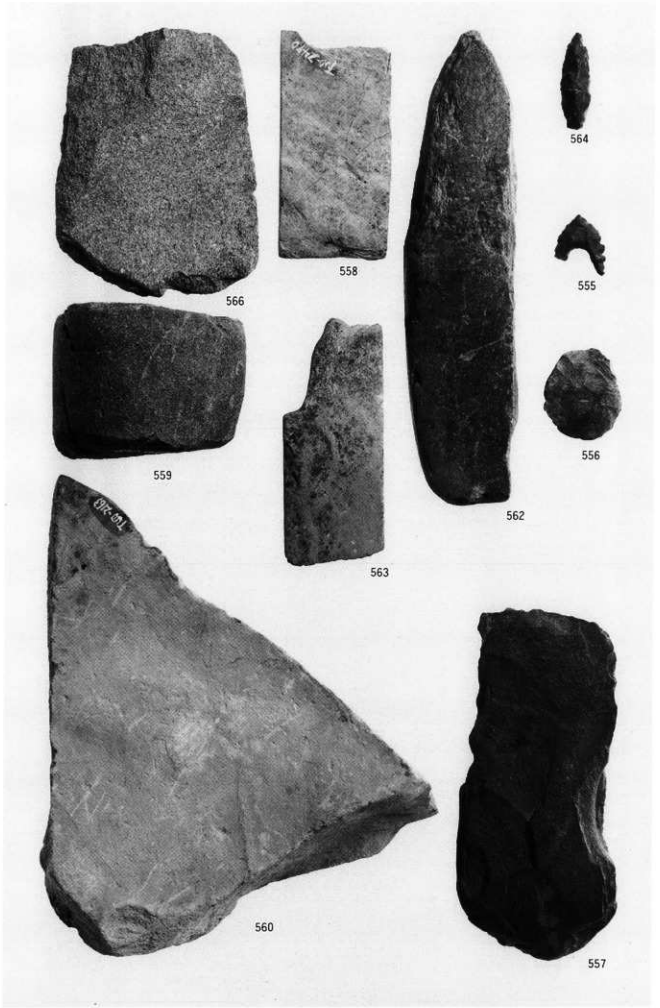
482

488

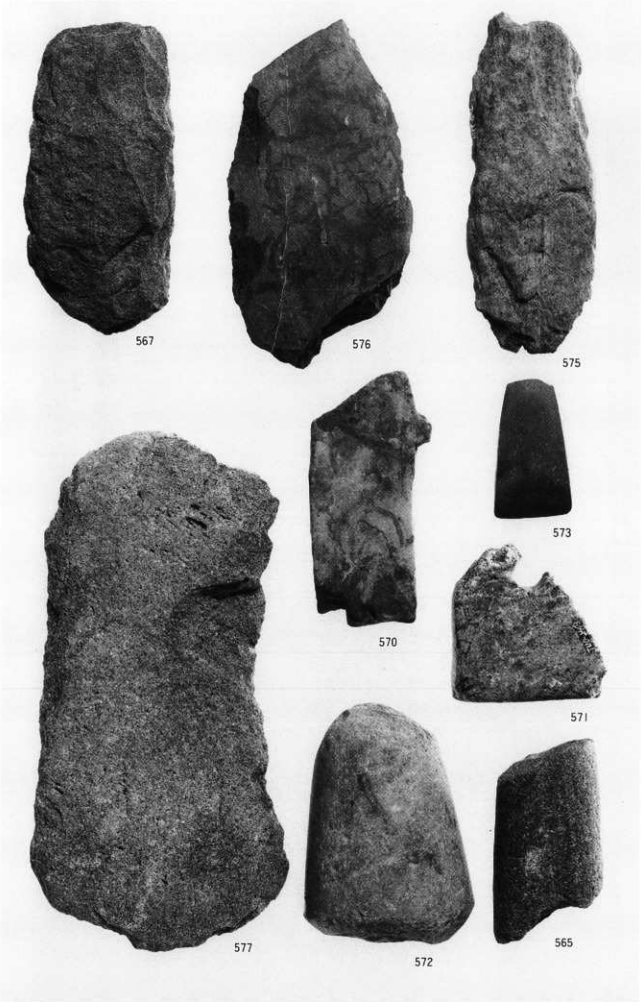
507

535

図版35　牛岡遺跡出土石製品（Ⅰ）
実測図番号　555～560・562～564・566


566
558
564
555
559
562
556
563
560
557

図版36　牛岡遺跡出土石製品（２）
実測図番号　565・567・570～573・575～577


567
576
575
573
570
571
577
572
565

図版37　牛岡遺跡出土石製品（3）
実測図番号　568・569・574
鉄製品・木製品（1）
実測図番号　546・578・579

568

569

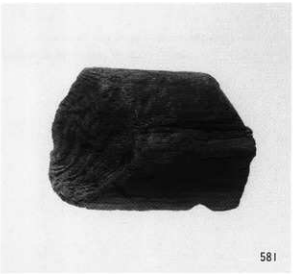
574

546

578

579

図版38　牛岡遺跡出土木製品（2）
実測図番号　581・582・584・585・587・589


581

582

584

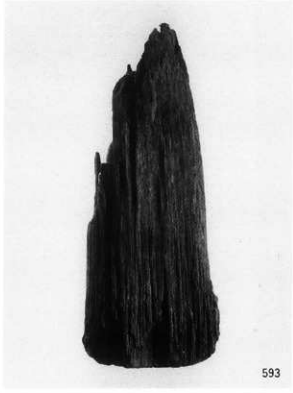
585

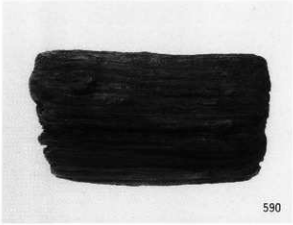
587

589

図版39　牛岡遺跡出土木製品（３）
実測図番号　588・590・592～595

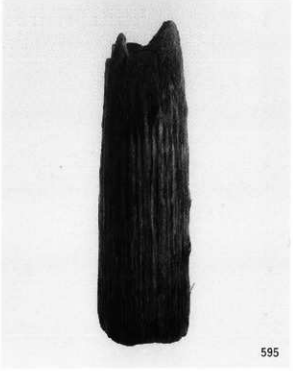
588


593


590

594

592


595

図版40　頭地遺跡出土土器（1）
実測図番号　597・598・601・602・607・612
616・617・619・620・624・626

597

616

598

617

601

619

602

620

607

624

612

626

図版41　頭地遺跡出土土器（2）
実測図番号　627・628・630～633・639
641・642・645・647・650

627

628

630

631

632

633

639

641

642

645

647

650

図版42　頭地遺跡出土土器（３）
実測図番号　651・653～656・659・669
670・672・674・684

651

669

653

670

654

672

655

674

656

659

684

図版43　頭地遺跡出土土器（4）
実測図番号　692・694・695・701
702・714・722・731

692

702

694

714

695

722

701

731

報告書抄録

ふりがな	うしおかいせき1　かしらじいせき
書名	牛岡遺跡1・頭地遺跡
副書名	平成6年度口坂バイパス埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第56集
編著者名	篠原修二・杉山　忍
編集機関	静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒424　静岡県清水市江尻台町18－5　　TEL 0543－67－1171
発行年月日	西暦1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
牛岡（うしおか）	静岡県（しずおかけん） 掛川市八坂（かけがわしやさか）	22213	…	34度 47分 22秒	138度 4分 42秒	19891002 ～ 19911220	11,000	国道一号日坂バイパス建設に伴う緊急調査
頭地（かしらじ）	同上	22213	—	34度 47分 17秒	138度 4分 35秒	19891002 ～ 19901107	150	同上

所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
牛岡	集落	奈良～江戸	竪穴住居　1軒 掘立柱建物　21棟 溝・土坑	須恵器　石製品 土師器　柱根 灰釉陶器 山茶碗	奈良から近世までの複合遺跡
頭地	集落	奈良～中世	掘立柱建物　1棟 溝・土坑	須恵器 土師器 灰釉陶器 山茶碗	奈良から中世までの複合遺跡

静岡県埋蔵文化財発掘調査報告書　第56集

牛岡遺跡Ⅰ・頭地遺跡

平成6年度日坂バイパス
埋蔵文化財発掘調査報告書

1995年3月31日

発行所　財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印刷所　黒船印刷株式会社
静岡市登呂二丁目4番25号
ＴＥＬ（054）286－0236㈹